印旛の原始・古代

—旧石器時代編—



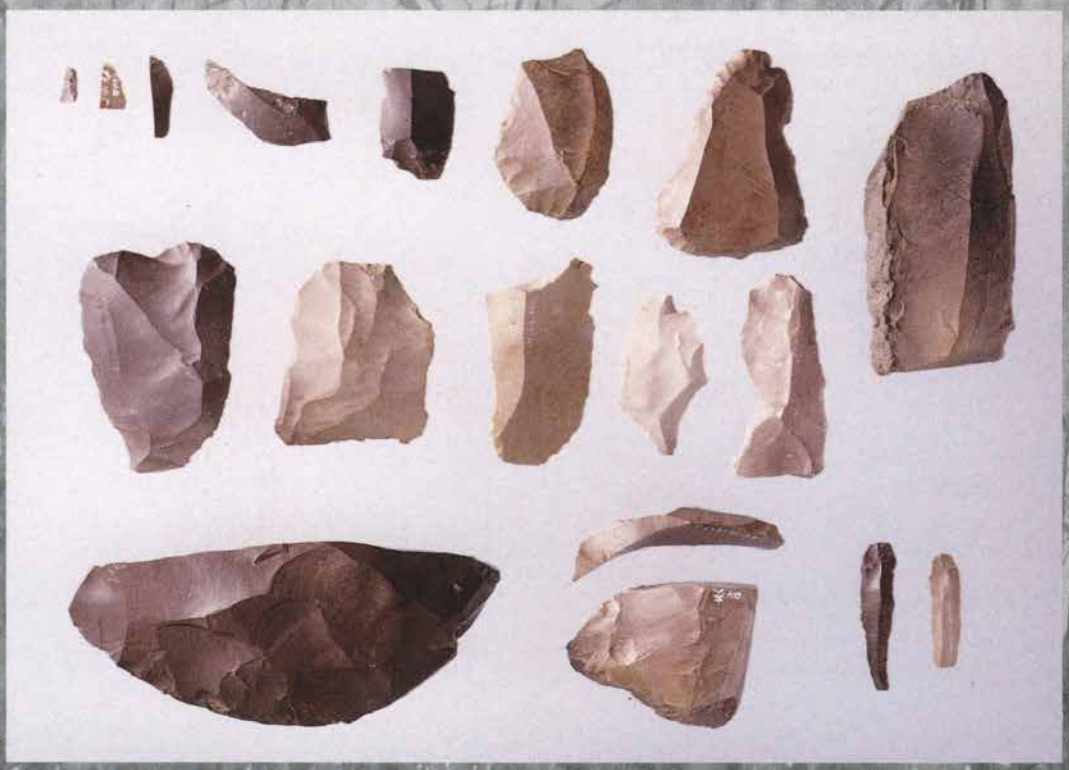
2004

財団法人 印旛郡市文化財センター

印旛の原始・古代

—旧石器時代編—

2004
財団法人
印旛郡市文化財センター



1　佐倉市高岡大山遺跡・高岡大福寺遺跡出土北方系削片系細石刃石器群
［左下：長さ9.8cm］

ごあいさつ

昭和59年10月1日、印旛郡内における埋蔵文化財の調査・研究ならびに地域住民の文化財保護思想の涵養と普及を目的として財団法人印旛郡市文化財センターが設立されました。

そして現在、設立より20周年という節目を迎え、これまでに印旛郡内で蓄積された埋蔵文化財調査・研究の成果を広く一般の方々に還元することを目的とし、各時代別に6分冊の計画で、普及図書『印旛の原始・古代』が刊行される運びとなりました。

内容につきましては、印旛郡内から出土した遺構や出土遺物を最新の研究成果を取り入れながらまとめ、一般の方々も理解できるように、写真や図面を多く用いて解説してゆきたいと思っておりますが、そこからさらに一歩踏み出し、専門家向けの研究資料集としての性格をも有する構成を盛り込んでゆきたいと考えております。

今回、その先駆けとなる第1分冊－旧石器時代編－が刊行されるにいたり、本書が印旛郡内の歴史の一端をうかがい知る資料として広く普及し、活用されることを心より願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり貴重な資料をお貸しいただき、また御指導・御協力を賜りました関係諸氏及び関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

財団法人　印旛郡市文化財センター

理事長　　髙　宮　良　一

『印旛の原始・古代－旧石器時代編－』目次

ごあいさつ
目次・例言

Ⅰ．幕開け

1．人類の誕生と旧石器時代・・・

Ⅵ. 資料集

白井市復山谷遺跡 ・・・・・・・・・・62
白井市白井第１遺跡 ・・・・・・・・・64
白井市一本桜南遺跡 ・・・・・・・・・65
印西市木苅峠遺跡 ・・・・・・・・・・67
印西市地国穴台遺跡 ・・・・・・・・・68
印西市船尾白幡遺跡 ・・・・・・・・・69
本埜村向原遺跡 ・・・・・・・・・・・69
本埜村宮内遺跡 ・・・・・・・・・・・70
本埜村瀧水寺裏遺跡 ・・・・・・・・・71
本埜村五斗蒔遺跡 ・・・・・・・・・・72
栄町前原Ⅰ遺跡 ・・・・・・・・・・・73
栄町大畑Ⅰ遺跡 ・・・・・・・・・・・73
印旛村平賀一ノ台遺跡 ・・・・・・・・74
成田市南三里塚宮原第１遺跡 ・・・・・75
成田市飯仲金堀遺跡Ｂ地点 ・・・・・・78
成田市天神峰奥之台遺跡 ・・・・・・・79
成田市東峰御幸畑西遺跡 ・・・・・・・81
成田市取香和田戸遺跡 ・・・・・・・・82
成田市天神峰最上遺跡 ・・・・・・・・84
成田市古込遺跡 ・・・・・・・・・・・86
四街道市木戸先遺跡 ・・・・・・・・・87
四街道市御山遺跡 ・・・・・・・・・・89
四街道市池花遺跡 ・・・・・・・・・・91
四街道市池花南遺跡 ・・・・・・・・・92
四街道市出口・鐘塚遺跡 ・・・・・・・93
佐倉市高岡大山遺跡 ・・・・・・・・・95
佐倉市高岡大福寺遺跡 ・・・・・・・・95
佐倉市内田端山越遺跡 ・・・・・・・・96
佐倉市御塚山遺跡 ・・・・・・・・・・97
佐倉市大林遺跡 ・・・・・・・・・・・98
佐倉市芋窪遺跡 ・・・・・・・・・・・99
佐倉市星谷津遺跡 ・・・・・・・・・100
佐倉市向原遺跡 ・・・・・・・・・・101
佐倉市木戸場遺跡Ａ地点 ・・・・・・102
佐倉市池向遺跡 ・・・・・・・・・・103
佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡 ・・・・・・・104
佐倉市向山谷津遺跡 ・・・・・・・・105
八街市榎戸小富遺跡 ・・・・・・・・105
酒々井町墨新山遺跡 ・・・・・・・・106
富里市東内野遺跡 ・・・・・・・・・107
富里市獅子穴Ⅸ遺跡 ・・・・・・・・108
冨里市南大溜袋遺跡 ・・・・・・・・108
富里市古込Ⅴ遺跡 ・・・・・・・・・109

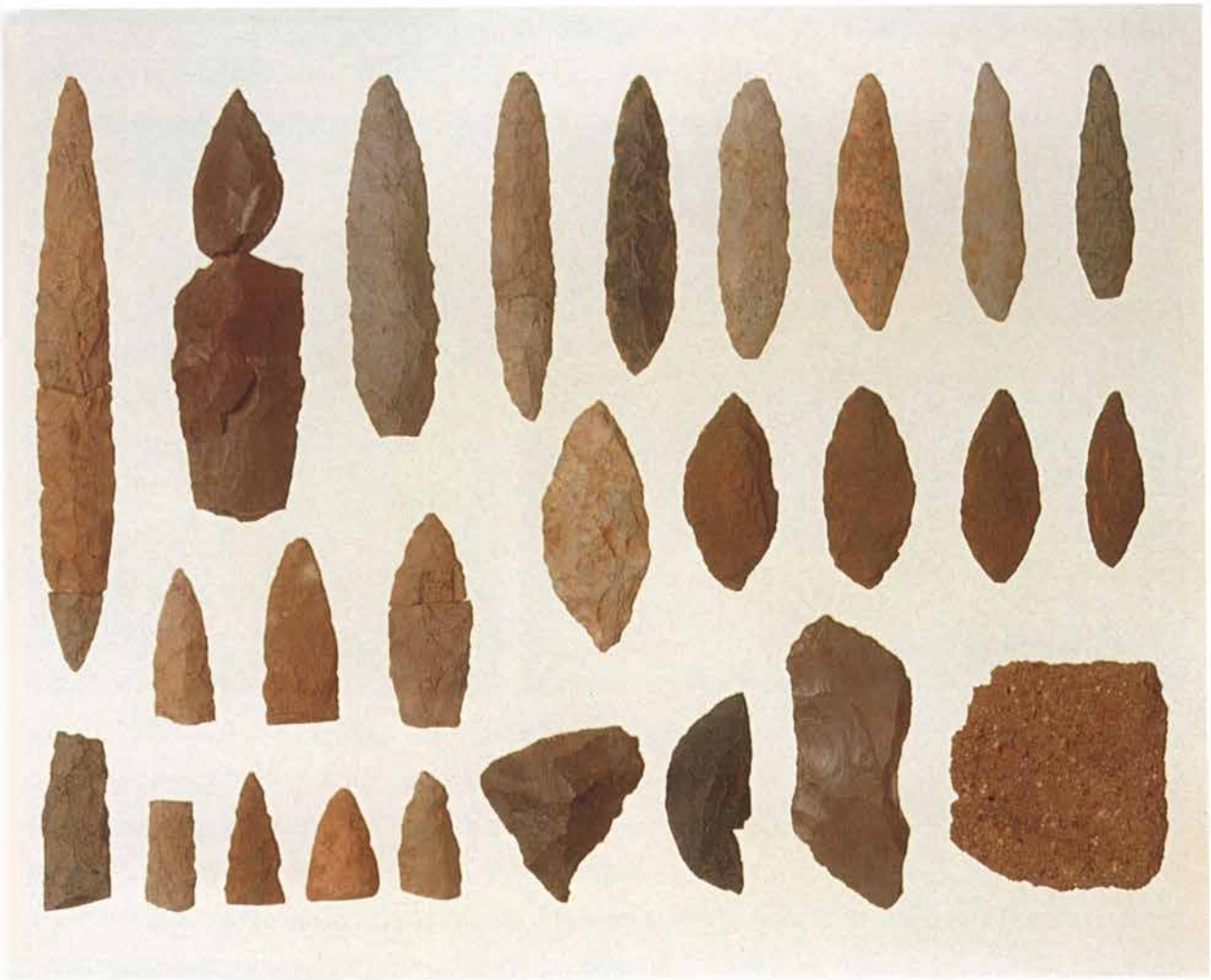
印旛郡内旧石器出土遺跡一覧表
参考・引用文献一覧
挿図・写真出典一覧
協力者・協力機関一覧

付図　印旛郡内旧石器時代遺跡分布図

例　　言

・本書は、設立20周年記念事業　普及図書『印旛の原始・古代』の第1分冊「旧石器時代編」である。
・本書に掲載した図版の提供先・出典等については巻末一覧に明示した。
・付図に使用した地図は国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図「龍ヶ崎」（平成11年2月1日発行）・「佐原」（平成11年8月1日発行）・「佐倉」（平成10年9月1日発行）・「成田」（平成14年3月1日発行）・「千葉」（平成12年9月1日発行）・「東金」（平成12年10月1日発行）を複製したものである。（承認番号　平15関複、第605号）
・本書の執筆・編集は主任調査研究員　酒井弘志、嘱託職員　宇井義典が担当した。
・本書の作成にあたっては、一覧に明示した協力者・協力機関以外にも多くの方々から御指導・御協力を賜った。あらためて御礼申し上げます。

I
幕開け



2　富里市南大溜袋遺跡出土石器［左上：長さ16.1cm］

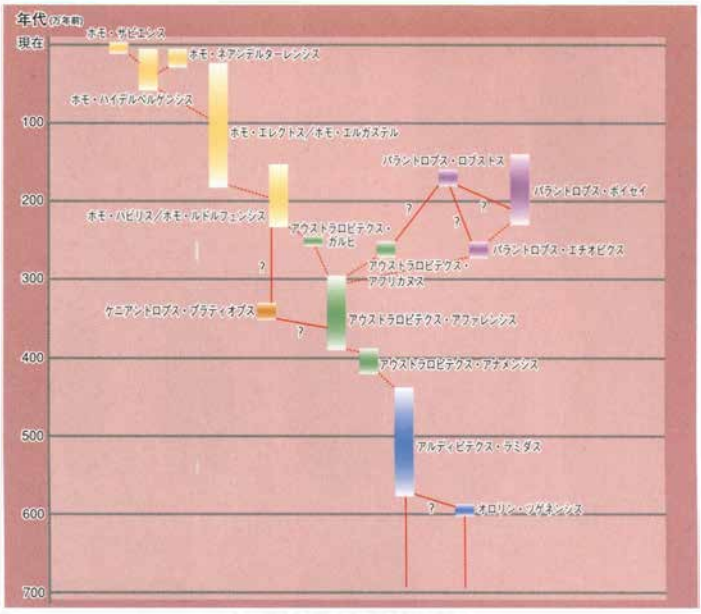
1．人類の誕生と旧石器時代

数年前まで、人類の起源は500万年、600万年前に遡ると言われていた。しかし、遠いアフリカ大陸の地で新たな発見があるたびに、その様相は二転三転している。この2、3年の間にも古人類学史上最大級の発見があり、各紙を賑わせたことも記憶に新しい。オロリン・ツゲネンシス、サヘラントロプス・チャデンシスなどの相次ぐ発見により、人類の起源は700万年前以上とも言われるようになった。

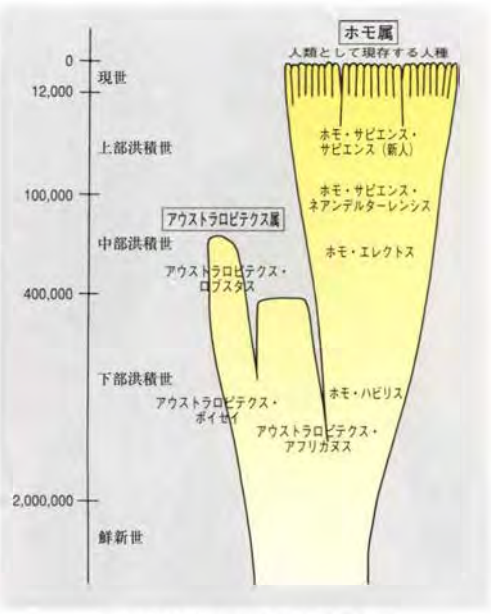
旧石器時代の始まりと人類進化の歴史は密接不可分の関係にあり、特に旧石器時代の話にその担い手の話題は不可欠なのである。とりわけ、「石器を最初に作ったヒト」がいったい何時の段階なのかということは常に話題の中心である。人類進化の時間的流れは「猿人→原人→旧人→新人」という直線的な考え方が長い間浸透していた。しかし、人類起源の場所であるアフリカ大陸での古人類骨の発見により、もっと多くの種類の人類がその地に生存していたことが分かってきた。そのため、現在では過去に考えられていた以上に複雑な進化の過程が明らかになってきたため、今までの直線的な考え方は古くなり、最新の成果を基に新たな枠組みが構築されつつある。いまだ明確な答えが出ない人類進化の過程であるが、それと密接不可分な石器はどのようになっているのであろうか。“石”が何時から“石器”へとなっていったのか見てゆきたい。



3　タウング出土のアウストラロピテクス・アフリカヌス頭骨　　愛称「タウング・チャイルド」



4　近年の人類進化系統図



5　1970年代初頭の人類進化図

● ヒトと石器

世界最古の石器はエチオピアのゴナ遺跡から見つかり、250万年位前のものといわれている。礫に片刃の刃をつけたチョッパー、両刃のチョッピングトゥールが主要な石器である。また、剥離された鋭い剥片も十分使用することができたであろう。このような石器を用いた時代をオルドヴァイ文化と呼んでいる。

こうした原始的な石器は、実に100万年という長い間使われていた。では最初の持ち主は誰なのかというとまだ明快な解答が得られていない。250万年前という年代を考えると、アウストラロピテクス（猿人）が最初



6　オルドヴァイ文化の石器群（複製・イースト・トゥルカナ　ＫＢＳ、ケニア）[左上:長さ約7.3cm]

に石器を使ったのだと言うこともできる。しかし、ホモ属（ホモ・ハビリス）が登場するに伴い石器が使用されるという考えも根強いため、まだどちらともいえない状況である。

次の段階は洋ナシ形をした握斧（ハンドアックス）が主要石器となるアシュール文化である。初期の頃はまだ粗い剥離で形を作っており、このようなものを特に前期アシュール文化と呼んでいる。そして、精緻な成形がおこなわれるようになると後期アシュール文化と呼ぶ。この石器は約150万年前から約20～30万年前の間使用されていた。これも実に長い間主要石器として用いられてきたものである。ここでオルドヴァイ文化からアシュール文化にかけて石器製作の内容に大きな変化がおきる。洋ナシ形のハンドアックスは剥離を上手く施し左右対称に形成されることが最も特徴的なこととされている。

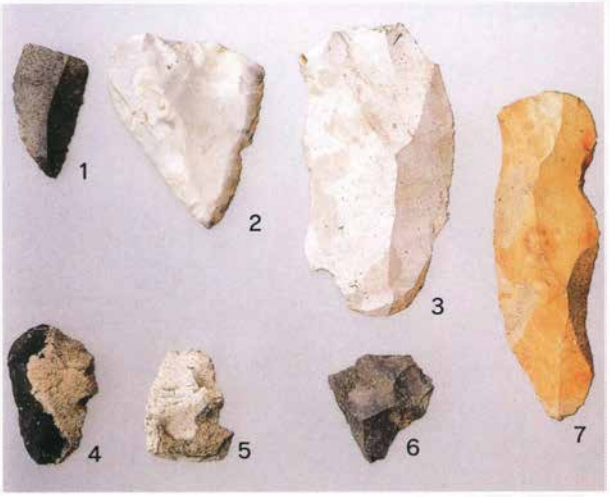
この石器の担い手は基本的にホモ属であったと考えられるが、未だ確証は得られていない。それはホモ属以外にもアウストラロピテクス属やパラントロプス属などがモザイク状に分布して生活していたためである。その時一種類の人類だけがいた訳ではない。この点があまり知られていないところである。



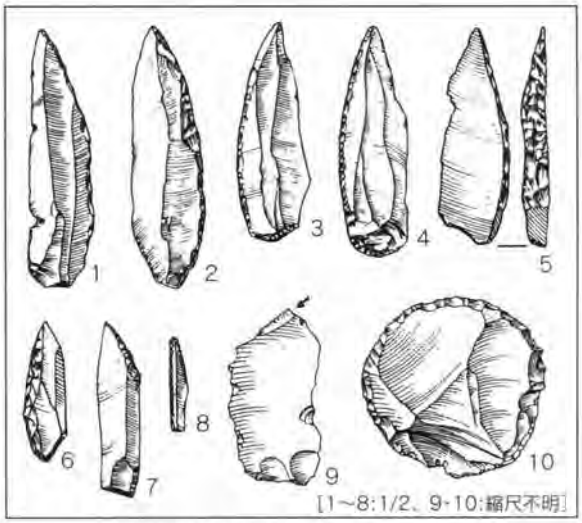
7　アシュール文化の握斧(ハンドアックス)
[長さ:約11.7cm]

その後登場するのはムスティエ文化である。今までのは石核石器の文化であったが、ここからは剥片石器文化へと変化する。そうすることで石材をより有効に使うことができるようになったのである。この石器群は約4万年前まで用いられており、ネアンデルタール人や一部の現代型ホモ・サピエンスが用いていた。重要なことであるが、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスは長い間共存していたというのが現在の説となっている。遺跡からだけでなくそれぞれの年代からも裏付けられている。新人が旧人を追い込んで絶滅させたという考えは今では見直されている。

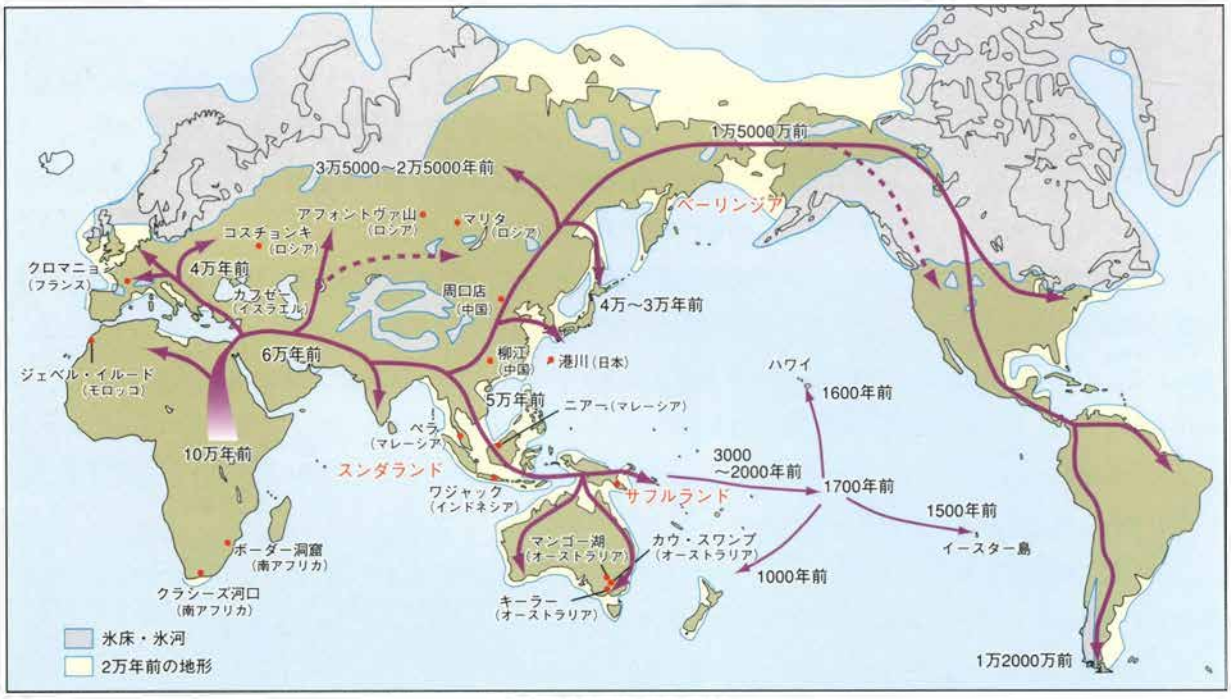
ムスティエ文化の後にシャテルペロンという文化が短期間存在



8　ムスティエ文化の石器
(1·2·4·5:削器、3:ルヴァロア型剥片、6:ルヴァロア型尖頭器、
7:ルヴァロ型石刃［右:長さ約14.2cm］)



9　シャテルペロン文化の石器
(1～6:シャテルペロン型尖頭器、7:斜截縁付き石刃、
8:細石器的な縁付き石刃、9:彫刻刀形石器、10:掻器)



10　第2次人類適応拡散

する。約4万年前から3～4千年の間であり、今までの文化の長さからすると非常に短い。この年代は後期旧石器の初頭に位置付けられるが、実は、ネアンデルタール人がクロマニヨン人の石器を真似て作ったものということがわかってきた。後期旧石器時代の指標である石刃技法にムスティエ文化の剥片石器の面影が残ったような石器群となったのである。それ以降は新人といわれているクロマニヨン人が世界中に広がっていったことはいうまでもない。もちろんこの極東といわれる日本にも移り住み、日本旧石器文化を開花させていったのである。

● 時代区分

約250万年前から1万2000年前という想像もつかないような長い間、石器は主要な道具として用いられてきた。よく言われるように、人類史の99%に当たる期間は石器の時代であった。縄文土器が出現してから現在にいたるまでの間は、ほんの一時でしかないのである。それだけ石器は生活に欠かせないものとして位置付けられていたということである。この長い期間を旧石器時代と呼んでいるが、その中を3つに分け前期・中期・

後期あるいは下部・中部・上部に区分している。石器の登場からアシュール文化までが前期にあたり、ムスティエ文化が中期、それ以降が後期になる。石器の変遷や担い手の交代劇を考えると非常にうまく分けられている。

それでは日本旧石器時代における時代区分はどの様になっているのかというと、前期・後期旧石器時代の二区分である。後期旧石器時代の始まりは世界の旧石器時代同様に石刃技法の登場をもって始まりとしている。これが約3万年前のことであり、後述するように武蔵野ローム層最上部から立川ローム層最下部にかけての年代である。それゆえ立川層から出土する石器は後期旧石器時代のもの、そして立川層以前のものは前期旧石器時代のものということになる。しかし現在、日本の前期旧石器時代の存在が根底から覆されていることは周知のとおりである。1980年代以降前期旧石器時代の遺跡が発見され、資料としてまた歴史として蓄積していったが白紙に戻さざるを得ない状況となった。しかし、岩手県や長野県で3万年を遡る石器が確認されているため、今後新たな枠組みが確立してゆくと考えられる。



11　岩手県金取遺跡Ⅲ層出土石器

岩手県金取遺跡では阿蘇4火山灰（8.5万年～9万年前）を挟んで2枚の文化層が確認されている。掲載した石器は阿蘇4火山灰よりも上位で確認されたⅢ層出土の石器である。

（左:斧形石器、右:石核［左:長さ16.4cm］）

代	紀	年代（100万年）	世	時代	文化
新生代	第四紀	0.01	完新世	新石器時代	アジール文化
			更新世	旧石器時代 後期（上部）	マドレーヌ文化 ソリュートレ文化 グラヴェット文化 オーリニャック文化 シャテルペロン文化
		0.04		中期（中部）	ムスティエ文化
		0.2		前期（下部）	アシュール文化
	第三紀	1.8	鮮新世		オルドヴァイ文化
		5	中新世	類人猿の繁栄、人類の出現	
		24	漸新世	真猿類の繁栄、類人猿の出現	
		34	始新世	真猿類の出現？	
		53	暁新世	原猿類の出現	
		65			

12　時期区分一覧表

2．日本における旧石器時代 - 総ては岩宿から -

「赤土の中には人が生活した跡などない」という戦後間もない頃の日本考古学の常識を根底から覆したのは、群馬県笠懸村岩宿の稲荷山と琴平山の切り通しで発見された黒曜石製の細石器であった。この発見は昭和21年のことであり、発見者は日本に旧石器時代の扉を開いた相澤忠洋その人である。相澤はさらにその切り通しに通い続け、昭和24年7月にその存在を一層強固にすることとなる、黒曜石製の美しい槍先形尖頭器を発見するに至った。その後、同年9月の岩宿遺跡



13　日本初の細石器［左:約1.7cm］

の発掘に至るが、日本に旧石器時代の存在を予感していた先人は相澤だけではなかった。岩宿遺跡発掘以前の旧石器時代研究の事情を垣間見てみたい。



14「明石原人」の寛骨（複製）[長さ17.0cm]

● 岩宿以前

先ず、日本における近代科学としての考古学の萌芽は、1877年（明治10年）におこなわれた、E.S.モースによる東京都大森貝塚の発掘調査が契機となったと言われている。この時を境として、日本考古学の礎が確立していったと言っても過言ではないであろう。さらに同年、柴田承桂により「*Information for the people*」が翻訳され、三時代法（コラム参照）が紹介された。

モースの大森貝塚発掘から28年後の1905年（明治38年）、英医学部を卒業し、後に横浜の病院院長となったN.G.マンローが神奈川県酒匂川、早川の礫層および赤土層において石器を採取している。このことは1908年に刊行された『*PREHISTORIC JAPAN*』のなかの「*PALAEOLITHIC PHASE*」の部分で触れられている。また同時に、日本における旧石器時代の存在を示唆していたが、あまり注目を集めることはなかった。

1917年（大正6年）、当時京都大学にいた喜田貞吉は、ある収集家が所持する資料の中に大型の不定形な石器などを発見した。この事実を同じ京都大学の浜田耕作に知らせたことが河内国国府遺跡の発掘調査がおこなわれる契機となったが、発掘調査は旧石器が出たとされる粘土層まで調査が到らず終了してしまった。しかしその後、橿原考古学研究所や鎌木義昌らによって、1957年、58年に再調査がおこなわれた結果、粘土層中より国府型のナイフ形石器が確認されたのである。あの時点で粘土層まで調査が及んでいたならば、日本旧石器時代研究の始まりはより早まったといえるかもしれない。

1931年（昭和6年）に直良信夫は兵庫県明石市西八木海岸にて化石人骨を発見する。これが後に明石原人（*Nipponanthropus akashiensis*）と呼ばれるようになる。前年に化石人骨採集地近くで石器を採集しており、これら両方の資料から日本における旧石器時代の存在の可能性を説いたのである。しかし、石器については鳥居龍蔵・大山柏により否定されてしまうこととなる。そして化石人骨については、最終的な結論が得られぬままとなってしまった。その後この化石人骨は東京大空襲の際に焼失してしまうが、幸いにも東京大学人類学教室に石膏模型が残されていたため、全くの不明という最悪の事態は免れた。そして、直良以降旧石器時代の探求を精力的に進めようという動きは消えつつあった。



15　相澤忠洋発見の槍先形尖頭器
[長さ7.1cm]

しかし、そうした状況も戦後になり一変する。1949年9月、相澤忠洋の地道なフィールドワークが実を結び、岩宿遺跡の発掘調査に至るわけである。そこに至るまでの道程は並大抵のものではなかったようである。小間物の行商を始めていた相澤は、とある農家に立ち寄った帰りに稲荷山の崖で黒曜石製の細石器を採取したが、土器が共伴しないことに疑問を抱いていた。幾度となくその場所に通いつめるが、

石器は見つかるものの土器が見つからなかった。心に生じた疑問を明らかにすべくさらに三年間を費やし、更なる資料の蓄積に奔走していった。そして、ついに先に述べた槍先形尖頭器を発見するのである。心に生じた疑問が明らかにされないまま、その当時新進気鋭の研究者であった芹沢長介に岩宿の石器の話をしたことが歴史的大発見の扉へと導いた。その後知らせを受け、登呂遺跡の発掘調査から戻った明治大学の杉原荘介もその重要性に気が付いたのであろうか、急遽岩宿ゆきを計画したのであった。

● 開かれた扉

昭和24年9月11～13日にかけて、ついに杉原荘介を筆頭に岩宿遺跡の試掘調査がおこなわれた。このとき楕円形のハンドアックス（局部磨製石斧）を含む約50点ほどの石器を検出し、試掘は成功裏に終わった。そして、試掘調査の成果を考慮し10月に第一次調査が行われたのである。これらの成果は新聞紙上を賑わし、日本中を駆け巡ったことはいうまでもない。現在、この時岩宿遺跡から出土した遺物は国指定の重要文化財となっている。



16　群馬県岩宿遺跡発掘調査風景

相澤の持つ信念が日本の歴史を変えたのであったが、発見された遺物が科学的な根拠に基づき旧石器時代のものであるとされたことも重要である。発掘調査という客観的な事実が伴うことで、誰もが認めざるをえなくなったのである。岩宿発掘以前の旧石器時代研究に対する動きについてはあまり知られていないが、小さいながらも日本における旧石器時代研究への胎動は始まっていた。しかし、どの先人もその扉を開くことができずにいたが、1949年、その日が訪れた。日本にも旧石器時代の存在が明らかになると、各地でそれを視野に入れた発掘調査がおこなわれるようになった。それ以降着実に汎列島的に遺跡が確認され、大量の遺物が蓄積され、現在に至っている。



17　鹿の川沼ごしに望む岩宿遺跡

3. 下総台地における旧石器時代の発見

岩宿遺跡の発掘から遅れること5年後の昭和29年、千葉県下総台地で初めて旧石器時代の発掘調査がおこなわれた。市川市国府台四丁目に所在する丸山遺跡である。しかし、もともとは旧石器時代の調査を目的としておこなわれたわけではなく、土採工事による消滅の危機を迎えようとしていた古墳の調査を主目的としていた。発掘調査の主体となった明治大学の調査報告によると、古墳についてはやや懐疑的に記しているが、旧石器時代石器についてはその重要性を重く見ている。その成果を詳しく見てゆくことにする。

遺物が確認された層位は関東ローム層の軟質部、硬質部と記されており、現在で言うソフトローム層とハードローム層付近であることが分かる。垂直分布を見るとソフトローム層中に遺物の広がりが多く見られる。検出された遺物は40点で、礫群が2基伴っていた。石器群の中に切出形のナイフ形石器が含まれていたことから、

Ⅳ下～Ⅴ層段階の石器群であるといえよう。ここで重要な点となるのが、この石器群の旧石器時代研究上での位置付けであろう。岩宿遺跡の発掘から僅か5年という歳月で、すでに大雑把ではあるが日本旧石器時代の体系が出来上がりつつあった。丸山遺跡の発掘調査の成果は目を見張るようなものではなかったが、旧石器時代の大枠を強固にする一例となった。下総台地における最初の旧石器時代の遺跡と言うこともあり、歴史的な意味も踏まえて重要な出来事であったことはいうまでもない。しかし、当遺跡の調査の後、下総台地における旧石器時代の発掘は長い期間空白となってしまう。



18　市川市丸山遺跡出土石器［S=1/3］



19　市川市今島田遺跡出土石器［S=1/3］

丸山遺跡の発掘から14年後の昭和43年に今島田遺跡、翌昭和44年に殿台遺跡の発掘調査がおこなわれた。今島田遺跡は市川市柏井町に所在する。『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』（千葉県史料研究財団2000）にも掲載されており、下総台地旧石器時代の黎明期における遺跡の一つとして重要なものと理解されている。発掘の成果として、遺物総数は183点であり、その内の9割がメノウであった。石器組成はナイフ形石器、切出形石器、掻器、石刃などであり、砂川期石器群の特徴が見られる。砂川期とは先の丸山遺跡の段階よりもやや後出の石器群に代表される文化期であり、関東地方はもとより、関西、東北方面にもその広がりが確認されている。そのように広範囲にわたる文化が下総台地にも確認されたことは有意義であった。

翌年の市川市大野町にある殿台遺跡の発掘調査は、縄文時代、弥生時代の遺構を確認する目的でおこなわれた。その調査の際に槍先形尖頭器が3点確認されたのである。尖頭器石器群は先の2つの遺跡よりも新しく、ナイフ形石器群の後に位置付けられている。このように小規模な発掘ではあったが、下総台地においても石器群の変遷を追うことができたことは、人が時代を異にしながらも生活していたことの証となる。そしてこの後、下総台地における旧石器時代の発掘調査は劇的な変化を遂げる。



20　神奈川県月見野遺跡遠望

昭和45年（1970年）になると千葉県においても大規模開発に伴う発掘調査がおこなわれるようになる。この年には新東京国際空港用地内の発掘調査が始まり、翌年には千葉ニュータウン造成による発掘調査が始まった。60年代から70年代にかけてのこのような大規模開発に伴う発掘調査は千葉県に限られたことではなく、神奈川県では月見野遺跡群、東京都では野川遺跡という著名な遺跡の調査がおこなわれた。特に月

見野遺跡群と野川遺跡の発掘調査は日本旧石器時代学史上で画期とされており、「月見野・野川以前」、「月見野・野川以後」と呼ばれるほどである。川筋に添って展開する人々の生活の跡は今までの発掘調査では得ることのできない成果であった。そして、生活する上で好条件であった場所については、時代が違っていても好んでその場所で生活を営んでいたことも明らかとなった。この2つについては、人がどのような行動をしていたのかを知る上で重要なことであった。

このように、大規模な発掘調査によって得ることのできた資料は、千葉県のみならず旧石器時代の研究において大きな飛躍をもたらすのである。しかし良いことばかりではなく、整理しきれない莫大な量の資料が蓄積されていったのも事実である。新東京国際空港用地内では、いくつもの遺跡が発掘調査されたが、そのなかにNo.55遺跡（後に古込遺跡に名称変更）と呼ばれる遺跡があり、千葉県だけではなく南関東で初めて斧形石器（局部磨製石斧）が確認された遺跡として有名である。後にこの遺跡から出土した遺物は平成8年3月に千葉県の指定文化財となった。現在印旛郡内の旧石器時代遺跡は330カ所以上確認されており、千葉県全体で考えるとさらに数が増す。都道府県単位でみても遺跡数は上位に位置付けられている。



21　成田市古込遺跡（三里塚No.55遺跡）出土石斧
［長さ11.3cm］

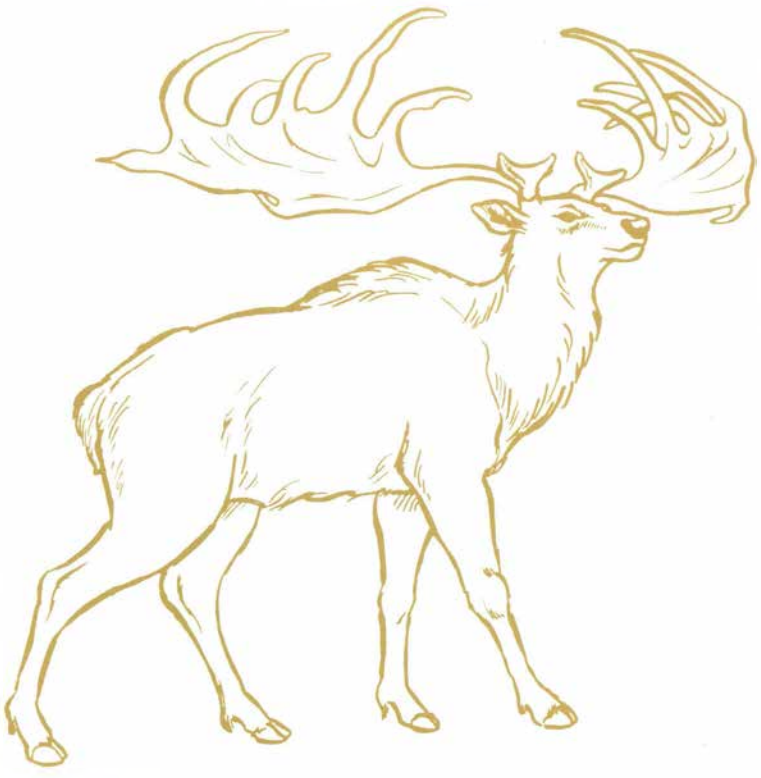
千葉県における旧石器時代の調査が軌道に乗りはや30年が経過したが、日本旧石器時代の学史に残る著名な遺跡も多く発掘された。印西市木苅峠遺跡、白井市復山谷遺跡、富里市南大溜袋遺跡、同市東内野遺跡、印旛村平賀一ノ台遺跡など枚挙に暇がない。その中でも東内野遺跡は千葉県、それも印旛郡内に特有の石器となった東内野型尖頭器が初めて出土した遺跡である。詳細は資料編に譲るが、千葉県は土地柄のためなのか北の文化、南の文化が入り混じる文化の坩堝となり、そして独自の新たな文化を形成していっていたのである。

コラム・歴史の転換期を見る－時期区分－

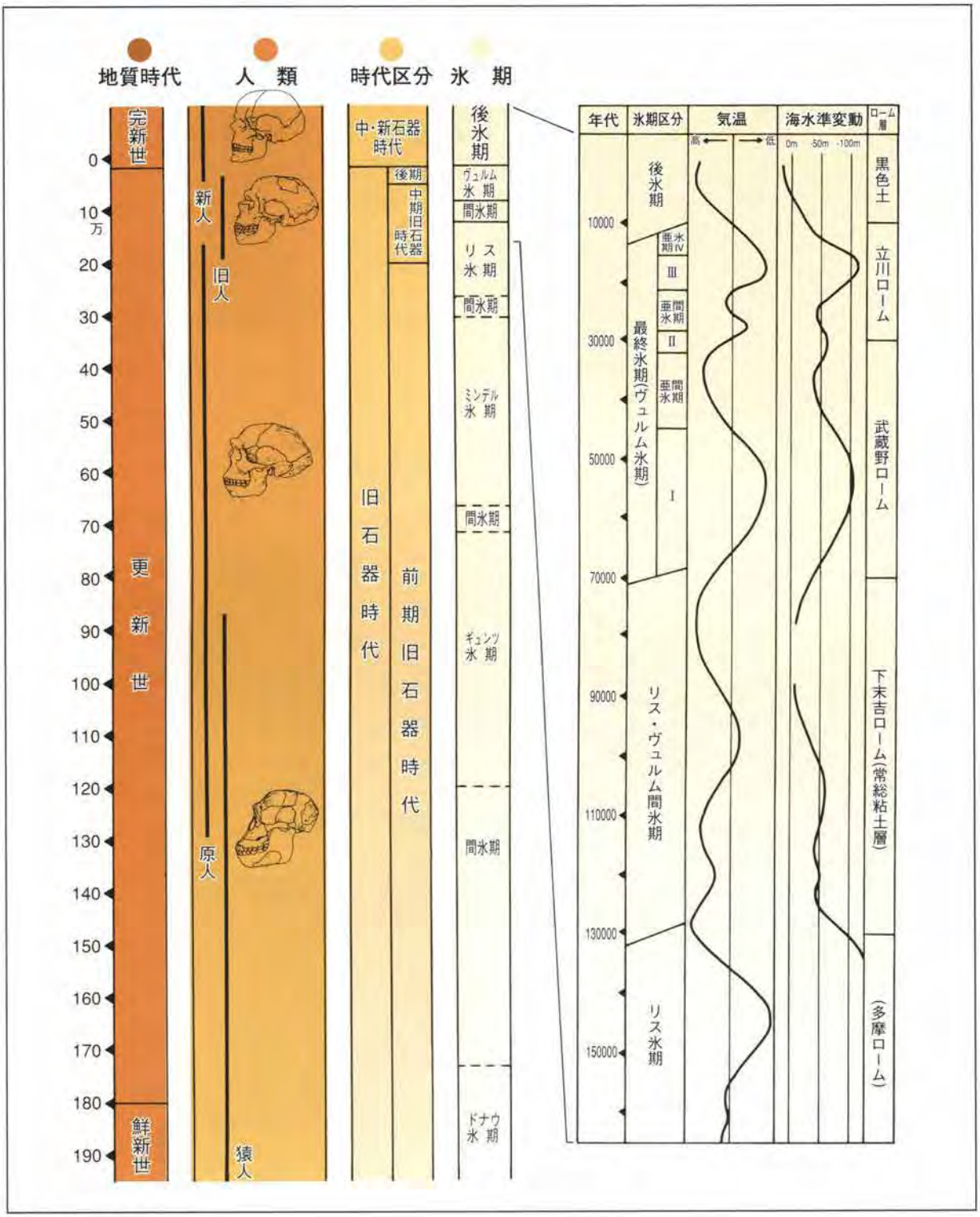
時間は絶えず流れてゆく。しかし、ふと過去を振り返った時、時代の流れが大きく変わった時期が見出せる。特に稲作農耕の定着と産業革命の2つは生活を営む上での大きな画期とされている。考古学の上では道具や生活形態の変化を目安として時期区分をおこなっている。その端緒となったものを見てゆきたい。

日本に初めて紹介された時代区分はトムゼンの「三時代法」である。デンマーク、コペンハーゲンの国立北方古物博物館の主任管理官に任命された彼は、博物館が所蔵する資料を展示用に整理していた。その時、道具を材質ごとに並べ、最も原始的な石を用いた時代から始め、青銅器を用いた時代、そして鉄器を用いた時代の3つに分けたのが始まりである。基本的な時期区分の確立ではあったが、北欧以外で歴史の詳細が明らかになるにつれ、地域ごとに道具や生活形態の変化に差があることが分かってきた。もちろん日本の考古学においても例外ではない。一つの物差しで計ることが困難であることが明らかとなり、それは世界全体が斉一性を持って変化することを意味するのではなく、それぞれの社会に歴史があることを反対に示したのである。

後にジョン・ラボックが石器時代を「旧石器時代」と「新石器時代」の2つに区分したが、我国の考古学事情はそれとは異なることは周知のとおりであろう。



II
環　境



22　第四紀の変遷

1. 地誌－下総台地の形成－

「人類の時代」と呼ばれる第四紀更新世（洪積世）は今から約180万年前に始まり、4回の氷期（ギュンツ・ミンデル・リス・ヴュルム）と比較的温暖な3回の間氷期が訪れた時代でもあった。別名「氷河時代」とも称され第四紀更新世を特徴づけるひとつでもある。

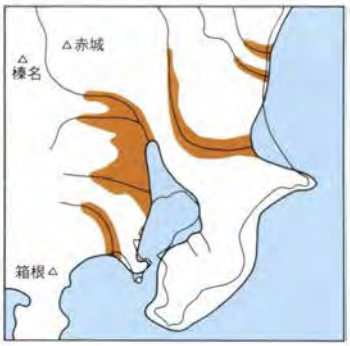
下総台地の形成には、更新世期中にくり返し訪れた氷期・間氷期に伴う海水面の変動（海進・海退）、関東造盆地運動と呼ばれる激しい地殻変動、当時活発であった富士・箱根を給源とする火山灰の降下によるところが大きく、複雑な変化をとげながら、現在私たちが見知っている下総台地の姿形へと移り変わってゆく。



①約50万～13万年前

下総台地は九十九里や鹿島灘に向かって開口していた「古東京湾」と呼ばれる大きな入り江下に没していた時間が多く、13万年前を少しさかのぼる頃にはリス・ヴュルム間氷期による「下末吉海進」が訪れた。

この時期に海底深くに形成された層が下総台地の基盤層になっている成田層で、七栄橋層・木下層などの貝化石砂層が含まれている。



②約13万～5万年前

約13万年前頃から気候の寒冷化に伴い下末吉海進が海退に移行し、約7～8万年前頃には最終氷期（ヴュルム氷期）が訪れた。これに伴い下総台地が陸化した頃、箱根・八ヶ岳などの火山の噴火により下末吉ローム層を形成する火山灰が降下・堆積した。しかし下末吉ローム堆積時初めの頃の下総台地は下末吉海進の名残で浅海または湿地として残っていたため、堆積した火山灰は水成堆積層となり、「常総粘土層」（下末吉ローム層に対比）を形成する。

またこの頃、手賀沼から印旛沼付近にかけて蛇行河川ができていたと考えられる。今日見られる印旛沼のW字形の特異な形状はこの蛇行河川の河道部分が浅い凹地帯として取り残され、その後の時代に開析谷として徐々に深く彫り込まれて、できあがっていったものである。



③約5万～3万年前

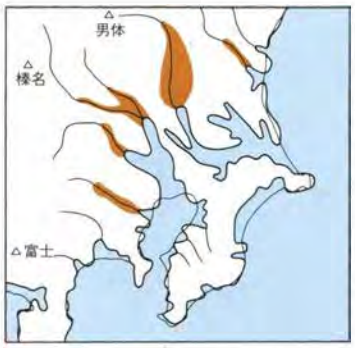
気温の降下が進み、それに伴い海水面の低下も進む。陸地の面積が増大し、その上を流れる河川の侵食により深い谷を刻みだし、段丘地形（千葉第1段丘）を形成する。このときすでに現在の地形に近い形になっていたと思われる。同時に、箱根に代わって活動が活発になった富士山を主体とする火山灰が乾燥した陸地を広く覆い、武蔵野ローム層を形成する。



④約3万～1万2千年前

さらに気温が低下し、武蔵野ローム層堆積期に引き続き海退が進む。約1万7千年前に迎える最終氷期最寒冷期には海面は現在より約120m以上も低下し、完全に陸化した東京湾には利根川・荒川・多摩川などを支流とした「古東京川」が流れていた。

この時期、台地上には富士山の火山活動によって堆積した火山灰により立川ローム層が形成される。また立川ローム層の堆積と共に河川の侵食や降雨・地下水の影響により、さらなる段丘地形（千葉第2段丘）や大小様々な樹枝状の谷が形成され、今日の下総台地に見られる複雑な地形を形づくることになる。



⑤約1万2千年前以降

約1万2千年前頃から（地質区分は更新世から完新世へ）気候は急速に温暖化し、時代も旧石器時代から縄文時代へと移り変わってゆく。この気候の変動に伴い海水面は次第に上昇し始め約6千年前には海進の最盛期を迎える（有楽町海進）。この海進に伴って深く複雑に刻まれた谷部に海水が入り込み（溺谷）、形成されたのが沖積層である。しかしこの海進も長くは続かず、また海退が始まり約2千年前頃までには現在見られる下総台地の姿が誕生する。



⑥現在

太線は海岸線、■は当時の沖積平野、△は活動した火山

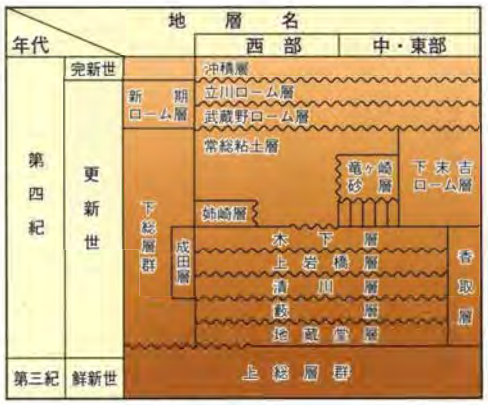
23　下総台地の移り変わり

2. 火山灰とローム層

第四紀更新世の自然環境を表すもうひとつの特徴は、活発な火山活動とそれに伴い大量に降下・堆積した火山灰である。この火山灰が長い時間をかけて土壌化したものが、今日の関東平野を広く覆う「赤土」と呼ばれる関東ローム層であり、堆積過程については先の項で述べたとおりである。

下総台地の関東ローム層は基盤層である成田層の上に古い順から下末吉ローム層（常総粘土層）、武蔵野ローム層、立川ローム層の順で堆積し、層厚は約5～6mを測る。このうち下総台地で旧石器時代の痕跡が見られるのは最上層の立川ローム層であり、層厚は1.5～2mである。立川ローム層は給源である富士山に近いほど厚く堆積しており、相模野台地では8～9m、武蔵野台地では4～5mを測り、下総台地の場合、両台地に比して堆積が薄いのが特徴としてあげられる。

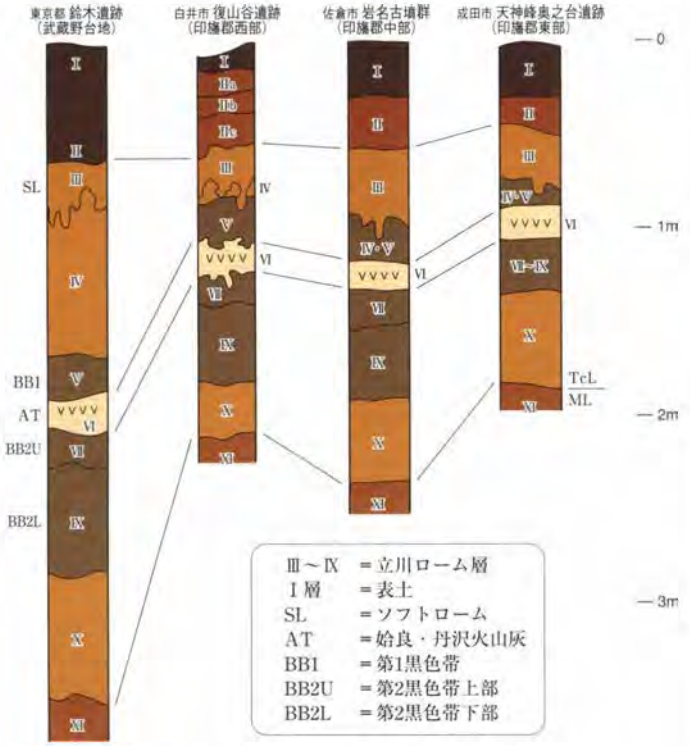
印旛沼周辺の立川ローム層は諸特徴（色調・硬化度・含有物など）により、武蔵野台地と比較を行いながらおおまかに6枚の層に分層される。この中には堆積時に火山灰の降下が弱くなり植物の繁殖が盛行したためにできたと考えられる黒色帯（第1黒色帯・第2黒色帯）や全国的な鍵層（比較的短期間に堆積し、他の層と区別できる特徴的な地層で、火山の多い日本列島では特定の広域火山灰がよく利用される）となる「姶良・丹沢火山灰（ＡＴ）」などが認められ、この層序区分は旧石器編年研究の指標のひとつとなっている。これら各層は理化学的な年代測定を行うことによってその堆積年代を知ることができ、これにより各層から出土した石器に年代が与えられる。



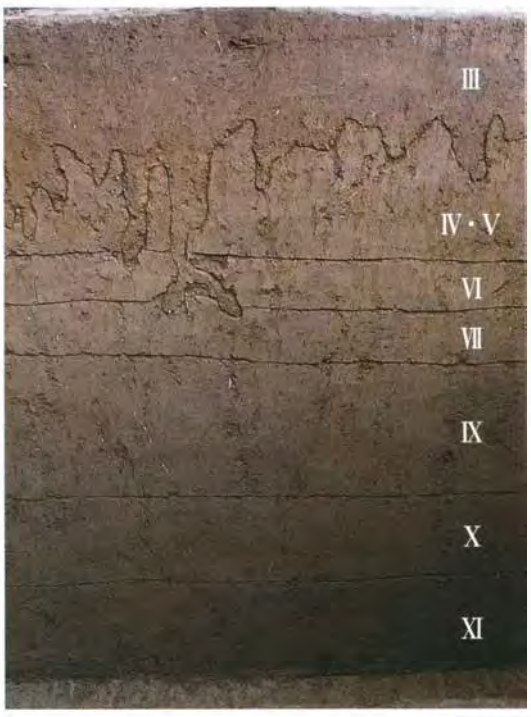
24 下総台地堆積層模式図



25 下総台地の地層（印西市草深）



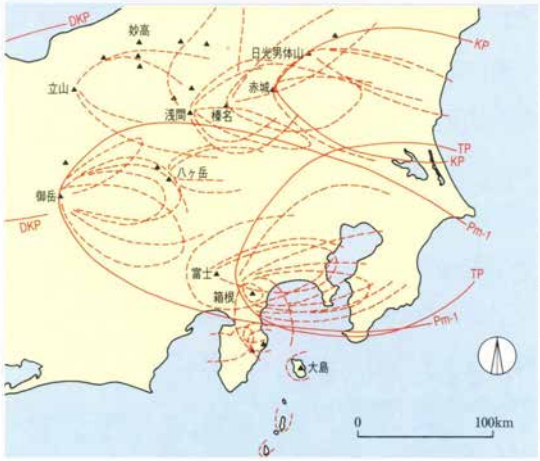
26 立川ローム層対比図（S=1/40）



27 立川ローム層の土層断面（佐倉市太田長作遺跡）



◀ 28　代表的広域火山灰（第四紀後期）



▲ 29　関東中部における主要火山灰

3. 動物相

更新世にくり返し訪れた氷期中は、いまよりも海水面が低下し、日本列島の北端は陸橋で大陸とつながっていた。約30万年前頃には中国北部から黄土動物群であるナウマンゾウ・ヤギュウ・オオツノジカなどの大型哺乳類がこの陸橋を渡って移り住み、日本全土に広がり、繁栄した。ヴュルム氷期になると同じく北方からマンモス動物群であるマンモス・ヘラジカなどが渡ってきたが、これらの動物群はより寒冷な地に適した動物であったため、ほとんど南下しなかったようである。

旧石器時代の遺跡から動物化石が出土する例は少ないが、岩手県花泉遺跡では約2万7千年前のナウマンゾウ・ヤベオオツノジカ・ヘラジカ・ハナイズミモリウシ・オーロックス・ノウサギなどの動物化石が発掘され、同時にヤギュウの肋骨を用いた骨器も発見されている。また、長野県野尻湖立ヶ鼻遺跡ではナウマンゾウ・ヤベオオツノジカ・ヒグマ・ハタネズミ・ヒシクイなどの動物化石の他にナウマン象の骨を用いた骨器や石器が出土しており、両遺跡は動物の解体場（キル・サイト）であったと考えられている。



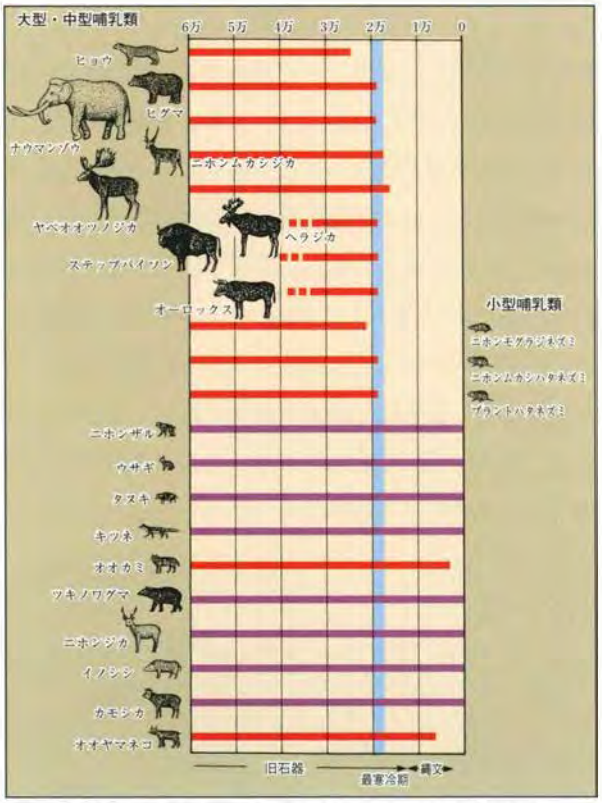
30　長野県野尻湖底出土のナウマンゾウの牙(上)とオオツノジカの掌状角(下)　愛称「月と星」

このように更新世の日本列島には今日には見られない絶滅種を含め大・小様々な動物が棲息していたと考えられ、特に大型哺乳類は旧石器時代人の重要な食料であり、獣骨や角は加工され、道具として用いられていた。

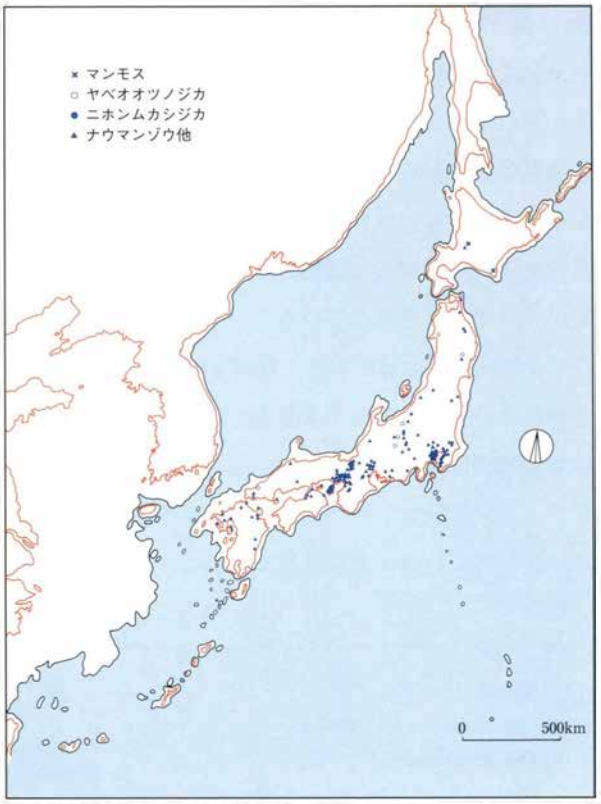
最終氷期最寒冷期（約1万7千年前）を境に日本列島からは大型哺乳類が姿を消す。最寒冷期の終了をきっかけとした気候・植生の変化も原因と考えられるが、この期を前後として見られる狩猟具の発達をも考え合わせると旧石器時代人たちによる乱獲（オーバー・キル）が絶滅の一因となった可能性も考えられる。



31　岩手県花泉遺跡出土骨角器
［右:タテ約23.5cm］



32 過去6万年間における日本の主な哺乳類の移り変わり



33 旧石器時代化石動物出土地点



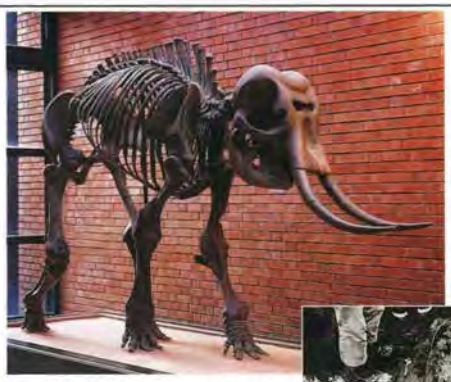
34 絶滅した大型哺乳類

コラム・印旛村のナウマンゾウ

昭和46年6月、印旛村瀬戸地区において印旛沼の水路開削工事中にナウマンゾウの全骨格化石が発見された。当時全骨格が発掘される例は極めて稀で、日本ではじめて一頭分が復元されたナウマンゾウとなった。また、臼歯や牙の形から推定年齢10～12才の若い雄であることもわかった。

発見されたのは成田層中の清川層と呼ばれる貝化石砂層であり、約30～20万年前のナウマンゾウと考えられる。この頃、下総台地は「古東京湾」の海底下に没していた時間が長かったが、一時的な海退により沼沢地化した時にこのナウマンゾウは下総台地へ訪れて来たと考えられる。

このナウマンゾウはまだ下総台地に人類の活動痕跡が見られる前のものであるが、この発見により旧石器人が活躍する3万年前以降にも下総台地にナウマンゾウが棲息していたという可能性が十分高くなった。おそらく印旛沼周辺にいた旧石器人たちも狩猟の対象としてナウマンゾウを追っていたことであろう。



▲ 35 印旛沼出土ナウマンゾウ(レプリカ)



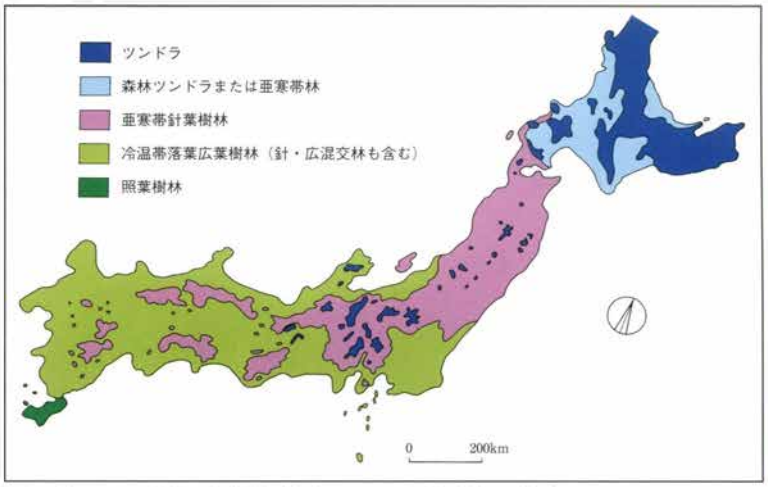
36 当時の発掘風景 ▶

4. 植物相

旧石器人が生活していた時代は氷河期のまっただ中であり、後期旧石器時代の中頃、いまから約2万～1万7千年前の最終氷期最寒冷期を例にしてみても、年間の平均気温が今より約7～8度低く、非常に寒冷であった。

当然の事ながら植物相も現在とは異なっており、北海道の北半部や高山にはツンドラ地帯が、北海道南半部から東北地方にかけては亜寒帯針葉樹林が、関東以南から九州地方にかけては針葉樹と冷温の落葉広葉樹の冷温帯針広混交林が、九州地方の南端の一部に照葉樹林が広がっていたと考えられ、これは宮城県仙台市富沢遺跡など各地で発見されている化石林の発掘からも確認することができる。このことから考えると当時の関東地方は、現在でいえば標高約1,500mの山岳地帯の植生が台地上に広がっていたと見ることができる。

当時の日本列島の大半をおおっていた針葉樹林・落葉広葉樹林中には多種・多様な食料に適した種子や果実を実らせる植物が存在しており、チョウセンゴヨウ・トドマツ・ハイマツなどの種子類、ハシバミ・クルミ・クリ・ドングリ・トチノキなどの堅果類、ヤマイモ・ユリなどの根茎類が代表的なものとしてあげられる。これらは容易にかつ多量に採集できるばかりではなく、栄養価が高い点からも当時の人々の重要な食料となっていた。



37　ヴュルム氷期最寒冷期（約2万～1万7千年前）の植生


38　岐阜県西穂高山頂付近（標高2,156m）の風景


39　宮城県富沢遺跡植物化石
（グイマツ樹根）出土状況


40　東京都野川中洲北遺跡植物化石
（カラマツ属）出土状況



41　旧石器時代の代表的な植物質食料

5. 下総台地の古環境と風景

自然環境は狩猟と採集を主としていた旧石器人に大きな影響を与えており、古環境の復元は当時の人たちの生活や行動を理解する上でのひとつの重要な要素となっている。

旧石器時代の古環境を復元する有効な手段の一つとして、ローム層中や湖沼堆積物中に含まれる花粉分析があげられる。近年においては分析技術の発達・分析事例の増加から古環境復元が容易になってきており、特に武蔵野台地では300カ所以上発見されている旧石器時代遺跡の成果から約3万年前以降、立川ローム堆積期の古環境の変遷がかなり詳細に明らかになってきている。

下総台地ではまだ分析事例は乏しいが、成田空港周辺（成田市木の根拓美遺跡［空港No.6遺跡］等）や千葉ニュータウン周辺（白井市復山谷遺跡・同市白井第1遺跡）などの旧石器時代遺跡において立川ローム層中の花粉分析が行われており、その内容が明らかになっている。まだ不明確な部分も多いが当時の古環境の様相をうかがい知ることができ、その結果、おおまかに見て次に示す3段階の変遷をたどることができよう。



42　下総台地の古環境の変遷

段階1　立川ローム X 層（約3万～2万8千年前）

この段階にはシダ類胞子が多く検出される特徴が上げられ、比較的温暖・湿潤的なシダ類の草原の古環境を復元できる。樹木ではマツ属・スギ属・クロベ属・ヒノキ属等の針葉樹、ハシバミ属・ハンノキ属等の広葉樹が草原の中にまばらに点在していたと考えられる。



段階2　立川ローム層 IX～IV層（約2万7千～1万7千年前）

最終氷期最寒冷期に向かって気候が冷涼に変化する段階。イネ科・タンポポ亜科・ヨモギ属・カラマツソウ属・キク亜科等の草本類が草原を形成し、樹木ではスギ属・マツ属等の針葉樹、ハシバミ属・ハンノキ属・コナラ属・クマシデ属・クリ属等の広葉樹が草地に展開していたと推測される。



段階3　立川ローム III 層（約1万6千～1万2千年前）

最終氷期最寒冷期が終了し、徐々に温暖な気候へ移り変わっていった段階で、草原から森林への過渡的な植物相を示す。ハシバミ属・ハンノキ属・コナラ属・クリ属・クリカシ属・ヤナギ属・アカガシ亜属等の多様な広葉樹に加えてスギ属・マツ属の針葉樹が主体となって林地を形成し、林地の内外にはキク亜科・ヨモギ属・タンポポ亜科・イネ科・スゲ科・マメ科等の草本類が生育していたと考えられる。

6. 下総台地における旧石器時代の遺跡の立地

下総台地を含む南関東地方（相模野台地・武蔵野台地）における旧石器時代の遺跡は、基本的には小河川に沿った台地縁辺の「張り出し地形」に立地する。これは当時の植生とかかわる旧石器人たちの生活と深い関係があったと考えられる。先にも見たように、当時の台地上には草原が広がり、森林は谷の中や台地上に点在していたときが多く、飲料水を確保し、また狩猟活動・木の実等植物の採集を行うには草原と谷との境界付近、つまり台地のへりにいるのがもっとも効率がよいからである。同時にそこは日当たり・水はけも良く、眺望のきいた当時の住環境に適した場所といえる。

印旛沼周辺地域においては印旛沼を中心に高崎川・鹿島川・師戸川・取香川・尾羽根川・神崎川・手繰川などの流域・支流域に旧石器時代遺跡の分布が数多く見られる。これは河川の流域に下総台地の地形的特徴のひとつである樹枝状に発達した谷津に伴う「張り出し地形」がいたるところに見られるからである。



43　成田市取香和田戸遺跡D・L地点空撮

谷に向かって張り出した台地先端部に旧石器時代の遺跡が立地している様子がうかがえる。

コラム・東内野遺跡と「東内野湖」

東内野型尖頭器の標識遺跡である富里市東内野遺跡は遺跡中央に窪地が存在し、その窪地を取り囲むように環状に大規模な石器集中地点が展開している遺跡である。昭和51年から始まったたび重なる調査においては石器群の検出の他に中央窪地を含む地形・地質の調査が行われ当時の古環境の様相が明らかになっている。

この窪地に関する調査・分析結果の要点は次の2点にまとめられる。

1．ロームに水付きの現象（ローム層が地下水の影響により変色・変質化すること）が観察され、この水付きロームを境に粘土化から粘土質になる。また土壌分析の結果、姶良・丹沢火山灰より上部は沼池の環境下に火山灰が堆積したことが判明。

2．窪地土中の珪藻分析の結果、珪藻化石の検出は見られなかったが植物珪酸体については検出が見られ、当時は珪藻は生息していたがその殻が堆積できる環境ではなかった。

この2点の結果を考え合わせると、この窪地は武蔵野ローム上層あたりで形成され、その後に水がたまったり、乾燥したりをくり返していた沼池であったと推測される。当時、この沼池にはたくさんの動物が集まってきたと考えられ、その動物たちを求めて旧石器人たちも集まり、大規模な遺跡が形成されたとも見ることができる。このように東内野遺跡は旧石器時代の特殊な古環境を復元する事ができる貴重な遺跡でもある。



44　東内野湖と石器出土状況



45　東内野遺跡古環境想像復元図

Ⅲ
石　器

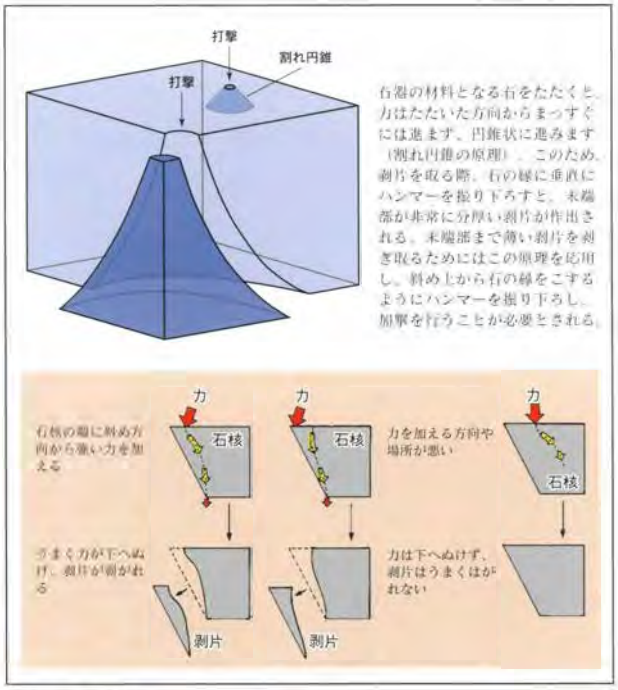


46　成田市飯仲金堀遺跡B地点出土石器［S=2/3］

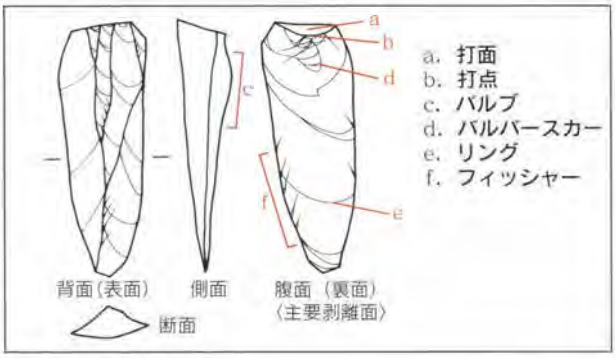
1．石器の作り方

旧石器時代では主に打ち欠きによって製作された打製石器が用いられていた。石器の製作にあたってはまず第一にその素材となる石のかけら（剥片）を原石または石核からうまく剥ぎ取る（割り取る）ことが重要である。そこで旧石器人たちはムダなくかつ効率良く剥片を作り出すために石刃技法や瀬戸内技法と呼ばれる素材作出技術を考え出した。さらに旧石器時代の終わり頃には湧別技法など、細石刃という非常に小さな石刃を剥ぎ取るための特殊な技術もあみだしている。剥片を剥ぎ取るためには石（ハードハンマー）や角・骨・木（ソフトハンマー）などを使って、直接に石をたたいて剥片を取る直接打法や石のふちに骨や角でできたタガネをあて、このタガネをハンマーでたたいて剥片を取る間接打法が用いられていた。

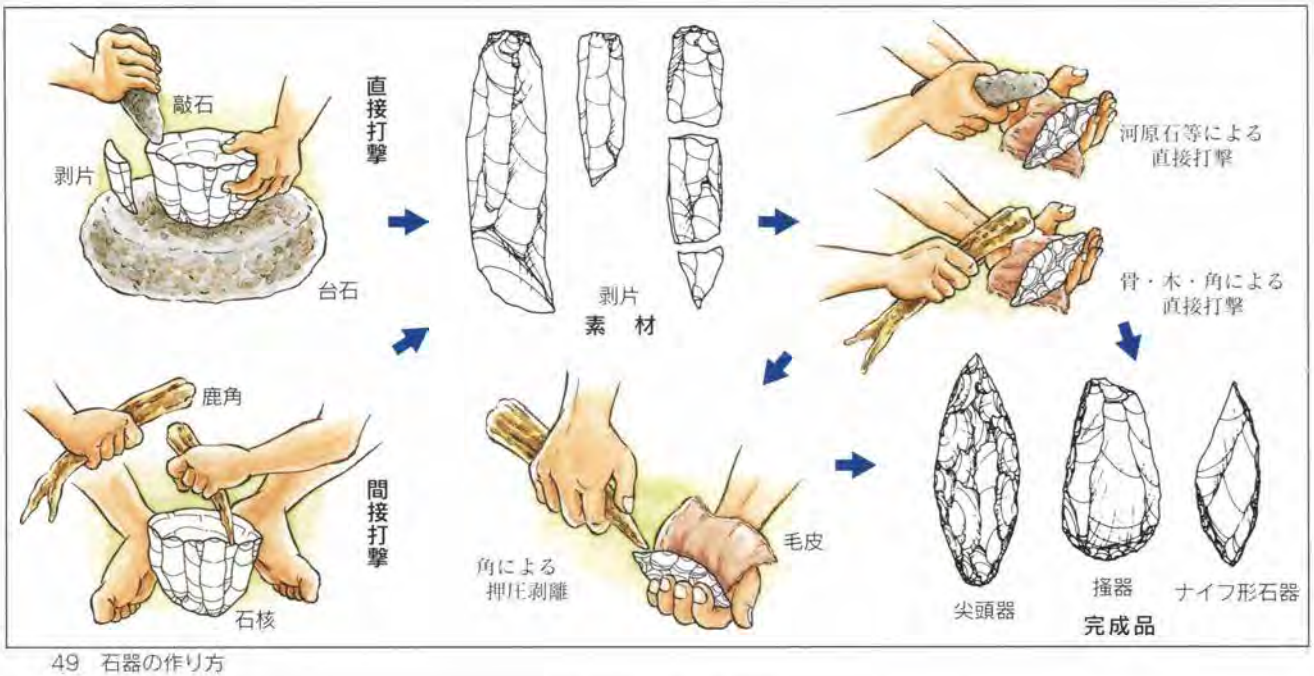
得られた剥片（素材）はそのまま刃器として用いられる場合もあるが、さらに加工が施され（二次加工）、石器に仕上げられる。その際、ナイフ形石器などのように素材剥片の形状を著しく変形するような二次加工が加えられる場合もある。これらの二次加工は直接打法・間接打法により行われるが、旧石器時代の後半には押圧剥離という剥片のふちに角などの先端を当てて一気に力を加えて薄く細かい加工を施す技術が登場し、尖頭器などの製作に用いられた。



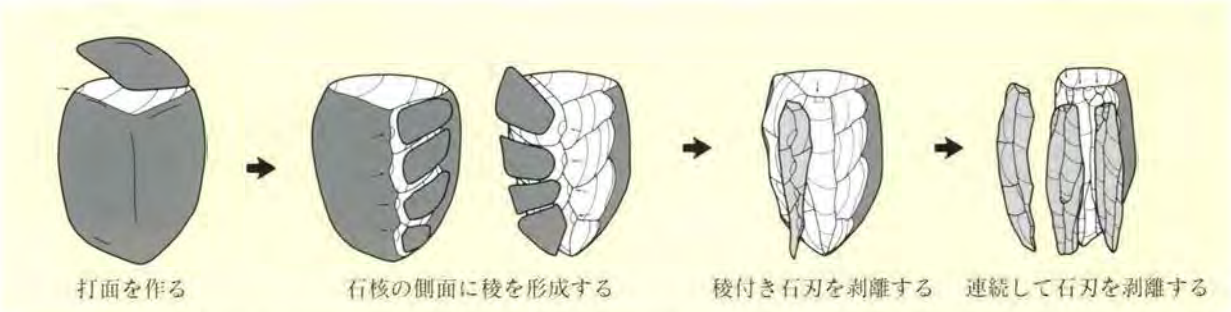
47　石の割れ方



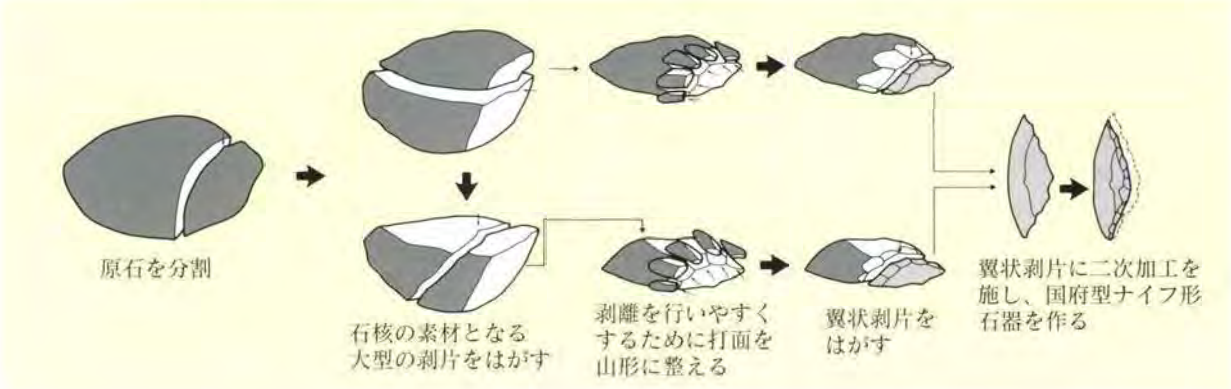
48　剥片の各部名称



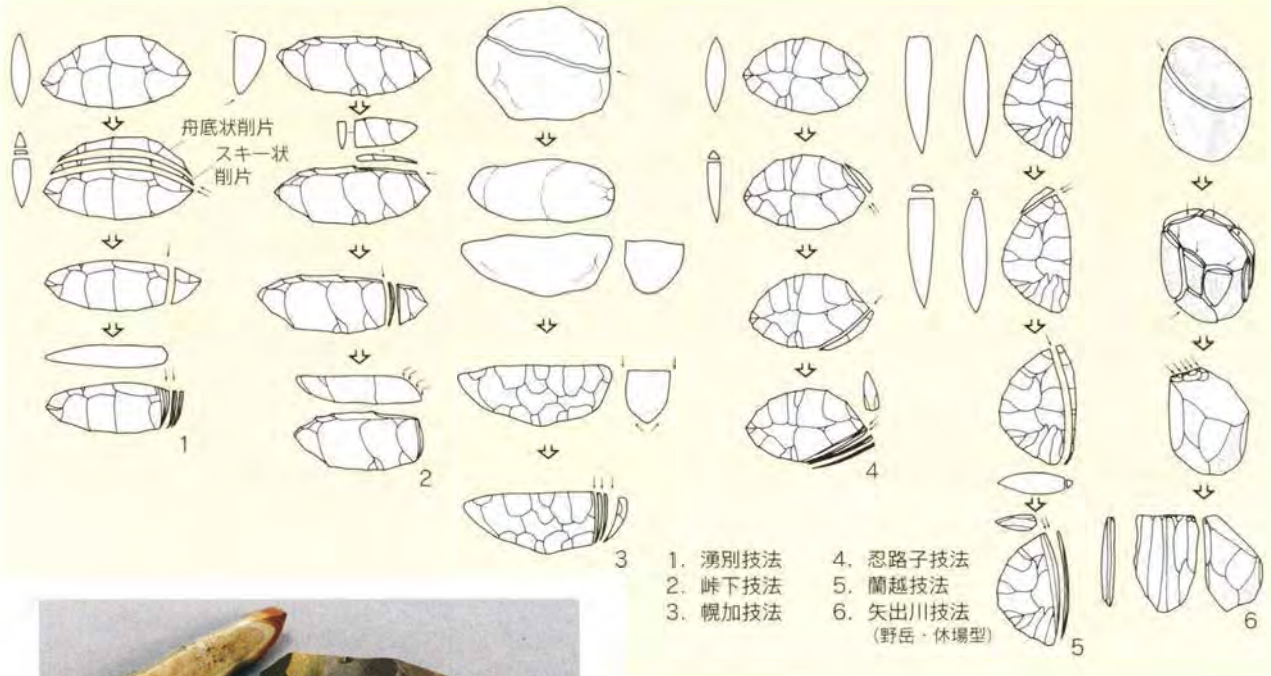
49　石器の作り方



50 石刃技法　縦に細長い剥片（石刃）を連続して剥ぎ取るための技法で、日本列島内では後期旧石器時代前半から見られる。石刃をうまく剥離するためには入念な石核の調整が必要とされ、場合に応じ、頭部調整・打面調整・打面再生などが行われる。



51 瀬戸内技法　石刃技法に対し、横長の翼状剥片を連続して剥ぎ取るための技法。ＡＴの降灰後に近畿・瀬戸内地方のサヌカイト原産地に発達し、翼状剥片からは特徴的な「国府型ナイフ形石器」が作られる。





53 四街道市木戸先遺跡出土の湧別技法による細石刃石核

52 細石刃製作技法

後期旧石器時代の終わり頃、小型の石刃（細石刃）を組み合わせて用いる細石刃文化が登場し、この細石刃を連続的に剥ぎ取るための様々な技法が地域により発達する。湧別技法は楔形を呈する細石刃石核を作出する技法で、特に北海道・東北地方で発達し、千葉県内にも波及する。円錐形細石刃石核を作出する矢出川技法は関東以西を中心に見られる。

2．石器の種類と使用法

石器は生活必需品であり、何らかの目的をもって作られたことは言うまでもない。しかし、現在の視点から過去の用途を導き出すのは困難なことである。そこで石器を分類するために形態分類が広くおこなわれるようになった。例えば、ナイフの形に似ているからナイフ形石器、彫刻刀に似ているから彫刻刀形石器などである。形態分類のなかに機能に即した分類がないわけではない。例えば何かを引っ掻くものだから掻器、刺突具としての機能が考えられるから槍先形尖頭器などである。では、生活必需品である後期旧石器時代の石器の種類（器種）とその使用方法がどのようなものであったのかを見てみよう。

● ナイフ形石器



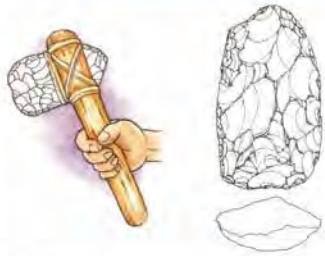
素材の一側縁もしくは二側縁に刃潰しを施し、鋭い縁辺を刃部とする。切截具

● 掻器



剥片・石刃の末端部や側縁部に二次加工を施し厚みのある刃部を作る。皮なめし等に用いた。

● 石斧



動物の解体、木の伐採、土掘具など使用に関しては諸説ある。刃の部分を研磨したものもある。

● 槍先形尖頭器



素材を求心状に薄く剥離させ先端を尖らせたもの。刺突具として用いられた。

● 彫刻刀形石器



周縁に加工を施し、樋状剥離により彫刻刀の丸刀のような刃部が作られる。溝掘りなどに用いられた。

● 石錐



主に剥片の２辺に加工を施し、抉りを入れ尖った刃部を作る。穴をあける道具。

● 磨石



穀物や堅果類を磨り潰す道具。石皿と共に用いる。

● 細石刃　●細石刃石核



細石刃　　細石刃石核

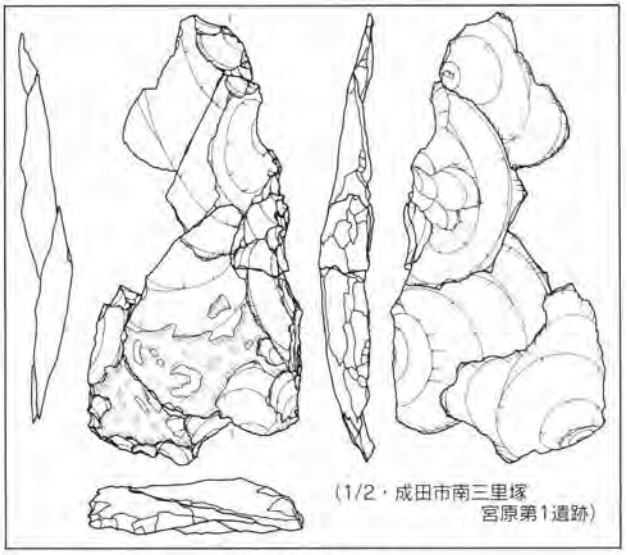
主に、幅1cm以下で長さが幅の2倍以上あり、両側縁が平行し背面の稜線も同時に平行となるもの。組み合わせて槍先の刃部などに用いられる。

54　主な石器の種類と使用法

3. 石器の再生

石器がどのようにして作られるか、そしてどのような種類がありどのように使用されていたのかを見てきた。最後には捨てられ（廃棄）、それが我々の目に映るブロックとなり姿を現すと考えられてきたが、残された石器をよく観察してみると不慮の折損などの後に再び加工を施していることがある。つまり再びその石器を使用する目的があったと考えられるのである。また事故の場合だけではなく、石器としての機能が衰えたため、“刃”の部分を作り直した例もある。これは刃部再生、あるいはリダクションと呼ばれる行為である。

リダクションは変形論などといわれ、1968年にフリソンによって提示された理論のことである。ことの始まりはムステリアン石器群の解釈でボルドーとビンフォードが議論を交わしたムステリアン論争に負う所が大きい。多彩な石器群を型式学的に分類し、地域差や時期差としたのがボルドーであった。一方でそうした石器の違いは社会と自然環境への適応の結果であるとしたのがビンフォードである。伝統的な考古学的手法と仮説検証法を取り入れたニューアーケオロジーとの対峙が始まる、1960年代の出来事であった。



55 石斧の刃部再生剥片

具体的に再生とはどのようなものかをみてゆきたい。再生は後期旧石器時代の初頭からおこなわれてきた。よく知られているもので石斧の刃部再生があり、なかでも局部磨製石斧にしばしば刃部再生が施される。打製石斧にも刃部再生がおこなわれているのかもしれないが、全体が剥離面で覆われているためその判断がつきにくい。局部磨製石斧の場合だと刃部の研磨面が部分的に残っている場合があるため、判断できることが多い。刃部再生と呼んではいるが、本体そのものを大きく作り変えることもある。そのため一回り小型の石斧へと生まれ変わる。また、使用による衝撃で縦に割れたり、大きく割れたりした場合、再び調整剥離をおこない研磨を施すこともある。この場合は再利用と呼んで良いかも知れない。

石斧が出土するのはⅨ層段階に集中しているが、石器群の中に占める割合は非常に低い。出土しても5点未満のことがほとんどであり、むしろ出土しないことのほうが多い。それだけ石斧が出土することは珍しいのである。現代感覚でいうと、貴重なものだから使い込まれたのだということになるかも知れない。また石斧は環状ブロック群に伴うケースが多いため、両者には強い相関関係があると考えて差支えがない。

下総台地のⅦ層～Ⅵ層段階で良質な珪質頁岩製大型石刃を分割する下総型石刃再生技法がある。石刃そのものを製品とみなし刃部を再生するもの、あるいは石刃を石核とみなし小型石刃を作出するもの、石刃を細かく分割するものなどの例がある。どの例も目的があっておこなわれたものであるが、一つの技法の範疇に収まるかどうかを考える必要がある。共通項として石刃の分割という部分で括られよう。この他にも再生の例はいくつかあり、印旛郡内で特徴的な東内野型尖頭器がある。ほとんど普通の尖頭器と変わらないのだが、先端部から樋状剥離を施す点が特徴である。同じ有樋尖頭器の種類で男女倉型と呼ぶものがあり、このタイプは信州を中心に分布する。ナイフ形石器に後続する石器群に含まれることもあって、確認されて間もない頃はナイフの機能を取り込んだ尖頭器という解釈もあった。しかし、図56のように樋状剥離による削片と東内野型尖頭器との接合例が存在するため、今では槍先の一部を再生したという考えが主流になっている。この他にⅣ下～Ⅴ層段階で掻器や、彫刻刀形石器に刃部再生の例があり、使用によって磨滅した刃部を新しくすることが目的の



56　刃部再生剥片・削片の接合資料

ようである。

石器の再生は削片や調整剥片が接合することで明らかになったが、実際の遺物観察だけではやはり見過ごしてしまうことも少なくない。さらに詳しく見てみると、元の石器の形を踏襲しスケールダウンするものと、別の機能を有する石器に作り変えるという2つの変形論が浮かび上がる。ただ、どちらも再利用、再使用の意図が含まれる点では大きな枠のリダクションとして捉えることができる。

4. 石材

石器に使用する石は、石なら何でも良いというわけではなく、黒曜石・珪質頁岩・チャートなど加工しやすく、また、割れ口が鋭くなる石材を選択する。だが、良質な石材の原産地・採取地（河原の転礫など）は限られている。そのため、当時の人々は、交易かまたははるばる遠方まで直接取りに行くかして石器製作に適した石材を入手していたと考えられる。下総台地だけを見ても遠方かつ多方面からの石材の搬入が見られ、時期によって主に使用される石材の種類に違いが見られる。

しかし、当時は良質の石材は自然環境の影響（火山活動の活発化など）等により常に入手可能な状態ではなかったようである。不足を補うために、やや粗悪な在地の石材を使用したり、稀少な良質の石材を効率よく消費しながら石器製作を行わざるを得ない状況もあった。その場合でも旧石器人たちは石器の製作技法や形態を改変して、工夫を凝らしながら柔軟に対応していた。特に良質な石器石材の原産地が乏しい千葉県内ではこれが顕著に見られ、旧石器時代の前半段階に下総台地で特徴的に見られる「下総型石刃再生技法」や「遠山技法」はその一つの現れと考えられる。

コラム・千葉県内の石材産地

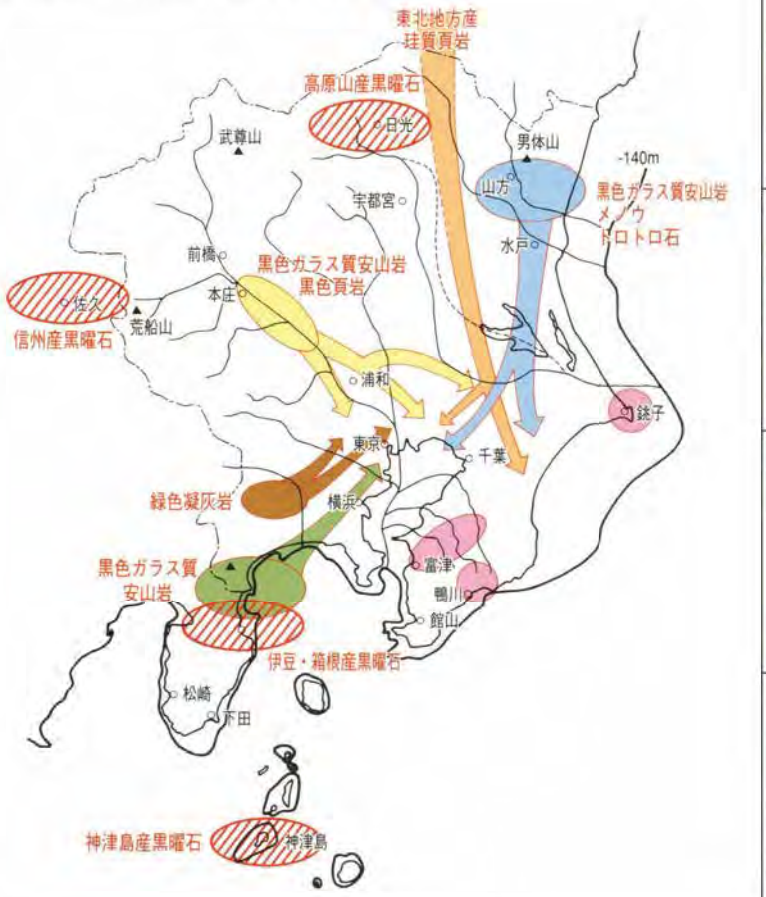
千葉県はかつて「石なし県」と呼ばれたほど、石器の材料に適した石材産地が知られていないところで、これらのほとんどは外部からの搬入に頼っていたものと考えられていた。

しかし近年、新たな石材産地の発見や県内で産する石材を多く使用した石器群の検出によりその状況は変わりつつあり、銚子のチャート・古銅輝石安山岩、万田野・長浜層などの礫層中に見られる黒色ガラス質安山岩・チャート・玉髄・黒色頁岩など、嶺岡山地周辺の白滝層に見られる珪質頁岩（白滝頁岩）などが注目されてきている。まだ産出する石材の質や量などに問題は残されているが、万田野・長浜層などの礫層の石材種は北関東の石材種傾向に似ていたり、白滝頁岩は下総台地でかなり多用されていたりと、下総台地への石材の移動ルートは再考され始めている。このように今日の下総台地の旧石器時代研究は千葉県内の石材産地を含めた石材の受給関係、それに伴う人々の移動などの考察も行われ、新しい段階へ一歩踏み出したと言える。



57　千葉県内で採取できる石器石材

58 関東地方における石材原産地と移動ルート




メノウ


トロトロ石
（奥：原石、手前3点：遺跡から出土した風化の進んだもの）


黒色ガラス質安山岩（大洗）
（奥：原石、手前3点：遺跡から出土した風化の進んだもの）


黒色ガラス質安山岩（利根川）


珪質頁岩


チャート


緑色凝灰岩


黒色頁岩（利根川）


高原山産黒曜石


信州産黒曜石（和田峠）

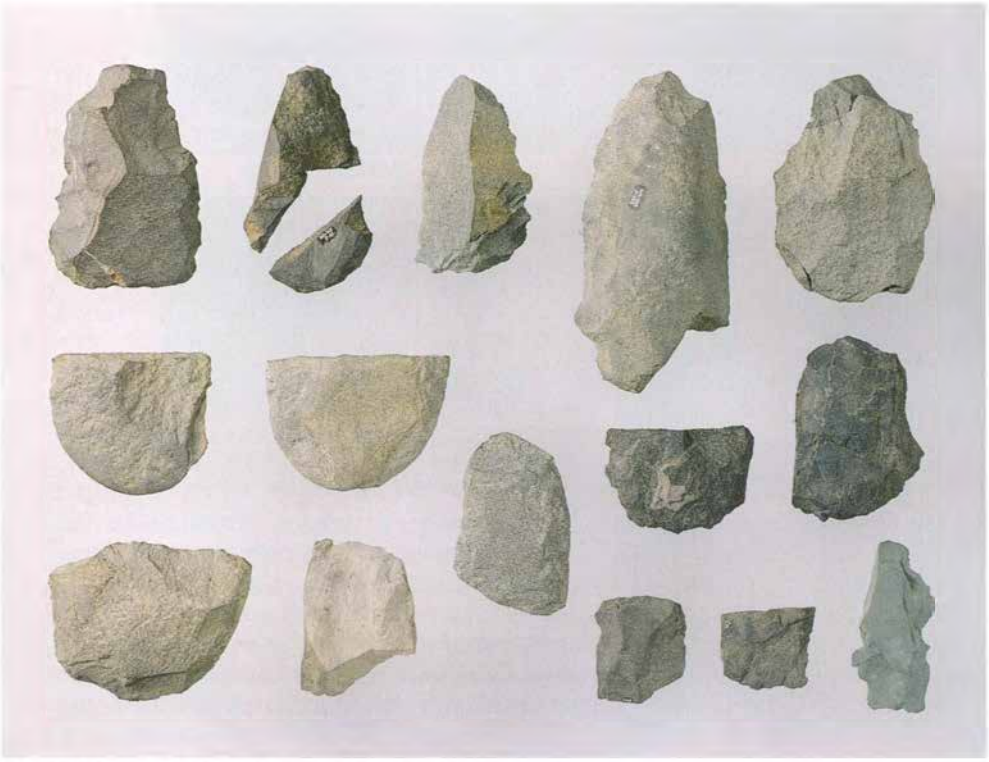

伊豆・箱根産黒曜石（柏峠）


神津島産黒曜石

コラム・遠き山の石－黒曜石の原産地分析－

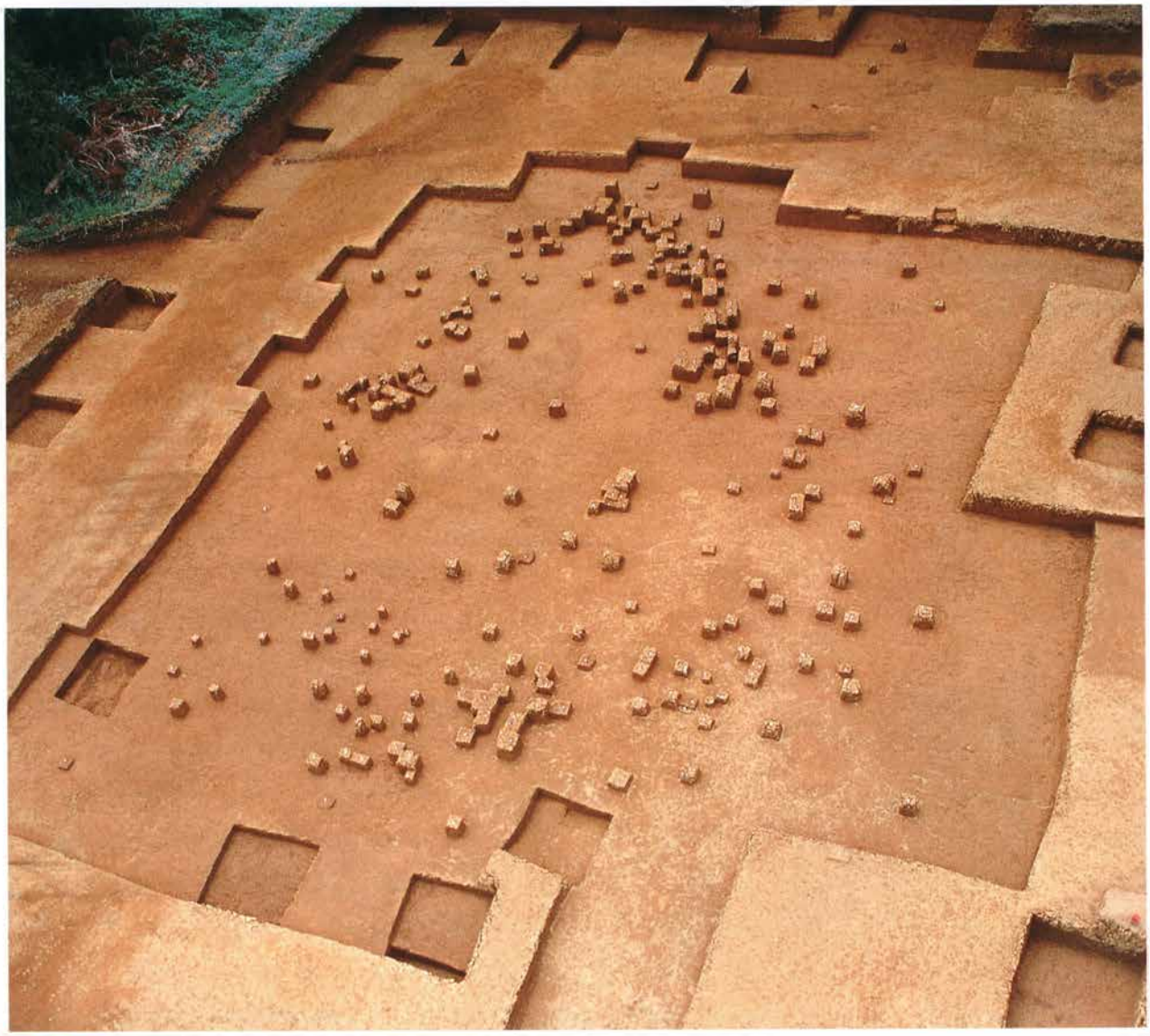
黒曜石は火山から噴出したマグマが冷え固まって誕生したガラス質の岩石である。黒曜石には生成過程上、様々な元素が含まれており、これらは噴出した時期や場所によって微妙にその量が異なっている。近年、蛍光X線分析と呼ばれる理化学的手法の発達により遺跡から出土する黒曜石の微量元素の定量分析が行われ、これと自然に存在する黒曜石原産地から採集した資料との分析結果比較によって、かなりこまかく正確な黒曜石の産地同定がなされるようになってきた。これにより地域・時期を通した黒曜石の移動ルートが解明されるようになり、印旛沼周辺地域においても信州産、伊豆・箱根産、神津島産、高原山産の黒曜石が確認され、当時の人々の交流や動きが議論されるようになってきている。またこの分析法はサヌカイトや黒色ガラス質安山岩にも取り入れられ、同様にかなりの成果が得られている。

しかし、蛍光X線分析は今のところ黒曜石等のマグマが固結した一部の火成岩にのみ有効であり、旧石器時代の石器石材によく使用されている珪質頁岩・チャート等の堆積岩・変成岩への応用はまだ難しい。これらの産地推定には河原・河床礫の採取、露頭に見られる岩脈・鍾層からの採取等、まだまだ地道な活動を通した比較分析を続けていかなければならない。



59　本埜村瀧水寺裏遺跡出土石斧［左上：長さ8.5cm］

Ⅳ
足　跡



60　成田市南三里塚宮原第1遺跡　第2地点検出環状ブロック群

1．旧石器時代の調査

現代社会に生きる我々からすると，旧石器時代に生きた人々の生活は漠然としたものに映るであろう。第1章で触れてきたように、石器を使って生活していたということなど全く想像もつかない世界ではないだろうか。石器は当時の生活必需品であり、それを使って何かをおこなっていたことは確かである。だが、それは単に生きるという活動の、ある一側面しか捉えていないのであって、より大きな視点に基づき当時の社会を見てゆかねばならない。

では、どのような方法を用いることでそれが可能となるのであろうか。それはやはり過去の道具を丹念に見てゆくことであろう。しかし、そこかしこに石器が落ちているわけではない。そこで、当時の人々が好んで生活を営んでいたであろうと思われる場所に発掘調査というメスを入れるのである。旧石器時代の調査は縄文時代以降のそれとは異なる部分がある。縄文時代以降となると、住居跡や陥穴といった遺構と呼ばれるものが多数確認されるのであるが、旧石器時代ではそれらはほとんど発見できない。そのため、どこで生活していたのかを探りあてるのが非常に困難なのである。どこでも掘ればよいと言うわけでもなく、過去の調査例からどのような場所に生活が営まれていたのかといった好みや生態を導き出すことが必要である。

千葉県の下総台地で石器が見つかるのは、今のところ関東ローム層で一番新しい立川層からである。しかし、新しいといっても立川層の一番古いところは約三万年前に遡る。この年代はちょうど後期旧石器時代が始まる頃に一致してくる。これから少しずつこの三万年という年月を紐解いてゆきたい。

● 石器の出土状況



61　石器出土状況（四街道市前原No.2遺跡・谷津田遺跡）

今でこそ石器の広がりを面的に捉えることを当たり前のこととしておこなっているが、旧石器時代の調査が始まったばかりの頃は違っていた。石器がある程度まとまりをもって眠っているなど考え様もなかったのである。では、ある程度のまとまりとは何なのだろうか。遺跡に持ち込まれた石材は石器を製作することが目的の材料であるため、これらを石器に至らしめるためには石材を打ち欠いてゆかねばならない。その過程に生じた剥片や砕片（カケラ）が製作者の周辺に飛び散るわけである。そうしたまとまりをブロックと呼んでいる。その内容は様々で、単に製作の跡だけとは限らない。複数の石材が混ざることがごく普通で、完成品しかない場合もあったり、製作途中で欠損したものが廃棄されていたり、意図的にまとめて廃棄されたりと様々である。ブロックの内容が一様ではないということは、おこなわれていた作業が一様ではないことの裏返しとなる。

ブロックの内容に差が生じるのは、行動が違うからということだけではなく、石材の供給という根本的な部分が違っていても生じてくる。その点からみてみると、遺跡の性質は原産地遺跡と非原産地遺跡の2つに分けられ、下総台地の場合は非原産地遺跡に含まれる。原産地遺跡に含まれるからといって、常に原産地の近くで生活を送っているわけではなく、食料を得るためにはそれがある場所に移動してゆかなければならない。その当時のテリトリーの範囲を知るすべは無いが、遊動生活を送ることにより手持ちの石材は徐々に消費されてゆく。原産地から離れれば離れるほど、必然的にブロックの規模は小規模となるであろう。それは手持ちの石材を消費し続けるからであるが、完全には消費しつくすことは無い。そのような状況に陥る前に、別の地点で石

材を確保するのである。つまり、テリトリーとは食料獲得可能範囲というだけではなく、石器石材獲得可能範囲をも含むこととなる。それでも石材を獲得できる場所を多く確保してあればあるほど、石材の種類も多様となり、ブロックの内容がある意味潤沢に映るのではないだろうか。例外はあるであろうが、千葉県の石器は相対的に小型である。原産地が分かってきたといえども、十分な供給量に至らなかったためであろう。それゆえ、限られた石材を如何に効率よく使用してゆくかということも要求されたに違いない。そのように考えると、ブロックや石器の規模が小さいのは理にかなったことと理解することもできる。

● 石器の分布と接合

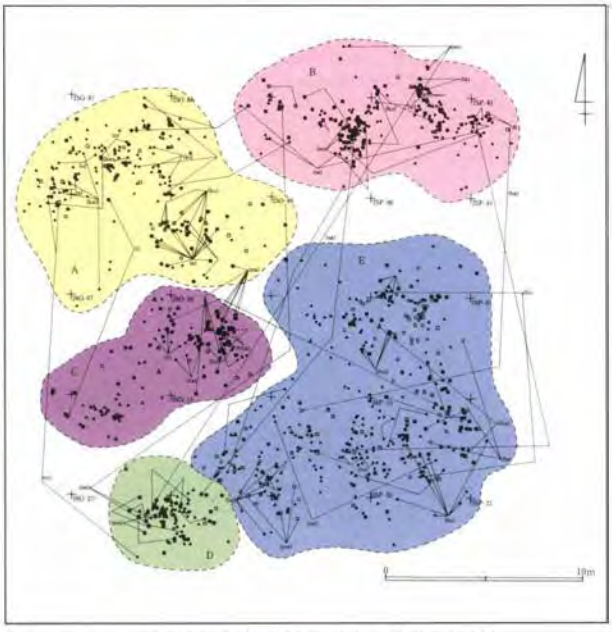
石器のまとまり(ブロック)が石器製作の場所であるならば、その中にある剥片同士はくっついて元通りに戻るはずである(くっつくことを考古学では接合するといっている)。しかし、なかなか元に戻るというものではない。実際は全てのピースが揃っていないジグソーパズルをしているようなものなのである。それだけではなく、複数のパズルが入り乱れているというのがほとんどである。



62 接合資料(北海道上白滝5遺跡[タテ28.0cm])

ブロックができる過程を考えると、ブロック内の石器同士は接合する確率が高い。これは10点あれば10点全てが接合するという意味ではなく、1つくらいは接合するということである。これがブロック間になると、1つくらいの接合の確率がずっと低くなる。

旧石器時代の遺物の広がり、つまりブロックがどのように存在しているかを考えてみよう。先ず、どのような構成人員で生活していたかであるが、基本的には大人数での行動は取らなかったであろう。発掘調査から分かってきたことだが、2～3のブロックに石材の共有や接合関係などの相関関係が認められるため、おそらくそれくらいの人数であったのではないかと考えられている。しかし1ブロックしか存在しないこともあったり、石器、石材構成に大きな違いが見られたりと、まだまだ分からないことがたくさんある。それでも2～3のブロックの間に繋がりが認められることは、人の行動を理解する上で大きな情報となろう。ブロック間に上記のような関係があるものについてユニットと呼んでいる。



63 ブロック間接合資料分布状況(佐倉市芋窪遺跡)

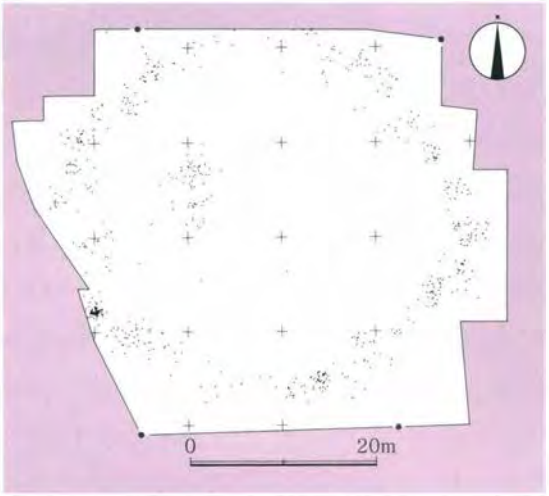
石器のまとまりをブロックあるいはユニットと表現していることがあるが、実際は可視的な石器のまとまりをブロックと呼ぶ一方で、ブロック間に相関関係が認められるものをユニットととらえられている。少なくともユニットはブロックが複合した状態を示すため、本来は同じ意味とはならない。旧石器時代の研究だけに限れられたことではないが、全体を一度に把握して理解するのではなく、段階を設けて一段一段上がってゆくことも求められる。個々の石器から始まり、ブロック、ユニットと経る必要もある。根気良く相互の繋がりを手繰っていった結果、

人間社会の一端に辿り着くに違いない。

● 環状ブロック群

ブロックやユニットについて説明してきたが、1980年代に今まで考えられなかったような遺跡が報告されるようになる。それはブロックが環状に巡るものであった。個々のブロックが円を描くように配置されたものであり、こうした遺跡を環状ブロック群と呼んでいる。とても1、2ヵ所のブロックで作れるようなものではなく、5、6ヵ所あるいは10ヵ所以上のブロックで形成されていることもある。遺跡の規模も様々であり、直径20mのものから50m以上のものまで存在している。一つの集団で形成したとは考えにくく、複数集団によるものと考えるのが自然であろう。個々のブロックを詳細に検討してゆくと、同時期に形成された可能性が高い。規格性の高い環の形状となっていることを考慮すると、それぞれのブロックに強い関係性があったことを示唆していよう。その証左として距離の離れた対向するブロック間で接合することもしばしば見られる。

このように規模の大きな遺跡を大型遺跡と呼び、一般的に見られる2～3ブロックで形成される遺跡と区別している。これは単に遺跡が大きい、小さいを示しているのではなく、離合集散という行動の結果を表している。人々は常に小単位で行動しているのではなく、何らかの契機に伴い小単位が集合し大型遺跡を形成するに至るのである。小から大、大から小へ、これを離合集散と呼んでいる。何を発端とするかはまだ明らかとなっていないが、当時の社会はそれなりに複雑であったのかもしれない。



64　成田市南三里塚宮原第1遺跡第1地点環状ブロック群


65　本埜村瀧水寺裏遺跡南側環状ブロック群

● 個体別資料分析

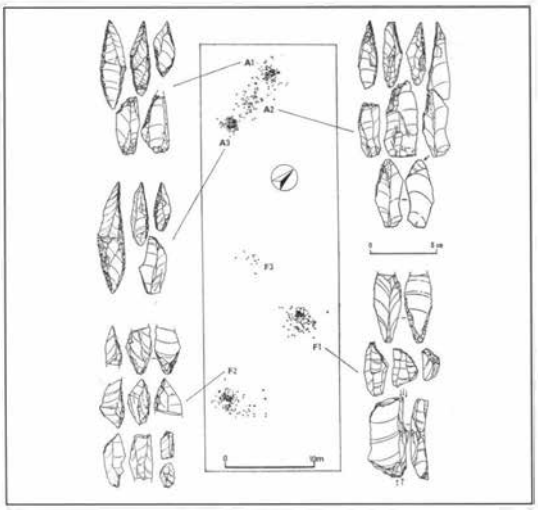
本来であれば個体別資料分析ではなく母岩別資料分析とすべきところである。石材入手から始まる石器製作工程の中でそれぞれ異なる位置付けが与えられている。おおもとの原石を母岩と呼び、作業がおこないやすいように分割されたものを個体と呼ぶ。そして石器製作は分割された塊ごと（個体別）に進行してゆくことになる。この様に個体別に作業が進んだ資料が複数存在することが明らかとなるため、母岩と個体は区別して用いられている。しかし、学史的な意味合いも強いためここでは個体を用いることとする。

先ほどのユニットという考えが初めから存在していたわけではない。個体別資料分析を用いてブロックを詳細に検討した結果、ブロック間には意味のある関係が存在していることがわかったのである。このように記述するとあたかも個体別資料分析ありきのように聞こえてしまうが、実際は、埼玉県砂川遺跡の資料を分析している過程で確立した方法論である。この時を境に砂川遺跡の分析で用いられた方法を個体別資料分析と呼ぶようになった。どのような分析方法かと言うと、先ず出土した石器を石材ごとに全て分類することから始まる。

すでに述べているように、単一母岩によりブロックが形成されることは稀なことであり、いくつもの母岩から構成されるのが一般的な形である。それらの母岩を分類することで、個々の母岩の状況が明らかとなってくる。例えば、自然面が残る剥片しかない、製品しか存在しない、石核しかないということがある。反対に剥片は接合するが石核が無いといった母岩が出てくる。ただ単にブロックとして見ていただけでは分からないことである。母岩ごとに作業の進行状況が異なることが分かり、状況が異なるものが組み合わさってブロックを形成していたということが分かったのである。



66 埼玉県砂川遺跡接合資料［左：タテ13.6cm］



67 埼玉県砂川遺跡遺物分布図

進行状況の異なる母岩が混在しているのはなぜか。一つの母岩を消費しつくしてから次の母岩に手をつけるのではなく、複数の母岩をオーバーラップさせながら使用していたためである。製作者が複数いたことにもなるであろう。ある程度消費すると、遊動範囲（テリトリー）内の石材調達ポイントへと出向いてゆく。程度に差はあるであろうが、基本的にはどの遺跡も砂川遺跡のような状況にあったと考えられる。遺跡は、生活という連続する営みの一部分が切り取られ、残されたものなのである。

石材の使用状況の差異が明らかとなったわけであるが、実は成果はこれだけではなかった。砂川遺跡にはA地点とF地点の2カ所があり、それぞれ3つのブロックから構成されていた。個々のブロックを詳細にみてゆくと、それぞれの地点で母岩の共有や接合関係が見られユニットを構成していたことがわかってきた。またユニット間でも同一母岩の共有がありA地点とF地点は同一集団が残した遺跡であることも分かった。

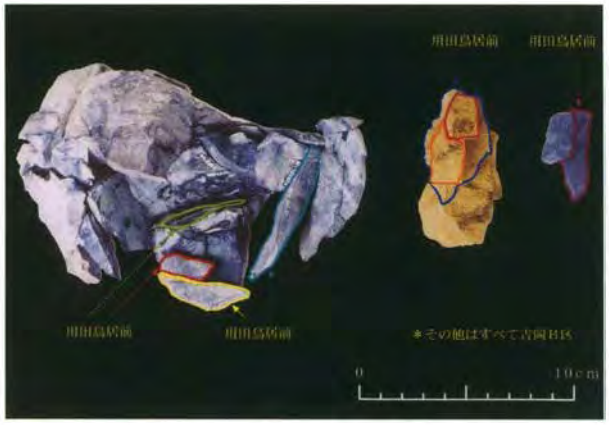
問題は両地点間の距離は15m程と近い距離にあるにもかかわらず、同時期に形成されたものではないということである。接合の状況や石器の形態などの詳細な分析から、A地点から別の遺跡へと移動した後、再びF地点に戻ってきたという結論に至ったのである。つまり砂川遺跡の分析から人々が遊動生活を営んでいたことが分かったのである。そして、この分析方法は今でも旧石器時代の中心的な研究方法として用いられている。

● 遺跡間接合

遺跡に残された遺物はその場での営みに直結するため、ブロック内の接合やブロックとブロックの間での接合関係は良くあることである（くどいようだが、ブロック間接合の確率は低い）。これが距離の離れた遺跡と遺跡だとなかなかそうはゆかない。双方の遺跡が、はたして同時代のものか、同一集団が残したものかが厳密に分からないと不可能に近い。また、遺跡間に連続性があるのかということも重要である。

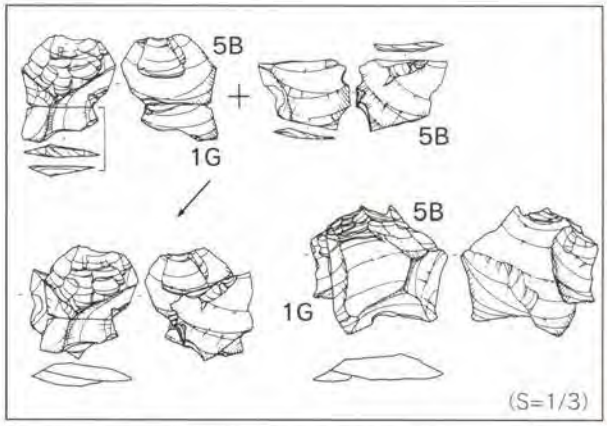
同時代となると、同じような質の石材を使っていたりするため、分類が困難であったりする。稀に、珍しい石材が双方で見つかっている場合や特徴的な石器を含んでいる場合には、期待を抱いたりするかもしれない。

旧石器時代に関わらず、遺跡間で接合してみたいと思う気持ちは誰しもが抱くに違いない。そのような例が旧石器時代では報告されている。千葉県内では今のところ報告されていないが、神奈川県、長野県、新潟県で1例ずつ報告されている。当時の人々が移動生活を送っていたという事実を目の当たりにできる貴重な事例といえよう。個体別資料分析などにより旧石器時代では移動生活を送っているという概念的なものが出来上がっていたとしても、やはり事実に勝るものは無い。





68　吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡（神奈川県）　遺跡間の距離は約2kmであり、遺跡間接合の中で最も距離がある。時期は約1万9500年前のものであり、吉岡遺跡群から検出された炭化材から年代を出している。3母岩での接合関係があり、剥片同士の接合だけではなく、吉岡遺跡群から出土した石核に、用田鳥居前遺跡から出土したナイフ形石器が接合する例もある。





69　中ツ原遺跡群第5遺跡B地点と第1遺跡G地点（長野県）　黒曜石製の剥片同士の接合であり2点の接合関係がある。遺跡間の距離は約500mである。時期は細石刃文化期に相当し、出土している遺物は北方系削片系細石刃石器群と呼ばれるものである。





70 下モ原1遺跡と居尻A遺跡（新潟県）　異なる河岸段丘上に遺跡が形成されており、遺跡間は約600mの距離がある。東北・北陸で主要石材となっている珪質頁岩や頁岩製の彫刻刀形石器とその削片の接合例が5点確認されている。彫刻刀形石器は下モ原1遺跡から出土し、彫刻刀形石器の削片は居尻A遺跡から出土している。遺跡の時期は約1万7000年前である。

コラム・発掘調査の現在

埋蔵文化財の緊急発掘調査が盛行する前は、大学などの機関による学術調査が主体であった。表土剥ぎといえばエンピ（スコップのこと）をもって人力でおこなったものである。エンピ投げが上手い下手では扱われ方も違うのである。今でも学術調査は同じであろう。学術発掘は面積が狭いので体力を絞ればなせる技であるのだが、いわゆる行政発掘となると何千㎡とか何万㎡という桁違いな面積となる。人力では遠く及ばない。そこで登場したのが重機であった。ショベルカーといえば分かるであろうが、それを文化財用に改良したものである。重機のおかげで土を剥ぐのがとても早くなったのである。



71 発掘調査風景（佐倉市太田長作遺跡）

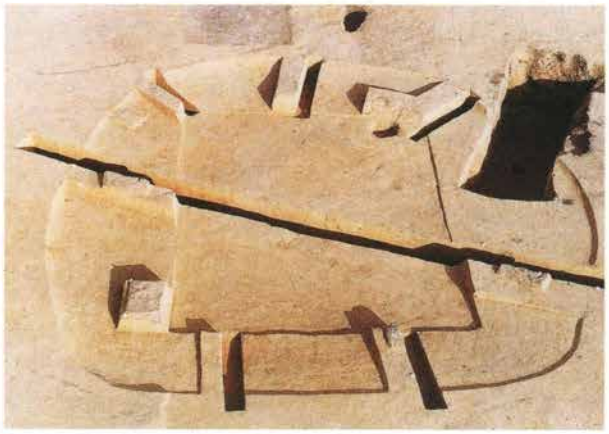
旧石器時代の調査は非常に時間がかかる。表土を剥ぐのは重機であっても、調査になるとやはり人力である。時間がかかるだけではなく、特に夏場は大変である。あの暑い炎天下の中、固いロームと格闘していると、汗が噴出してくる（体力の消耗も激しい）。また部分的に掘り下げることもあるので、風が吹かない。真夏に壁に囲まれているようなものだ。それでも補助員を鼓舞激励して調査を進めるが、これも調査のためと自分に言い聞かせ、あえて厳しく言い放つ。「さぁ、掘って！」と。

梅雨時は調査の期間が短くなるし、冬はやはり寒い。東北地方では10月以降は現場が無いそうである。こちらでは一年中調査がある。やはり、気候が良い春の調査が望まれる。花粉症の人は辛いかもしれないが。

2．旧石器時代の生活形態

個体別資料分析や遺跡間接合で当時の生活は移動生活を送っていたことがわかった。しかし、日々移動していたわけではなく、一定期間はその場に留まることもあったであろう。出土した石器の点数だけでは、その期間がどれほどなのかを知るすべは無い。遺物の点数が必ずしも期間を反映しないからである。

しかし、一定の場所に留まっていたと考えられる痕跡はある。それが住居状遺構であったり、陥穴であったりする。ブロックそのものも、人々が生活していた痕跡にはちがいない。日本全国でもそれほど発見されているわけではないため、住居状遺構も極めて貴重な遺構といえる。ここ数年の中では群馬県小暮東新山遺跡、神奈川県田名向原No.4遺跡の住居状遺構が脚光を浴びた。大阪府はさみ山遺跡の住居状遺構は現在保存されている。広島県の西ガガラ遺跡では複数の住居状遺構が確認されている。これらの遺跡で共通しているのは地面に柱の穴を掘り込んだ柱穴が、円状に配置されていることである。一方で、千葉県ナキノ台遺跡の竪穴状遺構は掘り込みがあり、さらに柱穴らしきものがある。縄文時代以降に見られる竪穴住居跡のようにしっかりとした掘り込みを作るのが一般的なのかは今後の事例の増加を待たねばならない。しかし、縄文時代と異なり移動生



72 群馬県小暮東新山遺跡住居状遺構



73 市原市ナキノ台遺跡竪穴状遺構

活が基本であったと考えるならば、柱穴のみで簡素な住居を構えていたと考えても不思議ではない。現在よりも平均気温が7～8℃程低かったといわれているが、雨、露をしのぐ程度の施設は必要であったに違いない。



74　メジリチ遺跡の4号住居

少し離れてシベリアの住居跡を紹介しておく。よく知られている遺跡でメジン遺跡、メジリチ遺跡があるが、これらの遺跡からはマンモスの牙や骨を用いて頑丈な住居を構築していたのである。また、ヨーロッパでは洞穴を居住空間として利用している場合が多く、そのため洞窟絵画が数多く残されている。日本の洞穴絵画は続縄文時代の北海道フゴッペ洞穴と手宮洞穴の2遺跡だけである（絵画というよりもむしろ線刻画である）。日本では泉福寺洞穴、福井洞穴などの例があるが、基本的にはオープンサイトが一般的である。縄文時代草創期頃になると徐々に利用されてくるが、それも比較的標高の高い山間部などにある洞穴に限られる。洞穴利用の機会が増加するのは、縄文時代中期の五領ヶ台式期以降となる。日本の洞穴遺跡はそのほとんどが海岸線や河川沿いに形成された第2次洞（波食、河食、風食により形成された洞穴の総称）を利用している。これらの洞穴は縄文海進の時に形成され、海退後に居住として適した時期に利用されている。その適した時期が五領ヶ台式期の頃と言われている。

シベリア、ヨーロッパのような居住形態であるならば、その遺跡を中心とした遊動生活を営んでいたことも考えられる。年間の半分はそのような居住空間で生活し、残りの半分は狩猟採集でテリトリーを巡っているという生活であったかもしれない。日本の旧石器時代では洞穴ではなく、回帰する場所を中心として遊動生活をおこなっていたようである。生活の中心となる場所は累積的にブロックが増え、いつしか大型遺跡のような状況となる。これを川辺のムラと呼ぶこともある。この様に累積し、結果的に大型遺跡に映る遺跡（累積的大型遺跡）と、同時的大型遺跡とは明らかに異なるのである。一方では後者を環状のムラと呼んでいる。

環状のムラとは前述の環状ブロック群のことを指しているが、接合と分布でも述べたように複数集団による計画性、規格性の高い、同時性をもった遺跡である。この場合は回帰ではないが、別集団との接触と離合集散の2つを明



▲ 遠方より開口部を望む



開口部 ▶

75　長崎県泉福寺洞穴遺跡

示している。単独で生活している一方で、何かを契機として集合するという生活は社会的な行動ということができるであろう。

3. 旧石器時代の生業

ここまで石器とは如何なるものか、それが表しているものは何なのかということを述べてきた。またそこから考えられる、暮らしのあり方も見てきた。最後にどのような生活を営んでいたのかを考えてみたい。

農耕が始まる遥か昔の話であり、山野を相手にして生活していたことは容易に想像がつくであろう。基本的には現代社会でも変わらないが、海の幸、山の幸、大地の恵みが生きる糧を与えてくれる。自然を知らなければ生きてはゆけないほどであったに違いない。主な生業形態は狩猟採集であり、獲物を捕らえたり、木の実、果物などを採集したりしていた。特に狩猟は人間の活力の素、タンパク質を得るために欠かせないものである。



76 静岡県初音ヶ原遺跡旧石器時代土抗群



77 初音ヶ原遺跡土抗断面図

さて、テリトリーという言葉を使い、ここにおいての意味を述べてきたが、もう少し具体的にみてみたい。先ほどから当時の人々は遊動生活あるいは移動生活を送っていたと記してきた。ある場所から次の場所へと移ることによって、生活を保持していたのである。年間を通してどれだけ移動していたかは分からないが、生きるために必要な分だけは移動していたであろう。しかし、好き勝手にあちらこちらに移動していたとは考えられない。それは何故か。自然を相手にしていたからである。狩猟や採集をするにあたり、それぞれの生態を把握していなければならない。現在の漁師、狩人にしても獲物の生態、気候状況、時期などをデータとして猟に行くわけである。例えば、静岡県三島市の初音ヶ原遺跡群では旧石器時代の遺構として60基の陥穴が検出されている。箱根西麓には初音ヶ原遺跡群のほかに加茂ノ洞B遺跡、焼場遺跡、下原遺跡などで陥穴が確認されている。配置状況や陥穴の規模を見る限り、規格性があり、意図的に配置された様子が窺える。その様は壮観であり、当時の狩猟の様子が偲ばれる。千葉県においても成田市木の根遺跡で陥穴が確認されているが、明確に旧石器時代の所産であるという位置付けはなされていない。



78 初音ヶ原遺跡の旧石器時代土抗配置図 [S=1/2,500]

陥穴の配置やその場所などを見ると、かなりの労

力を要したことが窺え、単なる思い付きで穴を掘ったとは考えられない。そこには対象物の行動様式などを考慮し、計算された様子が垣間見える。これも動物がどのように生活しているかを熟知していなければ成し得ないことなのではないだろうか。こうして見てみると動物が活動する時期、果物が熟す時期が把握できている範囲が遊動生活を営む範囲となっていたと考えられる。そしてこれがテリトリーとなるのである。

しかし、下総台地をテリトリーとしている限り、黒曜石や東北地方の珪質頁岩を入手することは容易ではない。直接入手していた可能性を否定することはできないが、何らかの方法で間接的に入手していた可能性が高いと考えられる。当時の人間関係、人間行動がどのようなものであったのか興味が尽きない。

先に、漁師という言葉を用いたが、旧石器時代の漁撈活動については、残念ながら明確な証拠というものはない。ただ、縄文時代草創期の遺跡である東京都前田耕地遺跡でサケ科の歯が大量に検出されているため、旧石器時代でも行われていた可能性は否定できない。また、東京都神津島で採取できる黒曜石が石器石材として使用されている。入手手段として海を渡るしかないため、そうした技術は備えていたともいえる。ただ、当時の気候状況によっては、神津島まで地続きとなっていた可能性もある。ここまで大掛かりな漁撈活動はともかくとして、身近な河川での活動を先ず考えるべきだろう。少なくとも河川の近くで生活を営んでいたことも併せて考えると、生活の一手段としておこなわれていたのではないだろうか。

コラム・「最初に花を愛でた人々－*The first flower people*－」

この言葉はイラクのシャニダール洞窟を調査したソレッキ（*Ralf S. Solecki*）が残した言葉である。6万年前のネアンデルタール人の墓と考えられる遺跡から、大量の花粉が分析の結果明らかになったことによる。死者の周りに花を手向けたのではないかということであるが、これには賛否両論がある。

少し難しいが、旧石器時代の精神文化を覗いてみたい。精神は物質文化と違い目には見えてこないが、墓や装飾品といった日常生活で恒常的に用いられないものに形を変えて存在する。また普段とは異なった遺物の出土状況にもその影響が及んでいることがある。先ほどのシャニダールもそうした一例である。日本の旧石器時代にも墓と考えられている遺構が数例存在する。中でも北海道湯の里4遺跡では土壙の底面と考えられる部分に赤土が広がり、カンラン石やコハク製の玉類が検出されている。旧石器時代の玉類は珍しく、コハク製となるとさらに稀少性が増す。死者に手向けたのであろうか。

千葉県では墓と考えられる遺構は検出されていないが、装飾品などの遺物が出土している。四街道市出口・鐘塚遺跡では磨かれた垂飾が2点出土している。2点とも同じブロックから出土しており、区層段階に位置付けられる。遺構などは確認されていない。山武郡大網白里町上引切遺跡では線刻のある礫がソフトローム層中から検出されている。大半が礫片で構成された石器群に含まれており、礫片と同様に廃棄されたものと考えられている。掘り込み等は確認されていない。共に日常生活の中で使われるものとは考えにくいため、精神文化が物質化したものと考えられよう。



79　旧石器時代の装飾品1
（北海道湯の里4遺跡
[左のみ複製：長さ2.8cm]）



81　旧石器時代の装飾品3
（四街道市出口・鐘塚遺跡
[左：長さ2.2cm]）



80　旧石器時代の装飾品2
（北海道美利河1遺跡
[左上：タテ0.9cm]）



82 線刻礫
（大網白里町上引切遺跡
[タテ4.5cm]）

V

印旛沼周辺地域における石器群の変遷



83　本埜村宮内遺跡出土石器［S=2/3］

第Ⅰ章中でもふれたが、印旛郡内には現在のところ330カ所をこえる旧石器時代の遺跡が確認されいる。この中には学史に残る遺跡、下総台地を代表する旧石器時代の遺跡として古くからその存在が知られているものも少なくないが、特にここ十数年の大規模開発に伴う成果はめざましく、また調査精度の向上もあって、内容的にも充実した資料の蓄積が相次いでいる。

しかしながら現在のところ、各報告書の中で、報告資料に対する編年的検討や類似資料との対比が行われてきてはいるが、これら石器群の変遷（編年）について総体的にまとめた論考は少なく（鈴木1976、道澤1983、田村・橋本1984）、特に近年においては資料の充実は進められてはいるものの、ごくわずかであると言わざるを得ない（道澤2002a、2002b）。

その要因としてまず第1に、下総台地は相模野台地・武蔵野台地と比較して立川ローム層の給源である「古富士山」より遠隔に位置するため、その堆積が薄く、黒色帯等の色調の変化も乏しい点があげられる。つまり編年研究の基礎となる石器群の細かい層位的出土状況を把握することが困難な点にある。各遺跡間における層位的比較が行えるように立川ローム層の層序区分に関する分層規準（島立他1992）が提示され、統一化が進められてきてはいるものの、やはりＡＴより上位については第Ⅲ層・ソフトロームのクラックが下位の層（下総台地東部では第Ⅵ層・ＡＴを含む層）にまで深く及んでいるため、多時期の石器群がせまい層位内に密集・混在する形となり、層位的出土・層位的前後関係がとらえられる例は乏しい。

第2の要因としては、下総台地では地理的要因や特殊な石材環境下での規制により独特の石器・製作技法をはぐくんだ点にある。「東内野型尖頭器」・「遠山技法」・「下総型石刃再生技法」などであるが、しかしこれらは先に述べた層位的検討の難しさもあって、同一層位内におけるこれらを持つ石器群と持たない石器群との関係や時間的つながり、あるいは系譜等、いまだ不明確な点が多々認められている。また独特であるが故に、編年研究の進んだ武蔵野台地・相模野台地の石器群との比較が直接的に行えないことにも、その位置付けに関する糸口をつかみづらい一端があるとも言える。

そこで本書ではこのような状況を鑑みた上でも、また今回本書の作成に伴い基礎的作業として行った旧石器時代遺跡の検索・内容検討、及び「第Ⅵ章　資料編」に掲載した諸資料をまとめた機会に、印旛郡内という限られた地域・資料ではあるが、石器群の変遷過程（編年）についての考察を試みてみたいと思う。

方法としては、本書資料編に掲載した43遺跡を用い、編年研究の基本である出土層位（各石器群の出土層位は概ね報告書の出土層位に準拠した）を基準として段階設定を行った。この際、特に重層遺跡での層位的出土例を重要視し、また相模野台地・武蔵野台地・その他関東近隣域における編年研究成果（諏訪間2001、鈴木・矢島1978、茨城県考古学協会2002、笠懸野岩宿文化資料館1993･1994、静岡県考古学会1996、長野県旧石器文化研究交流会2003）を参考にした。次に石器組成・各器種の形態組成・製作技術・石材等を考慮してまとめ、各段階内での細分（時間差）・群分け（組成差等）を行った。

その結果、大枠としてＡＴ層（第Ⅵ層）以下では5期（印旛Ⅰ期～印旛Ⅴ期）に、ＡＴ層より上位では6期（印旛Ⅵ期～印旛XI期）に段階分けを行うことができた（第1表参照）。この中でＡＴより上位の印旛Ⅶ期～印旛Ⅸ期の段階区分については、石器群の内容が類似した上に、先にも述べたとおり層位的な把握が困難であるため、一本桜南遺跡・復山谷遺跡・取香和田戸遺跡・御山遺跡で見られるわずかな層位的出土例を手掛かりとして、石器群の内容を検討した上でまとめ、段階区分・細分等を行った。詳細な相対関係については第2表にまとめたので併せて参照していただきたい。

以下、次項から印旛Ⅰ期～印旛XI期について順次、詳細を述べていきたい。（各期で掲載した石器実測図のスケールは1/3に統一した）

第1表　印旛沼周辺地域の旧石器時代遺跡変遷一覧

層　位	時期区分		遺跡（文化層・地点）	挿図番号
Ⅲ層上面	印旛Ⅺ期		木戸先遺跡（第3群）	6·7·10·16～29
			復山谷遺跡（第10文化層）	8·9·11·12·30～32
			南大溜袋遺跡	1～5·13～15
Ⅲ層上部	印旛Ⅹ期	2群	木戸先遺跡（第2群）	62·63·77
			高岡大福寺遺跡	68
			高岡大山遺跡	69～71·85
			木戸場遺跡A地点（第Ⅰ文化層）	66·67·72·73·78～81·86
			東峰御幸畑西遺跡（第3ｂ文化層）	64·65·74～76·82～84·87
		1群	本埜村向原遺跡	12·16·34～49
			復山谷遺跡（第9文化層）	13～15·18～30·50·51·58·59
			一本桜南遺跡（第10文化層）	9～11·52·60
			天神峰最上遺跡（第3ｂ文化層）	8·17·31～33
			大林遺跡（第Ⅰ文化層）	5～7·54·56·57·61
			船尾白幡遺跡	1～4·53·55
Ⅲ層中部～下部	印旛Ⅸ期	Ⅸｃ	御塚山遺跡（第Ⅰ文化層）	52·58·61·63·64·73～75
			池花遺跡	47～51·54·55·71
			内田端山越遺跡（クラブハウス）	
			御山遺跡（第Ⅷｂ文化層）	53·56·57·59·60·62·65～70·72·76
		Ⅸｂ	一本桜南遺跡（第9文化層）	33·35·36
			復山谷遺跡（第8文化層）	34·37～46
		Ⅸａ	木苅峠遺跡（上層石器群）	1～3·7·9·10·12·13·15·22
			復山谷遺跡（第7文化層）	16～19·21·23·24·26·32
			大林遺跡（第Ⅱｂ文化層）	4·11·14·20·21
			御山遺跡（第Ⅷａ文化層）	5·6·8·25·29·30
Ⅲ層下部～Ⅳ・Ⅴ層	印旛Ⅷ期		鹿予穴Ⅸ遺跡	16～20·29·37·38
			出口・鐘塚遺跡（第5文化層）	31·40
			池花南遺跡（第2文化層）	39·53·54
			復山谷遺跡（第6文化層）	11·13·14·21～25·27·28·45·47·48·55～60
			天神峰最上遺跡（第3ａ文化層）	3～10·12·15·30·32～36·41·46·49·50·52·61
			地国穴台遺跡（E01地点）	2·26·42～44·51·62～67
			五斗蒔遺跡（第5文化層）	1
Ⅲ層下部～Ⅳ・Ⅴ層	印旛Ⅶ期	3群	平賀一ノ台遺跡（第3文化層）	42～44·46·47·50·52·54～56·60～62·64
			一本桜南遺跡（第8文化層）	58·63·65
			取香和田戸遺跡（第2文化層）	36·41·45·48·49·51·57
			東内野遺跡（上層石器群）	34·35·37·40·53
			木戸先遺跡（第1群）	38·39·59
		2群	墨新山遺跡	15·17·18·20·23～26
			一本桜南遺跡（第7文化層）	14·16·19·21·22·27～33
		1群	大畑Ⅰ遺跡	1·8·10·12
			前原Ⅰ遺跡	5·9·11·13
			取香和田戸遺跡（第3文化層）	2～4·6·7
Ⅳ・Ⅴ層	印旛Ⅵ期		天神峰奥之台遺跡（第Ⅲ文化層）	4·7·14·26·30
			取香和田戸遺跡（第4文化層）	5·8·9·17·18
			五斗蒔遺跡（第4文化層）	6·21·27·31
			一本桜南遺跡（第6文化層）	11·28
			一本桜南遺跡（第5文化層）	12·13
			榎戸小富遺跡（第1地点）	
			出口・鐘塚遺跡（第4文化層）	
			復山谷遺跡（第5文化層）	10·15·24·29·32～34
			白井第1遺跡	19·20
			大林遺跡（第Ⅳ文化層）	25
			佐倉市向原遺跡（第2文化層）	1·22
			池向遺跡（第4文化層）	2·23
			地国穴台遺跡（A51地点）	3·16
Ⅵ層	印旛Ⅴ期		飯仲金堀遺跡	1·2·19·20·23
			天神峰奥之台遺跡（第Ⅱ文化層）	9·10
			取香和田戸遺跡（第5文化層）	11～14·24·26
			出口・鐘塚遺跡（第3文化層）	17
			一本桜南遺跡(第4文化層)	3～5
			木苅峠遺跡（下層石器群）	15·16·18·25
			栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡（第Ⅱ文化層）	6～8·21·22·27
Ⅶ層	印旛Ⅳ期	3群	大林遺跡（第Ⅵ文化層）	35～38·50
			羊深遺跡	34·39·46～49·51
			東峰御幸畑西遺跡（第2文化層）	40～45
		2群	宮内遺跡	18～20·28～33
			榎戸小富遺跡（第2地点）	21～24
			佐倉市向原遺跡（第3文化層）	16·17·25～27
		1群	御山遺跡（第Ⅴ文化層）	12
			出口・鐘塚遺跡（第2文化層）	1·6·11·13
			五斗蒔遺跡（第2文化層）	8～10
			池向遺跡（第2文化層）	4·5·7·14·15
Ⅸ層上部～中部	印旛Ⅲ期	Ⅲｂ	天神峰最上遺跡（第1文化層）	46·55
			出口・鐘塚遺跡（第1文化層）	42·43
			瀧水寺裏遺跡	36·37·48～54
			南三里塚宮原第1遺跡	32～35·38～41·45·47
			東峰御幸畑西遺跡（第1文化層）	29～31
			吉込遺跡	28·56
Ⅸ層下部		Ⅲａ	池花南遺跡（第1文化層）	1～3·13～21
			天神峰奥之台（第Ⅰ文化層）	4～12·22·26·27
Ⅹ層上部	印旛Ⅱ期		御山遺跡（第Ⅱ文化層）	2～10·19～26
			向山谷津遺跡	15·17·18
Ⅹ層下部	印旛Ⅰ期		御山遺跡（第Ⅰ文化層）	1·2

第2表　印旛Ⅶ期～印旛Ⅸ期石器群の相対関係

印旛Ⅶ期1群	印旛Ⅶ期2群	印旛Ⅶ期3群	印旛Ⅷ期	印旛Ⅸa期	印旛Ⅸb期	印旛Ⅸc期
大畑1	最新山	平賀一ノ台	獅子穴Ⅸ	大林Ⅱb文		御塚山1文
前原1	一本桜南7文	一本桜南8文			一本桜南9文	
		東内野	出口・鐘塚5文木	木苅峠上層		池花3文
取香和田戸3文		取香和田戸2文				
		木戸先1群	五斗蒔5文			内田端山越CH
			復山谷6文	復山谷7文	復山谷8文	
			池花南2文			
				御山Ⅷa文		御山Ⅷb文
			天神峰最上3a文			
			地国穴台E01			
ナイフ主体	ナイフ主体+尖頭器	東内野型尖頭器主体	幾何形ナイフ	器長小 ―	尖頭器主体 ―	器長大
砂川期			月見野期	尖頭器文化期		

印旛Ⅰ期

下総台地のX層下部にかけて出土する石器群。印旛郡内でもX層を上下に二分し、それぞれをａ、ｂと分層できる地域がある。そのためⅠ期はＸｂ層となるが、不明確な場合が多く、X層とまとめている所が多い。武蔵野台地ではX層下部（Ｘｂ層）、相模野台地ではＢ5層中の石器群に対比される。

武蔵野ローム層最上層から立川ローム層最下層のX層下部に含まれる石器群を包括する。概説等の部分で触れているように立川ローム層を境として後期旧石器時代が始まると考えられているため、萌芽期という捉え方ができよう。ただし、今の所後期旧石器時代の指標である石刃技法が石器群内で明確になっている遺跡は認められない。また、該期の資料が非常に少ないこともあり、様相自体も不明確である。

上記理由から器種組成、石材傾向、技術的様相については明らかにすることは困難であるが、他の地域で出土している遺跡を参考にしてみてゆきたい。市原市草刈遺跡（島立2000）では武蔵野ローム層最上層から石器が検出されており、県内最古の石器群に位置付けられている。

剥片剥離技術では寸詰りの横長剥片、矩形剥片、不定形の縦長剥片を生産するものであり、規格性のある縦長形剥片を生産する技術は認められない。盤状求心石核やサイコロ状石核から剥離された可能性が高い。器種としては上記剥片に二次加工を施したり、鋭利な部分を使用したものがある。また、この時期に特徴とされる斜軸尖頭器状の石器が出土している。断定はできないがこの石器群の石材は、房総半島嶺岡山地周辺で産出されると考えられる珪質頁岩（白滝頁岩）や、ノジュールと思われるものが用いられている。

その他の特徴として香取郡大栄町南敷大沼遺跡（永塚2001）からは形態的に古いと考えられているハンドアックス（メノウ製）が検出されている。しかし、石核の可能性も指摘されているため断定はできない。

問題点としては、この段階の石器群の検出例が少ないため、比較検討ができないことにある。印旛郡内では御山遺跡第Ⅰ文化層が相当するが、層位的にみて第Ⅱ文化層よりも下位のものであるという位置付けに留まっている。今後の資料の増加に期待する以外ほかにない。

印旛Ⅱ期

下総台地のX層上部にかけて出土する石器群。分層が可能な地域ではＸａ層に当たる。相模野台地ではＬ5上部～Ｌ5上面までの、武蔵野台地ではX層上部の石器群に対比される。

下総台地全体でもこの段階の遺跡はそれほど多くはない。印旛郡以外では八千代市坊山遺跡第6文化層（大野1993）、市原市草刈六之台遺跡第1文化層（島立他1994）などがあり、郡内では資料編に掲載した以外に

大林遺跡がある。特徴となってくるのは大型同時遺跡の環状ブロック群が出現することである。また、石斧（局部磨製石斧を含む）が出現する段階としてもとらえられる。

器種組成として局部磨製石斧、石錐、台形様石器、基部加工のナイフ形石器、楔形石器、削器などで構成される。石材は黒色ガラス質安山岩、珪質頁岩、珪質凝灰岩、メノウ、チャートなどであり、石斧には蛇紋岩、緑色凝灰岩、ホルンフェルス、砂岩などが主に用いられる。石斧と剥片石器には石材の使い分けが認められる。

技術的特徴として剥片剥離技術の二極化が認められるようになる。前段階の寸詰り横長剥片や矩形剥片を作出する横長剥片剥離技術と、同様に不定形縦長剥片に加え定形的縦長剥片を作出する縦長剥片剥離技術の二つに大きく分けることができる。依然として横長剥片の占める割合が高く、前段階の技術を継承しつつ縦長剥片剥離技術が客体的に認められる段階である。

その他の特徴として、この段階から既に黒曜石を石材とした石器製作がおこなわれており、産地同定の結果栃木県高原山産のものを用いていることが明らかとなっている（坊山遺跡第6文化層）。

また、課題の一つとして環状ブロック群と石斧の出現をどの様に考えるかが問題となる。印旛Ⅱ期以降2つの相関関係が高まることが知られているため、出現期からそうしたことは念頭に入れておく必要がある。

印旛Ⅲ期

Ⅲａ期　下総台地Ⅸ層中部～下部（第2黒色帯下部）にかけて出土する石器群。一部ではⅨ層をａ，ｂ，ｃに三区分する案が示されているが、地域によってⅨｂ層が明確でないため分層が困難となっている。相模野台地ではＢ4下部～Ｂ4中部まで、武蔵野台地ではⅨｂ層もしくはⅨ層下部～中部までの石器群に対比される。

器種組成は前段階と比べても大きな変化がなく、石斧、ナイフ形石器、台形様石器、削器、楔形石器、石刃などである。石錐については認められていないが、前後段階をみると本来は組成に加わっている器種と考えられる。組成比として、依然ナイフ形石器よりも台形様石器の方が多いが、遺跡によっては縦長剥片（石刃）がまとまって保有されていた例もあり、組成比による比較は簡単にはおこなえない。

石材の傾向は黒色ガラス質安山岩と珪質頁岩が主要石材となっている。その他に黒曜石、凝灰岩、メノウ、チャートが客体的に含まれる。

技術的様相として、台形様石器の加工法に平坦剥離が多く用いられるようになる。またナイフ形石器には急斜度調整が施されるが、必ずしも技術が分化するわけではなく両石器の中に両技術が認められる段階である。未分化の状態であるが、石材によって使い分けているのではなく、素材形態に左右されるようである

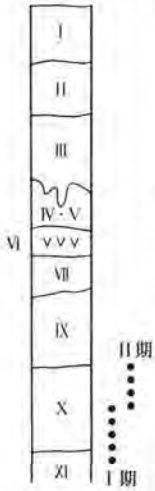
その他の特徴に縦長剥片剥離技術が挙げられる。前段階で技術の二極化が認められるとしたが、この段階の包括される2遺跡については明確な縦長剥片剥離技術が認められない。しかし、技術が欠落するのではないことに注意する必要がある。坊山遺跡第5文化層では200点以上の縦長剥片（石刃）が出土している。また、横長剥片を折断し台形様石器の素材とする行為も認められる。折断剥片の存在は重要なファクターとなる。

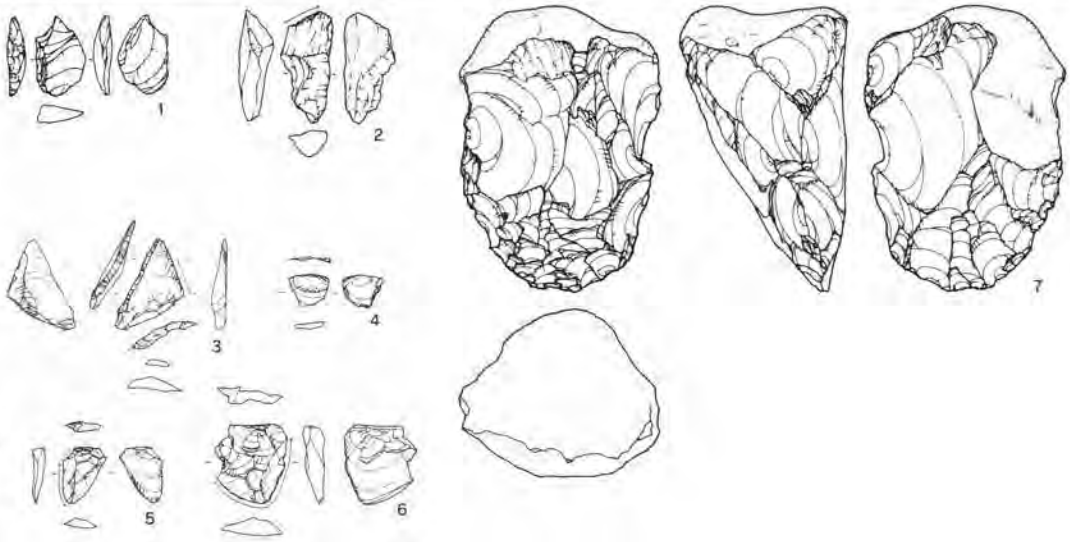
Ⅲｂ期　下総台地Ⅸ層中部～上面（第2黒色帯下部）にかけて出土する石器群。層位的区分が困難なことはⅢａ期で記している。相模野台地ではＢ4中部～Ｂ4上面まで、武蔵野台地ではⅨａ層もしくはⅨ層中部～Ⅸ層上面までの石器群に対比される。

Ⅲａの器種組成とほとんど変化はないが、石刃あるいは縦長剥片を用いたナイフ形石器が目立つようになる。また、楔形石器も同様に組成の割合として多くなる。1遺跡における石斧も多くなっている。

石材は黒色ガラス質安山岩、珪質頁岩、チャートが主要な石材となり、黒曜石の需要も増加している。その他に流紋岩、ホルンフェルスなど様々な石材が利用される。その中でもメノウ、トロトロ石は下総台地におい

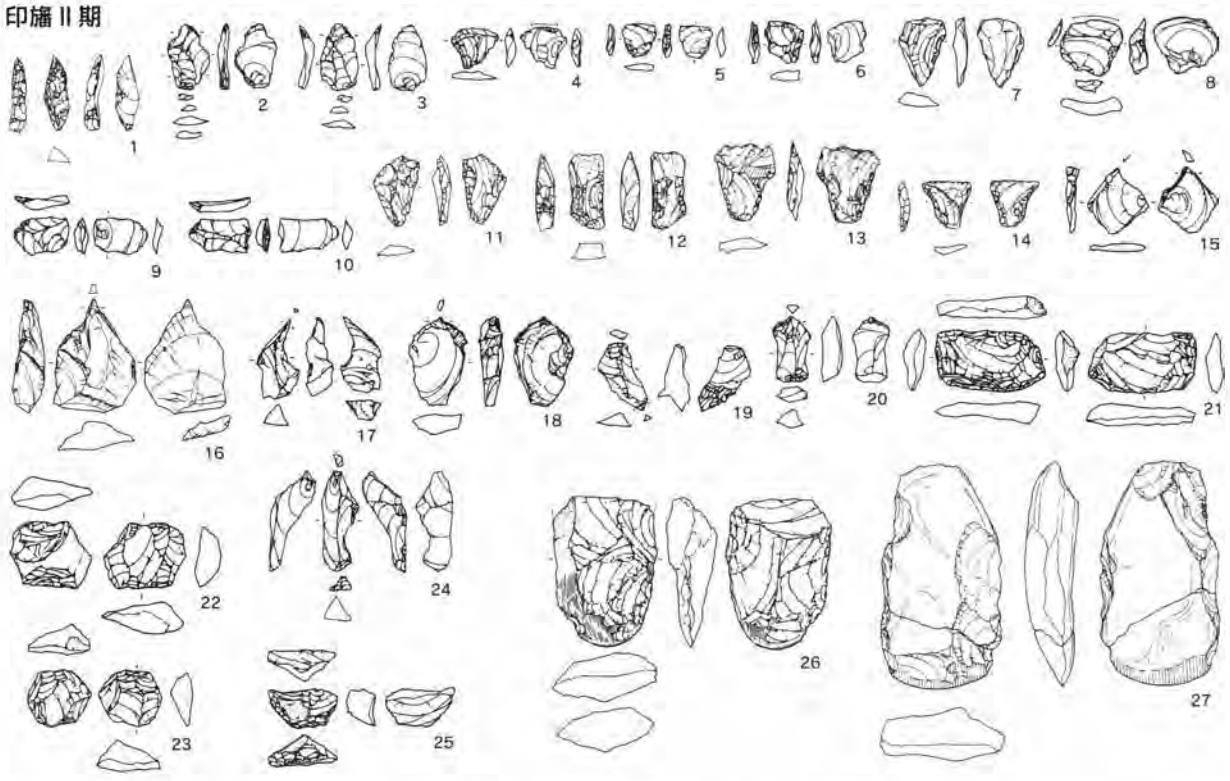
印旛Ⅰ期





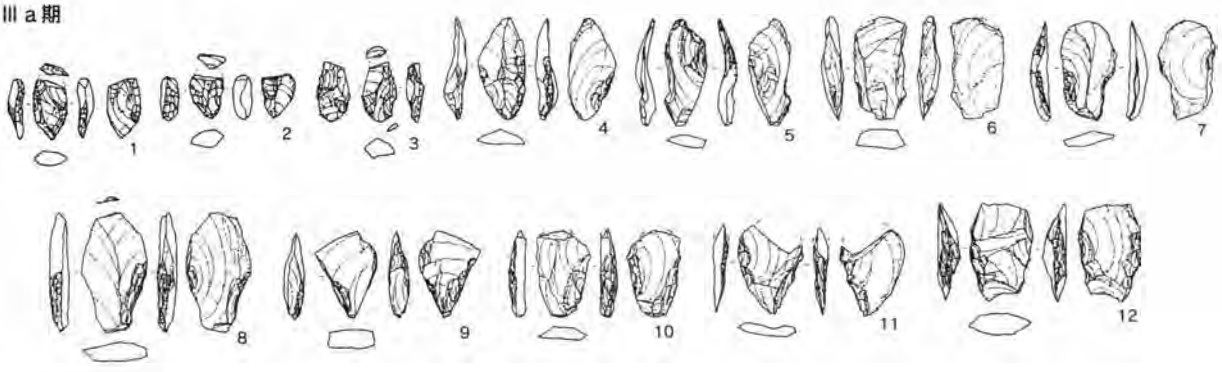
1・二次加工のある剥片，2・礫片，3・尖頭器，4・台形様石器，5，6・使用痕のある剥片，7・ハンドアックス
3～7・参考資料（3～6：市原市草刈遺跡，珪質頁岩，7・大栄町南敷大沼遺跡，メノウ）

印旛Ⅱ期

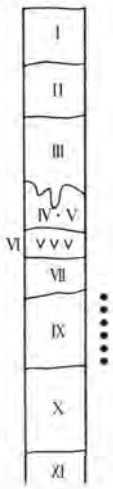


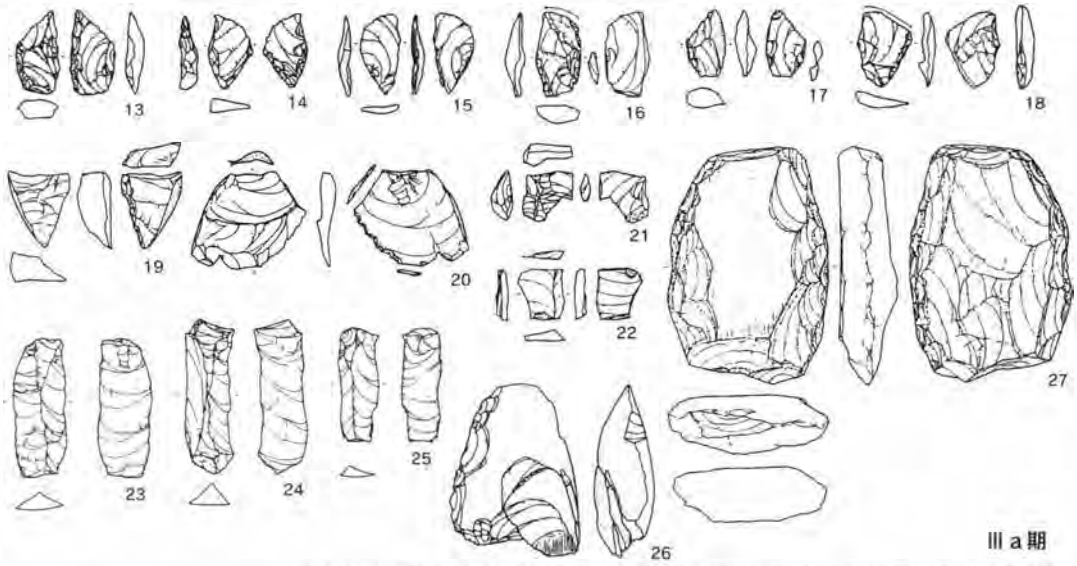
1・ナイフ形石器，2・3・剥片製小型尖頭器，4～14・台形様石器，15・彫刻刀形石器，16～20・石錐，21～23・楔形石器，24・25・掻器，26・27・石斧
1・11～14・16・27・参考資料（1・11～14・八千代市坊山遺跡，1・11・13・14・黒曜石，12・チャート，16・27・市原市草刈六之台遺跡，16・珪質頁岩，27・蛇紋岩）

Ⅲａ期



印旛III期

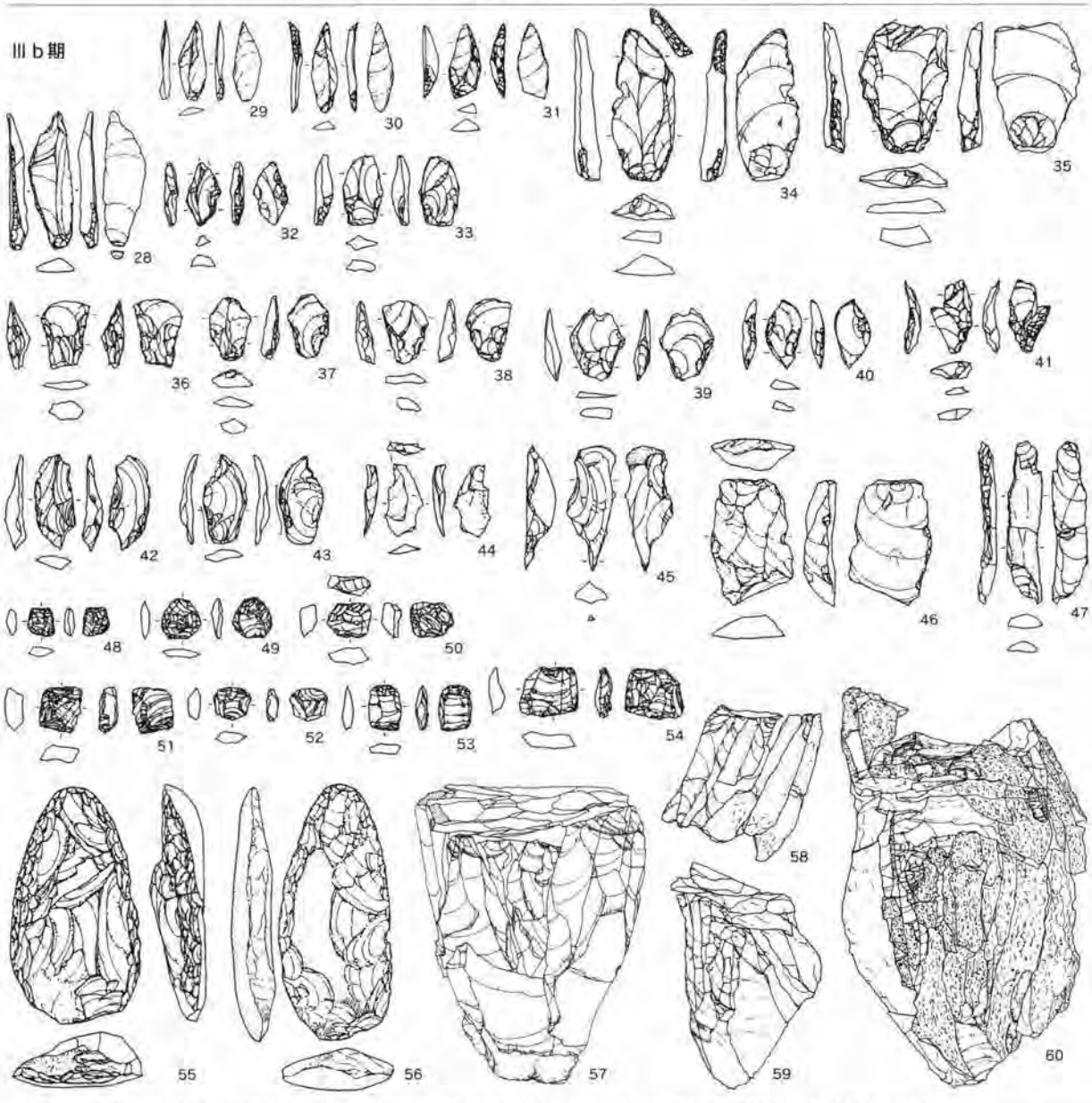




IIIa期

1～5：ナイフ形石器，6～18：台形様石器，19･20：削器，21･22：模形石器，23～25：石核，26･27：石斧
23～25：参考資料（八千代市坊山遺跡，23･24：チャート，25：珪質頁岩）

IIIb期



28～35：ナイフ形石器，36～43：台形様石器，44：掻削刃形石器，45：石錐，46･47：削器，48～54：模形石器，55･56：石斧，57～60：接合関
57～60：参考資料（57：八千代市仲ノ台遺跡，凝灰岩，58：柏市中山新山Ⅰ遺跡，珪質頁岩，59：成田市東峰御幸畑西遺跡，珪質頁岩，60：市原市草刈古之台遺跡，黒曜石）

て特徴的な石材であり、北関東、特に茨城県側との関係が考えられる。

定形的な縦長剥片（石刃）を作出する縦長剥片剥離技術（石刃技法）が定着し始めるのもこの頃である〔草刈六之台遺跡第3文化層、八千代市仲ノ台遺跡（落合1989）、柏市中山新田Ⅰ遺跡（田村他1986）〕。全ての遺跡に石刃技法の痕跡が認められるわけではないが、搬入品という形で認められる場合が多い。二極化は進行し、2つの調整技術も分化し始める。特にナイフ形石器の調整法に急斜度調整の割合が高まり、台形様石器との差が明確となる。しかし、台形様石器における折断剥片の使用のため、急斜度調整もおこなわれている。

この段階になると環状ブロック群の定形化が進み、大型のものが出現してくる（第Ⅳ章第1節参照）。環状ブロック群だけが存在するわけではなく、一般的に認められる遺跡形態も並存しているため異なる遺跡形態の関係を考える必要がある。現時点では離合集散という形で整理されているが、それが求められる要因を探ることが課題となる。

印旛Ⅳ期

下総台地Ⅶ層（第2黒色帯上部）にかけて出土する石器群。相模野台地ではB3下部を中心とした石器群、武蔵野台地ではⅦ層中の石器群に対比される。Ⅳ期に見られる石器群の特徴から1群から3群までを設定している。石器群の構成内容の差より導いたものであることを明記しておく。

1群　特徴として石刃を素材としたナイフ形石器の製作である。前段階よりも確実に石刃を素材とした製品の製作が増加しており、石器群の内容が明らかに異なっている。1群の典型的な遺跡として、鎌ヶ谷市東林跡遺跡Ⅶ層文化層（織笠2000）があり、その他に、八千代市北海道遺跡第4文化層（橋本他1985）、本埜村荒野前遺跡下層石器群（田村2000f）などが挙げられる。

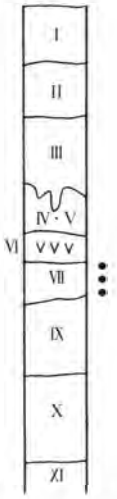
器種組成はナイフ形石器、削器、楔形石器、石刃、石錐などであり、石材は黒色ガラス質安山岩、珪質頁岩、頁岩、流紋岩、凝灰岩、黒曜石などが主に用いられている。

技術的にみると前段階までの横長剥片剥離技術が卓越する状況に対して、この段階では石刃技法により得られた素材が非常に目立つ。また、平坦剥離を用いることも減少し、急斜度調整による二側縁のナイフ形石器が主体的となっている。ナイフ形石器については素材を逆位に用いることで、バルブ除去が行われるようになっている。製品の定形化が一層進む段階といえる。横長幅広剥片を主に素材とした台形様石器があまり認められなくなるが、横長剥片剥離技術そのものが技術体系から欠落するわけではない。

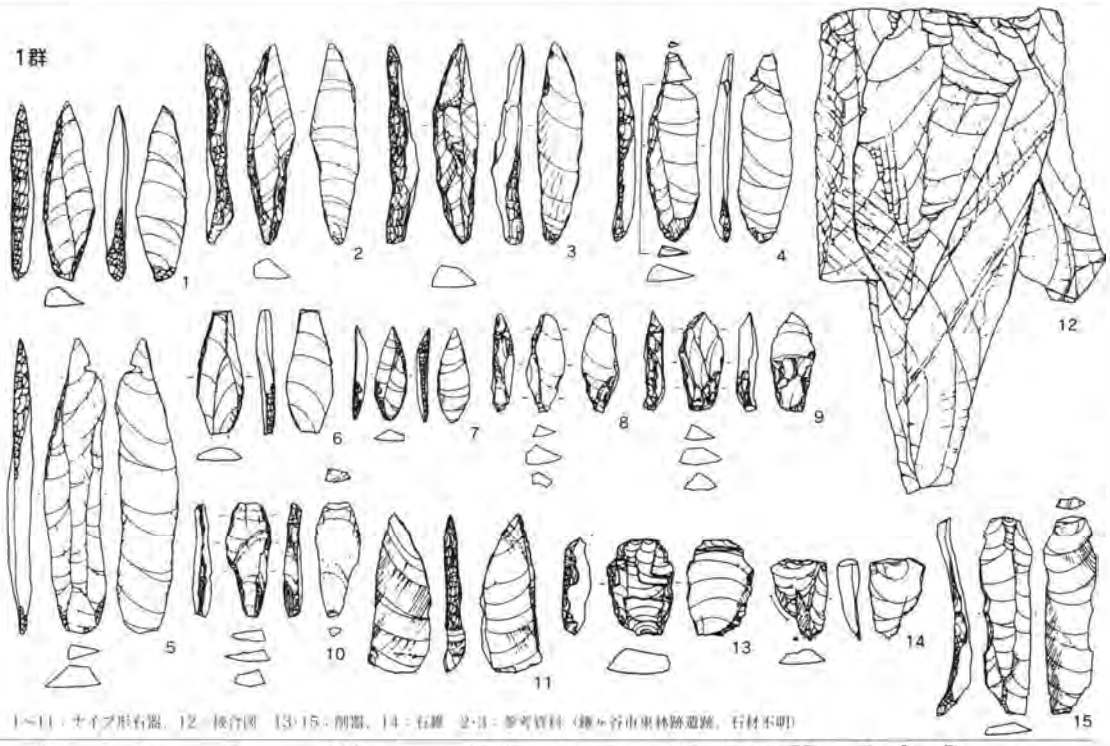
2群　特徴としては「下総型石刃再生技法」を主体とした石器群である。一種独特な石器群であり、1群や3群に客体的に含まれる場合でも、痕跡を重要とみなし2群に含めている。良質な珪質頁岩製の大型石刃を分割し、小型石刃の作出をおこなうものである。大型石刃が石核なのか、製品として機能し刃部再生をおこなったものなのかという疑問もあるが、少なくとも良質な石材が確保しにくい下総台地において、石材を有効利用するための一手段であったと言えよう。芝山町香山新田中横堀遺跡（新田1992・1993）、香取郡多古町一鍬田甚兵衛山西遺跡（永塚他2001a）などが挙げられる。器種組成はナイフ形石器、削器、石刃、石刃素材石核、小型石刃などである。下総型石刃再生技法については新田の論攷（新田1995）に詳しいが、基本的に石材のほとんどが良質な東北地方産の珪質頁岩で占められている。これらの大型石刃を作出するためには打面調整や頭部調整が不可欠であり、打面が遺存する石器のほとんどに打面調整が見られる。

3群　特徴として両極技法を主体とした石器群であり、特に「遠山技法（田村他1989）」と呼ばれる小型の円礫を素材とし、両極剥離で定形的な楔形石器を作出するものがある。既に前段階から両極技法を用いた楔形石器の生産が認められているが、石器群の中で集中的にそして主体的になってくるのはこの段階からである。

印旛Ⅳ期

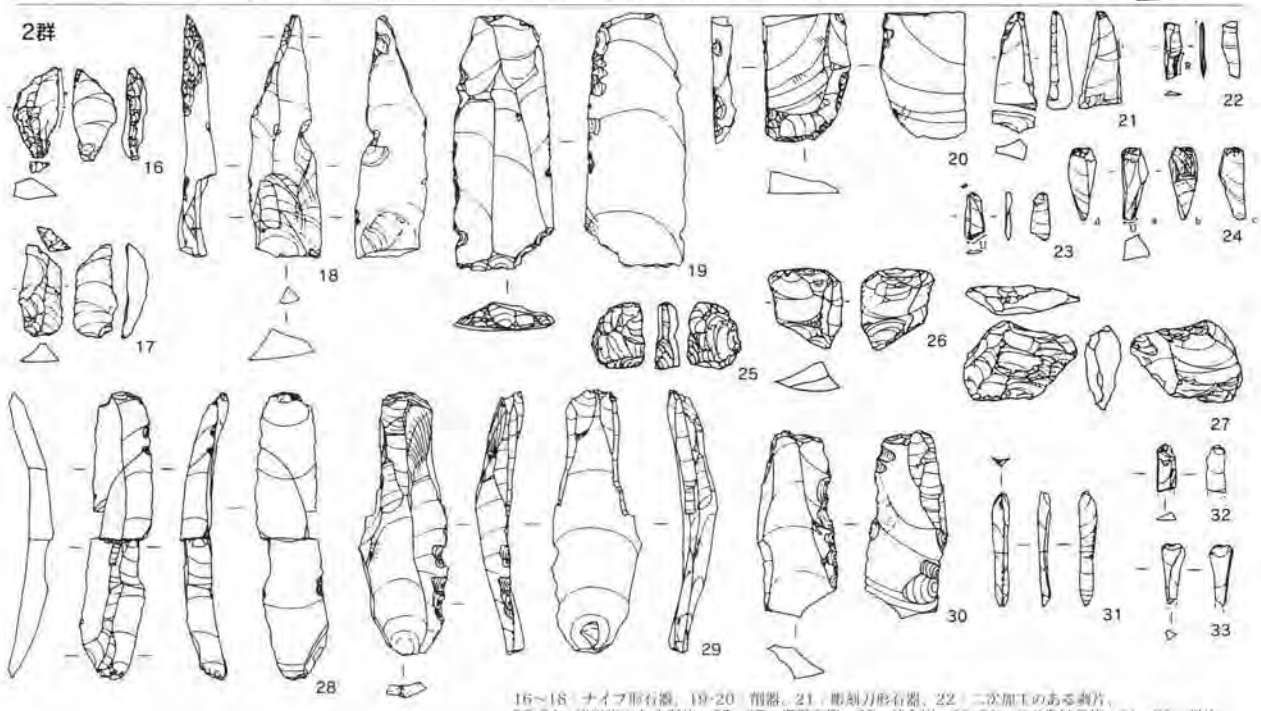


1群



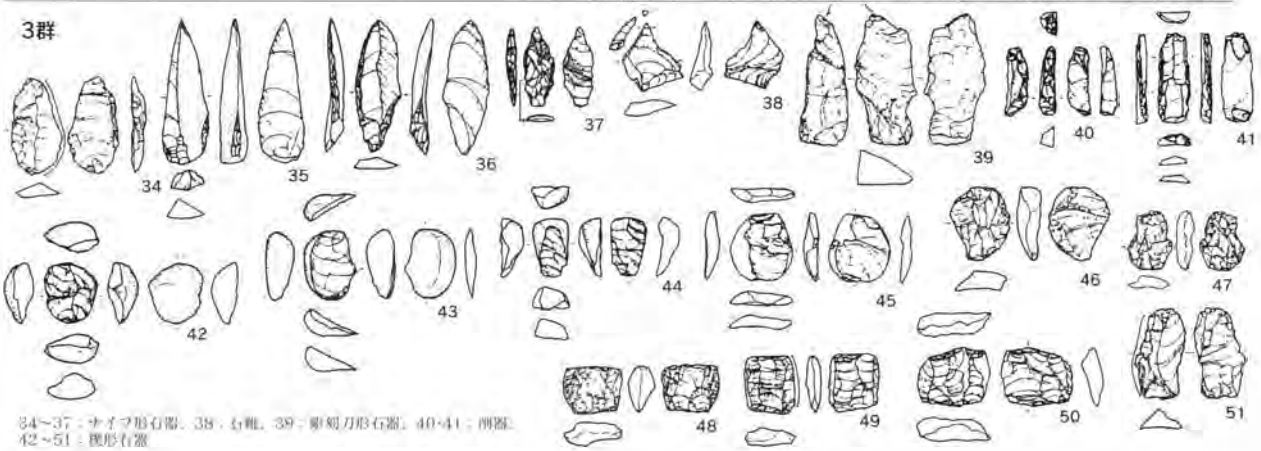
1～11：ナイフ形石器，12：接合図　13･15：削器，14：石錐　2･3：参考資料（鎌ヶ谷市東林跡遺跡，石材不明）

2群



16～18：ナイフ形石器，19･20：削器，21：彫刻刀形石器，22：二次加工のある剥片，
23･24：使用痕のある剥片，25～27：楔形石器，28：接合図，29･30：石刃素材石核，31～33：削片

3群



34～37：ナイフ形石器，38：石錐，39：彫刻刀形石器，40･41：削器，
42～51：楔形石器

2群同様に石材の有効利用の一端として選択されたものといえる。横芝町遠山天ノ作遺跡（高橋・奥田1986、新田1988、2000a）、佐原市出口遺跡第1文化層（新田他1991、新田2000b）などが挙げられる。

楔形石器以外にはナイフ形石器、削器、掻器、石錐などが組成する。使用石材はチャート、安山岩の小型円礫が多く、他には凝灰岩、メノウ、珪質頁岩、頁岩などが用いられている。現段階ではこれらの石器群に、1群や2群で出土している石刃技法を基盤としたナイフ形石器の製作の跡があまり認められないため、下総台地における3群のあり方はやや特異的という見方ができる。

Ⅳ期の問題点と課題として、上記のように区分した「群」がどのような事情で石器群の内容が異なっているのかを突き詰める必要がある。地域的要因によって異なるのか、ある程度の時期差が認められるのか、それとも全てがパラレルに存在しているのか。編年上重要なだけではなく、下総台地における人間行動を明らかにするためにも重要な時期となってくる。また、印旛郡内に比較的多く認められる2群や3群は当台地の旧石器時代を語るのに不可欠となってこよう。

印旛Ⅴ期

下総台地Ⅵ層にから出土する石器群（姶良・丹沢火山灰包含層）。相模野台地ではB3上部～B2L下部までの石器群に、武蔵野台地ではⅥ層中の石器群に対比される。

前段階では3つに分かれていた石器群も、ほとんどが石刃技法を基盤とした石器群へと移行する。特に出口・鐘塚遺跡では第2文化層（印旛Ⅳ期1群）→第3文化層（印旛Ⅴ期）という層位的な石器群の検出例が認められる。また、2群の石器群が小型・中型化し、印旛Ⅴ期にまで認められるということであるが（前掲新田1995）、層位的解釈の問題や下総型石刃再生技法の範疇で理解すべき内容なのかを検討する必要がある。

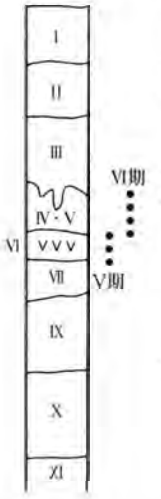
細身の定形化された二側縁加工のナイフ形石器がメルクマールとなる。その他に掻器、削器、彫刻刀形石器楔形石器、石錐などが認められる。ナイフ形石器に次いで掻器の存在感が高まっているようである。石材は珪質頁岩、黒色ガラス質安山岩、メノウ、チャート、流紋岩といった良質な石材に、黒曜石が高頻度で利用されるようになる。前段階まで比較的珪質頁岩、黒色ガラス質安山岩などを多用していたが、印旛Ⅴ期になり黒曜石が多用される背景には社会的、行動的変化が考えられる。黒曜石は透明度が高いものが多く、信州産のものが搬入されている。なお、この段階となり黒曜石の依存率が高まるのは印旛郡内だけではなく、下総台地全体や相模野台地、武蔵野台地も同様に高いため、南関東地方における当時の社会的傾向といえる。

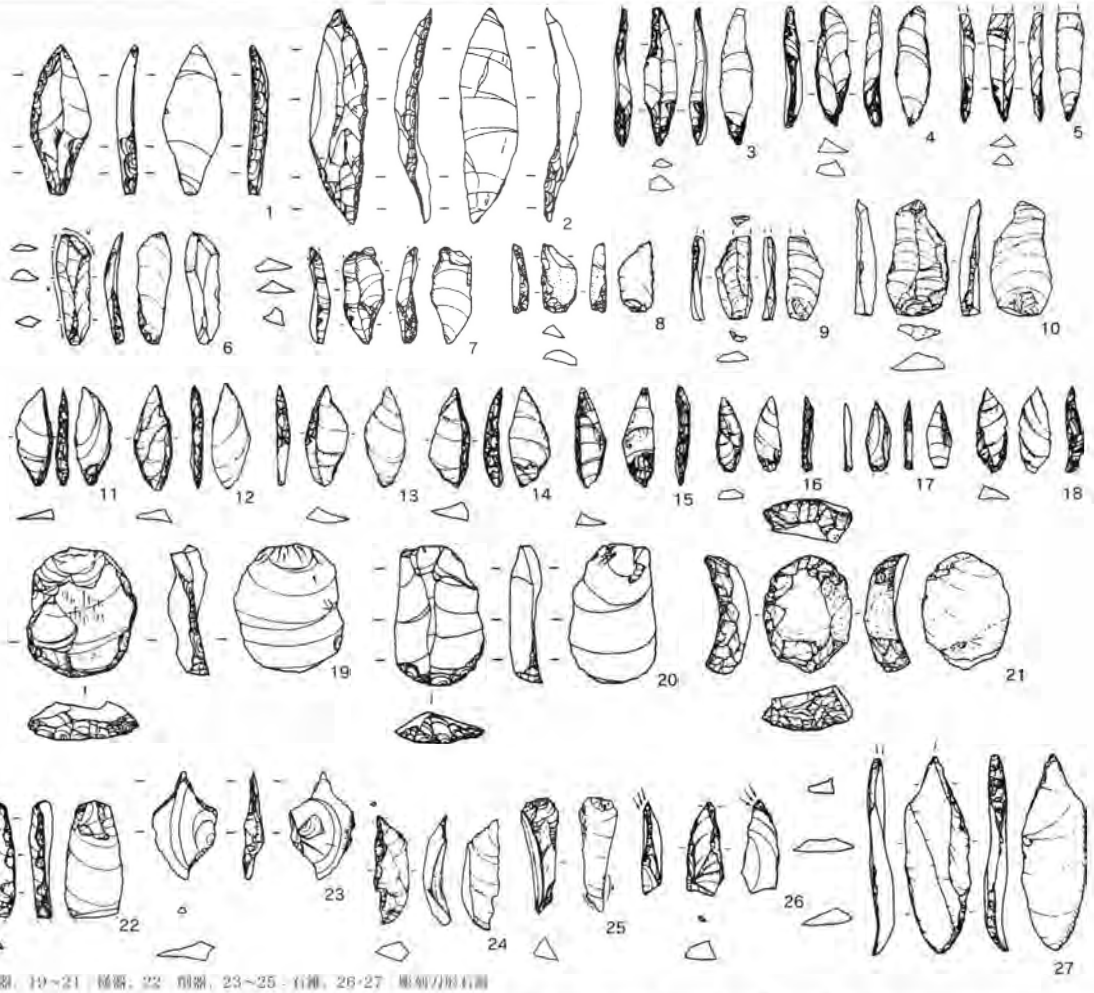
印旛Ⅵ期

下総台地ではローム層の堆積が薄く不安定であるため、Ⅲ層～Ⅴ層に拡散している。相模野台地や武蔵野台地を参考にするとⅣ下～Ⅴ層の石器群。相模野台地ではB2L下部～B2Uまでの石器群であり、武蔵野台地ではⅤ層～Ⅳ層中部の石器群に対比される。一本桜南遺跡では第5文化層（Ⅴ層）→第6文化層（Ⅳ下層）という層位的な出土例があり、更に第7文化層が印旛Ⅶ期に認められ、層位的出土例として良好な遺跡と言える。

印旛Ⅳ期以降、横長剥片剥離技術がほとんど表面化してこなかったが、この段階になって再び石器群内で用いられるようになる。メルクマールとなる切出形石器の多くは横長幅広剥片を素材としており、前段階との内容から一転し、石刃技法よりも多用されている。しかし、調整法は平坦剥離によるものではなく、ほとんどが急斜度調整によるものである。平坦剥離に関係するか否かは明らかではないが、向原遺跡では下総台地最古の尖頭器が出土し、池向遺跡では有樋尖頭器が出土している。尖頭器の初源にも関わるため慎重な判断が求められる。石器組成は切出形石器を中心に角錐状石器、削器、掻器、楔形石器、石錐そして尖頭器などである。石

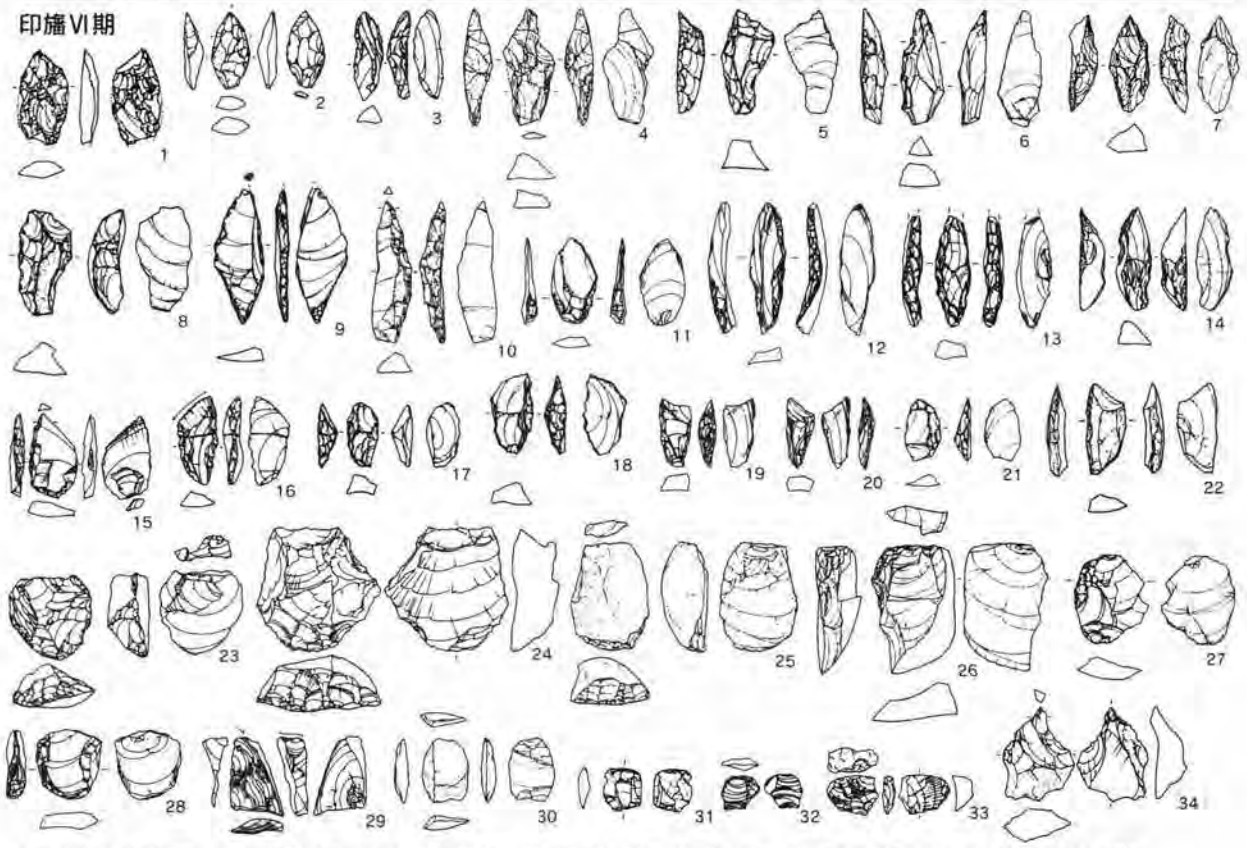
印旛Ⅴ期





1～18：ナイフ形石器，19～21：掻器，22：削器，23～25・石錐，26・27：彫刻刀形石器

印旛Ⅵ期



1：尖頭器，2：有樋尖頭器，3～8：角錐状石器，9～22：ナイフ形石器，23～25・28：掻器，26・27：削器，29：彫刻刀形石器，30～33：楔形石器，34：石錐

材は全体的に黒曜石が最も多く黒色ガラス質安山岩、珪質頁岩、メノウが続く。黒曜石が主体とならない石器群では比較的礫群が共伴する（道澤1996）。資料が増加した近年では比較的掻器が認められているが、資料編掲載遺跡では客体的に映る。他地域では掻器がまとまる遺跡もあり、その様な遺跡では刃部再生接合資料が認められている。

今回資料編に掲載した当該期の石器群は必ずしも黒曜石主体の遺跡ばかりではないが、前述のとおり黒曜石の多用と横長剥片剥離技術の表面化に何らかの関係も考えられる。印旛Ⅴ期における石刃技法と珪質頁岩あるいは黒曜石といった石材の偏重からの変化は、社会的変化が認められる画期としてとらえられるかもしれない。

印旛Ⅶ期

下総台地のⅢ層下部～Ⅳ・Ⅴ層中にかけて出土する石器群。武蔵野台地ではⅣ層中部～上部、相模野台地ではL2～B1層中の石器群に対比することができ、南関東地方におけるいわゆる「砂川期」に比定される段階である。石刃素材の二側縁加工・部分加工のナイフ形石器を特徴とし、これらに様々な形態の掻器・彫刻刀形石器や尖頭器が伴う。これらの素材作出には打面・頭部調整を入念に行った両設打面石核から石刃を連続的に剥離し、頻繁に打面再生・転位を行う「砂川型刃器技法」が用いられている。なお、印旛地域では本段階の石器群を石器組成から1～3群に分けて考えることができる。

1群　ナイフ形石器を主体とし、尖頭器が組成に含まれない一群。石器組成はナイフ形石器、石刃、打面再生剥片、石核等である。石材は黒曜石、メノウ、珪質頁岩、黒色ガラス質安山岩等が用いられ、遺跡により主要となる石材が異なっている。

2群　ナイフ形石器を主体とするが、これらに少量の尖頭器が組成に含まれる一群。石器組成はナイフ形石器、尖頭器、彫刻刀形石器、楔形石器、二次加工のある剥片、石刃、小型石刃、石核等である。ナイフ形石器には素材として横長剥片を用いたものが若干認められる。尖頭器は小～中型の片面・半両面加工の尖頭器である。また、一本桜南遺跡第7文化層では剥片素材石核から小型石刃を作出する特徴的な剥片剥離技術[1]も見られている。石材は頁岩、珪質頁岩、黒色ガラス質安山岩、チャート、メノウ、凝灰岩等で、本群でも遺跡により主要となる石材が異なる傾向が見られている。

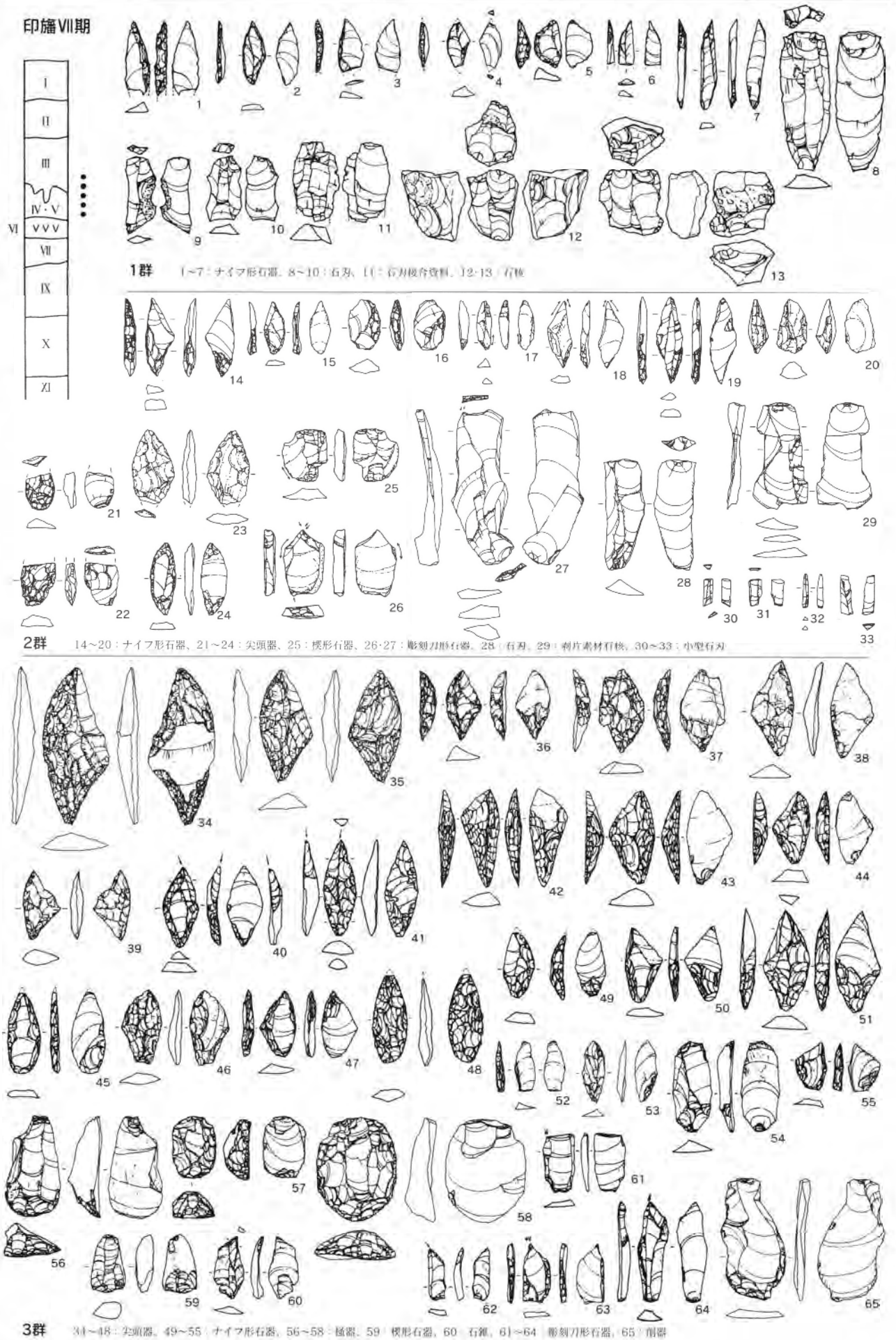
3群　東内野型尖頭器[2]を組成の中心にもつ一群。大規模なブロックを形成し、多くの礫群を伴う例も見られる。近年の研究動向では本群の特徴を持つ石器群を「砂川期」段階に位置づける見方が強まってきているが（石器文化研究会2000a・2000b・2001、千葉県立房総風土記の丘2001b）、本書においても東内野型尖頭器以外の石器組成・形態組成等の検討から本段階に位置付けらるものとしてとらえた。

石器組成は東内野型尖頭器、尖頭器、ナイフ形石器、掻器、彫刻刀形石器、削器、石錐、削片、楔形石器、石刃、石核等である。東内野型尖頭器以外の尖頭器には小～中型の両面・半両面・片面加工のものが見られ、彫刻刀形石器も形態的にバラエティーに富み、平賀一ノ台遺跡では削片を再利用したものも存在する。掻器は縦長剥片素材の先刃掻器の他、円形・楕円形のものも多い。

石材には珪質頁岩（東北地方産珪質頁岩・白滝頁岩）、チャート、黒色ガラス質安山岩、黒曜石、凝灰岩等が用いられ、特に東内野型尖頭器は東北地方産珪質頁岩、チャートとの強い結びつきが認められている。

1）この小型石刃作出技術は、技術的には印旛Ⅳ期2群に見られる下総型石刃再生技法と類似するが、出土層位や使用石材が異なっている点から下総型石刃再生技法とは区別されるべきものであろう。また現段階では印旛Ⅶ期から印旛Ⅸａ期にまで認められ、地域も印旛沼北側を中心に見られている。これらが下総型石刃再生技法と系統的なつながりを有するものかどうかは今後の課題である。

2）先端部の一側縁に樋状剥離（ファシット）が施され、樋状剥離が見られる側縁が「く」の字状を呈する左右非対称の尖頭器。印旛沼周辺を中心として分布する。左右対称のものは「男女倉型」として区別される。


印旛Ⅶ期
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ・Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅸ
Ⅹ
Ⅺ
1群 1～7：ナイフ形石器、8～10：石刃、11：石刃模倣剥片、12・13：石核
2群 14～20：ナイフ形石器、21～24：尖頭器、25：楔形石器、26・27：彫刻刀形石器、28：石刃、29：剥片素材石核、30～33：小型石刃
3群 34～48：尖頭器、49～55：ナイフ形石器、56～58：掻器、59：楔形石器、60：石錐、61～64：彫刻刀形石器、65：削器

これら1～3群の関係であるが、1群と3群には取香和田戸遺跡での層位的出土例から、2群と3群には一本桜南遺跡での層位的出土例からそれぞれ前後関係も考えられるが、類例が稀薄であること、また東内野型尖頭器に関する重要な問題も含まれていることから今後さらなる検討が必要と思われる。1群と2群との関係についてもいまだその関係が見出せない状況にあるといわざるを得ず、本段階における多様な石器群のあり方・関係は今後の課題として残される。

印旛Ⅷ期

前段階と同様に下総台地のやはりⅢ層下部～Ⅳ・Ⅴ層中にかけて出土する石器群。武蔵野台地ではⅣ層上部～Ⅲ層下部、相模野台地ではB1上部～上面の石器群に対比することができ、南関東地方におけるいわゆる「月見野期」に比定される段階である。

小型幾何形のナイフ形石器を主体とする石器群で、尖頭器も量的に増えてくる段階ではあるが遺跡によっては組成に含まれないところもある。石器組成はナイフ形石器、尖頭器、掻器、削器、彫刻刀形石器、楔形石器、石刃、二次加工のある剥片、石刃、石核等である。ナイフ形石器には主体となる小型幾何形の他に幅広の二側縁加工などバラエティーに富むが、前段階よりも小型化する傾向が見受けられる。尖頭器は小～中型のもので片面・半両面・両面加工のものが見られ、男女倉型の有樋尖頭器も若干含まれる。掻器・削器・彫刻刀形石器も形態は多様である。

石材は黒曜石、チャート、珪質頁岩、頁岩、泥岩、メノウ、黒色ガラス質安山岩、凝灰岩、流紋岩等で、特に特定の石材が卓越して用いられている傾向や特定器種と結びつく傾向は見られない。

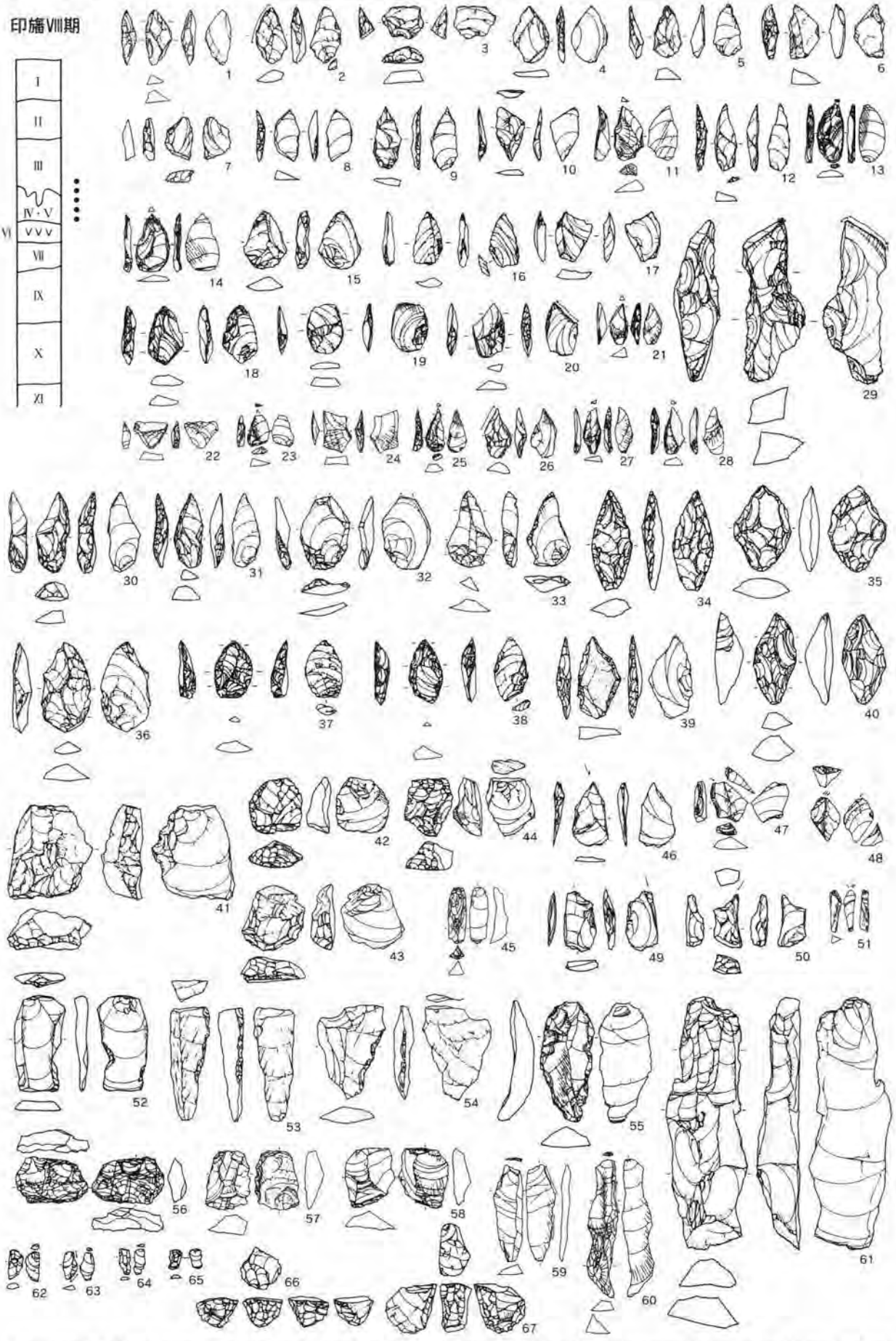
剥片剥離技術には石刃技法と横長剥片剥離技術の両者が見られるが、しかし石器群により主体となる剥片剥離技術が異なっている。石刃技法には前段階のような精緻なものはほとんど見られなくなり、逆に横長剥片剥離技術に獅子穴X遺跡、五斗蒔遺跡第5文化層のように規格的な素材作出の意図がうかがえるものがある。また地国穴台遺跡E01地点では印旛Ⅶ期2群（一本桜南遺跡第7文化層）に見られた剥片素材の石核から小型石刃を作出する特徴的な剥片剥離技術も見られている。

ブロックの規模は小～大規模のものまで様々で、礫群のほかに焼土址・竪穴状遺構が伴う例も見られる。

印旛Ⅸ期

下総台地のⅢ層中部～下部を中心に出土する石器群。武蔵野台地ではⅢ層下部、相模野台地ではL1H中部を中心とする石器群に対比することができ、尖頭器を組成の中心とする「尖頭器文化期」の段階である。印旛地域では復山谷遺跡に見られる層位的出土例や尖頭器の形態・器長の変化（小型→大型へ）から、Ⅸa～Ⅸc期の3段階の設定を行うことができ、変遷がたどれるものと考えられる。また、剥片剥離技術には石刃技法と横長剥片剥離技術の両者が認められており、遺跡ごとに量の多寡は見られるものの、基本的には主要器種は石刃及び縦長剥片が多く用いられる傾向が認められる。

Ⅸa期　小型・幅広の尖頭器を主体に含む石器群。石器組成は尖頭器、ナイフ形石器、掻器、削器、彫刻刀形石器、楔形石器、石錐、二次加工のある剥片、削片、小型石刃、石刃、石核等である。尖頭器は両面加工が主ではあるが、片面・半両面加工のものも認められる。また有樋尖頭器も多く見られているが、これらは黒曜石を主要石材とする点、左右対称に近い点から男女倉型の範疇でとらえるものと考えられる。しかし樋状剥離は見られないものの形態的には東内野型に類似しているもの、さほど顕著ではないが左右対称をなさないものが見られることから、Ⅸa期の有樋尖頭器は男女倉型と東内野型の「折衷」的様相を示していると思われる。



1～33：ナイフ形石器、34～40：文脚器、41～45：掻器、46～51：彫刻刀形石器、52～55：削器、56～58：楔形石器、59・60：使用痕のある剥片、61：石斧、62～65：小型石皿、66・67：石棒

ナイフ形石器は二側縁・部分加工のものであるが平面形態は様々で、また遺跡により出土量に差が見られる。掻器は円形に近いものも認められるが、縦長剥片素材の先刃掻器が多い。削器・彫刻刀形石器の形態はバラエティーに富んでいる。なお、木苅峠遺跡上層石器群には印旛Ⅶ期2群（一本桜南遺跡第7文化層）、印旛Ⅷ期（地国穴台遺跡E01地点）で認められた小型石刃を作出する剥片剥離技術が続けて見られている。

石材は黒曜石が主要石材として用いられており、これら黒曜石は特に尖頭器製作との結びつきが強く、また原産地推定の結果、高原山産のものが主体として用いられている結果が明らかとなっている（千葉県文化財センター2002）。この他には珪質頁岩、チャート、安山岩、メノウ、泥岩がわずかに使用されているのみである。

ブロックは小～大規模なものまで様々で、小規模な礫群が伴うブロックも若干ではあるが認められている。

Ⅸb期　復山谷遺跡の層位的出土例からⅨa期に後続する段階としてとらえ、尖頭器が中型・木葉形主体へとなる石器群である。石器組成は尖頭器、ナイフ形石器、掻器、彫刻刀形石器、二次加工のある剥片、削片、石刃、石核等である。尖頭器は片面・半両面・両面加工のものが見られる。復山谷遺跡第8文化層では出土は見られていないが、尖頭器削片の存在から有樋尖頭器が組成に含まれているものと考えられる。しかしこれらの尖頭器はⅨa期とは異なり、石材が黒曜石主体から多様な石材を用いる方向へ変化している。ナイフ形石器・削器・彫刻刀形石器は形態的に多様なあり方を示し、特に復山谷遺跡第8文化層では多種の彫刻刀形石器が組成に含まれ、印旛Ⅶ期3群（平賀一之台遺跡）で見られた削片を再利用したものが含まれる。掻器は縦長剥片素材の先刃掻器が見られている。

石材は先にもふれたが、Ⅸa期の黒曜石主体から泥岩、黒色ガラス質安山岩、頁岩、流紋岩、凝灰岩等の多様な石材が用いられるようになっている。ブロックの規模は小・中規模なもので、現段階での資料中には礫群が伴っている例はない。

Ⅸc期　中型～大型の木葉形尖頭器を主体的に含む石器群。尖頭器の完成度はさらに高くなる。石器組成は尖頭器、ナイフ形石器、掻器、削器、彫刻刀形石器、石錐、楔形石器、石刃、石核等であるが、御山遺跡Ⅷb文化層・御塚山遺跡第1文化層中のいくつかのブロックで尖頭器が組成に含まれない石器群が見られ、Ⅸc期では組成において2様のあり方が見て取れる。尖頭器は両面・半両面・片面加工のものが認められるが、遺跡により主体となるものが異なっている。また有樋尖頭器は認められていない。ナイフ形石器も形態的にバラエティーに富む。掻器は円形・楕円形を呈するものが多く、御塚山遺跡第1文化層では様々な形態の削器がまとまって検出されている。

石材は黒曜石・珪質頁岩が主体的に用いられる傾向が強まり、尖頭器の製作と強く結びつく。この他には黒色ガラス質安山岩、珪質凝灰岩、チャート、メノウ、凝灰岩等が使用される。黒曜石は池花遺跡第3文化層での原産地推定の結果（前掲千葉県文化財センター2002）、高原山産、信州産のものが見られている。内田端山越遺跡（クラブハウス）でも分析は行われていないが、同様の傾向が石材観察から予想される。

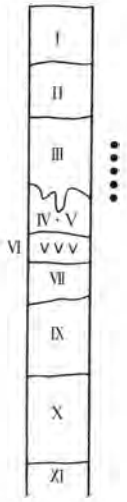
ブロックは比較的大規模なものが多く、小規模な礫群が伴う例も見受けられている。

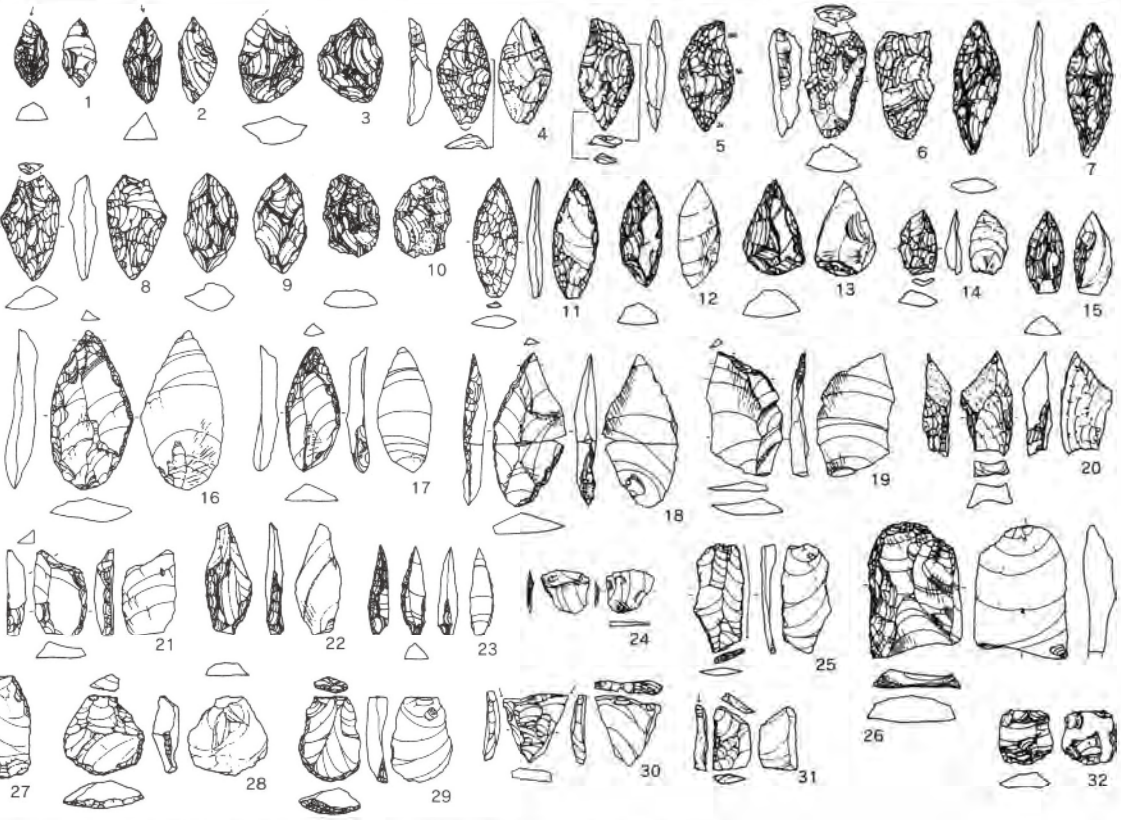
印旛Ⅹ期

下総台地のⅢ層上部から出土する石器群。武蔵野台地ではⅢ層中部～上部、相模野台地ではＬＩＨ上部～ＬＩＳ上部中の石器群に対比することができる「細石刃文化期」の段階である。印旛地域では細石刃核の形態から2つの群に分けてとらえることができる。

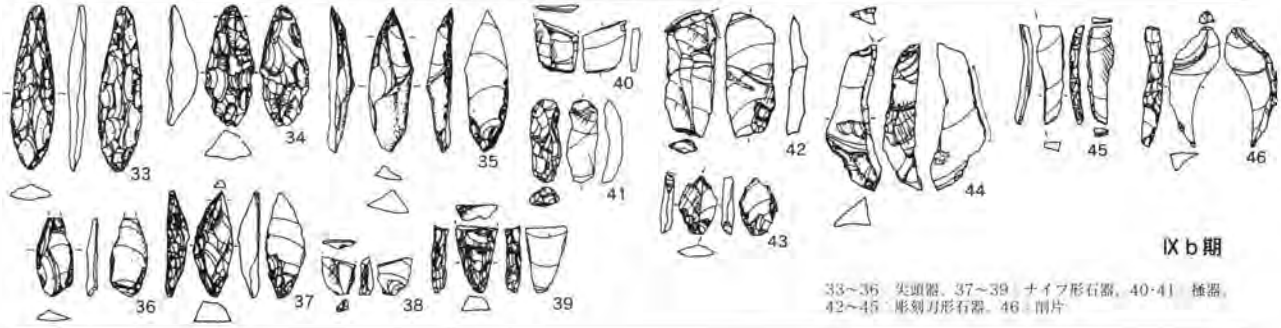
1群　西南日本に分布の中心が見られる野岳・休場型の細石刃石核を有する石器群。印旛地域を含む下総台地では本群が細石刃文化期の主体となる。石器組成は細石刃石核、細石刃、掻器、削器、彫刻刀形石器、ナイ

印旛Ⅸ期

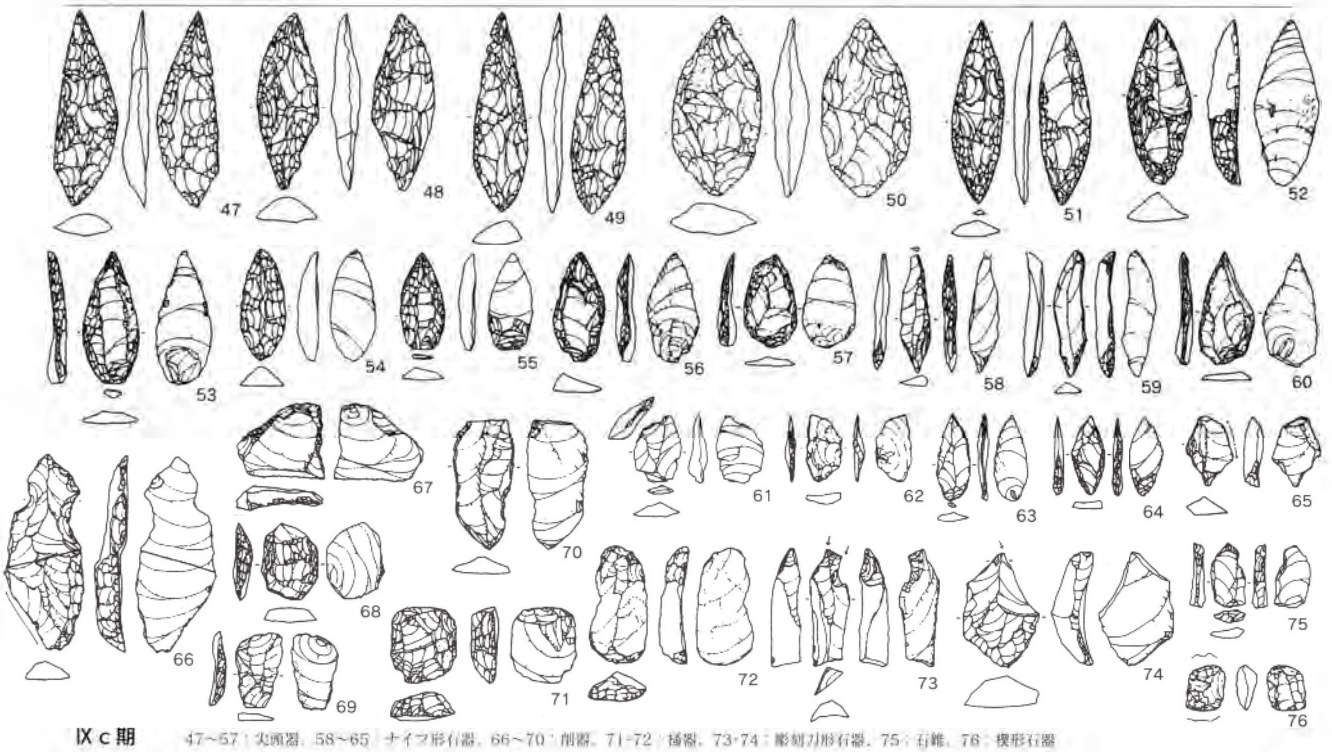




Ⅸa期　1～17：尖頭器，18～24：ナイフ形石器，25･26：削器，27～29：掻器，30･31：彫刻刀形石器，32：楔形石器



Ⅸb期　33～36：尖頭器，37～39：ナイフ形石器，40･41：掻器，42～45：彫刻刀形石器，46：削片



Ⅸc期　47～57：尖頭器，58～65：ナイフ形石器，66～70：削器，71･72：掻器，73･74：彫刻刀形石器，75：石錐，76：楔形石器

フ形石器、楔形石器、石錐、二次加工のある剥片、石核、剥片等である。細石刃石核は稜柱形・円錐形を呈し、打面調整・頭部調整・打面再生を駆使しながら細石刃の作出が行われる（第Ⅲ章第1節参照）。また作出された細石刃は折断により分割されて用いられる例が多い。ナイフ形石器は二側縁加工のものが見られているが量的には少なく、その他の器種も定形的なものは見られず形態的にバラエティーに富んだものになる。

また、細石刃剥離技術の他にも横長剥片剥離技術が認められるが、これらは細石刃以外の石器製作の素材作出を目的として行われているものである。

石材は細石刃石核には黒曜石・チャートを主体に用いられており、若干ではあるが珪質頁岩を用いたものも認められる。他には粘板岩、安山岩、凝灰岩等が見られるが主に細石刃製作以外の石器製作に用いられる。

2群　北海道から東北日本に分布の中心が見られる湧別技法による細石刃石核を有し、荒屋型彫刻刀形石器、角二山型掻器が特徴的に伴う石器群（北方系削片系細石刃石器群）。石器組成は細石刃石核、細石刃、彫刻刀形石器（荒屋型を含む）、掻器（角二山型を含む）、削器、二次加工ある剥片、削片、剥片等であるが、これらは製品類の比率が高く、遺跡内での製作の痕跡もあまり見られないことから、完成品あるいは半製品の状態で持ち込まれているものと考えられる。よってブロックの規模も比較的小規模なものが多い。

細石刃石核は尖頭器状の両面調整体から削片を剥ぎ取りながら打面を作出し、船底状の細石刃石核の端部から順次細石刃を作出してゆくもので（第Ⅲ章第1節参照）、まれに打面再生・作業面再生が行われるものもみられている（東峰御幸畑西遺跡・木戸場遺跡A地点）。また剥片石器類は両面調整体を整形する段階で剥ぎ取られた剥片を使用して製作されており、本石器群の技術体系が「非常に組織化された無駄のない、管理的な石器製作構造」（島立・永塚1997）を有しているものとしてとらえられる。

石材は東北地方産の良質な珪質頁岩が大半を占め、本石器群との強い結びつきを見せている点も特徴の1つといえる。

これら北方系削片系細石刃石器群は周辺の各台地と比較しても特に下総台地において数多く検出されているが、その要因についてはいまだ不明確な点が多い。使用石材との関係や周辺地域における関係資料の分布をも視野に含め、今後考えていかなければならない問題である。

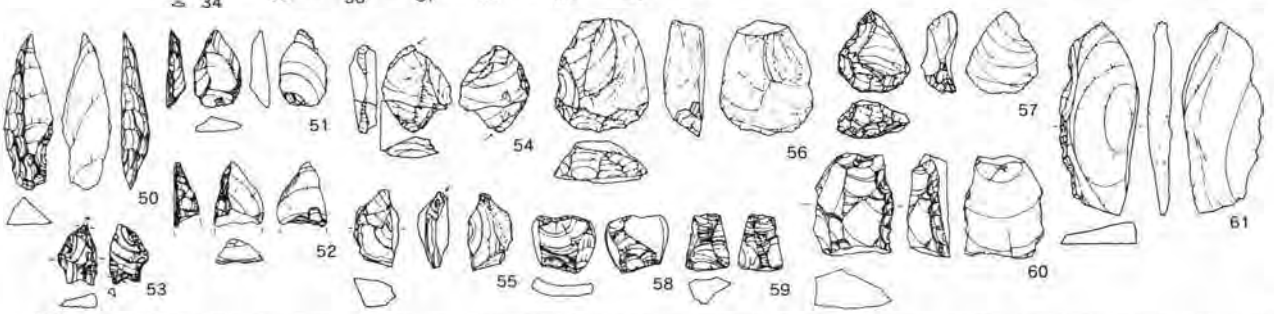
ここで1群と2群との関係であるが、いまだ両群が共伴する石器群の例は見られておらず、また両群の時間的関係も明らかになってはいない。2群に見られる北方系削片系細石刃石器群の下総台地内における検出例の多さは印旛X期を特徴づける1つであり、本地域がこれら石器群の太平洋側における分布の南限を示すことからも東北日本と西南日本との文化の接点であったことは間違いない。相模野台地での層位的出土例では野岳・休場型の細石刃石器群が細石刃文化期前半に見られるのに対し、北方系削片系細石刃石器群は細石刃文化期後半の段階に現れる様相が見受けられるが、しかしこれをそのまま特異な様相を示す下総台地に当てはめて考えるのは尚早であろう。今後、両細石刃石器群がどのような関係を持って存在していたかの解明が下総台地内での細石刃文化期を考える上での重要な課題である。

印旛XI期

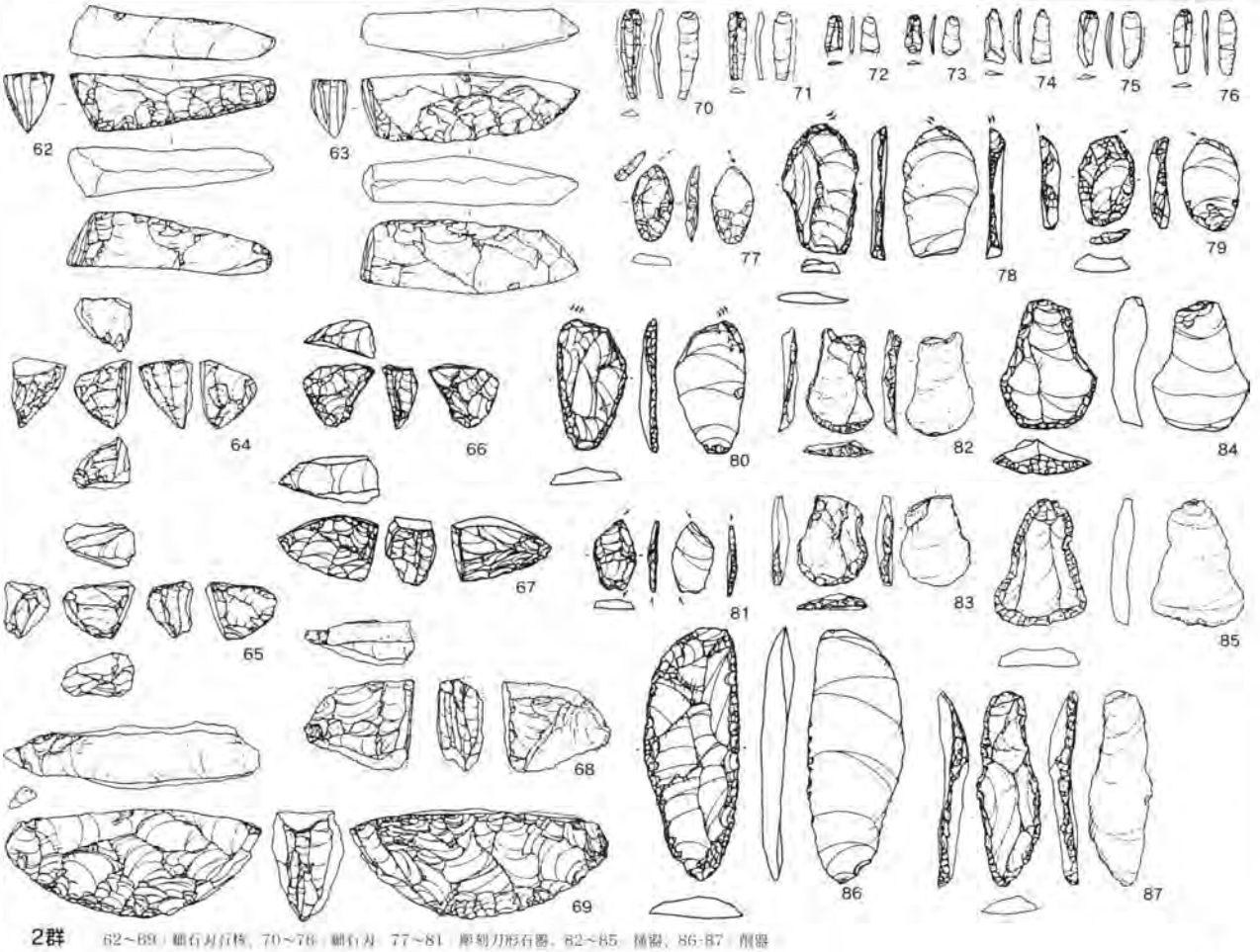
下総台地のⅢ層上面において出土する石器群。武蔵野台地ではⅢ層上部～上面、相模野台地ではＬ１Ｓ中部～漸移層中の石器群に対比することができる。旧石器時代末の最終段階に東日本において特徴的に見られる「神子柴・長者久保文化期」に比定される段階であるが、下総台地内では組成主体が大型の尖頭器であり、該期の石器群中において認められる神子柴型石斧の検出例は富津市前三舟台遺跡（佐伯他1992）、野田市本郷遺跡（飯塚1980）など数例見られるのみで非常に少ない。

印旛X期





1群　1～16：細石刃石核、17：打面再生剥片、18～49：細石刃、50～52：ナイフ形石器、53：石錐、54・55：彫刻刀形石器、56・57：掻器、58・59：楔形石器、60・61：削器



2群　62～69：細石刃石核、70～76：細石刃、77～81：彫刻刀形石器、82～85：掻器、86・87：削器

石器組成は尖頭器、掻器、削器、石錐、石核、剥片等であるが、南大溜袋遺跡では矢柄研磨器、石鏃が共伴しており注目される。また南大溜袋遺跡・木戸先遺跡の他は小規模なもので、明確なブロックを形成しない遺跡も多い。尖頭器は両面加工の柳葉形・木葉形・有舌形が見られる。特に柳葉形のものは折断・分割されている例が多く、植刃として使用されていた可能性も指摘されている。

石材は尖頭器には硬砂岩・黒色ガラス質安山岩、安山岩、凝灰岩が主体的に用いられ、南大溜袋遺跡においては尖頭器の形態による石材選択が行われた様子もうかがえる。この他にはチャート、頁岩、ホルンフェルス等が用いられる。

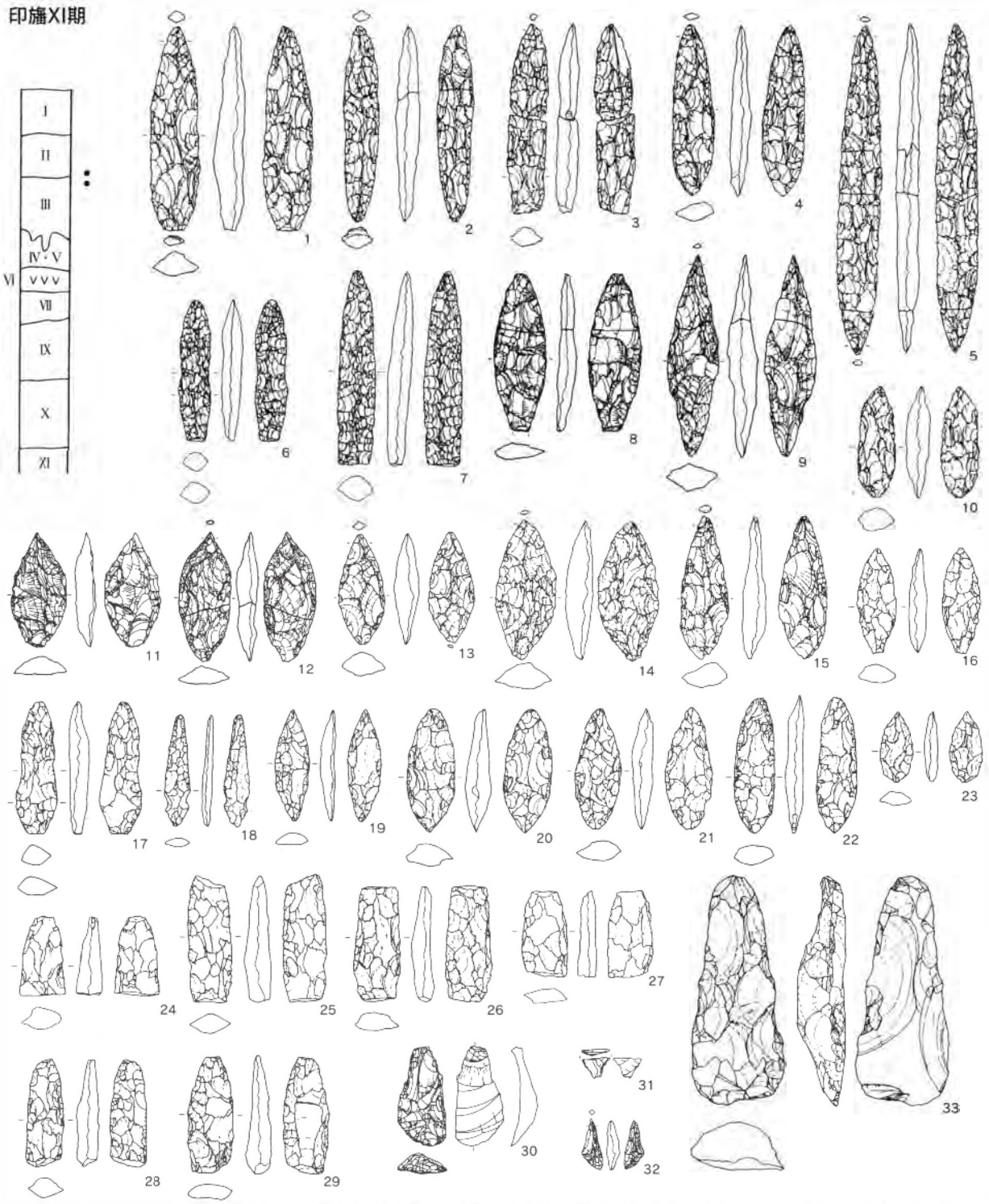
剥片剥離技術は石核の出土例が少ないためはっきりとはしないが、掻器には石刃を素材としたものが認められることから石刃技法が存在していた可能性は高い。

本書では印旛XI期の石器群を技術的な観点から旧石器時代末のものとして位置づけた。しかし、印旛村瀬戸遠蓮遺跡（白石他1973）のように大型の尖頭器に隆起線文土器の共伴を示唆する例も認められるため、これらの石器群が旧石器時代に属するのか縄文時代草創期のものとしてとらえるか難しい問題ではある。印旛XI期では土器との共伴関係を含め時代区分に関する問題にも留意する必要が求められよう。しかし重要なのは旧石器時代から縄文時代へと流れてゆく中で、石器及び石器製作がどのように移り変わっていゆくか一連のつながりの中でとらえてゆかなければならないことで、これらが土器の登場、生業の変化等とどのような関わりを持つのか考えてゆくことと思われる。

以上、11期に区分された印旛郡内の後期旧石器時代の編年を概観してきた。本章の初めにも記したように、後期旧石器時代の編年を組む作業は予想通り難航を極めた。相模野台地や武蔵野台地に比べローム層自体が薄く、そのため区分される各層も自然と薄く不明瞭となり、文化層が薄いローム層の中に圧縮されたかたちとなって現れた。急激な変化を伴わない石器の変遷を追うにはそれぞれの比較検討だけでは限界があり、出土層位から前後関係を把握する作業も必要となる。しかし、圧縮されるだけではなく、堆積状況や自然環境を要因とし当時の生活面から石器が上下に拡散しているため、出土層位を明らかにすることの困難さに拍車をかけることとなった。そのため、一つの区分のなかを更に細分しなければならないという事態が生じた。それぞれの問題点でも記しているように、現段階では時間差によるものか、地域差によるものか、あるいはパラレルに存在していたものなのかということを明らかにするには、更なる詳細な検討が必要であろうし、大きな枠組みで再考しなければならないことは必至である。

少なくとも、印旛郡内で確認されている旧石器時代の遺跡を可能な限り網羅し、検討を加えた結果抽出された43遺跡を基準としているため大きな変動は予測してはいない。報告書の内容を尊重し、慎重に遺跡相互の石器群に比較検討を加えたが、誤認・誤謬などから内容に訂正が求められることもあるかも知れない。もちろんその様な意見に対して真摯に向き合い、より共通認識が得られるものを作り上げてゆきたい。これが完璧な印旛郡内の後期旧石器時代編年であるとは考えてはいない。ただ本書を作成するにあたり抱いていたことは、これが具体的な始まりであって欲しいということである。東西文化の坩堝たる下総台地のなかのさらに印旛郡という地域は、石器石材の制約からそれに適応するための技法なり石器が認められるところでもあった。そのためある意味特殊な面が浮き彫りにされ、如何に考えてゆくかということにも直面した。困難な作業のなか、この地域の旧石器時代の歴史が抱える問題点や課題を提示できたことも重要なことであろう。

印旛郡内の遺跡を扱う当センターとして、印旛郡内で活躍する者がその手で歴史を紡いでこそ意味があると考えている。むしろ我々が行動を起こし、何らかの形として提示しなければならないのである。今まで提示さ



1～23：尖頭器、24～29：磨製石斧、30：掻器、31：削器、32：石鏃、33：石斧　33：参考資料（富津市前三舟台遺跡、ホルンフェルス）

れることのなかった「印旛郡内の後期旧石器時代編年」を、印旛郡市文化財センターの普及事業の一環として示せたことが一つの成果といえよう。内容的にはまだ不足する部分が多々あるため、基盤としてそして叩き台としての役割が担えれば当初の目的は達成できたものと思われる。また編年を積み上げる過程によって生じた新たな問題点や課題が明確となり、採るべき方向性も見えてきた。今回の作業から得られた多くのものを糧とし、今後精緻な編年を確立してゆきたい。そしてここが始まりとなるのである。更なる印旛郡内の旧石器時代研究の発展のため、多くの御意見、御批判そして御教示、御鞭撻が戴ければ幸いである。

XI期

X期　1群　2群

IX期　IXa　IXb　IXc

VIII期

VII期　1群　2群　3群

VI期

V期

IV期　1群　2群　3群

III期　IIIa　IIIb

II期

I期

I
II
III
IV・V
VI
VII
IX
X
XI

[石器スケール1/4]

印旛沼周辺地域における旧石器変遷図

VI
資料集



84　成田市南三里塚宮原第1遺跡出土石斧［左上:長さ12.5cm］

・本章に掲載を行った43遺跡は、地域・規模・内容等を考慮し、本書執筆・編集者が抽出したものである。
・掲載遺跡の順番は水系を重視し、印旛沼を中心として北側・南側に分けた上、各市町村ごとにまとめた。
・分布図番号は巻末の遺跡一覧及び付図の分布図番号と同一である。
・遺跡名は参考文献としてあげた報告書・遺跡報告及び『千葉県埋蔵文化財分布地図』（千葉県教育委員会1997）に登録されている遺跡名をそのまま用いた。
・各遺跡の内容（点数・ブロック数・器種分類・石材名称等）については基本的に報告書・遺跡報告の内容に準記したが、近年の研究成果や本書内での内容の統一を図るため、支障のない範囲で変更等を行った箇所がある。
・本章内における挿図は参考文献より転載及び編図を行った。
・石器実測図は一部を除き1/3スケールに統一し、その他のものについては挿図内にて凡例を示した。
・参考文献の正書名は巻末に一括表記した。

分布図番号：8

復山谷遺跡

白井市復字山谷〔神崎川水系〕

概要　遺跡は神崎川の支流から分かれる小支谷により開析された東方向へとのびる標高約20mの舌状台地先端部に位置する。これまでに6次にわたる調査によっておよそ100カ所のブロックが確認されているが、第6次分に関しては未報告であり、今回は報告が行われている第1次～第5次分の内容について掲載を行った。

第1次～第5次調査では60カ所のブロックが検出されており、これらは出土層位や内容から以下の表に示す10枚の文化層に分けることができる。この中でもＡＴより上位の石器群は量・質ともに充実した内容を示している。また、いずれの文化層に帰属するものか明らかではないが、Ⅳ層上面で焼土遺構が4基検出されている。

文化層	層　位	ブロック数	ブロック名	文化層	層　位	ブロック数	ブロック名
第1文化層	Ⅸ層中部	6ブロック	E区1～6	第6文化層	Ⅳ層上部	1ブロック	WⅢ1
第2文化層	Ⅸ層上部	9ブロック	WⅨ1～8	第7文化層	Ⅳ層上部	6ブロック	WⅢ2～6、I
第3文化層	Ⅶ層	1ブロック	EⅦ1	第8文化層	Ⅲ層下部	3ブロック	EⅢ1・2、C
第4文化層	Ⅵ層	1ブロック	EⅤ	第9文化層	Ⅲ層上部	6ブロック	WⅢ7～9、A、B、F
第5文化層	Ⅳ下・Ⅴ層	22ブロック	WⅣ1～6、EⅣ1～15、D	第10文化層	Ⅲ層上面	2ブロック	WⅢ直上1-2

第5文化層〔印旛Ⅵ期〕
最もブロック数が多く検出されている文化層で、礫群を伴うブロックも認められる。石器組成は角錐状石器、ナイフ形石器、掻器、削器、尖頭器、彫刻刀形石器、石錐、楔形石器、使用痕のある剥片、削片、折断剥片、石核、剥片・砕片、敲石、磨石、礫である。ナイフ形石器は横長剥片を素材としたものを主とし、切出形を中心に各種形態のものが認められる。剥片剥離技術は横長剥片剥離技術を主体とするが、一部石刃技法によると思われるものも見られている。石材は黒曜石を主体とするが、チャート、黒色ガラス質安山岩、珪質粘板岩、メノウ、細粒砂岩、泥岩、凝灰岩なども多く、多岐にわたる。

第6文化層〔印旛Ⅷ期〕
1カ所のブロックのみであるが規模が大きく、2カ所の礫群も伴っている。石器組成はナイフ形石器、掻器、削器、彫刻刀形石器、楔形石器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、剥片・砕片、磨石、礫である。ナイフ形石器は中～小型のものが多く、石刃もしくは縦長剥片を素材とした様々な形態のものが見られる。剥片剥離技術は石刃技法を主体とすると考えられるが、横長剥片剥離技術も比較的多く見られている。石材は黒曜石、チャート、泥岩、メノウ、凝灰岩、凝灰質泥岩など様々な石材が用いられる。

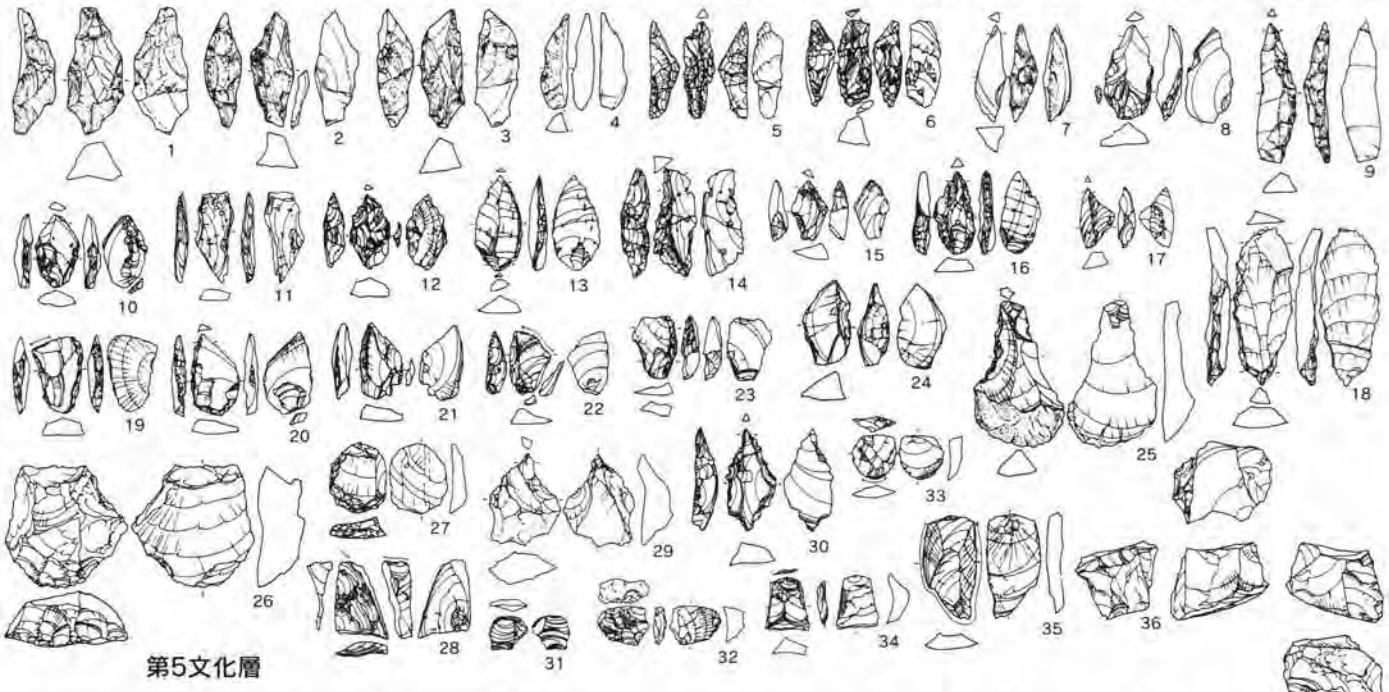
第7文化層〔印旛Ⅸa期〕
ナイフ形石器を主体に、少量の尖頭器が含まれる一群。石器組成はナイフ形石器、尖頭器、掻器、削器、楔形石器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、打面再生剥片、剥片・砕片である。ナイフ形石器は石刃を素材とした中～大型の二側縁加工のものが中心で、尖頭器は片面加工、周縁加工のものが多い。剥片剥離技術は石刃技法を主体とするが、横長剥片剥離技術も存在する。石材は黒曜石、泥岩を主体とし、その他チャート、流紋岩、凝灰岩、粘板岩、メノウ等が見られる。

第8文化層〔印旛Ⅸb期〕
石器組成は尖頭器、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、掻器、削片、石核、剥片・砕片である。検出は見られていないが、尖頭器削片が認められることから、本来的には有樋尖頭器が本文化層の組成に含まれると考えられる。尖頭器には両面加工と片面加工のものが検出されている。ナイフ形石器は石刃素材の二側縁加工のもの。また彫刻刀形石器の検出が多く、この中には尖頭器削片を利用した特徴的なものが含まれる。剥片剥離技術はやはり石刃技法を主体とする。石材は泥岩を主体に、黒色ガラス質安山岩、メノウ、チャート、黒曜石等が用いられる。

第9文化層〔印旛Ⅹ期Ⅰ群〕
細石刃文化期の文化層。石器組成は細石刃石核、細石刃、打面再生剥片、ナイフ形石器、削器、楔形石器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、剥片・砕片、礫器である。細石刃石核は円錐形・稜柱形を呈する野岳・休場型のもの。この他に石刃技法と横長剥片剥離技術が認められ、その他石器の素材が作出されている。石材は細石刃には黒曜石・チャート・粘板岩が、その他の石器にはやはり黒曜石を主体にチャート、泥岩、粘板岩、安山岩、頁岩、珪質粘板岩等が使用されている。

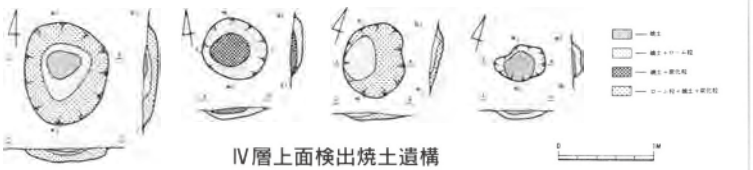
第10文化層〔印旛Ⅺ期〕
いずれも小規模なブロックで、石器組成は尖頭器、掻器、削器、石錐、剥片等である。尖頭器は大型の木葉形・柳葉形を呈するもの。剥片剥離技術は不明確であるが、掻器には大型の石刃を素材としたものが見られている。石材は尖頭器には黒色ガラス質安山岩が主体として用いられ、その他に泥岩、チャート、黒曜石が見られる。

〔◎参考文献：鈴木定明他1978、田村隆他1982、田村隆2000a　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘他〕

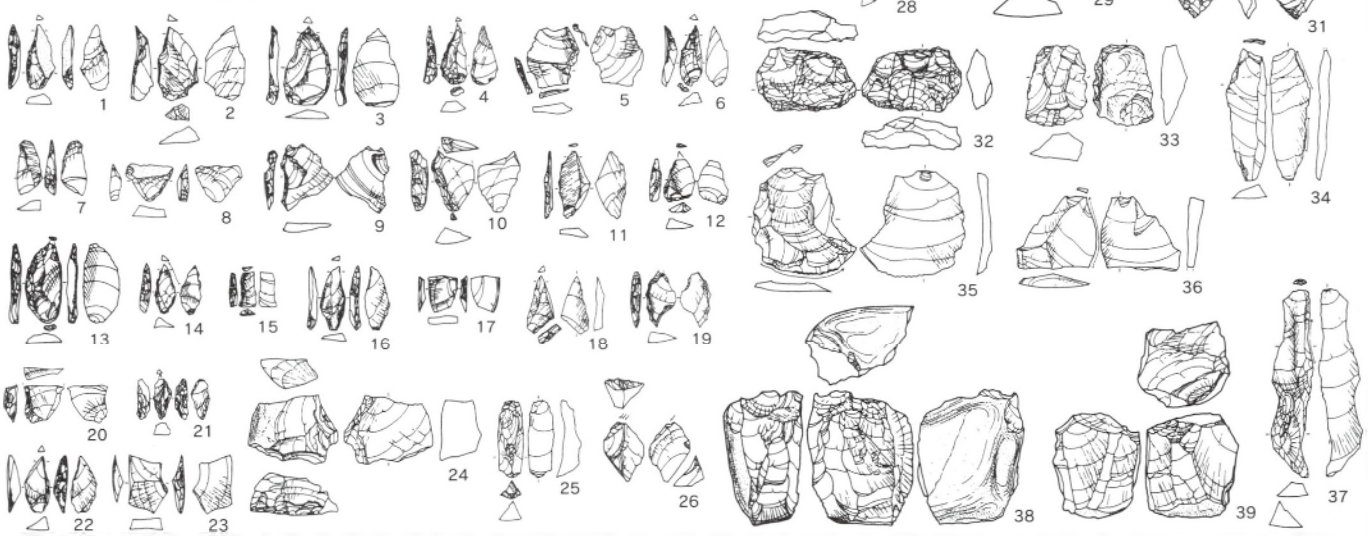


第5文化層

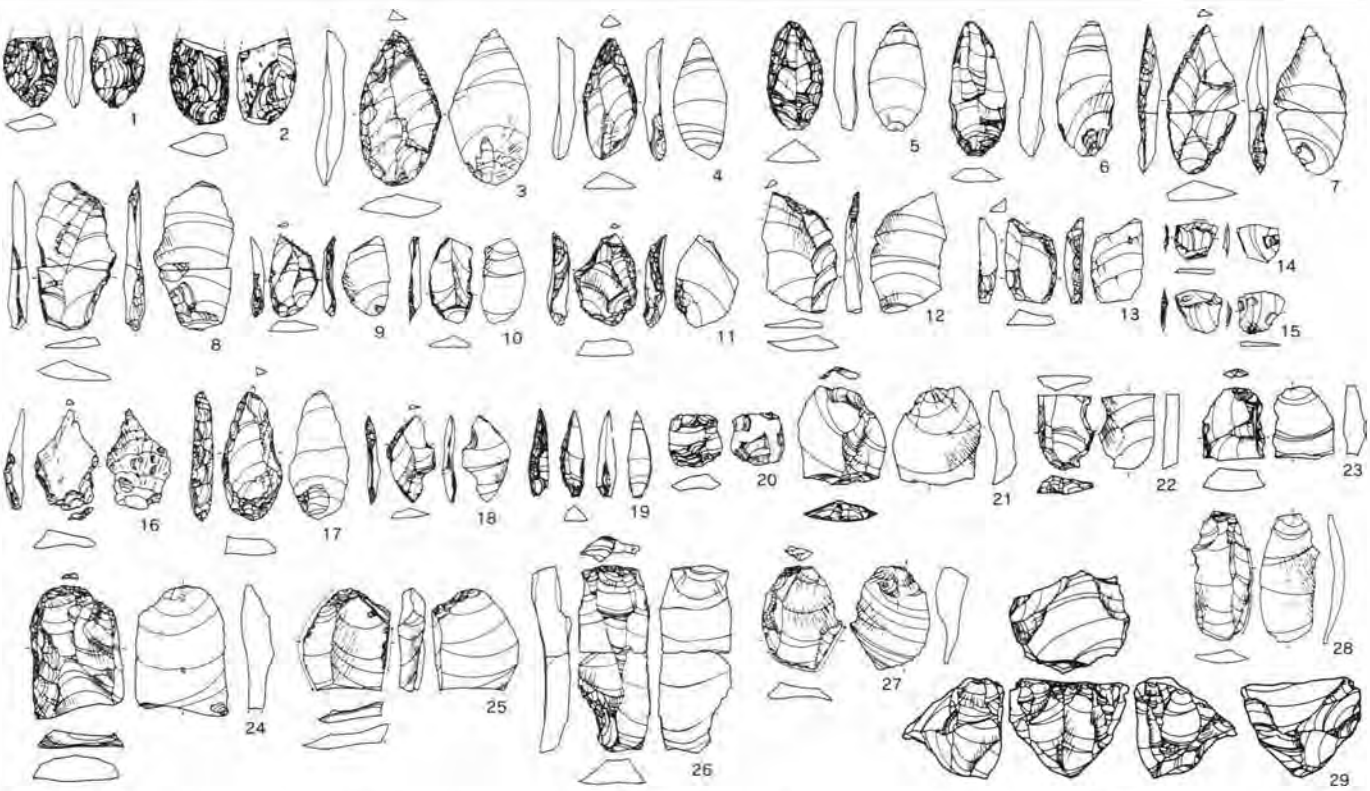
1～6：角錐状石器、7～24：ナイフ形石器、25：削器、26･27：掻器、28：彫刻刀形石器、29：石錐、30：尖頭器、31･32：楔形石器、33～35：使用痕のある剥片、36：石核
(1～4･7･9：細粒砂岩、5･18･27･29：黒色ガラス質安山岩、6･10～17･28･31～34：黒曜石、8･36：メノウ、19･20･25･35：泥岩、21～23：凝灰岩、24･26：珪質粘板岩、30：チャート)



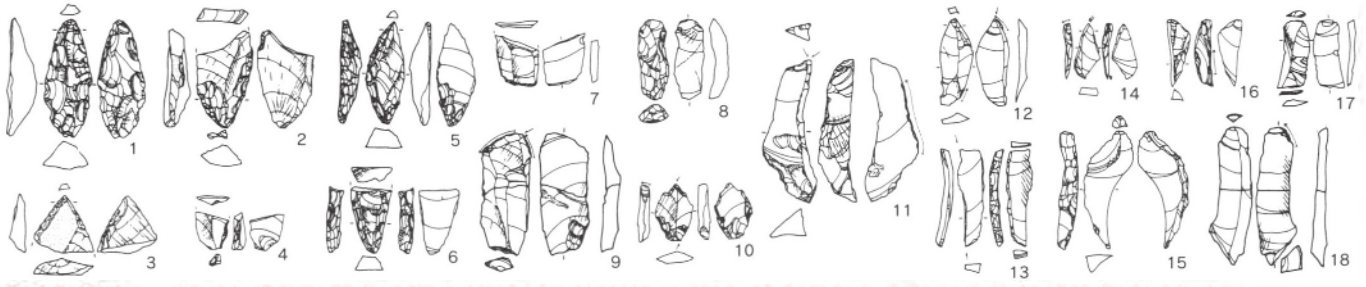
Ⅳ層上面検出焼土遺構



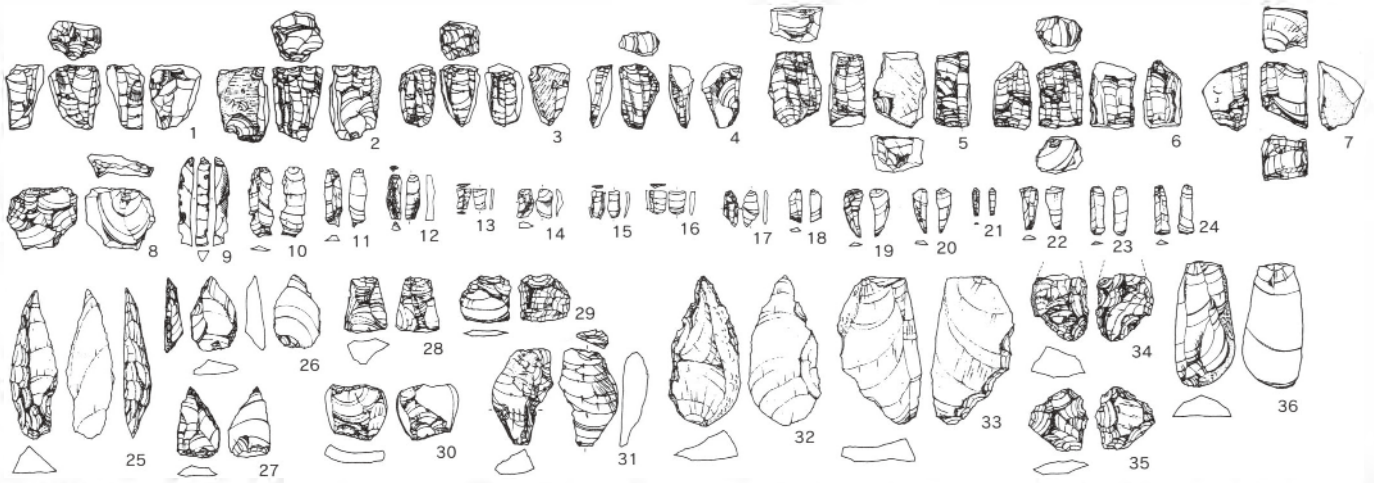
第6文化層　1～23：ナイフ形石器、24・25：掻器、26～28：彫刻刀形石器、29：削器、30～33：楔形石器、34～37：使用痕のある剥片、38・39：石核
（1～12・24・25・27・30・33～37・39：泥岩、13～15・31：黒曜石、16・17・29・32・38：チャート、18～20・26：メノウ、21・28：凝灰質泥岩、22：凝灰岩、23：砂岩）



第7文化層　1～6：尖頭器、7～19：ナイフ形石器、20：楔形石器、21・22：掻器、23～25：削器、26：二次加工のある剥片、27：使用痕のある剥片、28：石核
（1・2・16：黒曜石、3・4・13・14・17・20・22：チャート、5：メノウ、6・19・26：粘板岩、7～12・15・18・21・23・24・25・27～29：泥岩、）

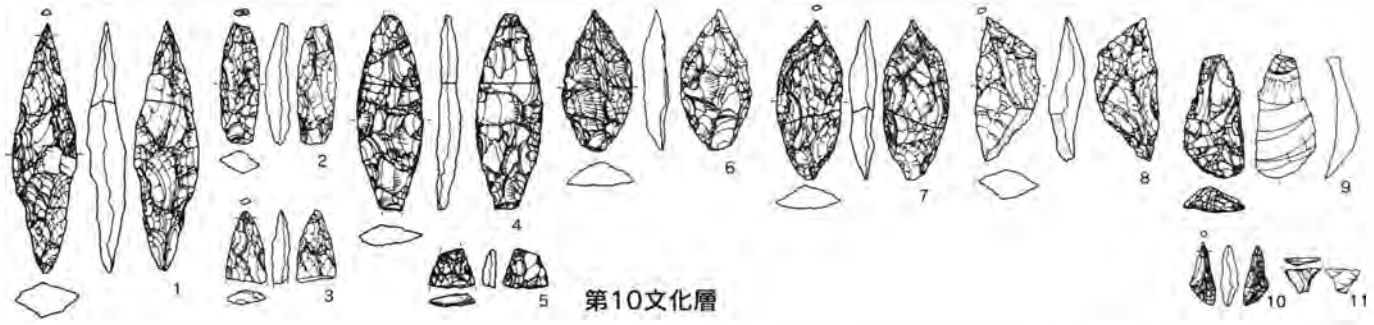


第8文化層　1～3：尖頭器、4～6：ナイフ形石器、7・8：掻器、9～14：彫刻刀形石器、15・16：削片、17・18：剥片（1・2・4～18：泥岩、3：黒色ガラス質安山岩）



第9文化層

1～7：細石刃石核、8：打面再生剥片、9～24：細石刃、25～27：ナイフ形石器、28～30：模形石器、31：削器、32～35：二次加工のある剥片、36：使用痕のある剥片
（1～4·9～17·31：黒曜石、5·6·8·18～24·28～30·34·35：チャート、7·26·27·36：粘板岩、25·32·33：安山岩）



第10文化層

1～8：尖頭器、9：掻器、10：石錐、11：削器（1～3·7·8·10·11：黒色ガラス質安山岩、4～6：泥岩、9：チャート）

分布図番号：6

白井第1遺跡

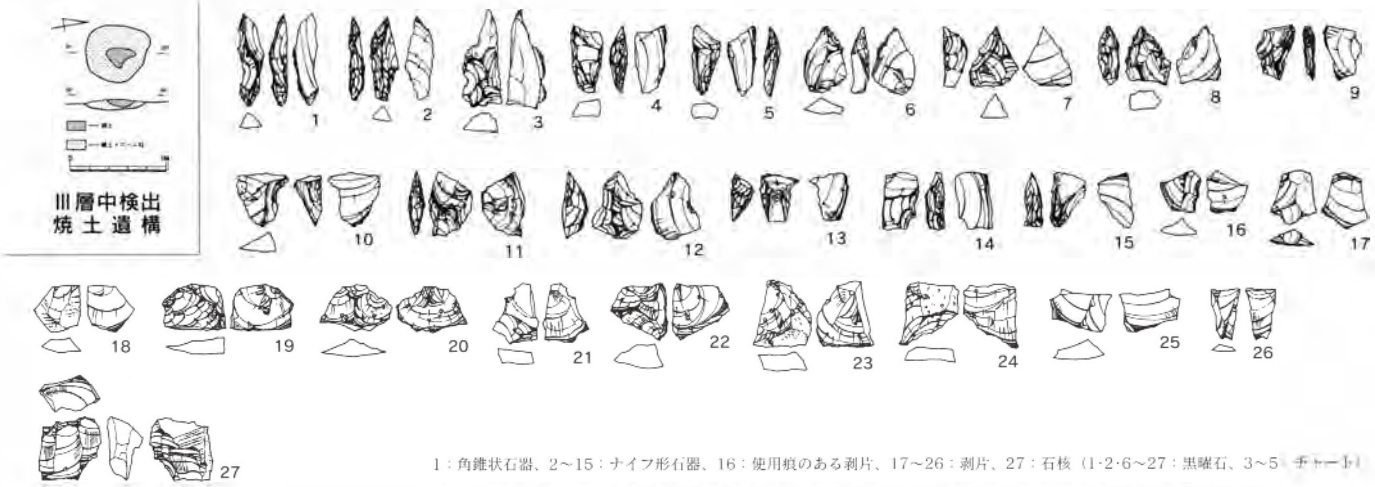
白井市復字居向〔神崎川水系〕

概要　遺跡は神崎川の支流から分かれる小支谷により開析された、北東方向へとのびる標高約22mの舌状台地先端部に位置する。計9ブロックから1,900点をこえる石器が検出されている。これらのブロックは出土層位及び内容から015·025～028ブロック（Ⅸ層）、006ブロック（Ⅳ層下部）、012ブロック（Ⅲ層下部）に分けることができるが、006ブロック以外はいずれも小規模で、また021・022ブロックについても内容が不明確で詳細な時期比定を行うことができない状況である。ここでは最も資料の充実している006ブロックと焼土遺構について掲載を行ったが、しかし焼土遺構についても所属時期については明確ではない。

006ブロック〔印旛Ⅵ期〕

総計1,605点が検出されており、石器組成は角錐状石器1点、ナイフ形石器14点、使用痕のある剥片1点、石核1点、剥片・砕片1,568点、礫20点である。組成の中心となるナイフ形石器は切出形を呈するものが多く、剥片剥離技術はこれらの素材である横長剥片剥離技術が主体である。石材は黒曜石とチャートのみであるが、約8割を黒曜石が占めている。

〔◎参考文献：鈴木定明他1978、田村隆・橋本勝雄1984　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘〕



1：角錐状石器、2～15：ナイフ形石器、16：使用痕のある剥片、17～26：剥片、27：石核（1·2·6～27：黒曜石、3～5：チャート）

分布図番号：9

一本桜南遺跡

白井市十余一字一本桜［神崎川水系］

概要　遺跡は印旛沼に流入する神崎川の支流によって開析された、西に向かってのびる標高約23mの台地南側の緩斜面部に位置する。計31カ所のブロックから4,300点以上にも及ぶ石器が検出され、これらは第1文化層（Ⅸ層上部）、第2文化層（Ⅶ層下部）、第3文化層（Ⅶ層上部）、第4文化層（Ⅵ層）、第5文化層（Ⅴ層）、第6文化層（Ⅳ層下部）、第7文化層（Ⅳ層上部）、第8文化層（Ⅲ層下部）、第9文化層（Ⅲ層中部）、第10文化層（Ⅲ層上部）に分けられる。この中でも特にＡＴから上の文化層については、点数の多寡はあるものの良好な内容を示し、石器の変遷を明らかにする上での重要な指標になるものと考えられる。

第4文化層［印旛Ⅴ期］

計2ブロックが見られるが、総数は12点と少ない。石器組成はナイフ形石器（4点）、石核、剥片・砕片・礫である。ナイフ形石器は中型石刃を素材としたものである。点数が少ないため剥片剥離技術の詳細は明らかではないが、石刃技法と横長剥片剥離技術が認められる。石材は黒色ガラス質安山岩、黒曜石、珪質頁岩、流紋岩、凝灰岩と多種である。

第5文化層［印旛Ⅵ期］

計2ブロックから総数65点の石器が検出されている。石器組成はナイフ形石器（7点）、石核、剥片・砕片、礫である。ナイフ形石器には切出形ナイフ形石器の他に国府型ナイフ形石器に類似するものが認められ注目される。しかし本遺跡内で行われている剥片剥離技術には瀬戸内技法に基づくものは認められず、不定形剥片の作出が多く見られる。おそらく国府型ナイフ形石器は石器単体での搬入品であったと考えられる。石材は珪質頁岩を中心に、黒曜石、頁岩、メノウ、凝灰岩等が用いられている。

第6文化層［印旛Ⅵ期］

計8ブロックから総数543点の石器が検出されている。石器組成はナイフ形石器（2点）、掻器（1点）、削器（2点）、二次加工のある剥片、石核、剥片・砕片、敲石、礫である。ナイフ形石器は切出形を呈する。削器は円形のもので、あるいは掻器としての機能を有していた可能性も考えられる。剥片剥離技術は打面・作業面の転位を頻繁に行って横長・不定形剥片を作出するものが主体を占める。石材はその大半を黒曜石が占め、その他珪質頁岩、黒色ガラス質安山岩、頁岩、凝灰岩、メノウなどが客体的に存在している。

第7文化層［印旛Ⅶ期2群］

1カ所のブロックから総数252点が検出されている。石器組成は尖頭器（3点）、ナイフ形石器（4点）、削器（3点）、彫刻刀形石器（1点）、小型石刃（10点・報告書中は削片）、剥片素材石核（1点・報告書中は彫刻刀形石器）、二次加工のある剥片、石核、剥片・砕片、礫である。ナイフ形石器には石刃を素材とした細身のものと横長剥片を素材とした幅広のものとの2者が認められる。尖頭器は3点全て欠損品のため全体形状は明らかにできないが、片面加工の尖頭器である。剥片剥離技術は単設打面で打面調整・頭部調整を頻繁に行った石刃技法を主体とし、剥片素材の石核から小型石刃を作出する特徴的な技法も認められる。石材は頁岩を主体とし、次に黒曜石が多用される。その他はチャート、流紋岩、砂岩が若干見られるのみである。

第8文化層［印旛Ⅶ期3群］

計4ブロックから2,819点が検出されているが、このうち約90%以上が礫・焼礫であり各ブロックにおいて比較的規模の大きな礫群を形成している。石器組成は尖頭器（1点）、掻器（2点）、削器（2点）、彫刻刀形石器（2点）、削片（10点）、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、小型石刃、剥片・砕片、礫である。尖頭器は両面加工で樋状剥離を有する左右非対称の東内野型尖頭器である。また尖頭器の樋状剥離を行った際に作出される削片も検出されており、本来はさらに多くの尖頭器が組成に加わるものと考えられる。剥片剥離技術は石刃技法が主体になると考えられるが、横長剥片剥離技術も存在していたものと思われる。石材は剥片石器には頁岩を主体とし、他に黒曜石等が使用され、礫群には安山岩、石英斑岩、砂岩等が用いられている。

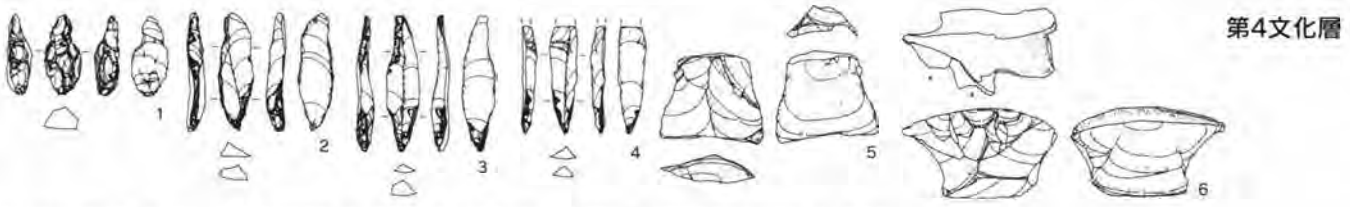
第9文化層［印旛Ⅸb期］

計3ブロックから総数30点のみの検出である。石器組成は尖頭器（3点）、二次加工のある剥片、石核、剥片・砕片、礫であり、ナイフ形石器を組成に含まない一群と考えられる。尖頭器には両面加工と片面加工が認められ、片面加工の素材には石刃が用いられる。出土点数が少ないため剥片剥離技術については不明。石材は黒色ガラス質安山岩、チャート、頁岩、流紋岩、凝灰岩他と多様である。

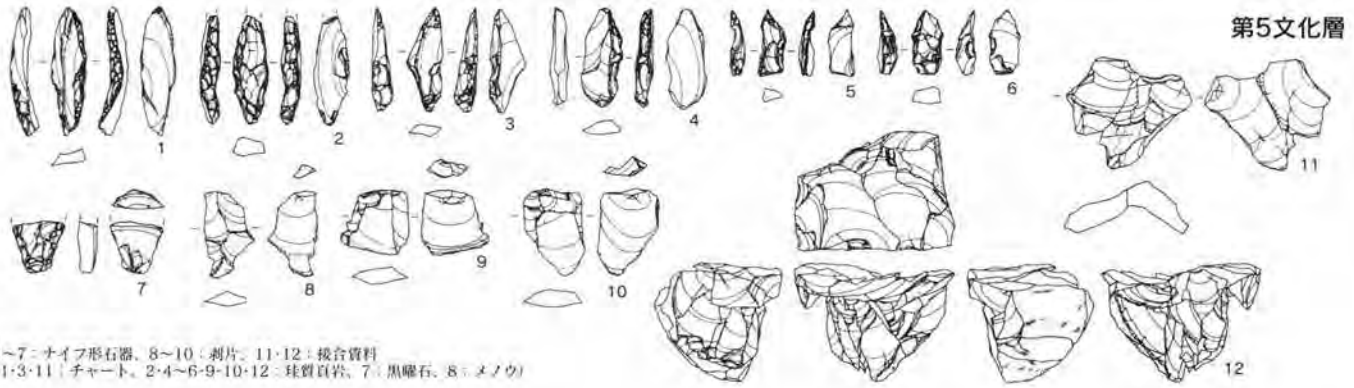
第10文化層［印旛Ⅹ期1群］

計3ブロックから総数181点が検出されている。石器組成はナイフ形石器（1点）、細石刃石核（13点）、細石刃（3点）、削器（3点）、二次加工のある剥片、石核、剥片・砕片、礫である。細石刃石核は円錐形・稜柱形を呈する野岳・休場型のものである。細石刃技法の他にも横長剥片剥離技術が認められ、削器等の剥片石器の製作に用いられている。細石刃石核には1点のみ珪質頁岩のものが見られるのみで、残りは全て黒曜石製である。剥片類もやはり黒曜石が主体を占め、その他は黒色ガラス質安山岩、頁岩、凝灰岩、メノウ等が使用されている。

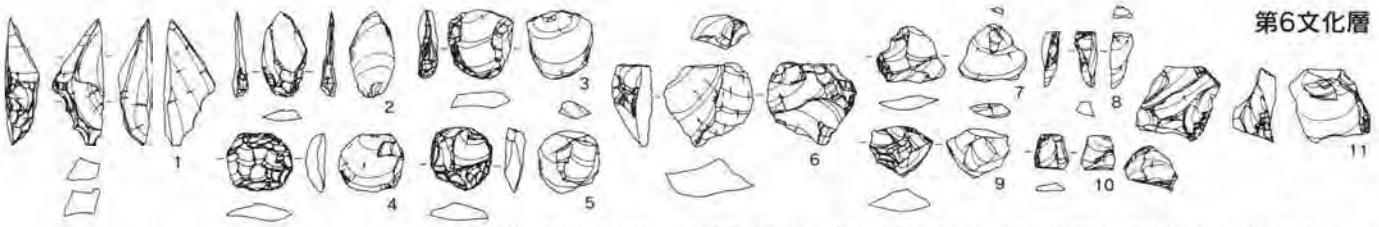
［◎参考文献：落合章雄・雨宮龍太郎1998　◎保管場所：千葉県文化財センター］



1～4：ナイフ形石器、5：剥片、6：石核接合資料（1：黒曜石、2・3：珪質頁岩、4：流紋岩、5：黒色ガラス質安山岩、6：凝灰岩）



1～7：ナイフ形石器、8～10：剥片、11・12：接合資料
（1・3・11：チャート、2・4～6・9・10・12：珪質頁岩、7：黒曜石、8：メノウ）



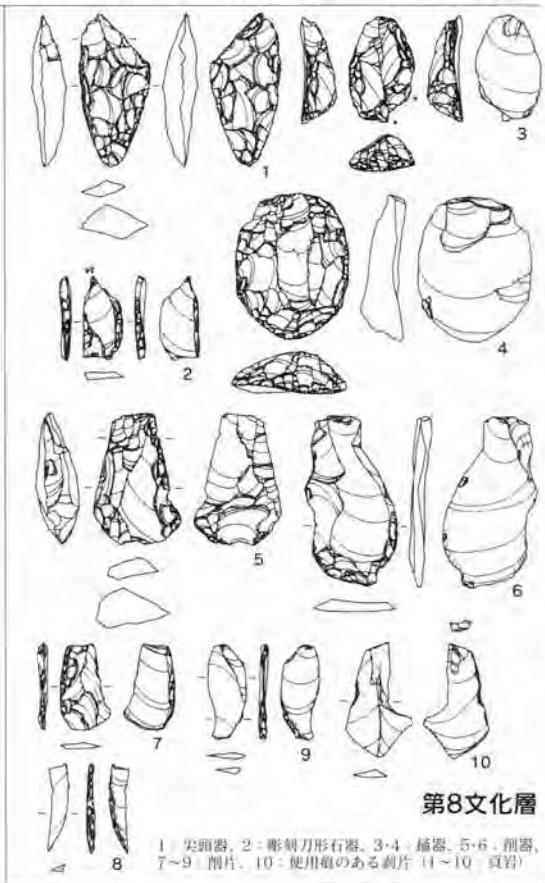
第6文化層

1-2：ナイフ形石器，3：掻器，4-5：削器，6～10：二次加工のある剥片，11：石核（1-4～11：黒曜石，2：メノウ，3：珪質頁岩）



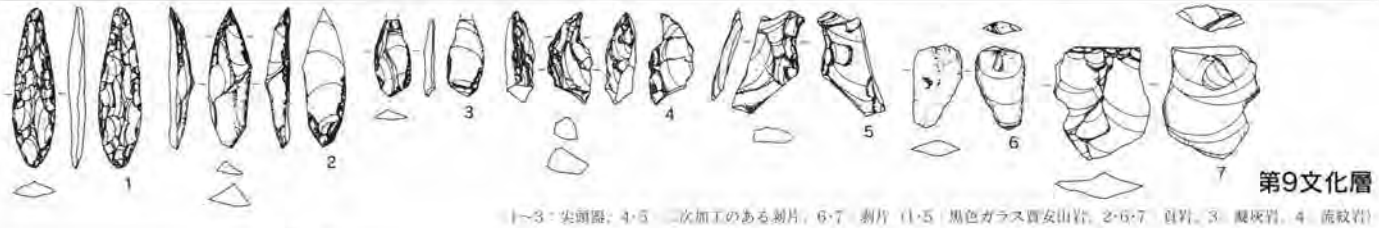
第7文化層

1～3：尖頭器，4～7：ナイフ形石器，8：彫刻刀形石器，9：剥片素材石核，10～17：小型石刃，18～22：二次加工のある剥片，23～27：剥片（1～4・21：黒曜石，5～20・22～27：頁岩）



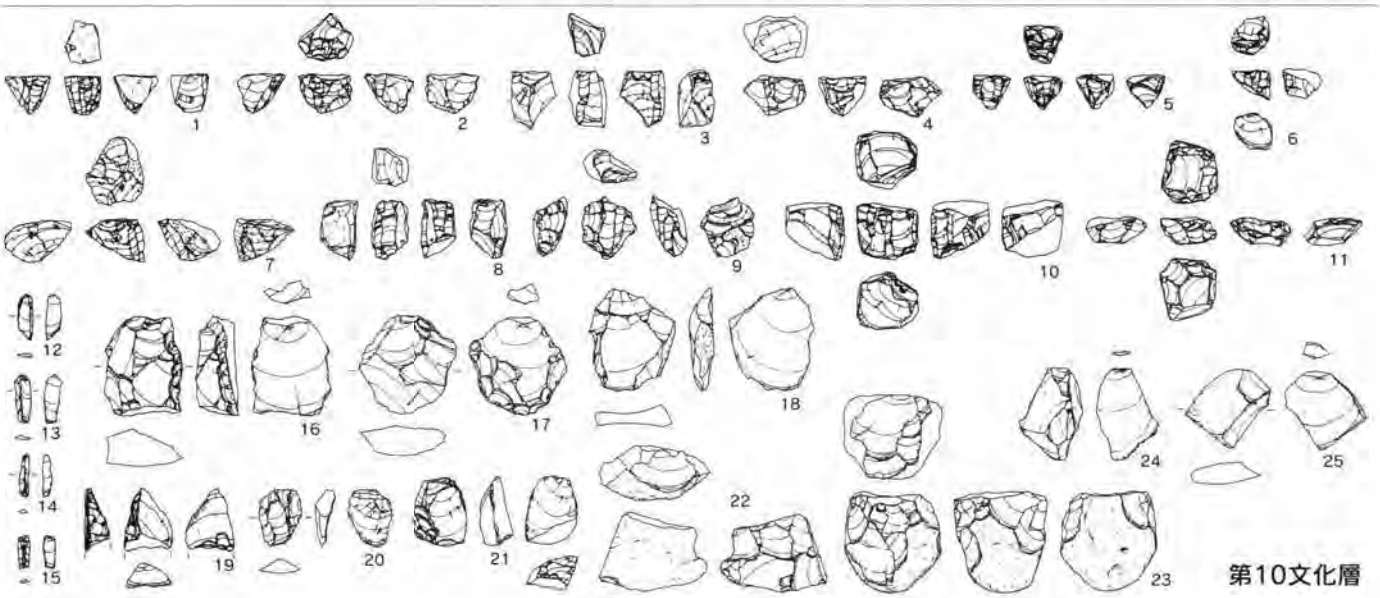
第8文化層

1：尖頭器，2：彫刻刀形石器，3・4：掻器，5・6：削器，7～9：削片，10：使用痕のある剥片（1～10：頁岩）



第9文化層

1～3：尖頭器；4・5：二次加工のある剥片，6・7：剥片（1・5：黒色ガラス質安山岩，2・6・7：頁岩，3：凝灰岩，4：流紋岩）



第10文化層

1～11：細石刃石核，12～15：細石刃，16～18：削器，19：ナイフ形石器，20・21：二次加工のある剥片，22・23：石核，24・25：剥片（1～10・12～15・19～21：黒曜石，11・16・18～22～25：珪質頁岩，17：メノウ）

分布図番号：34

木苅峠遺跡

印西市浦幡新田字木苅峠〔手賀沼水系〕

概要　本遺跡は県内における旧石器時代遺跡の組織的大規模調査の契機となったばかりではなく、層位的な出土例から編年指標が示され、また様々な遺物集中地点のあり方から空間的・構造的研究の実践の場ともなった学史に残る著名な遺跡である。遺跡は北に手賀沼低地をのぞみ、手賀沼からのびる東西に分け入った小支谷谷頭が集束する標高22～25mの台地上に立地する。25カ所のブロック（ユニット）から総数6,000点弱が検出されており、これらは下層石器群（Ⅵ層）、中層石器群（Ⅳ下・Ⅴ層）、上層石器群（Ⅲ層）の3文化層に分けることができる。この中でも下層・上層の石器群が良好な資料であるが、特に上層石器群に関しては有樋尖頭器を含む大規模な石器群として注目される。

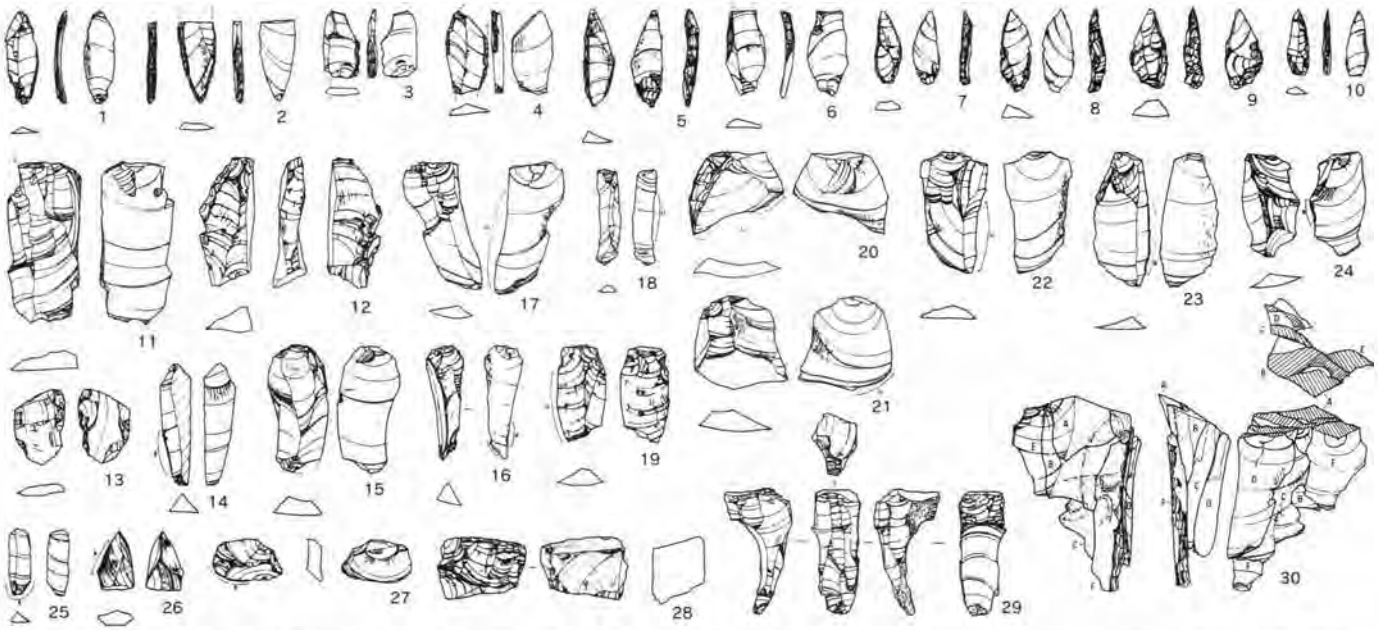
下層石器群〔印旛Ⅴ期〕

計6ブロック（ユニット）から総数973点の石器が検出されている。石器組成はナイフ形石器12点、掻器1点、削器3点、彫刻刀形石器1点、石錐1点、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、剥片・砕片である。ナイフ形石器は中～小型で、石刃素材の二側縁加工のものが主体を占める。剥片剥離技術は石刃技法が主体を占め、両設打面の石核から打面調整・頭部調整を行いながら作業が進行するものである。またこの他にも横長剥片剥離技術も見られている。石材は珪質頁岩、黒曜石を主体とするが、ブロック（ユニット）により主体となる石材に違いが見られている。この他に頁岩、メノウ、チャート、凝灰岩等が使用されているがごくわずかである。

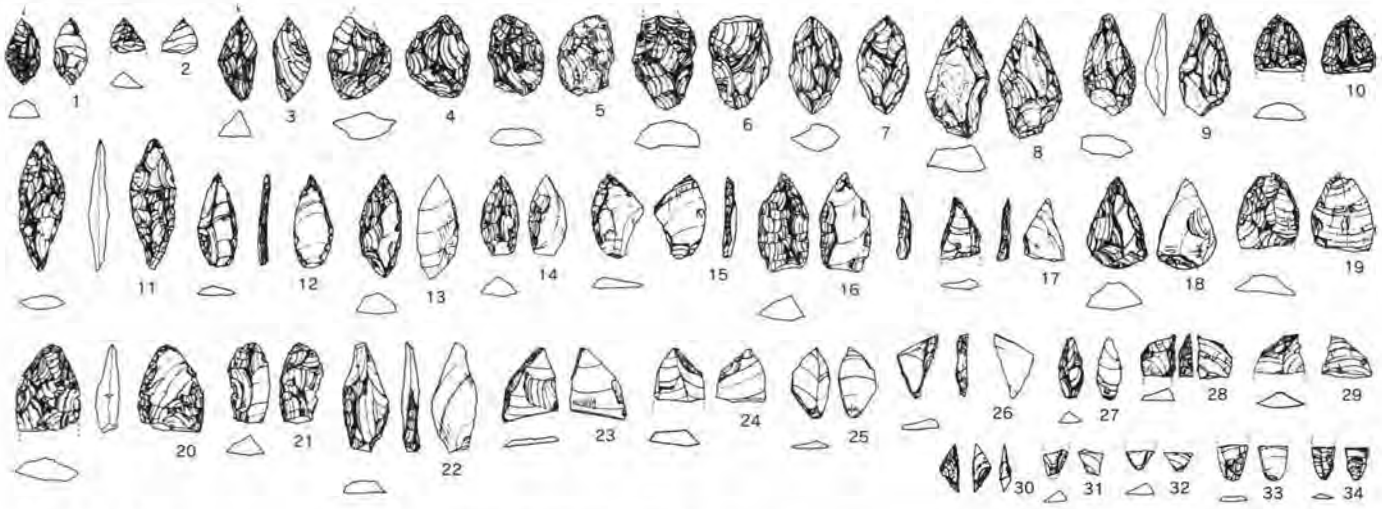
上層石器群〔印旛Ⅸa期〕

計18ブロック（ユニット）から総数4,821点の石器が検出されている。ブロック（ユニット）により6～2,631点と点数の多寡が認められるが、小規模なものが多い。第9ブロック（ユニット）からは小規模な礫群も検出されている。石器組成はナイフ形石器18点、尖頭器24点、掻器4点、削器10点、彫刻刀形石器2点、石錐1点、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、小型石刃、小型石刃石核、削片、石核、剥片・砕片、礫である。ナイフ形石器は中～小型の二側縁加工のものが主体となるが、切出形を呈するものもわずかに認められる。尖頭器は樋状剥離を有する男女倉型尖頭器の他、両面加工、半両面加工、周縁加工、片面加工と各種が存在しており、中～小型のものである。剥片剥離技術は石刃技法を主体とするが、横長剥片剥離技術もやや多く認められる。石材は挟雑物の多い黒曜石が大半を占め、次に珪質頁岩が多い。他に安山岩、チャート、凝灰岩が認められるが少数である。

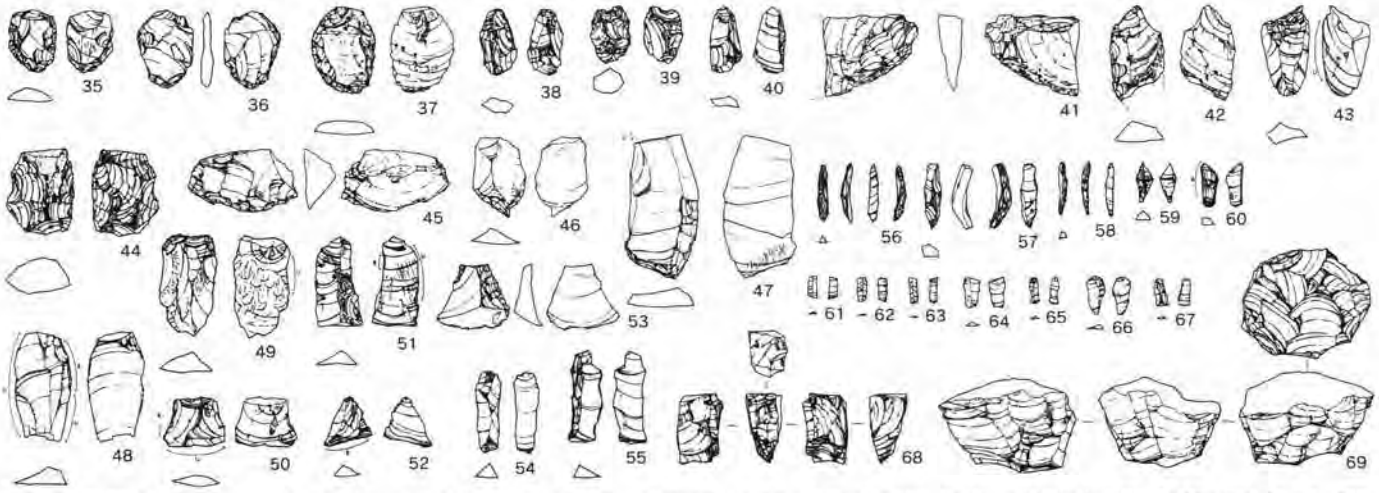
〔◎参考文献：白石竹雄他1975、田村隆2000c　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘〕



下層石器群　1～10：ナイフ形石器、11：彫刻刀形石器、12～14：削器、15：掻器、16：石錐、19～22：使用痕のある剥片、23～27：二次加工のある剥片、28・29：石核、30：接合資料
（1～3・13～18・20～24・27・30：珪質頁岩、4：メノウ、5～10・12・19・25・26・28：黒曜石、11・29：チャート）



上層石器群①　1～2：尖頭器、22～34：ナイフ形石器
（1～6・10・17・19・20・27～30・34：黒曜石、7：安山岩、8・9・11・13・14・16・18・21・22チャート、11・12・15・23～26・31～33：珪質頁岩）



上層石器群②

35～37：掻器，38～45：削器，46：石錐，47：鳥羽刃形石器，48～51：使用痕のある剥片，52･53：二次加工のある剥片，54･55：石刃，56～60：削片，61～67：小型石刃，68：小型石刃石核，69：石核
（35･36･45･46･53･54･69：チャート，37～44･48･50～52･55～57･59～68：黒曜石，47･58：珪質頁岩，49：メノウ）

分布図番号：35

地国穴台遺跡

印西市草深字地国穴台〔手繰川水系〕

概要　遺跡は北印旛沼に向かって開析する支谷から西側に樹枝状にのびた、通称地国谷と呼ばれる小支谷の谷頭部分、標高約26mの北側台地上に立地する。計13地点（単独出土4地点含む）15ブロックから総計800点以上の出土が見られている。この中でA51地点、E01地点が良好な内容を示しており、ここではこの2地点の掲載を行った。

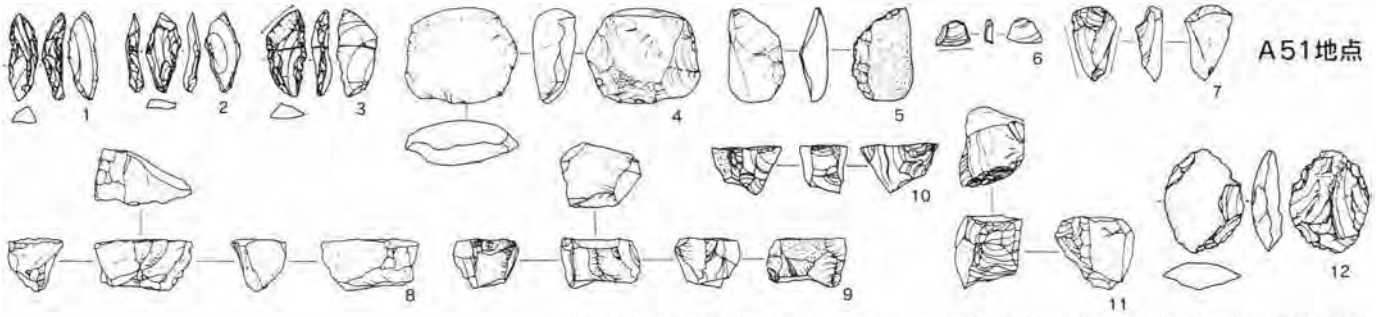
A51地点〔印旛Ⅵ期〕

Ⅲ層下部～Ⅳ・Ⅴ層にかけて計2ブロック、総数92点の石器が検出されているが、このうち48点が礫・礫片であり散漫な礫群が構成されていると考えられる。石器組成は角錐状石器1点、ナイフ形石器2点、削器2点、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、剥片・砕片、礫・礫片である。ナイフ形石器は横長剥片を素材とした切出形を呈するものである。剥片剥離技術は横長剥片剥離技術が中心で、円盤状・サイコロ状の石核が見られている。石材はチャートを中心に、粘板岩、珪質頁岩、頁岩、メノウ、珪質粘板岩等多様である。

E01地点〔印旛Ⅷ期〕

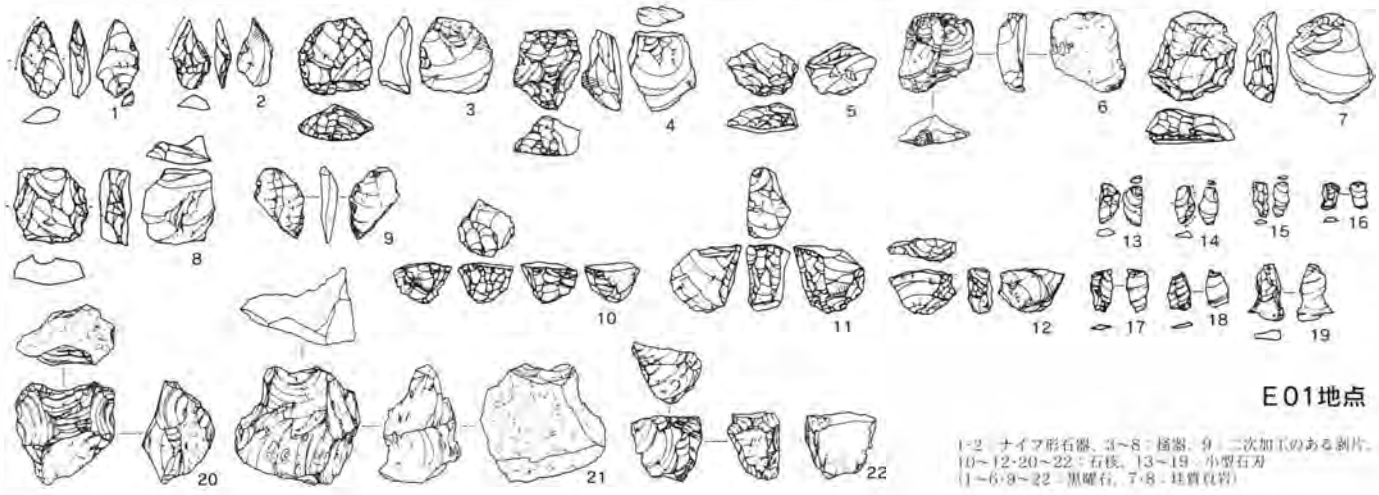
Ⅲ層下部～Ⅳ・Ⅴ層にかけて計2ブロック、総数216点の石器が検出されている。石器組成はナイフ形石器2点、掻器6点、二次加工のある剥片1点、石核、小型石刃、剥片・砕片、敲石である。ナイフ形石器は幾何形を呈するもので、小型の横長もしくは幅広の縦長剥片を素材とする。掻器には拇指状の円形掻器が含まれる。剥片剥離技術には細石刃様の小型石核から小型石刃を連続的に剥離するものが認められ、本石器群を特徴づける。この他に横長・不定形剥片を剥離したサイコロ状・円盤状の石核も見られている。石材は黒曜石が9割以上を占め、他に珪質頁岩、チャート、粘板岩、頁岩、凝灰岩等が若干使用されている。

〔◎参考文献：白石竹雄他1973、田村隆2000b　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘〕



A51地点

1：角錐状石器，2･3：ナイフ形石器，4･5：削器，6：二次加工のある剥片，7：使用痕のある剥片，8～12：石核
（1：頁岩，2･3･6～8･10･11：チャート，4･5･9：粘板岩，12：黒色ガラス質安山岩）



E01地点

1･2：ナイフ形石器，3～8：掻器，9：二次加工のある剥片，10～12･20～22：石核，13～19：小型石刃
（1～6･9～22：黒曜石，7･8：珪質頁岩）

分布図番号：41

船尾白幡遺跡

印西市船尾字白幡〔神崎川水系〕

層位　Ⅲ層
時期　印旛Ⅹ期1群
概要　遺跡は神崎川から樹枝状にのびる支谷により開析された南に張り出す標高25～26mの舌状台地先端部に所在する。1ブロック，188点が検出されており、石器組成は細石刃石核7点，細石刃22点，彫刻刀形石器1点，削器1点，石錐1点，石核，剥片，砕片である。石材は全体の9割以上を黒曜石が占め，製品には全て黒曜石が使用されている。他は黒色ガラス質安山岩が12点見られるのみである。細石刃石核は野岳・休場型の範疇に収まるもので、側面三角形を呈し小型のものが多い点に特徴が見い出せる。これは当時入手困難であった黒曜石を効率よく，かつ徹底的に使い込むような技術体系のもとで細石刃生産が行われた結果と考えられる。
〔◎参考文献：野村幸希他1976　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘他〕



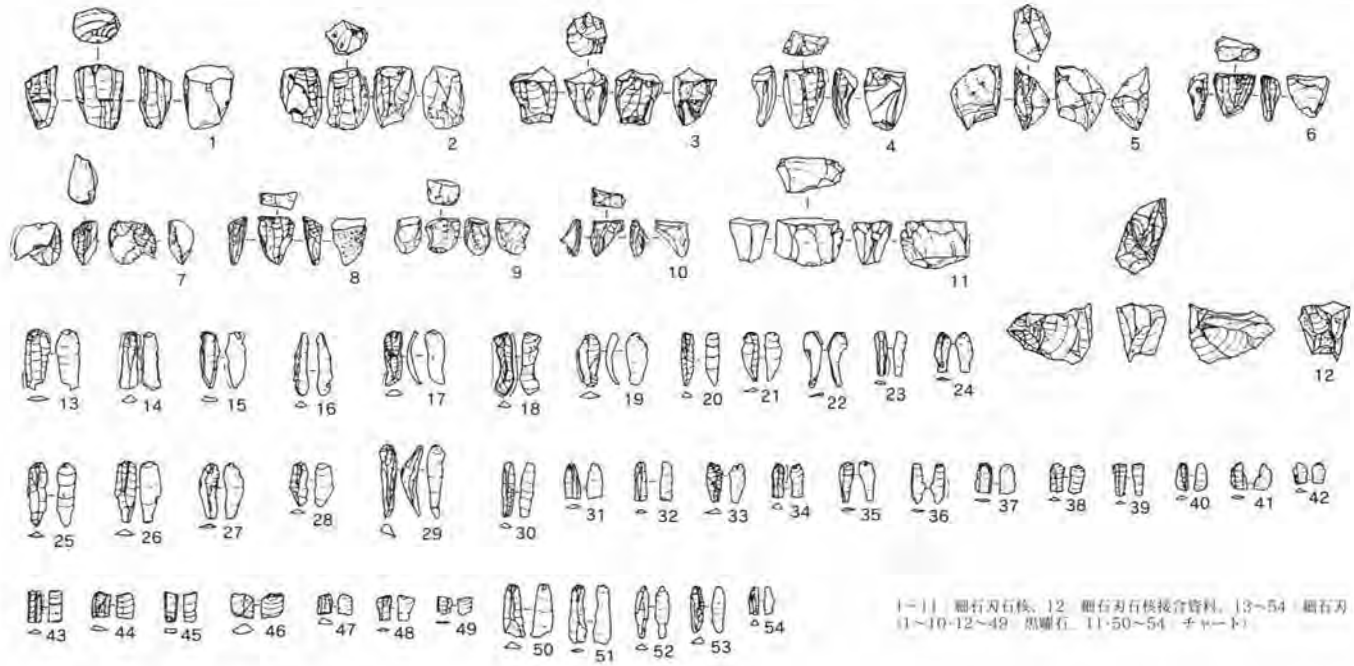
1：彫刻刀形石器，2：削器，3：石錐，4～10：細石刃石核，11～32：細石刃（1～32：黒曜石）

分布図番号：59

向原遺跡

印旛郡本埜村竜腹寺字向原〔印旛沼水系〕

概要　遺跡は北印旛沼西側の標高26mの台地上に位置し、北から入り込む谷津最奥部西岸の急崖に接している。石器は計5地点から200点以上の出土が見られているが、これらは縄文時代の石器と混在しており、旧石器時代の正確な石器数を把握することは困難な状況にある。これらの地点は出土層位及び特徴的な石器から第1文化層（Ⅲ層上部、大型の尖頭器を主体とする石器群）、第2文化層（Ⅲ層、細石刃を主体とする石器群）、第3文化層（Ⅳ層上部、黒色ガラス質安山岩製の切出形ナイフ形石器を主体とする石器群）の3枚の文化層に分けることができ，この中でも第2文化層は細石刃・細石刃石核がまとまった好資料になる。
第2文化層〔印旛Ⅹ期1群〕
A44、D00の2地点から100点以上の出土が見られているが，上述した理由から正確な数をとらえることは困難である。ここでは細石刃石器群に関連する資料のみを選択して掲載した。細石刃石核14点，作業面再生剥片1点，細石刃59点が検出されており、石材は細石刃石核にチャート製1点、流紋岩製1点、細石刃にチャート製8点のものが見られる以外は全て黒曜石が使用されている。細石刃石核は野岳・休場型のもので角錐形や稜柱形を呈し、作業面再生工程を示す接合資料も認められている。細石刃には折断により分割されたものが多く含まれる。
〔◎参考文献：白石竹雄他1973　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘他〕



1～11：細石刃石核，12：細石刃石核接合資料，13～54：細石刃（1～10・12～49：黒曜石，11・50～54：チャート）

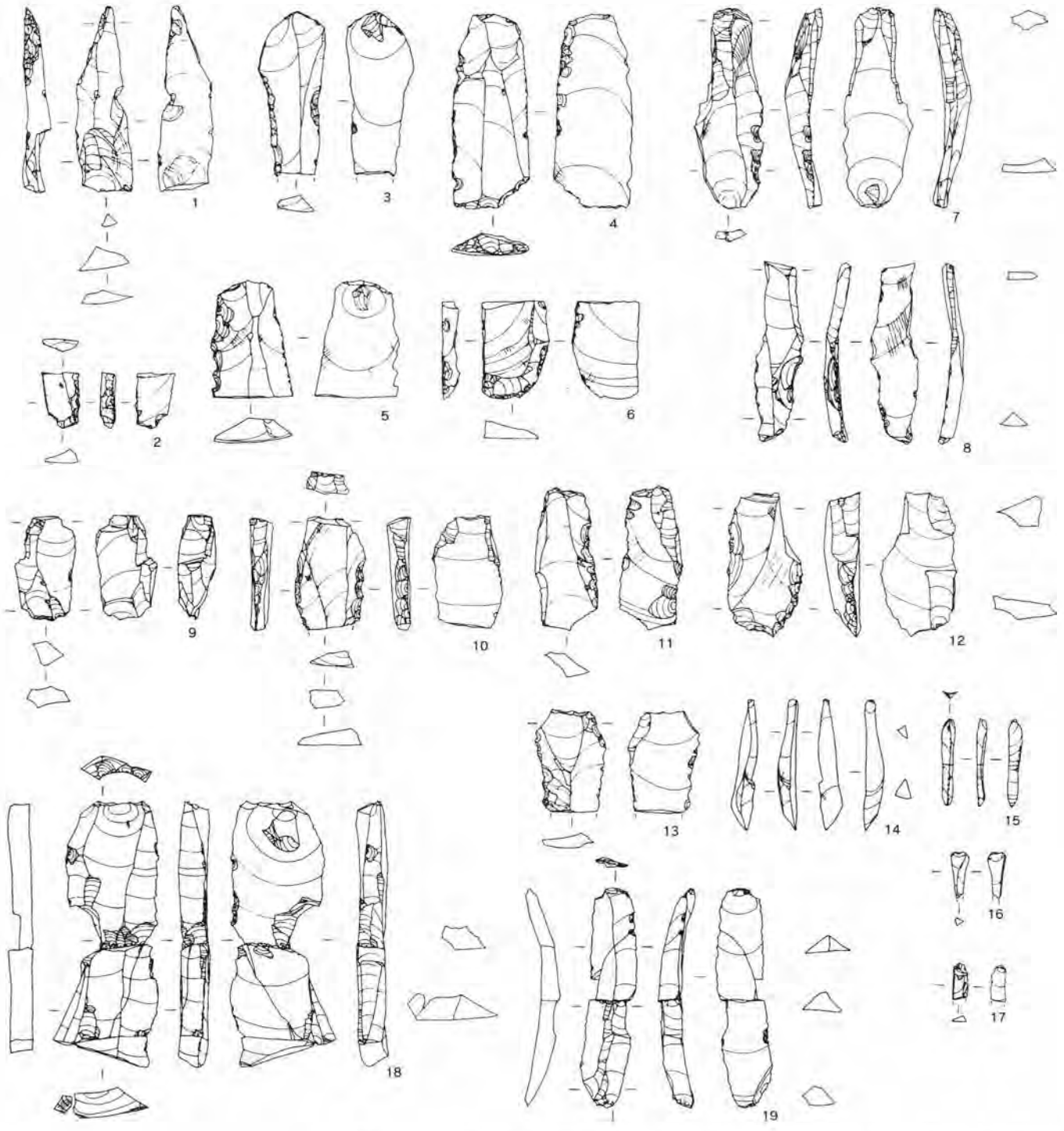
分布図番号：56

宮内遺跡

印旛郡本埜村中根字宮内〔印旛沼水系〕

層位　Ⅶ層
時期　印旛Ⅳ期2群
概要　遺跡は北印旛沼の西方に位置し、北東側に低湿地帯を望む標高約29mの舌状台地先端部に所在する。1ブロック、計134点の石器が南向きの緩斜面部より検出されており、ブロックに重なるように炭化物集中地点も確認されている。石器組成はナイフ形石器2点、削器4点、楔形石器1点、石刃素材石核（報告書中では彫刻刀形石器）13点、削片（石刃素材石核より作出された小型石刃）19点、石核2点、剥片69点、砕片24点である。石刃素材石核は搬入された中～大型の石刃をそのままもしくは分割・折断したものを素材とし、その素材縁辺から小型石刃の作出を行うもので、これらはいわゆる「下総型石刃再生技法」として特徴づけられるものである。石材は東北地方産の良質な珪質頁岩が約9割を占め、この他には珪質流紋岩、黒曜石、流紋岩、黒色ガラス質安山岩、凝灰岩が若干数使用されている。特に下総型石刃再生技法による作業は珪質頁岩でのみ行われており、本技術と珪質頁岩との強い結びつきを示している。

〔◎参考文献：内田理彦・吉林昌寿1995　◎保管場所：本埜村教育委員会〕



1-2：ナイフ形石器，3～6：削器，7～13：石刃素材石核，14～17：削片，18-19：接合資料（1-3～19：珪質頁岩，2：珪質流紋岩）
（第Ⅴ章表紙にカラー図版（図83）掲載）

分布図番号：57

瀧水寺裏遺跡

印旛郡本埜村滝字宮前〔印旛沼水系〕

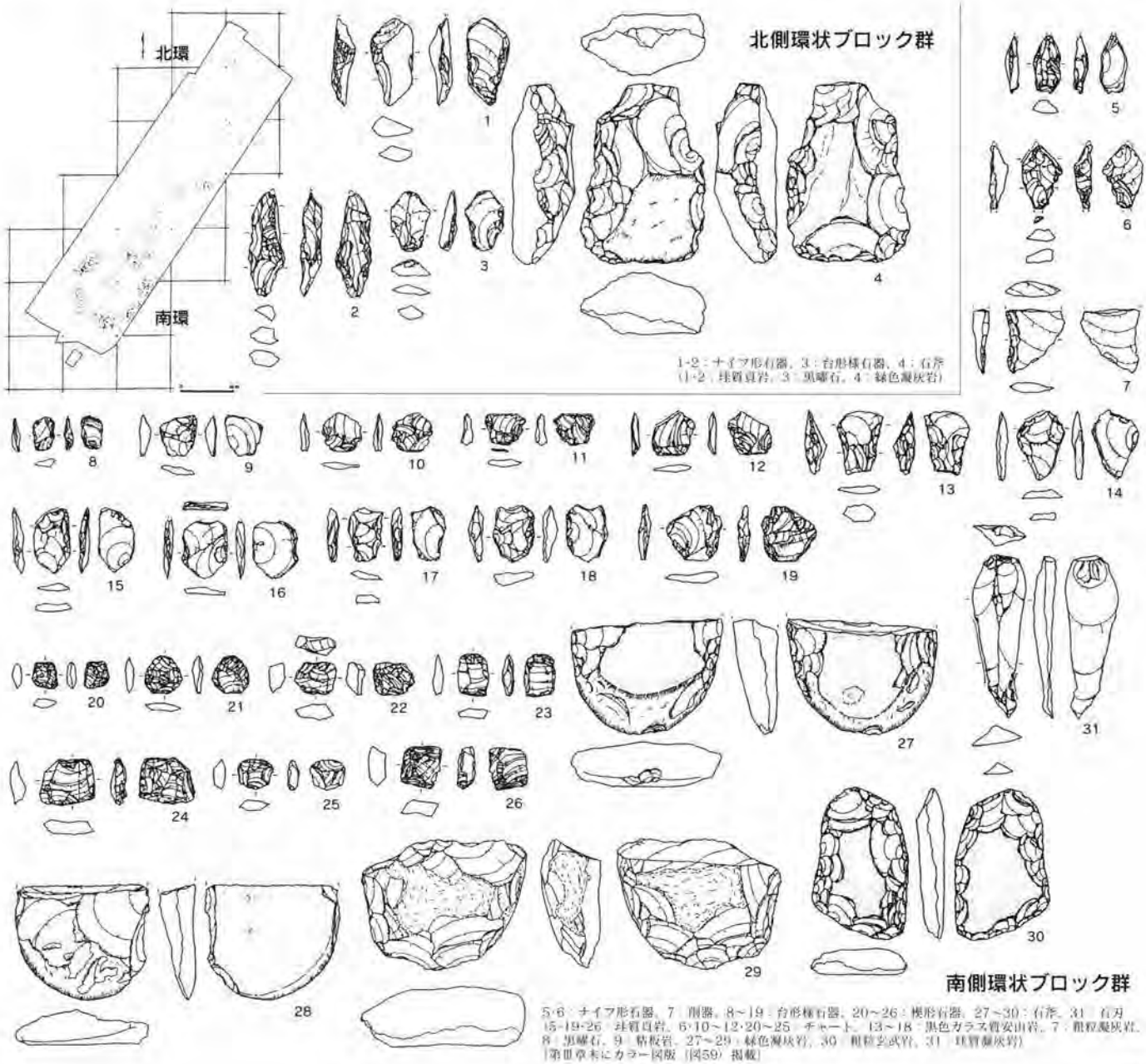
層位　Ⅸ層上部
時期　印旛Ⅲb期
概要　遺跡は北印旛沼に注ぎ込む大小河川により複雑に形作られた谷津奥に位置し、標高25～29mの台地上に所在する。旧石器時代の遺物は2カ所の調査区から検出されているが、大半は第1調査区のもので、第2調査区は単独出土にとどまる。第1調査区からは2基の環状ブロック群（北側環状ブロック群・南側環状ブロック群）が検出され、総計594点の石器が出土している。

北側環状ブロック群　48点で構成される散漫な分布を示す環状ブロック群。規模は南北14.9m、東西14.6mを測る。石器組成はナイフ形石器2点、石斧4点、台形様石器1点、使用痕のある剥片4点、折断剥片1点、石斧調整剥片1点、石核5点、剥片・砕片30点で、珪質頁岩を中心に黒色ガラス質安山岩、トロトロ石、チャート、黒曜石、緑色凝灰岩、ホルンフェルスが使用されている。珪質頁岩の中には在地産である白滝頁岩が多用される。

南側環状ブロック群　7つのほぼ整円に展開するブロックと環状部に付随する4つのブロックとの計11ブロック，546点で構成される。環状部の規模は南北16.5m、東西（17.3）mを測る。石器組成はナイフ形石器3点、石斧13点、台形様石器20点、削器1点、使用痕のある剥片21点、二次加工のある剥片6点、楔形石器21点、石刃2点、小型石刃6点。折断剥片11点、刃部再生剥片13点、石斧調整剥片・砕片192点、石核26点。剥片・砕片207点、敲石2点、焼礫2点で、特に石斧の多さ、石斧調整関連遺物の多さが際だち、その使用及び再加工がくり返されたブロック群ととらえられる。剥片石器では台形様石器、楔形石器が多く検出されている。剥片剥離技術には多種の横長剥片剥離技術が見られ、チャートの円礫等を用いた両極剥離技術も楔形石器の製作と結びつき多用されている点が注目される。石刃技法は認められない（石刃2点は搬入品）。石材は、剥片石器には珪質頁岩（白滝頁岩を多く含む）、チャート、黒色ガラス質安山岩が、石斧関連には緑色凝灰岩、ホルンフェルス、粗粒玄武岩が中心に用いられており、その他トロトロ石、黒色頁岩、メノウ、黒曜石、珪質凝灰岩、粘板岩等多種多様な石材が用いられている。

北側・南側の両環状ブロック群には接合関係・同一母岩の分布等同時性は見られないが、石器組成・使用石材等において多くの類似箇所が認められることから、両者はかなり近しい時期に残されたものと考えることができる。

〔◎参考文献：酒井弘志・戸谷敦司2004　◎保管場所：本埜村教育委員会〕



1-2：ナイフ形石器、3：台形様石器、4：石斧（1-2：珪質頁岩、3：黒曜石、4：緑色凝灰岩）

5・6：ナイフ形石器、7：削器、8～19：台形様石器、20～26：楔形石器、27～30：石斧、31：石刃（15・19・26：珪質頁岩、6・10～12・20～25：チャート、13～18：黒色ガラス質安山岩、7：粗粒凝灰岩、8：黒曜石、9：粘板岩、27～29：緑色凝灰岩、30：粗粒玄武岩、31：珪質凝灰岩）
〔第Ⅲ章末にカラー図版（図59）掲載〕

分布図番号：61

五斗蒔遺跡

印旛郡本埜村竜腹寺字五斗蒔〔印旛沼水系〕

概要　遺跡は北印旛沼に流入する小河川により開析された、西に向かってのびる標高約27mの舌状台地上の北側縁辺部に位置する。計22ブロック。800点をこえる石器が検出されており、これらは第1文化層（Ⅸ層中位）、第2文化層（Ⅶ層上位）、第3文化層（Ⅵ層）、第4文化層（Ⅳ層下部）、第5文化層（Ⅳ層上部）、第6文化層（Ⅲ層）、第7文化層（Ⅲ層上部）の7枚の文化層に分けられる。このうち第2文化層、第4文化層、第5文化層が内容的にまとまった資料になる。

第2文化層〔印旛Ⅳ期1群〕

計7ブロックから総数262点が出土している。石器組成はナイフ形石器7点、二次加工のある剥片3点、使用痕のある剥片3点、石核13点、剥片125点、砕片94点、敲石3点、礫14点である。剥片剥離技術には石刃技法と横長剥片剥離技術の2者が認められ共存するが、ナイフ形石器には石刃のみが使用されており、素材選択の意図がうかがえる。石材には珪質頁岩、頁岩、黒色ガラス質安山岩を中心にメノウ、チャート、凝灰岩、砂岩等が使用されている。

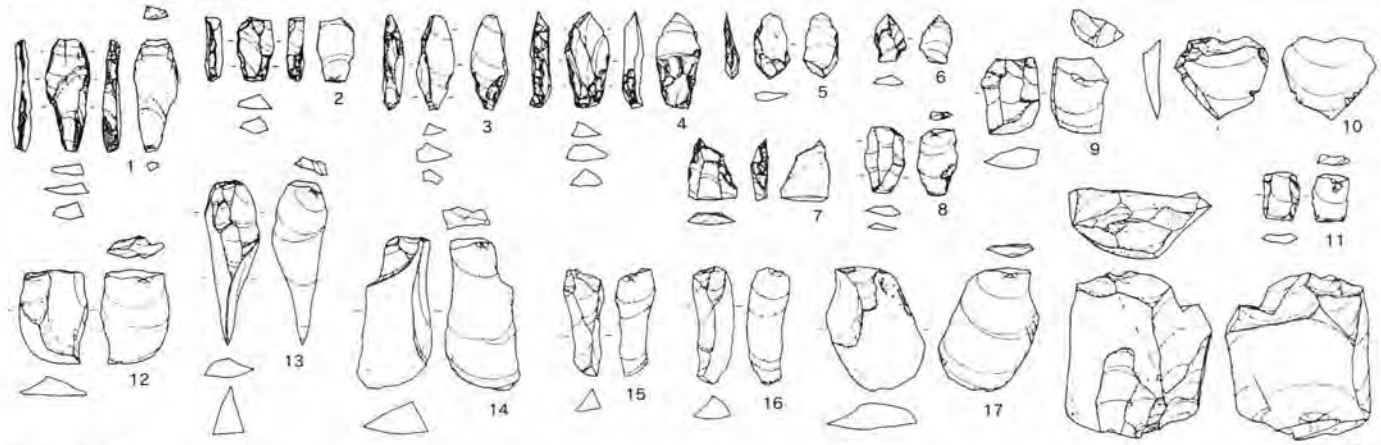
第4文化層〔印旛Ⅵ期〕

計8ブロックから総数442点が出土している。石器組成はナイフ形石器15点、削器2点、楔形石器1点、二次加工のある剥片16点、使用痕のある剥片5点、石核10点、剥片173点、砕片214点、敲石3点、礫3点である。ナイフ形石器の形態は様々で、横長剥片素材のものと縦長剥片素材のものとの2者が認められる。剥片剥離技術は打面を頻繁に転位しながら主に横長・不定形剥片（場合によっては縦長剥片）の剥離を行ったもので、作出された剥片の形状に規格性が認められない点に特徴を見出せる。石材は黒曜石、黒色ガラス質安山岩、珪質頁岩、メノウ、頁岩、チャート、流紋岩等多様であるが、第19ブロックにおいては黒曜石を集中的に用いた石器製作が行われている。

第5文化層〔印旛Ⅷ期〕

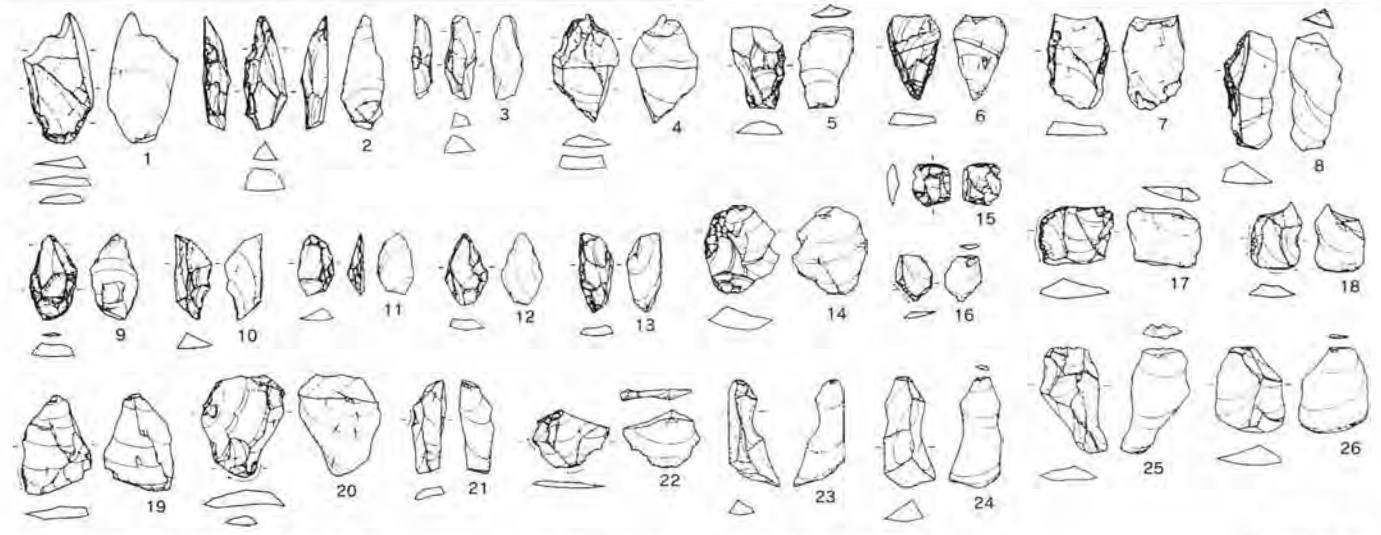
1ブロック、14点のみの出土である。ナイフ形石器2点、石核1点、剥片7点、砕片4点が検出されている。ナイフ形石器は横長剥片を素材とした小型幾何形を呈するもの。剥片剥離技術も横長・不定形剥片の剥離が中心のようであるが、規格的な素材作出の意図がうかがえる。石材は流紋岩、安山岩が使用される。

〔◎参考文献：落合章雄1993　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



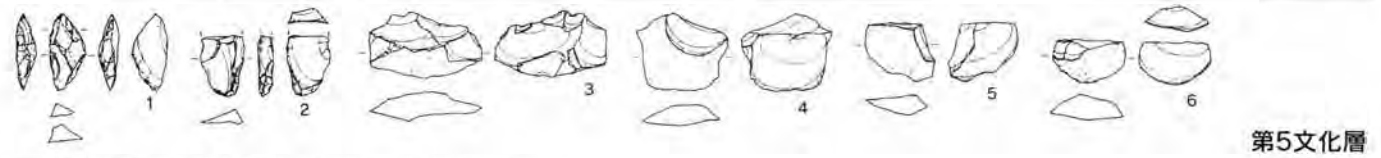
第2文化層

1～7：ナイフ形石器、8：使用痕のある剥片、9･10：二次加工のある剥片、11～17：剥片、18：石核
（1･5･9･15･16･18：黒色ガラス質安山岩、2･4･6･17：珪質頁岩、3･7･8･10･12･13：頁岩、11：メノウ、14：凝灰岩）



1～13：ナイフ形石器、14：削器、15：楔形石器、16～18：二次加工のある剥片、19～22：使用痕のある剥片、23～26：剥片
（1･5･13･14･26：珪質頁岩、2：頁岩、3･11･12･24･25：メノウ、4･23：黒色ガラス質安山岩、6～10･15～22：黒曜石）

第4文化層



1･2：ナイフ形石器、3：石核、4～6：剥片（1･6：安山岩、2～5：流紋岩）

第5文化層

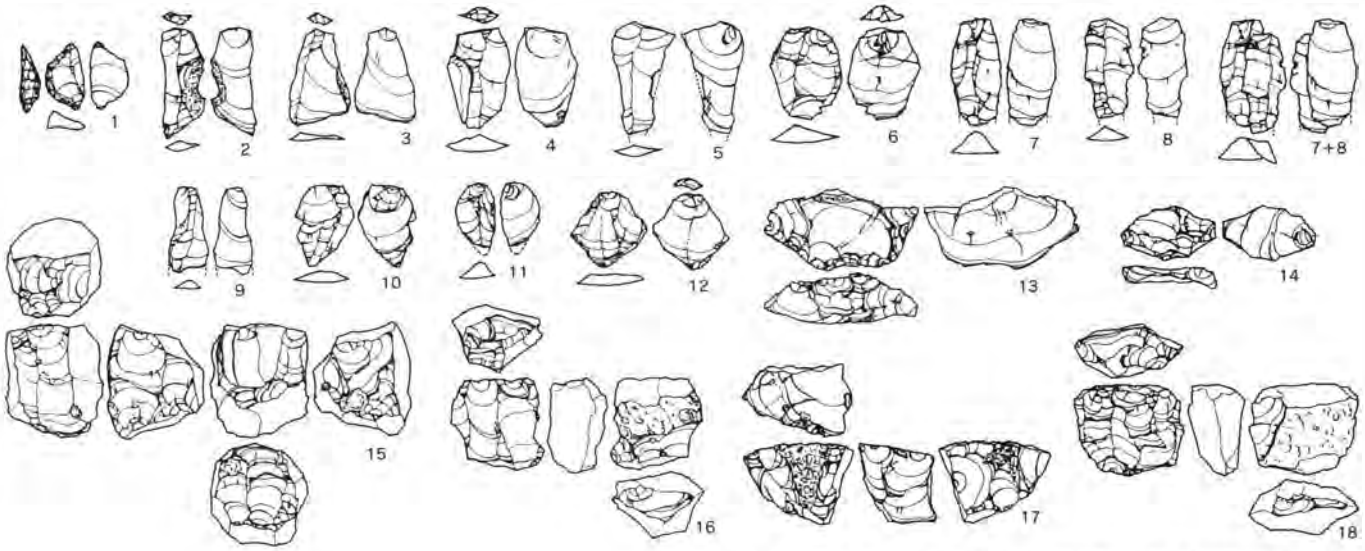
分布図番号：72

前原Ⅰ遺跡

印旛郡栄町龍角寺前原〔印旛沼水系〕

層位　Ⅲ層上部
時期　印旛Ⅶ期1群
概要　遺跡は周囲を5～10m前後の比高差を測る谷により画された北東方向にのびる舌状台地先端部に位置する。隣接する同一文化層としてとらえられる2カ所のブロックから計73点の石器が検出されている。石器組成はナイフ形石器1点、石核6点、打面再生剥片4点、剥片43点、砕片16点、磨石1点、焼礫2点である。ナイフ形石器は小型一側縁加工のもので、石刃を素材とする。剥片剥離技術は石刃技法を主体とし、これらは両設打面の石刃石核から打面再生、頭部調整、打面調整を頻繁に行いながら剥離作業を進行させたものである。石材は約8割をメノウが占め、その他チャート、砂岩、硬砂岩が若干用いられるのみである。

〔◎参考文献：石田広美他1985　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘〕



1：ナイフ形石器、2～12：剥片、13・14：打面再生剥片、15～18：石核（1～18 メノウ）

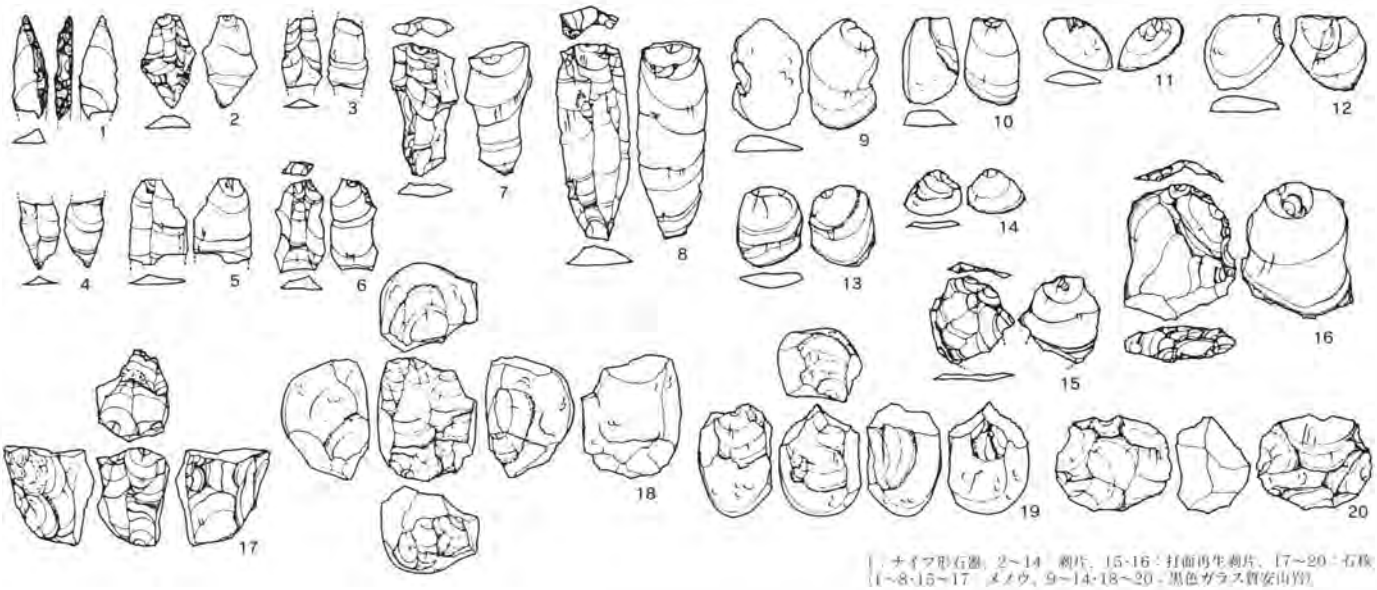
分布図番号：69

大畑Ⅰ遺跡

印旛郡栄町龍角寺大畑〔印旛沼水系〕

層位　Ⅲ層上部
時期　印旛Ⅶ期1群
概要　遺跡は周囲に緩やかで浅い谷が入り込むが、周辺域では最も広い平坦面を形成している標高28～30mの台地上に立地する。共に小規模な礫群を伴う2カ所のブロックから計124点の石器が検出されており、その内容から同一文化層のものとしてとらえることができる。石器組成はナイフ形石器1点、石核6点、打面再生剥片6点、剥片57点、砕片6点、礫・焼礫48点である。剥片剥離技術は両設打面で打面再生、頭部調整、打面調整が頻繁に行われて作業が進行する石刃技法と貝殻状もしくは幅広縦長剥片の剥離を行う2者が認められ、前者はメノウと後者は黒色ガラス質安山岩と結びついて意図的な石材選択が行われた様子が見て取れる。石材は黒色ガラス質安山岩、メノウを主体としており、他に頁岩、チャート、砂岩が見られる。

〔◎参考文献：石田広美他1985　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘〕



1：ナイフ形石器、2～14：剥片、15・16：打面再生剥片、17～20：石核（1～8・15～17 メノウ、9～14・18～20：黒色ガラス質安山岩）

分布図番号：77

平賀一ノ台遺跡

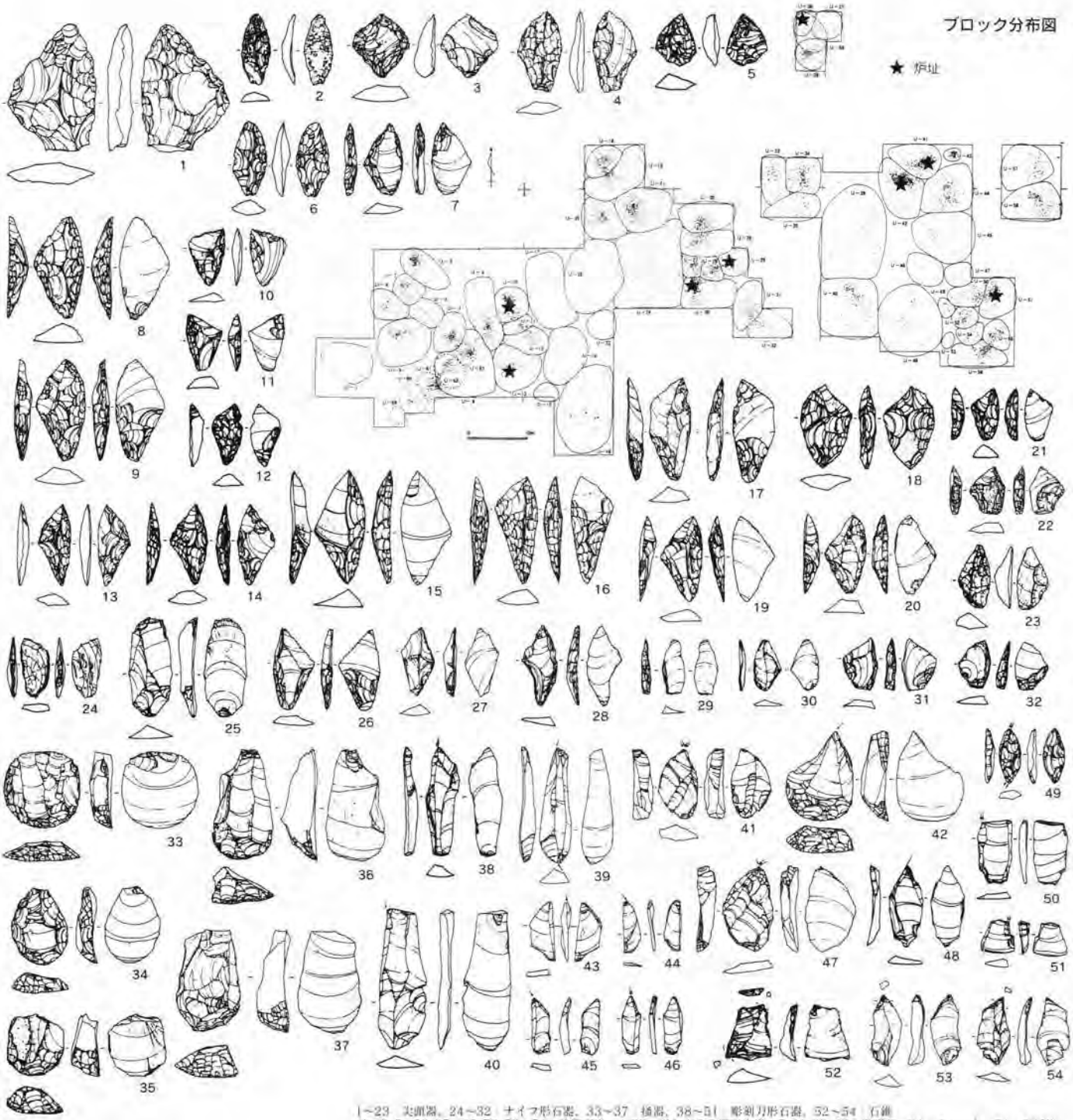
印旛郡印旛村平賀字一ノ台〔印旛沼水系〕

概要　遺跡は三方を印旛沼に囲まれた南東方向へのびるテーブル状の舌状台地上に位置し、標高は約25mを測る。65カ所のブロックから総数12,000点に及ぶ石器が検出されており、これらは第1文化層（IX層下部～X層上部）、第2文化層（IV層下部）、第3文化層（III層中部）にわけることができる。中でも58カ所にも及ぶブロックが属する第3文化層は多量の東内野型尖頭器を組成に含む大規模なもので、重要かつ著名な石器群として学史に刻まれている。

第3文化層〔印旛VII期3群〕

計58ブロックから総数11,151点が検出されているが、このうち約6割である6,931点が礫・焼礫である。そのためブロック群内各所に礫群が見られており、また8カ所もの炉址が検出されている点も注目される。石器組成は尖頭器69点（うち東内野型尖頭器49点）、ナイフ形石器28点、掻器52点、彫器102点、石錐5点、楔状石器10点、削片91点、石核、剥片・砕片、敲石、礫・焼礫である。東内野型尖頭器には長幅比2対1以上の茂呂型ナイフ形石器に類似したものと、長幅比2対1以下の切出形ナイフに類似するものとの2形態が認められる。いずれも片面もしくは半両面加工である。ナイフ形石器には切出形、二側縁加工、部分加工と様々な形態のものが見られる。掻器・彫刻刀形石器も形態は非常に多様である。剥片剥離技術は石刃技法が主体であるが、横長剥片剥離技術も一部存在している。石刃技法は単設もしくは両設打面で、打面再生・頭部調整・打面調整を頻繁に行いながら作業が進行したものである。石材には、剥片石器は東北地方産の珪質頁岩が主体で、次に黒色ガラス質安山岩が多用されている。他には黒曜石、赤玉、黄玉、チャート、凝灰岩、メノウなどが使用されている。

〔◎参考文献：道澤明1986・2000　◎保管場所：印旛村歴史民俗資料館〕



1～23　尖頭器、24～32　ナイフ形石器、33～37　掻器、38～51　彫刻刀形石器、52～54　石錐
1～3・6～20・25～48・50・52～54：珪質頁岩、4・23：黒色ガラス質安山岩、5・21・22・49：黒曜石、24：チャート、51：凝灰岩

分布図番号：162

南三里塚宮原第1遺跡

成田市南三里塚字宮原〔木戸川水系〕

概要　遺跡は土気－銚子分水界から太平洋側に流下する木戸川の左岸に西面している。台地の東側は栗山川水系の高谷川が流下しており、西側よりも複雑な樹枝状を呈している。両河川に挟まれた台地は南東側に細長く延び、九十九里へと続いている。遺跡が立地する標高は約40mであり、平坦でなだらかな地形を呈している。遺物の出土地点は大きく2カ所に分けられ、台地の北西側に位置する第1地点では、29ブロックからなる直径40m以上の環状ブロック群（第1）1基、南西側に位置する第2地点では8ブロックからなる直径約20mの環状ブロック群（第2）と、同規模の19ブロックからなる環状ブロック群（第3）の合計3基が検出された。遺跡全体から石斧が21点出土しているが、そのうち第3環状ブロック群から20点出土しており、同時期の遺跡内から出土した例としては千葉県内では初である。また、全国でも数少ない例となっている。

第1環状ブロック群〔印旛Ⅲb期〕

27カ所のブロックからなる環状の部分と2カ所の中央ブロックで形成されている。石器群全体で634点の遺物が出土している。石材組成は安山岩206点、チャート150点、黒曜石117点、砂岩42点、珪質頁岩32点、粘板岩26点、流紋岩26点、トロトロ石14点、メノウ14点、頁岩2点、緑色凝灰岩、ホルンフェルス、珪質緑色凝灰岩、珪質粘板岩、凝灰質頁岩が各1点であり、安山岩、チャート、黒曜石の3石材で全体の7割を占める。主な器種は台形様石器31点、ナイフ形石器6点、石刃5点、楔形石器4点、削器3点、石斧1点、石錐1点などである。

第2環状ブロック群〔印旛Ⅲb期〕

石器群全体で135点の遺物が出土している。石材組成はチャート63点、玉随23点、黄玉18点、流紋岩14点、頁岩12点、珪質頁岩3点、赤玉1点、砂岩1点である。主な器種はナイフ形石器3点、台形様石器2点、石刃3点などである。

第3環状ブロック群〔印旛Ⅲb期〕

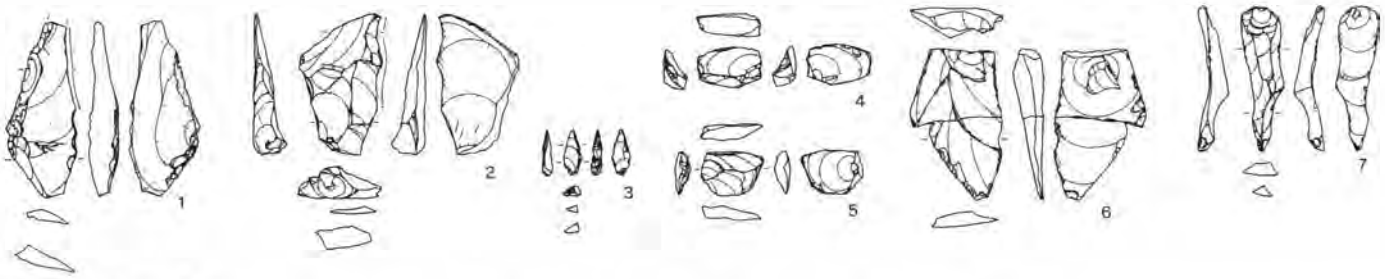
石器群全体で303点の遺物が出土している。石材組成は黒曜石116点、緑色凝灰岩106点、珪質頁岩24点、チャート16点、安山岩11点、砂岩7点、ホルンフェルス6点、流紋岩4点、赤玉3点、粘板岩3点、メノウ、トロトロ石、玉随、石英、蛇紋岩、珪質凝灰岩、凝灰岩が各1点である。黒曜石、緑色凝灰岩の2石材で全体の7割以上を占めており、この石材については第2環状ブロック群からは1点も出土していない。近接はしているが、異なる石器群である。主な器種は石斧20点、ナイフ形石器10点、石刃8点、台形様石器7点、楔形石器7点、削器2点などである。石斧に使用されている石材のほとんどは緑色凝灰岩であり、そのためそれら石材の石器が多く出土している。刃部再生剥片接合資料や研磨痕のある剥片が認められるため、石斧の再生がおこなわれていたことを暗示している。

〔◎参考文献：宇井義典・布施仁2004　◎保管場所：成田市教育委員会〕

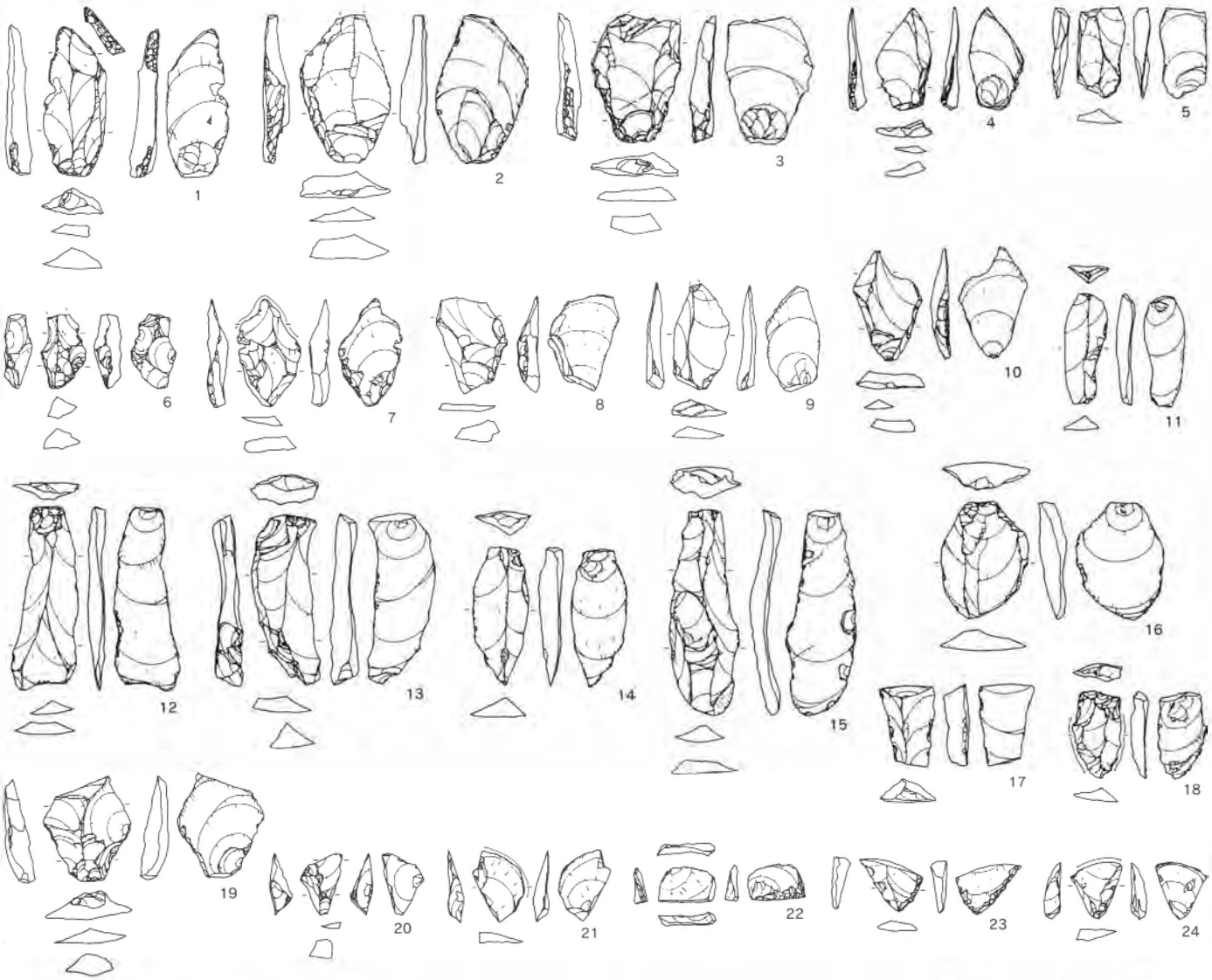


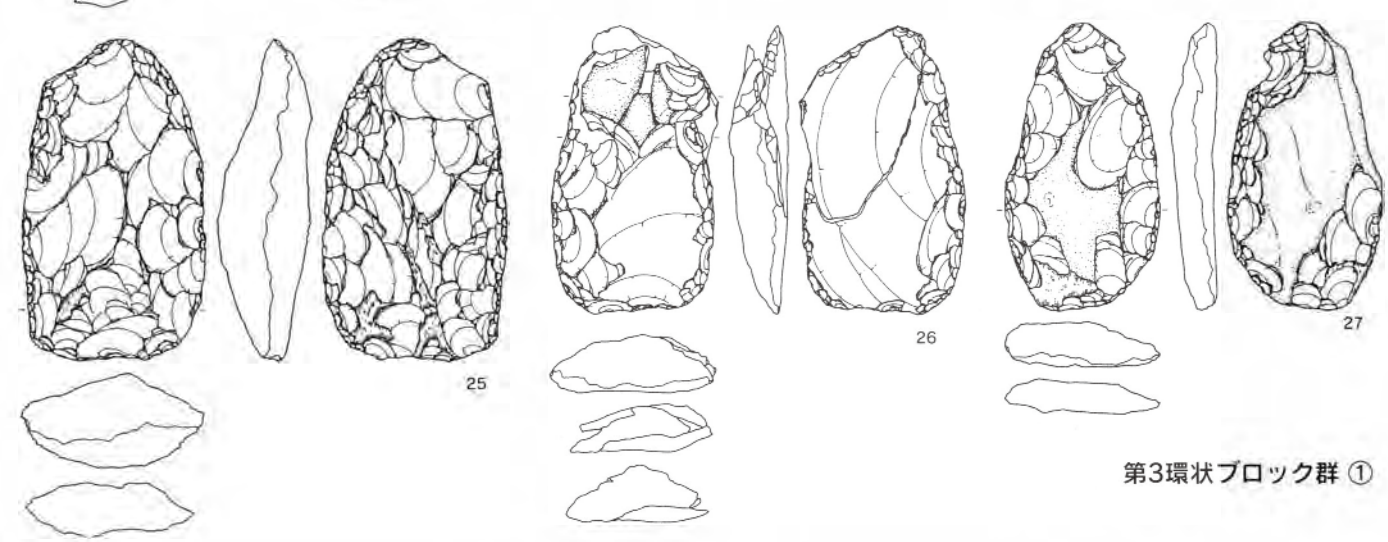
第1環状ブロック群

1：石斧、2～7：ナイフ形石器、8･9：削器、10：石錐、11･12：楔形石器、13～41：台形様石器
（1：緑色凝灰岩、2･3･11～21：黒曜石、5･6･22～30：安山岩、4･31～34：珪質頁岩、7･9･36･37：チャート、8･41：砂岩、10･38･39：粘板岩）

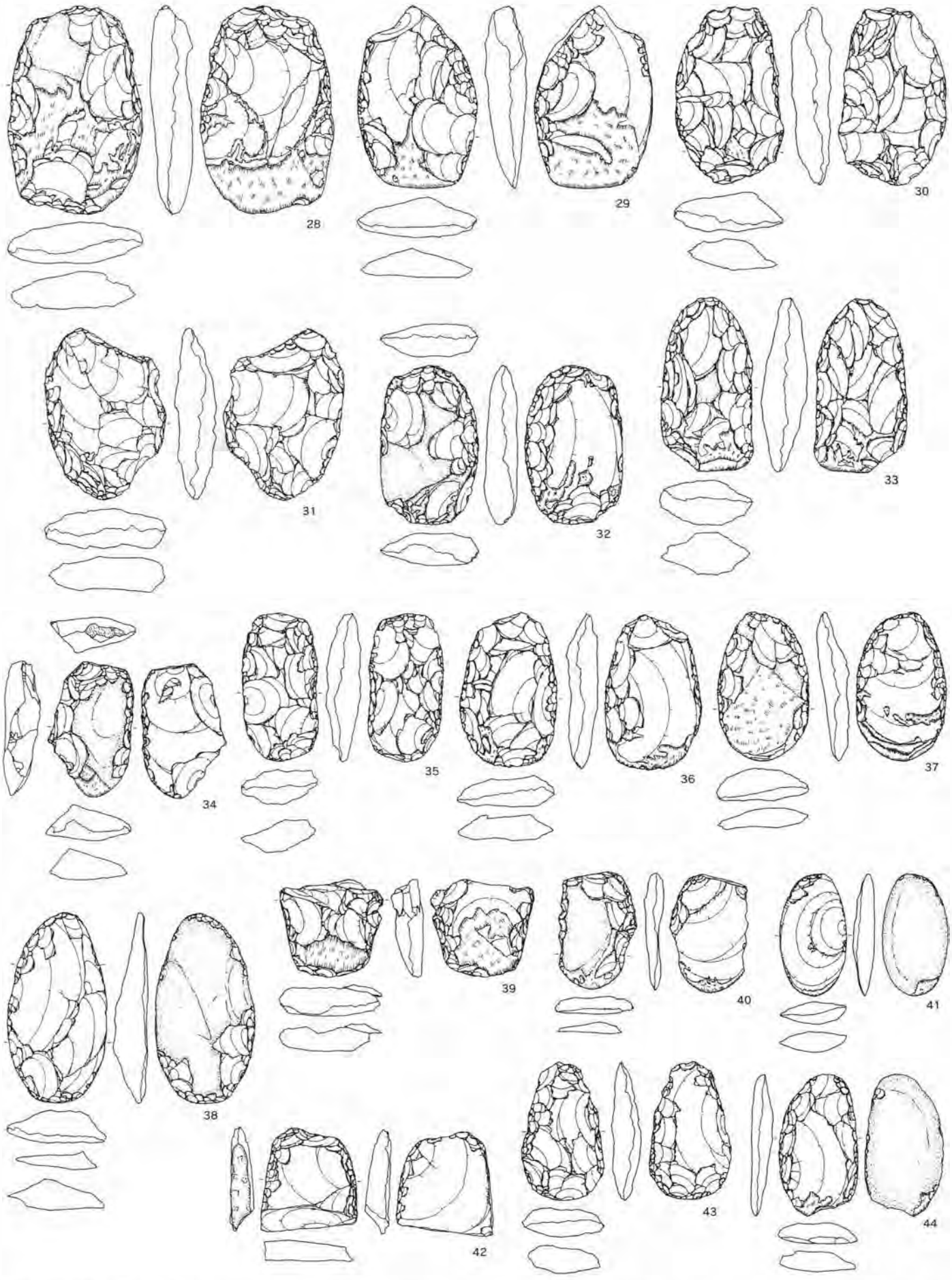


第2環状ブロック群　[1~3：ナイフ形石器、4·5：台形様石器、6·7：石刃 [1：黄 ft、2：赤陸、3~5：チャート、6：緑色凝灰岩、7：頁岩]





第3環状ブロック群 ①



第3環状ブロック群 ②　1～10：ナイフ形石器、11～18：石刃、19～24　台形様石器、25～44：石斧 11·6·7·18·21～24　黒曜石、2·3·13·16：チャート、8～10·14·19：安山岩、4：玉随、5：流紋岩、12：凝灰岩、15：粘板岩、38·39：ホルンフェルス、28：蛇紋岩、17·25～27·29～37·40～44：緑色凝灰岩）
［第VI章表紙にカラー図版（図84）掲載］

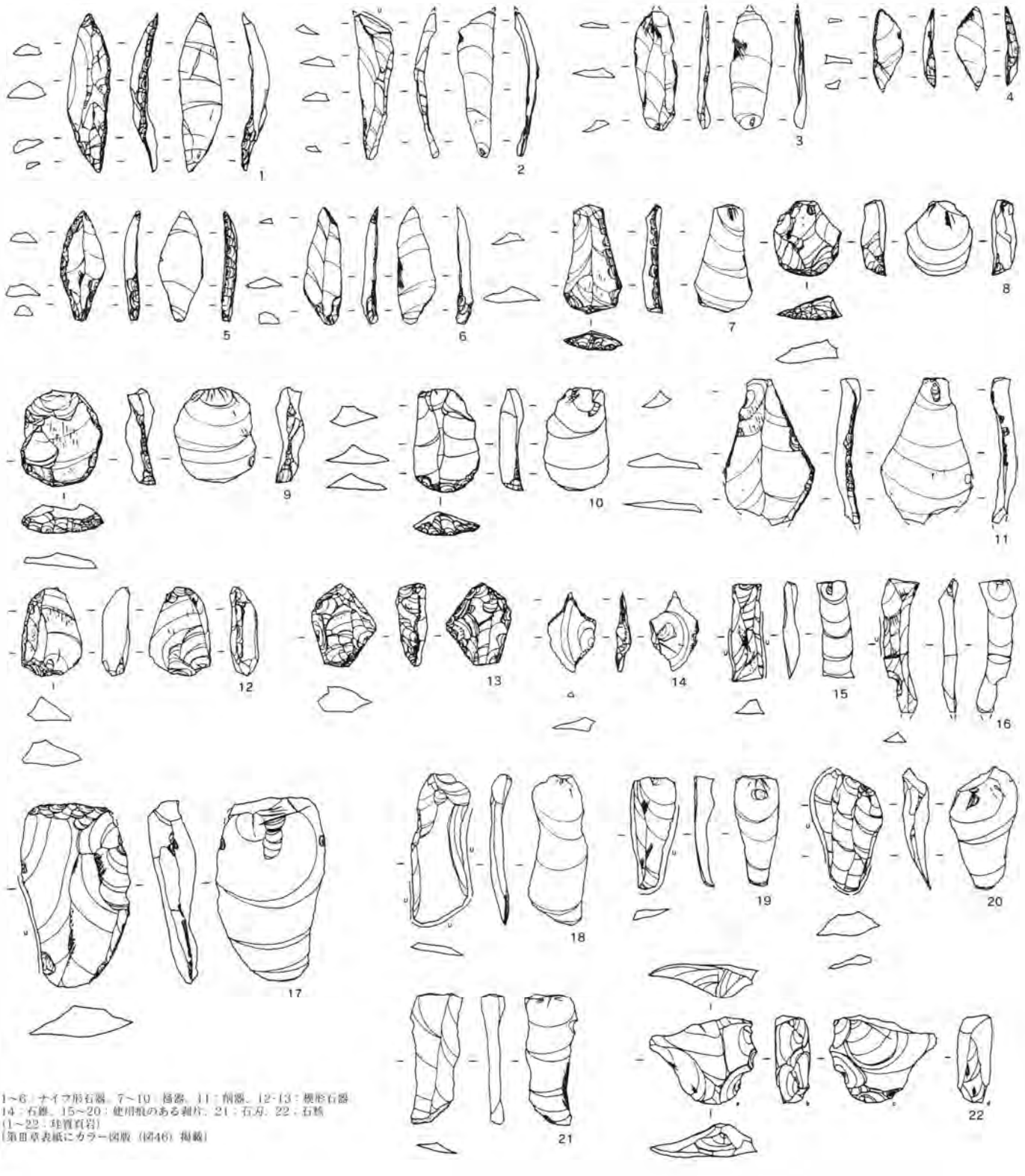
分布図番号：109

飯仲金堀遺跡Ｂ地点

成田市飯仲字金堀〔江川水系〕

層位　Ⅵ層
時期　印旛Ⅴ期
概要　遺跡は北印旛沼に注ぐ江川の左岸、樹枝状に開析された標高約27～35mの舌状台地上に立地する。石器群は遺跡の立地する台地平坦面から北西側斜面地（比高差約3m）にかけて検出されており、総計121点を数える。石器組成はナイフ形石器16点、掻器11点、削器2点、楔形石器11点、石錐2点、削片2点、二次加工のある剥片11点、使用痕のある剥片17点、石核2点、剥片34点、砕片14点であり、製品類の多いところに特徴があるといえる。また剥片類の割合が低いことから石器素材の生産は本遺跡内ではほとんど行われておらず、これらの石器は製品あるいは半製品の状態で遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。主要器種であるナイフ形石器・掻器は中～大型の石刃もしくは幅広の縦長剥片を素材とし、形態的にもバラエティーに富む。石材は9割近くが東北地方産の良質な珪質頁岩により占められており、当時の東北地方との強いつながりが示唆される。この他は頁岩、黒色ガラス質安山岩、メノウ、チャート、黒曜石が若干用いられているのみである。

〔◎参考文献：酒井弘志他1994　◎保管場所：成田市教育委員会〕



1～6：ナイフ形石器、7～10：掻器、11：削器、12-13：楔形石器
14：石錐、15～20：使用痕のある剥片、21：石刃、22：石鏃
（1～22：珪質頁岩）
〔第Ⅲ章表紙にカラー図版（図46）掲載〕

分布図番号：160

天神峰奥之台遺跡

成田市天神峰字奥之台〔尾羽根川水系〕

概要　遺跡は利根川に直接流下する尾羽根川の奥部左岸に東面しており、西側では取香川の最奥部が樹枝状に台地を刻んでいる。標高約40mで北東側に延びる舌状台地に立地する。合計24カ所の地点でブロックが確認されており、台地の先端部分と中程に分布する。24カ所の地点から31カ所のブロック、4カ所の単独出土地点、12カ所の礫群が検出された。文化層は3枚に分けられる。

第Ⅰ文化層はⅨ層下部にあたり、13ブロックが帰属する最も豊富な内容を呈する文化層である。第Ⅱ文化層はⅦ層～Ⅵ層にあり3ブロックが帰属するが、規模は大きくない。第Ⅲ文化層はⅣ・Ⅴ～Ⅲ層下部に相当し、15ブロックが帰属する。礫群については全てこの文化層に含まれる。

第Ⅰ文化層〔印旛Ⅲa期〕

第1～第13ブロックまでが相当し、全体で985点の遺物が出土している。主な石器の内訳はナイフ形石器3点、台形様石器34点、楔形石器1点、局部磨製石斧1点、石刃1点等である。台形様石器や石斧はⅨ層段階の示準石器となっている。石材については黒色ガラス質安山岩が全体の約7割を占めており、次にメノウとなっている。

第Ⅱ文化層〔印旛Ⅴ期〕

第14～第16ブロックまでが相当し、全体で73点の遺物が出土している。主要石器はナイフ形石器4点、石刃13点であり、この2つで全体の約1/4を占めている。石刃が多いことがこの文化層の特徴であろう。主要石材は珪質頁岩であり、出土層位としてはⅦ層中に位置づけられる。

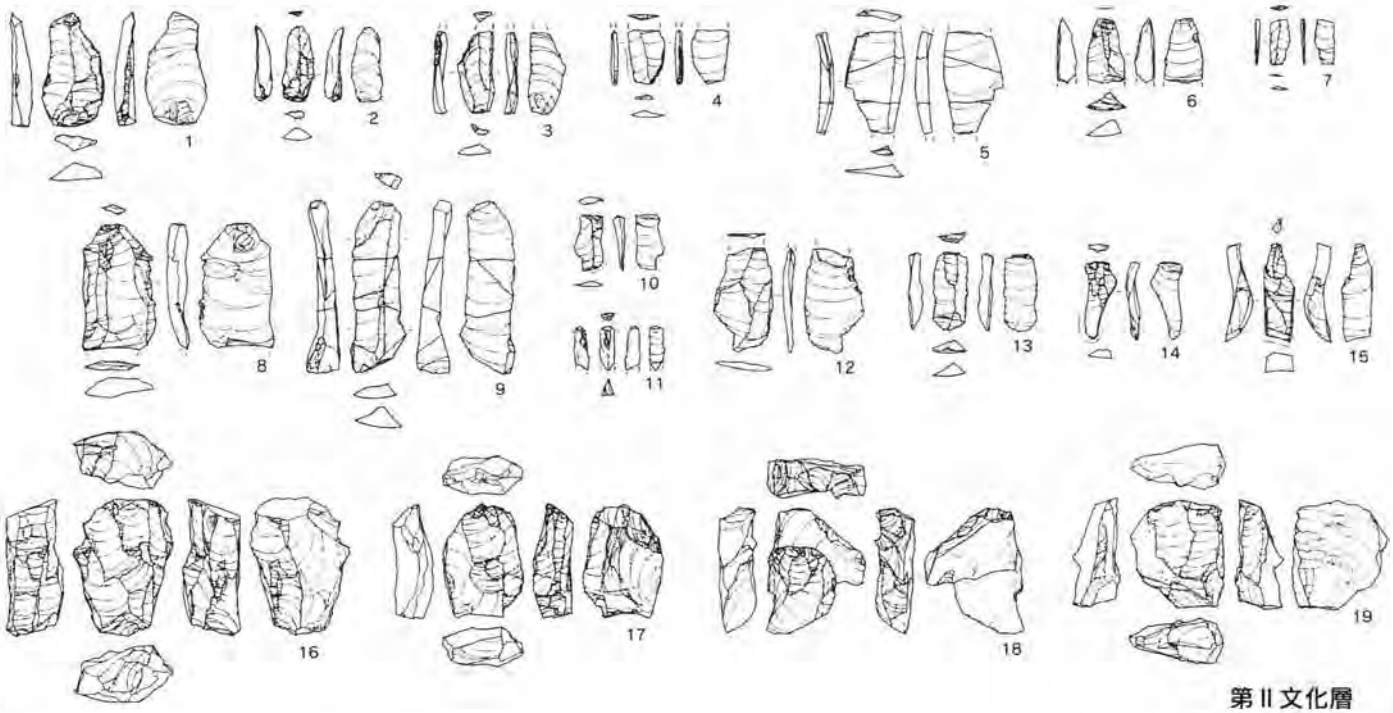
第Ⅲ文化層〔印旛Ⅵ期〕

第17～第31ブロックが相当し、全体で482点の遺物が出土している。主要石器の内訳はナイフ形石器11点、台形石器11点、角錐状石器2点、削器・掻器各2点、楔形石器1点等である。第Ⅰ文化層と同様に主要石材として黒色ガラス質安山岩が卓越しており、8割以上に達している。

〔◎参考文献：矢本節朗他1997、永塚俊司2000　◎保管場所：千葉県文化財センター〕

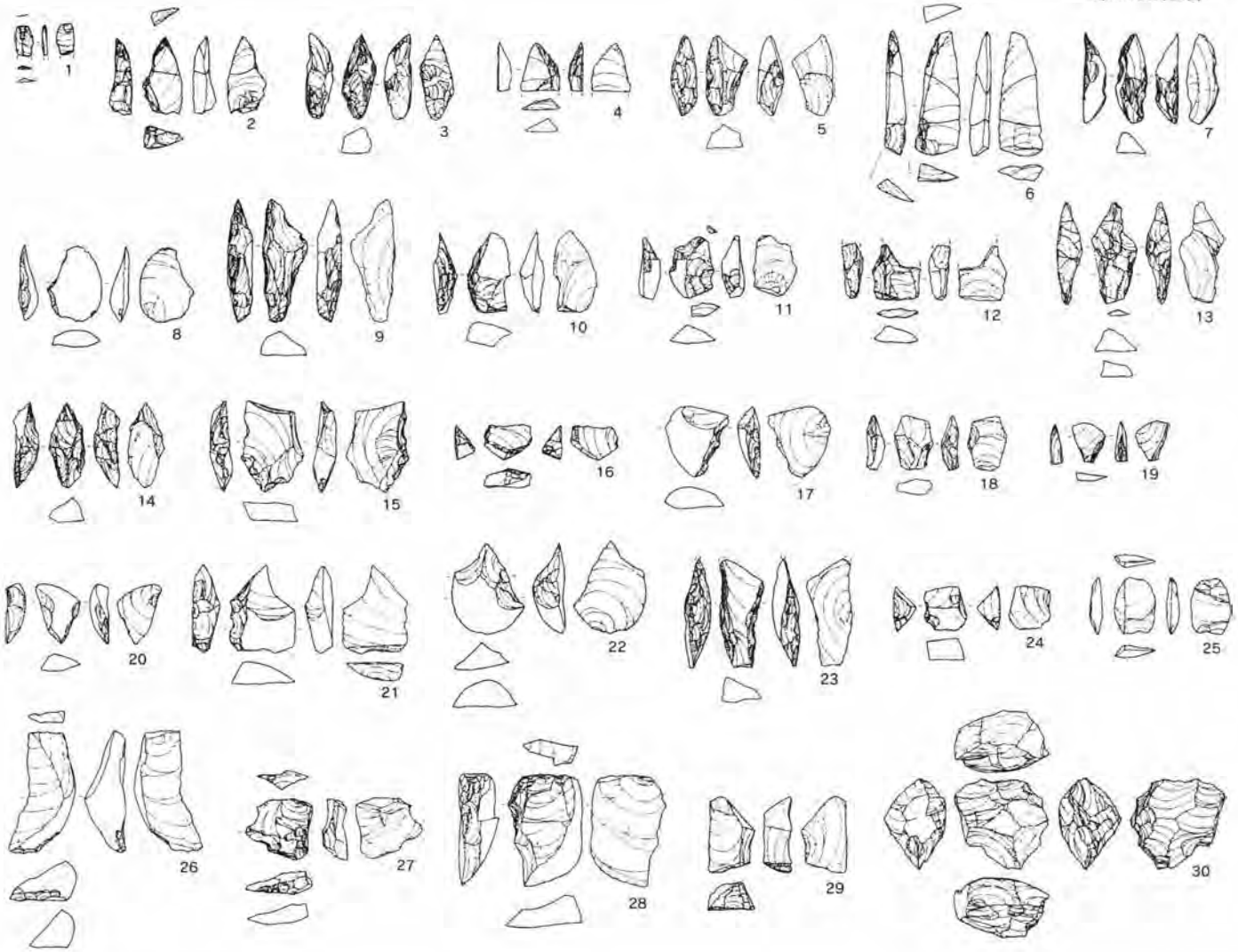


第Ⅰ文化層



第II文化層

第III文化層



第I文化層　1～3：ナイフ形石器、4～34台形様石器、35：楔形石器、36：石刃、37：局部磨製石斧、38：接合資料（3～8・10・12・14～17・19・20・22～27・29・30・32～34：黒色ガラス質安山岩、1・2・18・21・28・31・33～35：珪質頁岩、9：珪質凝灰岩、11：黒曜石、37：砂岩、13・32・38：メノウ）

第II文化層　1～4：ナイフ形石器、5～15：石刃、16・17・19：石核、18：接合資料（1～4・6～8・10～15：珪質頁岩、5・9：珪化木）

第III文化層　1：石刃、2～12：ナイフ形石器、13・14：角錐状石器、15～24：台形石器、25：楔形石器、26・29：掻器、27・28：削器、30：石核　（4～12・14・15・17～26・28～30：黒色ガラス質安山岩、1・3・16・27：珪質頁岩、2：メノウ、13：凝灰岩）

分布図番号：134

東峰御幸畑西遺跡

成田市東峰字御幸畑〔取香川水系〕

概要　遺跡は利根川水系根木名川支流の取香川の最奥部付近右岸に位置する。標高約40mの舌状台地上に立地し、石器の出土地点は舌状台地の先端部で、平坦面から緩斜面にかけて多くが出土している。文化層は4枚確認されており、第1文化層は第2黒色帯～X層上部に集中し、当遺跡で最も充実した内容である。また3カ所の炭化物集中地点が検出されている。第2文化層はVI層～第2黒色帯上部に集中し、両極剥離を特徴とする「遠山技法」が認められる。第3文化層はIII層に集中し、ナイフ形石器群の3aと細石刃石器群の3bに細分される。

第1文化層〔印旛IIIb期〕

41のブロックが検出され、合計2,184点の石器が出土している。散漫に台地上に広がるのではなく、3つのエリアにまとまる。そのうちエリア2・3は環状ブロック群を形成している。主な器種の内訳はナイフ形石器12点、台形様石器64点、削器9点、楔形石器12点、彫刻刀形石器1点、斧形石器7点ほかである。主な石材の内訳は珪質頁岩740点、安山岩778点、チャート224点、凝灰岩91点、メノウ38点などである。

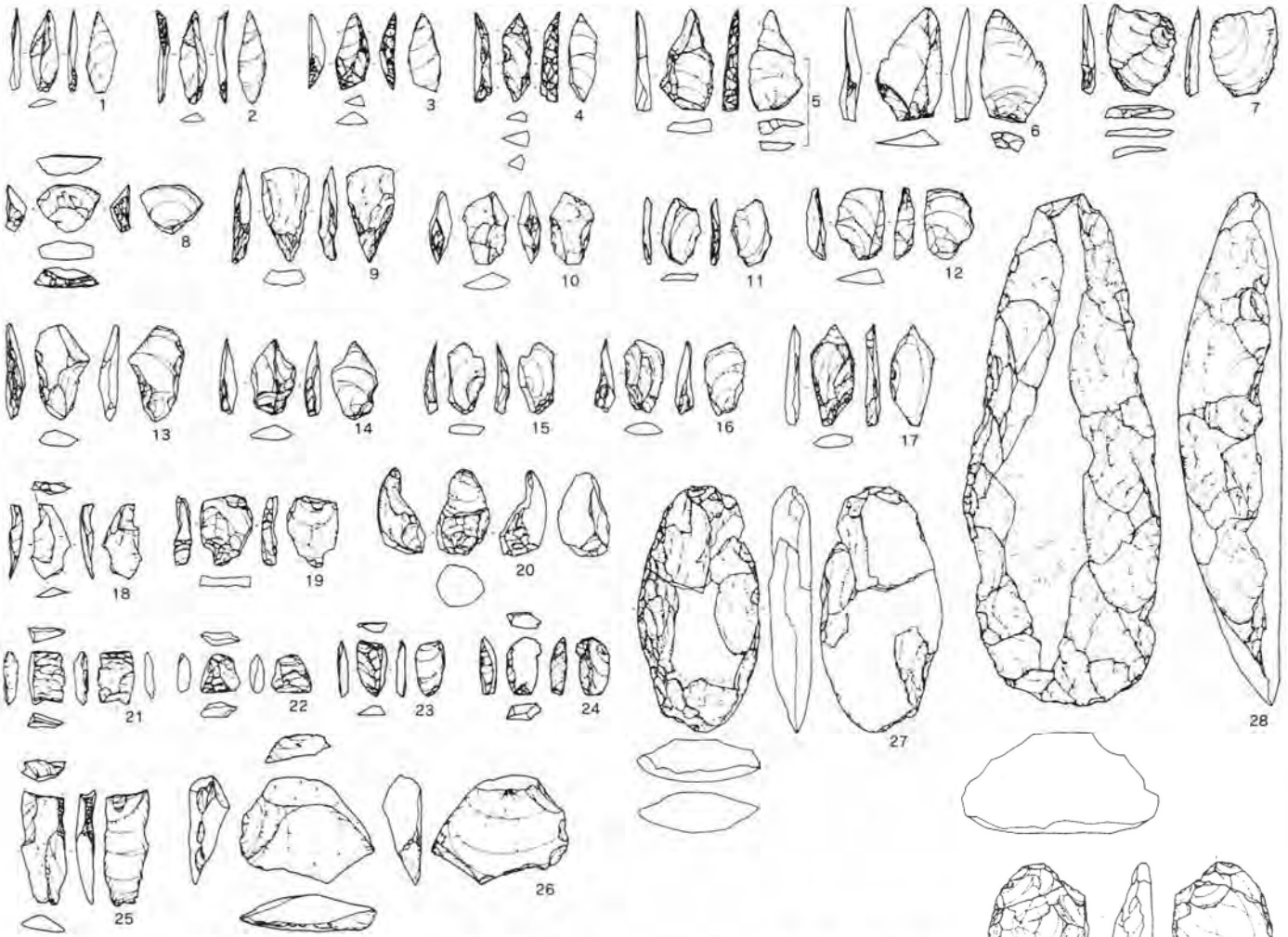
第2文化層〔印旛IV期3群〕

2つのブロックが検出され、合計313点の石器が出土している。主な器種の内訳は楔形石器78点、楔形石器剥片72点、削器1点、掻器1点ほかである。主な石材の内訳はチャート196点、流紋岩25点、凝灰岩21点ほかである。チャートの小型円礫を素材として両極剥離をおこなっているため、器種と石材の結びつきが強く現れている。

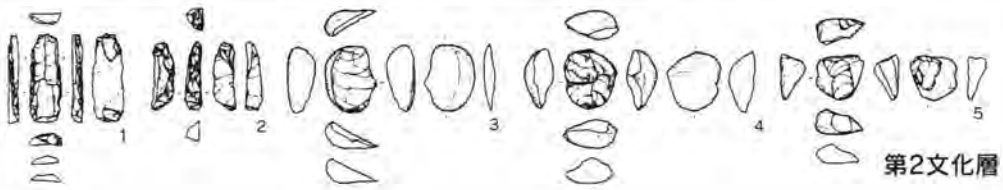
第3b文化層〔印旛IX期2群〕

半数以上がグリッド一括遺物となっているが、北方系削片系細石刃石器群の良好な資料である。主な器種の内訳は細石刃14点、細石刃石核4点、細石刃石核母型2点、削片3点、打面再生剥片2点、彫刻刀形石器10点、削器7点、掻器9点ほかである。主な石材の内訳は珪質頁岩166点、安山岩26点、砂岩24点ほかである。北方系削片系細石刃石器群と珪質頁岩との結びつきの強さは改めて言うまでもない。

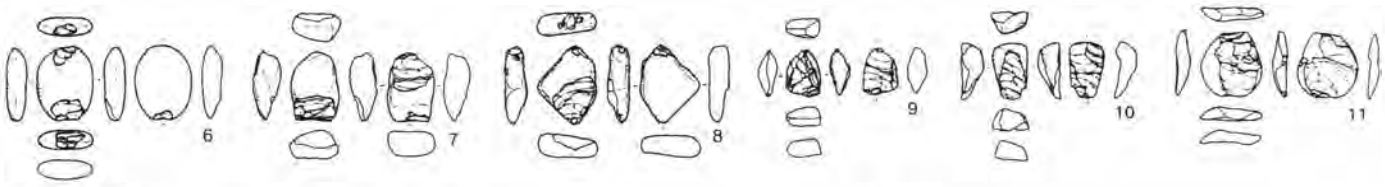
〔◎参考文献：永塚俊司他2000a、永塚俊司2000　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



第1文化層　1～6：ナイフ形石器、7～17台形様石器、18：彫刻刀形石器、19～24：楔形石器、25：削器、26：掻器、27・28：局部磨製石斧、29：打製石斧　（1～7・18・25：珪質頁岩、8・9・11・13・15～17・26：安山岩、10・12・14・20・24：チャート、19・22：メノウ、21・29：ホルンフェルス、23：凝灰岩、27：蛇紋岩、28：粗粒玄武岩）



第2文化層



第2文化層　1：削器，2：掻器，3～11：楔形石器　（1・4：メノウ，2：珪質頁岩，3・7・8・10：チャート，5・6・11：凝灰岩，9：砂岩）

第3b文化層



1～8：細石刃，9・10：細石刃石核，11：細石刃石核原型，12・13：打面再生剥片，14～17：彫刻刀形石器，18～20：掻器，21・22：削器
（1～21：珪質頁岩，22：凝灰岩）

分布図番号：133

取香和田戸遺跡

成田市取香字和田戸〔取香川水系〕

概要　遺跡は根木名川の支流にあたる取香川の右岸に南面する。最奥部近くの小支谷に挟まれ、張り出すような台地上に位置している。標高約40mであるが、谷津が細かく入り組んでいるため若干の起伏を伴う。支谷を挟んだ上流側には東峰御幸畑西遺跡が立地し、対岸には古込遺跡が立地している。複数の文化層が確認されており、空港周辺における旧石器時代の編年に大きく寄与した遺跡の一つである。文化層は6枚確認されているが、第2～第5文化層の4枚の文化層についてみてゆく。最も資料が充実している第2文化層はⅢ～Ⅴ層の上部に遺物が集中しており、22カ所のブロックが検出されている。第3文化層もⅢ～Ⅴ層の上部に遺物が集中し、ブロックは1カ所検出されている。第4文化層はⅢ～Ⅴ層下部に最も多く出土し、14カ所のブロックが検出されている。第5文化層はⅥ層に最も遺物が集中しており、3カ所のブロックが検出された。

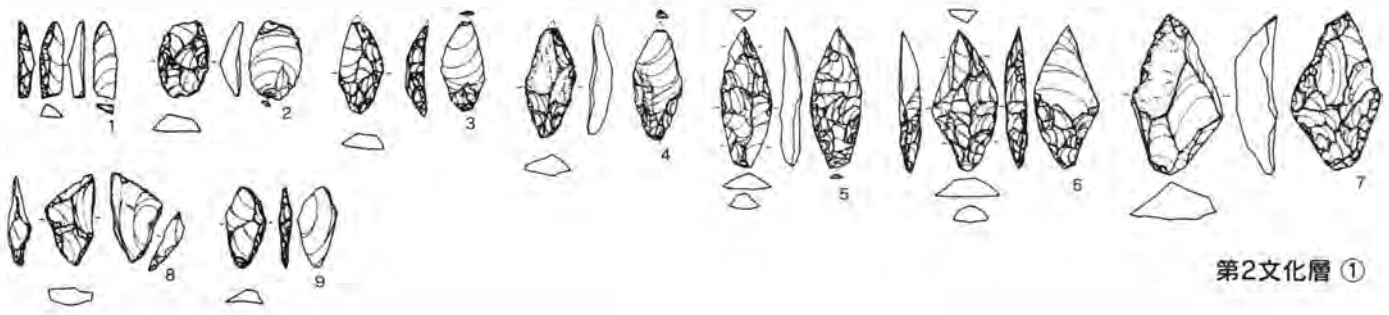
第2文化層〔印旛Ⅶ期3群〕
地点外も含め全体で1,250点の遺物が出土している。主な器種の組成はナイフ形石器22点、東内野尖頭器5点、尖頭器27点、彫刻刀形石器14点、削器22点、掻器4点、楔形石器13点ほかである。主な石材の組成はチャート368点、珪質頁岩175点、安山岩144点、黒曜石59点ほかである。また、大規模な礫群も伴う。

第3文化層〔印旛Ⅶ期2群〕
全体で87点の遺物が出土している。主な器種の組成はナイフ形石器7点、石核9点ほかである。主な石材の組成は安山岩48点、珪質頁岩23点、流紋岩5点ほかである。

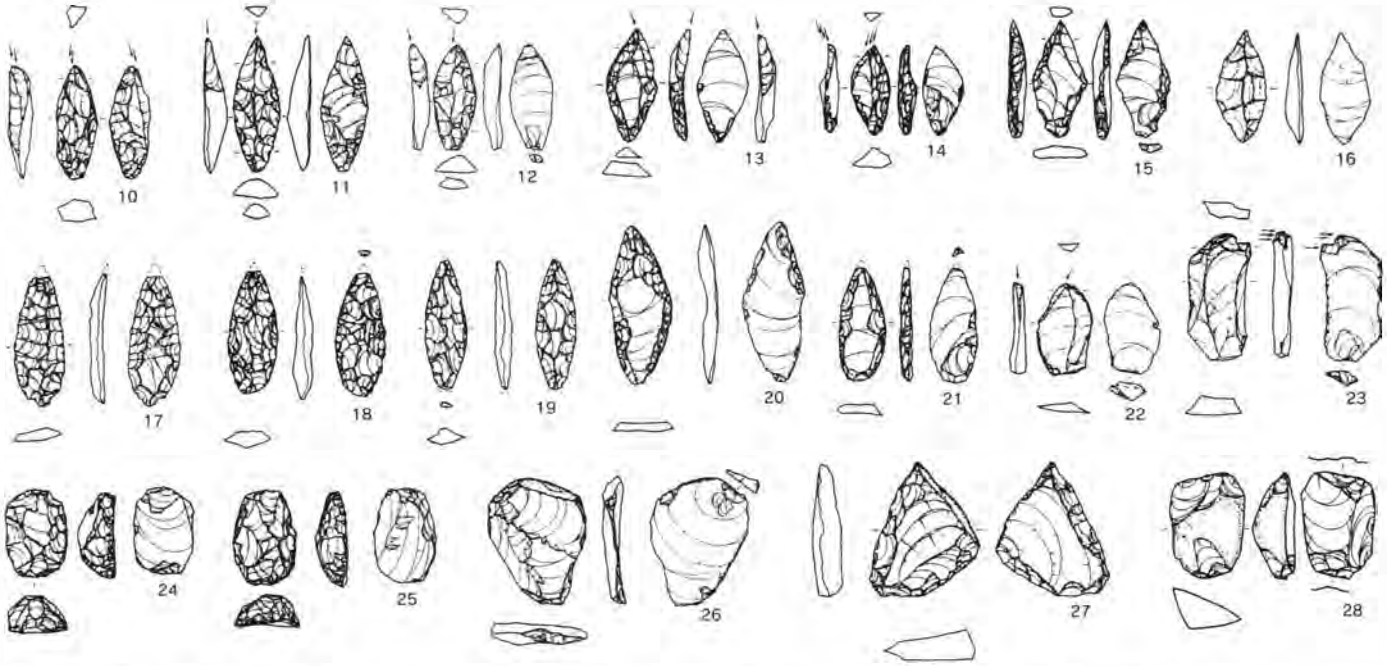
第4文化層〔印旛Ⅵ期〕
全体で605点の遺物が出土している。主な器種の組成はナイフ形石器10点、角錐状石器9点、削器3点、石核21点、楔形石器1点ほかである。主な石材の組成は安山岩398点、黒曜石68点、チャート48点、頁岩31点、玉随18点、珪質頁岩12点ほかである。

第5文化層〔印旛Ⅴ期〕
地点外も含めて全体で192点が出土している。主な器種の組成はナイフ形石器20点、彫刻刀形石器1点、削器3点、石錐1点、石核6点ほかである。主な石材の組成は珪質頁岩53点、チャート53点、黒曜石29点、メノウ23点、安山岩15点、玉随13点ほかである。

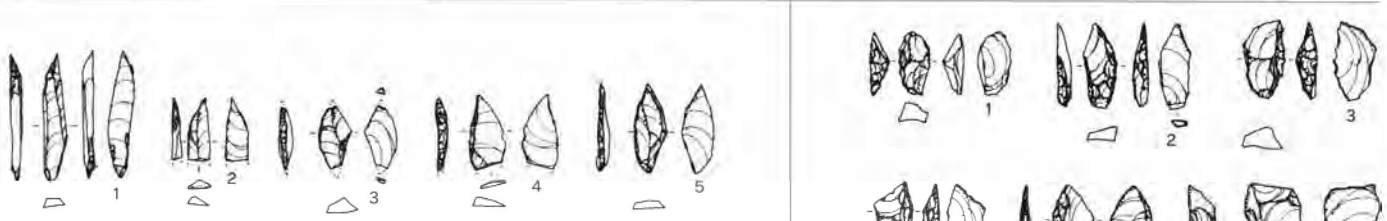
〔◎参考文献：新田浩三他1994、永塚俊司2000　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



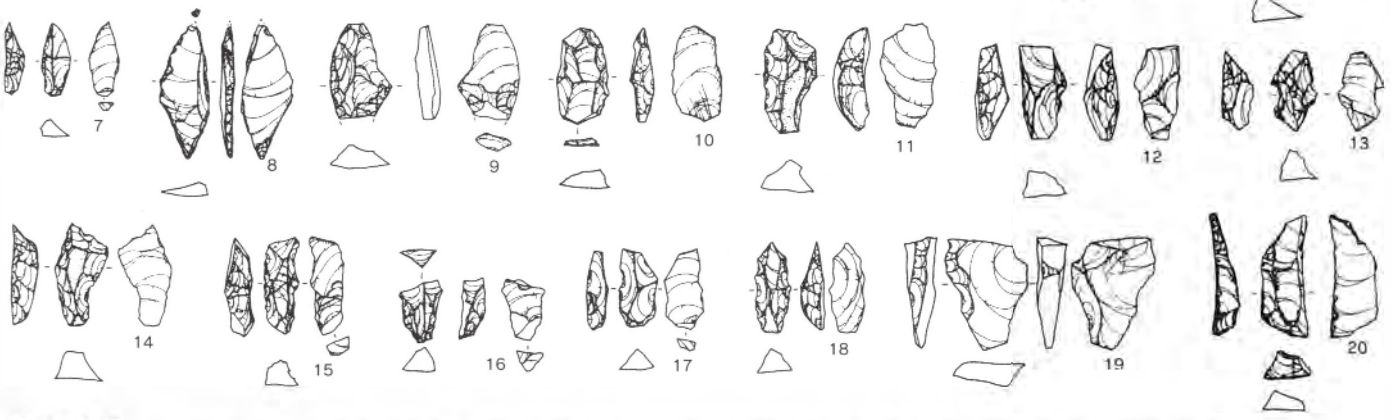
第2文化層 ①



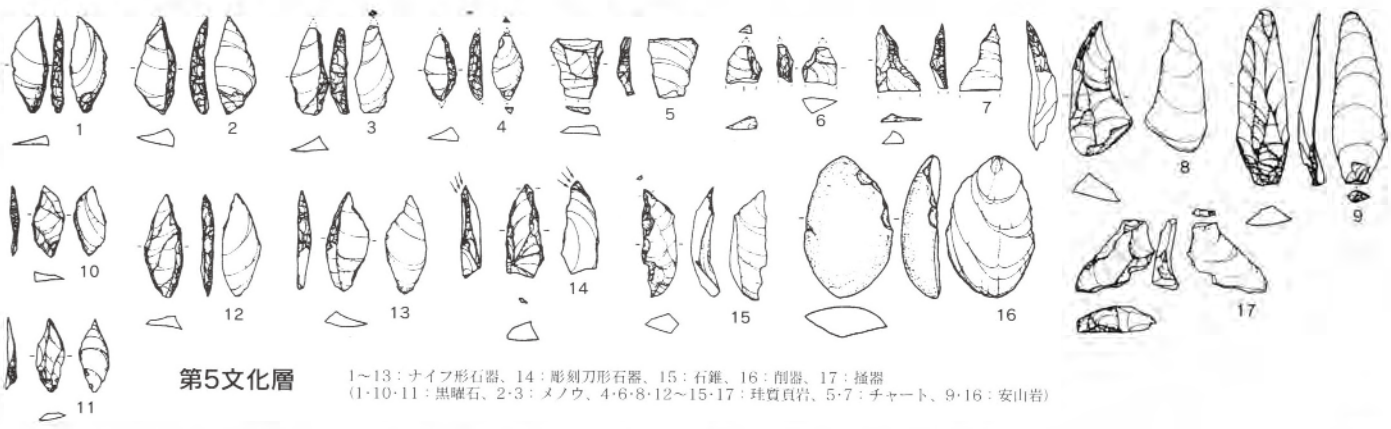
第2文化層②　1～9：ナイフ形石器、10～14：東内野型尖頭器、15～21：尖頭器、22・23：彫刻刀形石器、24・25：掻器、26・27：削器、28：模形石器
（1・3～6・10・12・20・22～24：珪質頁岩、2・7～9・11・13・14・18・25・26：チャート、15：流紋岩、16：泥岩、17・19・21・27：安山岩、28：頁岩）



第3文化層　1～5：ナイフ形石器　（1～5：珪質頁岩）



第4文化層　1～10：ナイフ形石器、11～18：角錐状石器、19・20：削器　（1～3・5～7・10～14・17～19：安山岩、4・8：チャート、9・20：珪質頁岩、15・16：黒曜石）



第5文化層　1～13：ナイフ形石器、14：彫刻刀形石器、15：石錐、16：削器、17：掻器
（1・10・11：黒曜石、2・3：メノウ、4・6・8・12～15・17：珪質頁岩、5・7：チャート、9・16：安山岩）

分布図番号：135

天神峰最上遺跡

成田市天神峰字最上〔取香川水系〕

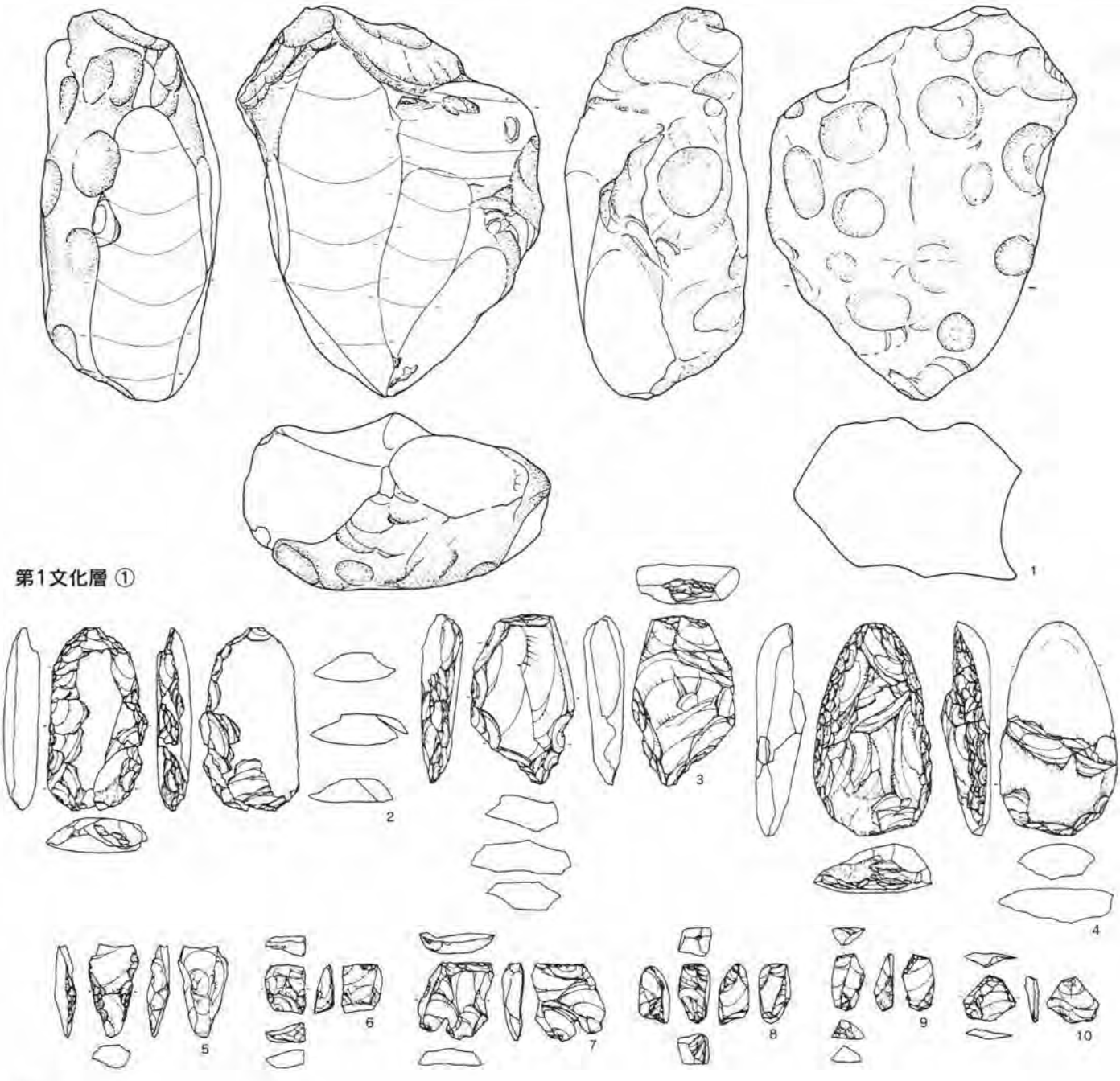
概要　遺跡は根木名川の支流にあたる取香川と尾羽根川に挟まれた台地上に位置し、2つの河川の分水嶺上に立地する。取香川支谷の最奥部に西面し、遺物の分布は台地の中央から尾羽根川支谷の谷津頭を取り囲むように出土している。標高は約40mである。北東側約300mのところに天神峰奥之台遺跡が立地している。文化層は4枚に分けられており、第1文化層は第2黒色帯（Ⅶ～Ⅸ層）に1～7ブロックが帰属し。第2文化層はⅣ下～Ⅵ層中に含まれる8～10ブロックが帰属する。第3文化層は3ａと3ｂにわけられている。共にⅢ～Ⅳ層中に含まれるが、第3ａ文化層はナイフ形石器を主体とし一部尖頭器を伴う石器群であり、11～23ブロックが帰属する。第3ｂ文化層は細石刃・細石刃石核を主体とする細石刃石器群であり、24～26ブロックが帰属する。

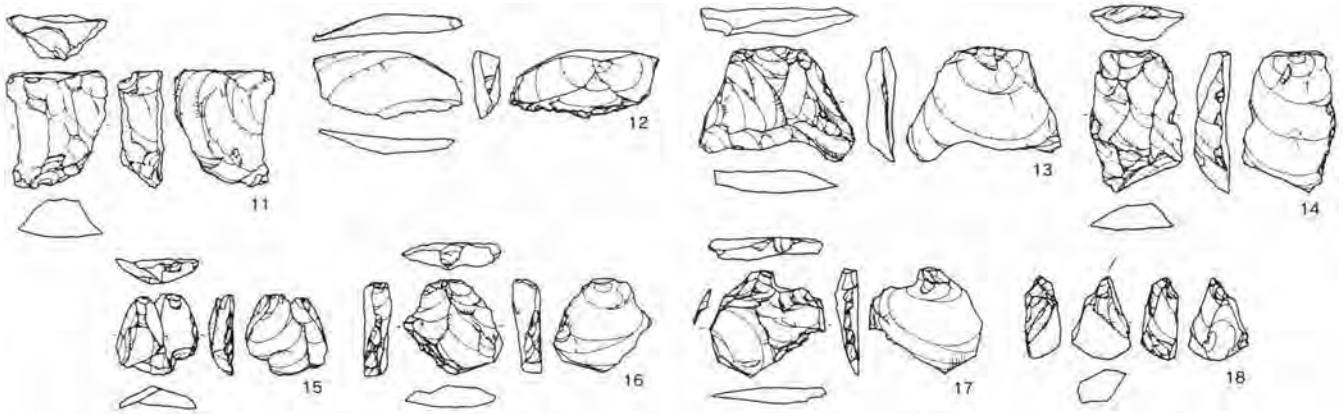
第1文化層〔第Ⅲb期〕
7カ所のブロックが検出されているが、まとまっては検出されていない。尾羽根川支谷の谷津頭を囲むように比較的ブロックが認められる。全体で320点の遺物が確認されており、主な器種の内訳は台形様石器1点、彫刻刀形石器1点、削器6点、掻器1点、楔形石器5点、砥石1点、石斧4点ほかである。特に注目されるのは砥石が確認されていることである。千葉県内でも数例しか確認されていないため大変貴重な資料と言える。また、焼土・炭化物集中地点が1カ所確認されている。

第3ａ文化層〔第Ⅷ期〕
比較的台地中央付近にまとまっており、11～23ブロックの合計13カ所のブロックからなる。特に16～23ブロックはメノウを主体とした石器群であり、ブロックの配置が環状となっている。全体で416点の遺物が出土しており、主な器種の内訳はナイフ形石器20点、尖頭器3点（未製品含む）、彫刻刀形石器1点、楔形石器1点、削器4点、掻器1点、石斧1点ほかである。

第3ｂ文化層〔第Ⅹ期1群〕
台地中央に北東から南西にかけてブロックが並ぶように3カ所認められる。全体で324点の遺物が確認されており、主な器種の内訳は細石刃25点、細石刃石核9点、細石刃石核母型8点、打面再生剥片7点、削器5点、掻器2、楔形石器5点、石斧1点ほかである。

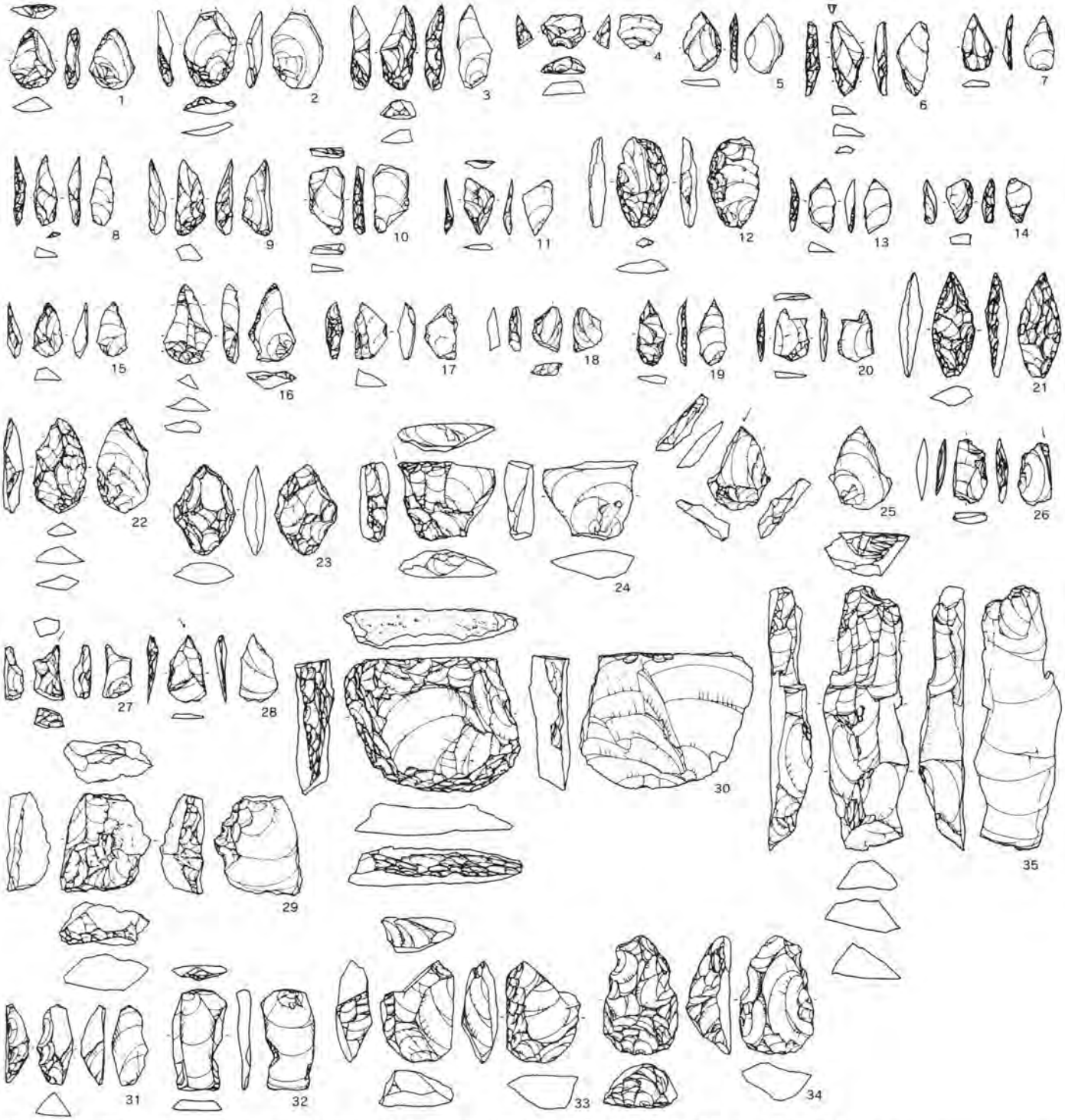
〔◎参考文献：永塚俊司他2001c、永塚俊司2000　◎保管場所：千葉県文化財センター〕





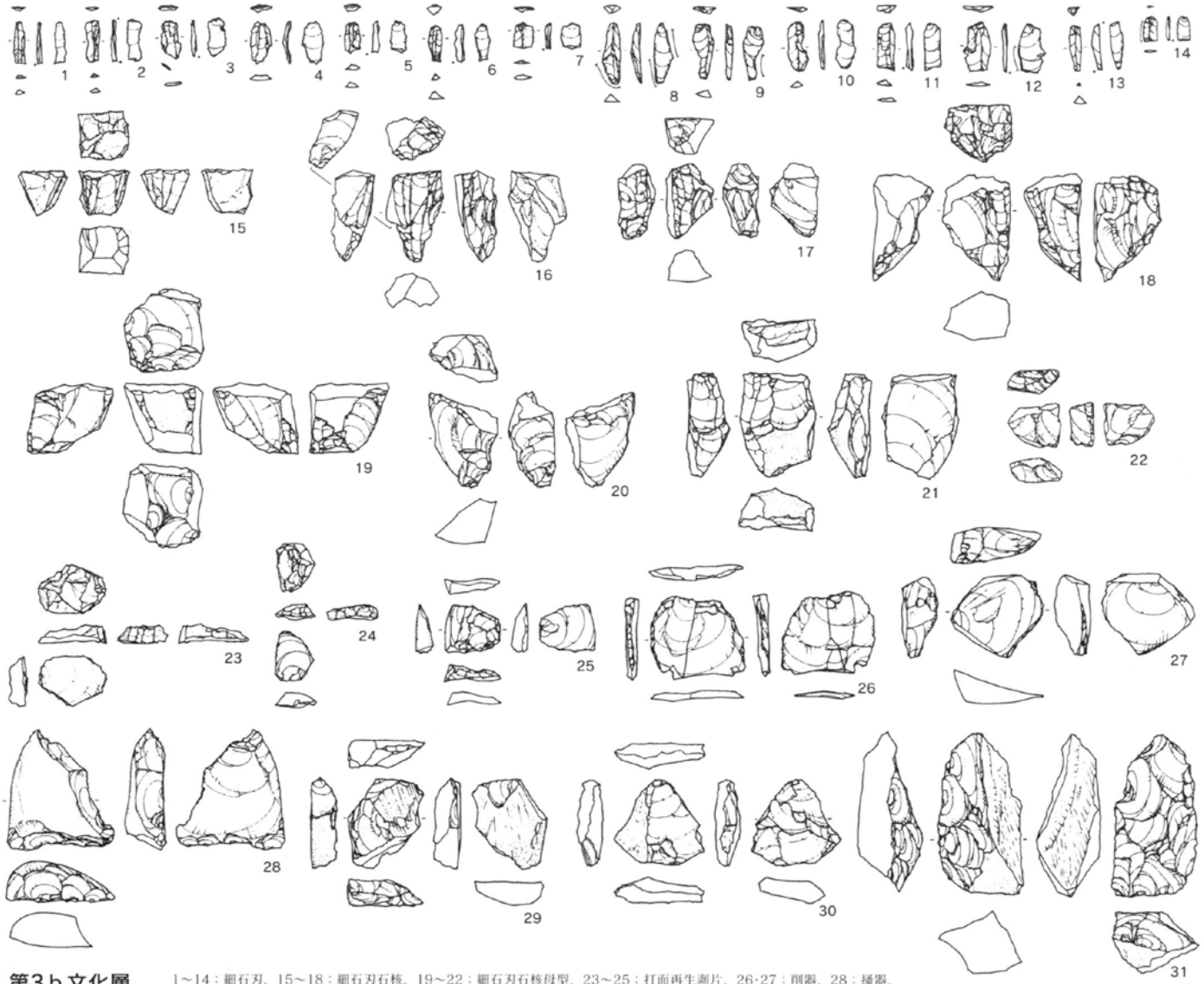
第1文化層 ②

1：凝灰、2～4：石斧、5：台形様石器、6～10：楔形石器、11：掻器、12～17：削器、18：影刃刀形石器
(1：砂岩、2・4：凝灰岩、3：ホルンフェルス、5・7・8・16：安山岩、6：黒曜石、9・11・17・18：珪質頁岩、10・12・13・15：メノウ、14：石英)



第3ａ文化層

1～20：ナイフ形石器、21～23：尖頭器（23未製品）、24～28：影刃刀形石器、29：掻器、30～33：削器、34：石斧、35：石刃
(1・4・12・22：黒曜石、2・3・6・24：珪質頁岩、5・7・23・30・31：安山岩、8・9・13～20・25～29・32・35：メノウ、10・11：頁岩、21・33：凝灰岩、34：ホルンフェルス)



第3ｂ文化層　1～14：細石刃、15～18：細石刃石核、19～22：細石刃石核母型、23～25：打面再生剥片、26･27：削器、28：掻器、29･30楔形石器、31：斧形石器（1～13･15～20･22･24･25･27･28･31：珪質頁岩、14：黒曜石、21･23：流紋岩、29：チャート、26･30：安山岩）

分布図番号：125

古込遺跡

成田市古込字古込〔取香川水系〕

層位　Ⅸ層
時期　印旛Ⅲb期
概要　遺跡は根木名川の支流取香川上流左岸の支谷に西面している。土気－銚子分水嶺が走る台地上に立地しており、周辺には取香和田戸遺跡、東峰御幸畑東遺跡、東峰御幸畑西遺跡が支谷を挟んで立地する。どの遺跡も旧石器時代の資料が豊富に出土しており、空港周辺の旧石器時代を語るには不可欠な場所と言える。標高約40mの台地上に立地する。出土遺物は34点と小規模であるが、当時南関東初の局部磨製石斧が検出された遺跡ということもあり、平成8年3月に千葉県有形文化財に指定されている。

下層から検出された遺物は33点であり、詳細はナイフ形石器1点、石錐1点、石刃3点、楔形石器3点、石核4点、局部磨製石斧1点、使用痕のある剥片5点、剥片11点ほかである。主な石材としては流紋岩、メノウ、安山岩、珪質頁岩、ホルンフェルスとなっている。

〔◎参考文献：古内茂他1971、田村隆2000g　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘〕



1：局部磨製石斧、2：ナイフ形石器、3･4：石刃、5･6：楔形石器、7～9：使用痕のある剥片、10：石核、11：石錐
（1：ホルンフェルス、2：安山岩、3･6･7：流紋岩、4･5･8･10･11：玉随、9：黒色頁岩）

分布図番号：190

木戸先遺跡

四街道市鷹の台2丁目〔鹿島川水系〕

概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ鹿島川の右岸に位置する。鹿島川は下総台地の中心付近に端を発し、佐倉市を縦断し北流する河川である。下総台地の中心とは東京湾－太平洋分水嶺と上気－銚子分水嶺が交わる場所であり、この交点から河川が利根川水系、東京湾水系、太平洋水系に分かれる。分水嶺上は人が行き交う場所として考えられており、そのような地理的条件から木戸先遺跡も鹿島川最奥部付近の分水嶺上近くに営まれたと考えられる。標高約30mの舌状台地上の西側縁辺部に立地している。遺跡からは多量に石器が出土しているが、その大半が縄文時代の遺物包含層中から出土した一括遺物であり、文化層ごとに分離することは困難である。その様な状況のなか部分的にではあるが、出土地点が明らかなものも含まれている。文化層として扱うにはやや危険が伴うため、特徴的な石器を一まとめにしてとらえてゆく。

第1群をナイフ形石器と東内野型尖頭器石器群、第2群を北方系削片系細石刃石器群、第3群を槍刃と尖頭器石器群とする。

第1群〔印旛Ⅶ期3群〕

標識遺跡は富里市東内野遺跡である。どちらかの一側縁が有肩を呈し、樋状剥離を施されたものを東内野型尖頭器と呼んでいる。他に印旛村平賀一ノ台遺跡、銚子市三崎3丁目遺跡などで多くの東内野型が出土している。当遺跡も比較的まとまった量が出土しており、印旛郡の南部における当概期の様相を把握するには重要な遺跡となる。

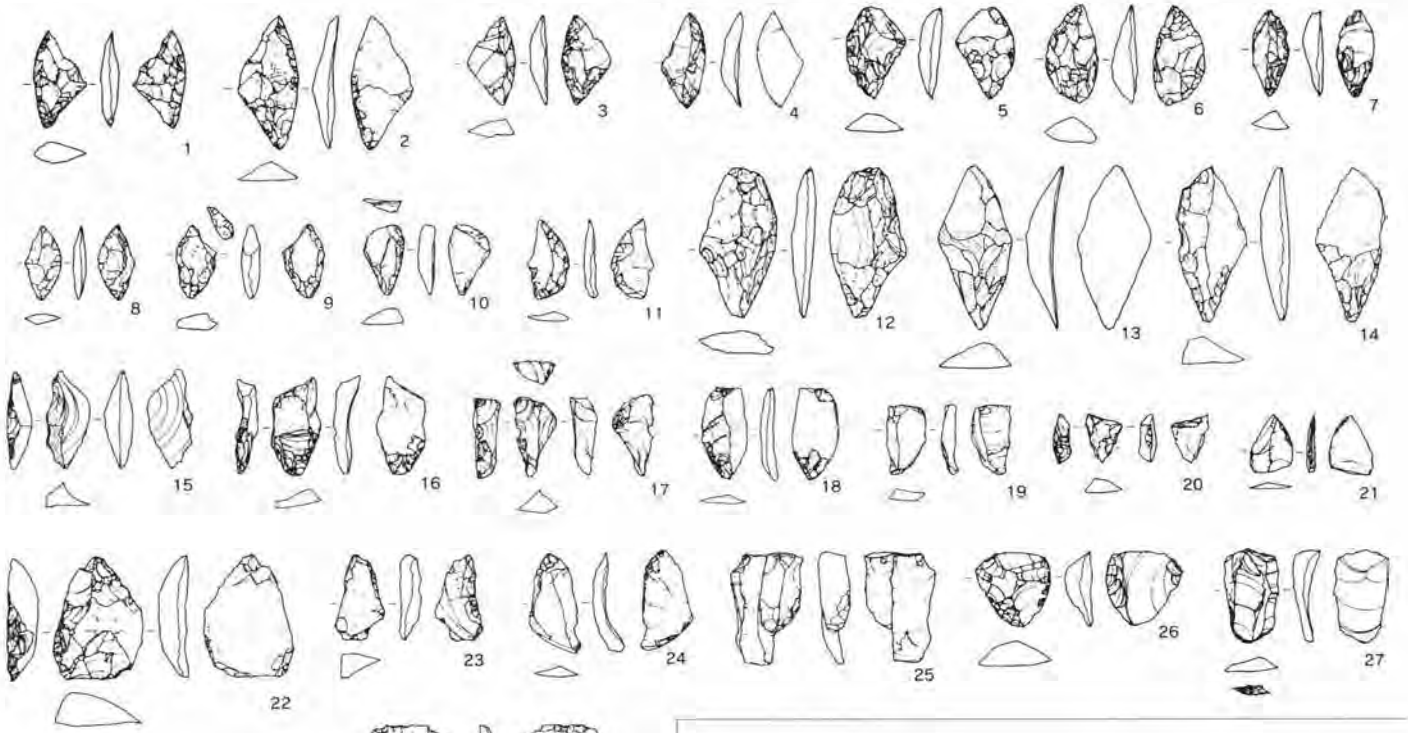
第2群〔印旛Ⅹ期2群〕

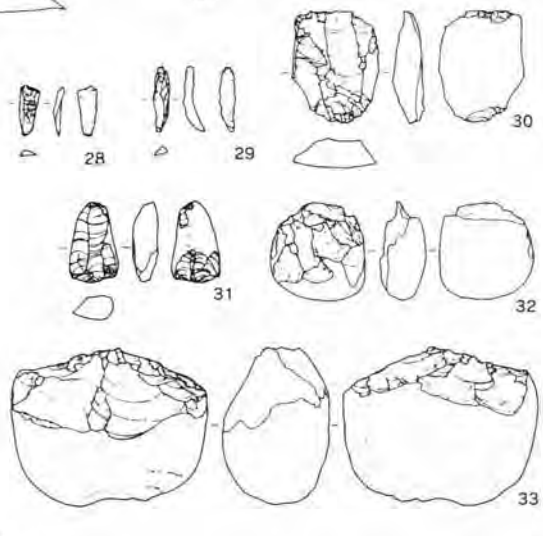
北方系削片系細石刃石器群は当遺跡以外に高岡大山遺跡、高岡大福寺遺跡、木戸場遺跡A地点などで確認されている。この3遺跡から出土している細石刃石核の形態は木葉形尖頭器を分割したものととらえられるが、木戸先遺跡のものは船底状を呈している。この形態は新潟県荒屋遺跡から出土しているものの範疇に含まれよう。この細石刃石器群は荒屋系の系譜を担うものと解することができるかもしれない。

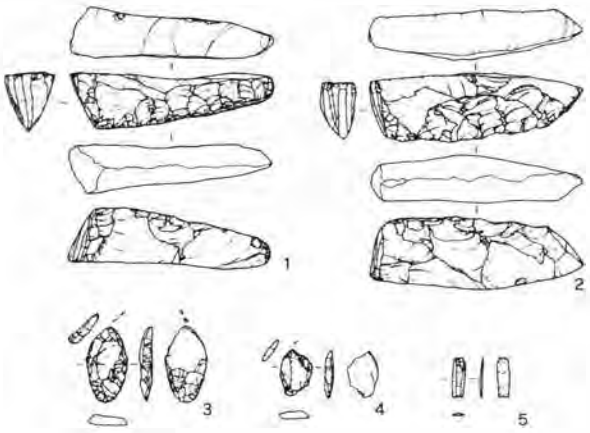
第3群〔印旛Ⅺ期〕

後期旧石器時代終末期に位置づけられる一群である。ナイフ形石器群と細石刃石器群の橋渡しをする尖頭器石器群とは異なるため、「神子柴・長者久保文化期」に比定される尖頭器石器群として区別される。同じ内容の遺跡は千葉市弥三郎第2遺跡、富里市南大溜袋遺跡が挙げられる。第3群についてはその大半が原位置を保っている。

〔◎参考文献：林田利之他1994、林田利之2000　◎保管場所：四街道市教育委員会〕



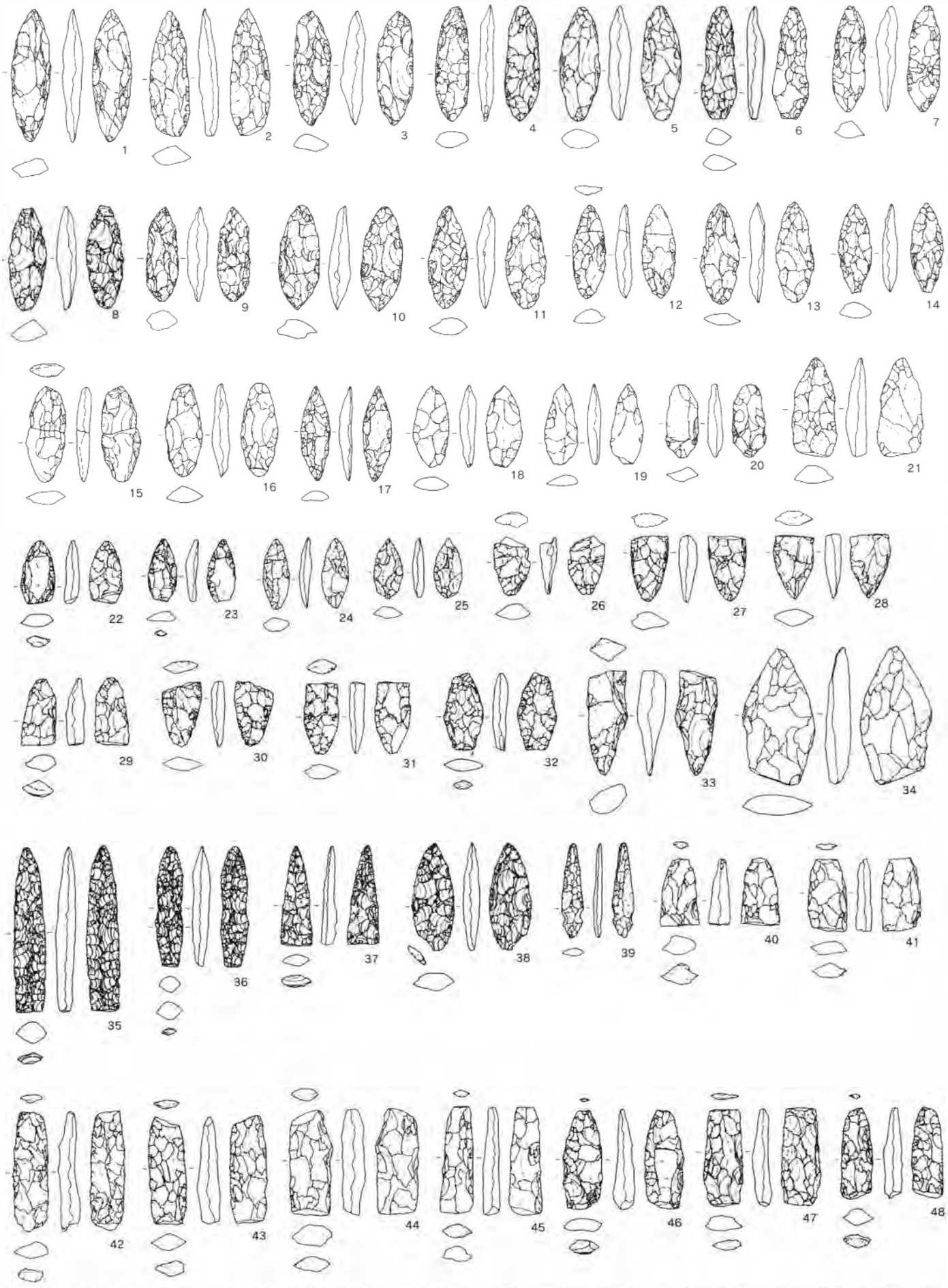




第2群　1·2：細石刃石核、3·4：彫刻刀形石器、5：細石刃（1～5：共晶貫岩）

第1群

1～14：東内野型尖頭器、15～21：ナイフ形石器、22·23：削器、24～27：掻器（25：接合資料）、28·29：剥片、30·31：楔形石器、32·33：石核
（1·3·4·11·15～17·19～21·24～31：チャート、2·5～7·18·22·32·33：頁岩、8·9·12·13：安山岩、10：凝灰質頁岩、14：凝灰岩、23：黒曜石）



第3群
88

1～39：尖頭器、40～48：植刃（1･3･6･10･14･19･22･31･33･40･42：凝灰岩、2･7：緑色凝灰岩、4･9･11･20：凝灰質頁岩、5･12･13･15～18･21･24～29･34･39･43･45･46･48：安山岩、8･35～38：頁岩、23･30･32：チャート、41･47：ホルンフェルス、44：砂岩）

分布図番号：192

御山遺跡

四街道市物井字御山〔鹿島川水系〕

概要　遺跡は鹿島川の支流により開析された小支谷の最奥部左岸、標高約30m前後の台地上に立地する。26カ所のブロックから総数約1,400点余が検出されており、これらは第Ⅰ文化層（X層下位）、第Ⅱ文化層（X層上位）、第Ⅲ文化層（IX層下位）、第Ⅳ文化層（IX層上位）、第Ⅴ文化層（Ⅶ層上位）、第Ⅵ文化層（Ⅵ層）、第Ⅶ文化層（Ⅵ～Ⅴ層）、第Ⅷａ文化層（Ⅲ層下位）、第Ⅷｂ文化層（Ⅲ層）の9枚の文化層に分けられる。中でも第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅷａ・Ⅷｂ文化層が内容的に充実した資料となっており、特に県内最古級の環状ブロック群あたる第Ⅱ文化層の第2ブロックは注目される。

第Ⅰ文化層〔印旛Ⅰ期〕
小規模なブロックが1カ所検出されているのみで、石器組成は二次加工のある剥片1点、剥片2点、礫片3点である。二次加工のある剥片は「初期台形様石器」としてとらえることができるものであり、礫片の中には一部使用痕の認められるものも存在する。剥片剥離技術は不明確な点が多いが、横長剥片剥離技術が主体であったと考えられる。石材はチャート、珪質粘板岩、砂岩が使用される。

第Ⅱ文化層〔印旛Ⅱ期〕
計2ブロックから総数505点の石器が検出されている。このうち第2ブロックは487点・11カ所の石器集中地点から構成される南北21m、東西22mの環状ブロック群である。第2ブロックの石器組成は剥片製小型尖頭器3点、台形様石器21点、削器4点、楔形石器8点、石錐3点、石刃8点、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片67点、石斧2点、石核31点、剥片・砕片331点、礫9点である。主要器種である台形様石器には逆台形を呈するものと小型の縦長剥片を横位に用いその末端あるいは頭部に調整を加える特徴的なものとの2種が認められる。また剥片製小型尖頭器が組成に含まれる点についても今後注意を要するものである。剥片剥離技術には各種の横長剥片剥離技術が主体として見られているが、石刃石核は認められない。検出されている石刃は全て搬入された客体的存在としてとらえられる。石材は珪質頁岩・珪質凝灰岩・黒色ガラス質安山岩を主体として他に粘板岩、流紋岩、メノウ、黒曜石が見られ、中でも珪質頁岩・珪質凝灰岩は台形様石器・剥片製小型尖頭器との結びつきが認められている。

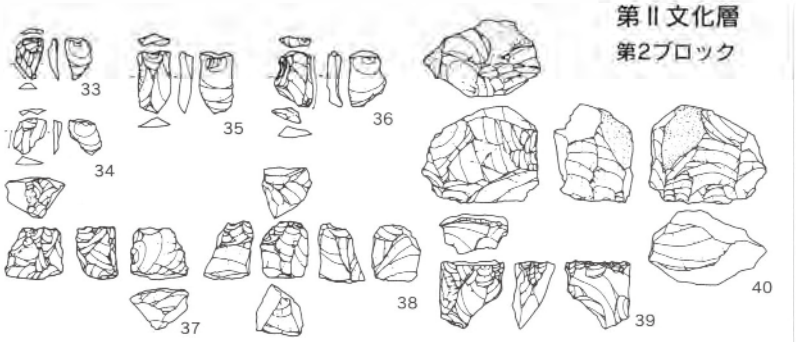
第Ⅴ文化層〔印旛Ⅳ期1群〕
小規模なブロック4カ所から総数21点が検出されているのみである。石器組成はナイフ形石器1点、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片5点、石刃11点、剥片・砕片4点である。この中で特徴的なのが第10ブロックより大型石刃がまとまって検出されたことである。全て同一母岩の黒色ガラス質安山岩製で出土状況より石刃の「貯蔵場所」であったと考えられる。これらは両設打面の石核を用い、平坦打面から連続的に大型石刃を作出する工程が認められており、また同様の石刃は第11ブロックにおいても1点検出されている。石材は黒色ガラス質安山岩の他は珪質頁岩、粘板岩、メノウ等が用いられている。

第Ⅷａ文化層〔印旛Ⅸa期〕
Ⅲ層からの出土が見られた第Ⅷ文化層はⅢ層下位から出土した第Ⅷａ文化層とそれよりやや上位から出土する第Ⅷｂ文化層の2枚に細分される。第Ⅷａ文化層は計2ブロックから総数379点の石器が検出されているが、そのほとんどが第20ブロック出土のものになる。石器組成は尖頭器15点、掻器1点、削器1点、彫刻刀形石器1点、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片8点、削片7点、石刃2点、剥片17点、砕片311点、礫16点であり、また砕片のほとんどは尖頭器調整剥片である。尖頭器には樋状剥離を有する男女倉型尖頭器の他、樋状剥離を有さないものも認められるが、これらは形態的には東内野型尖頭器に類似する。剥片剥離技術には石刃技法を主体としていた様相が認められる。石材は8割以上が黒曜石によって占められており、他に珪質頁岩、黒色ガラス質安山岩、流紋岩、メノウ等が見られているが、検出されている尖頭器の全ては黒曜石によって、その他掻器・削器・彫刻刀形石器については珪質頁岩によって製作されている。

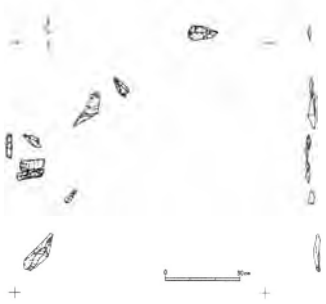
第Ⅷｂ文化層〔印旛Ⅸc期〕
計5ブロックから総数168点の石器が検出されている。石器組成はナイフ形石器9点、台形石器1点、削器3点、石錐1点、彫刻刀形石器2点、楔形石器1点、石刃14点、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片14点、石核4点、剥片・砕片108点、礫11点である。ナイフ形石器は石刃を素材とした中型～小型の二側縁加工のものが中心である。また石刃は折断されたものが多く認められ、植刃として使用された可能性が高い。剥片剥離技術は石刃技法が中心ではあるが、一部に横長剥片剥離技術も認められる。石材は珪質凝灰岩を中心に珪質頁岩、チャート、黒色ガラス質安山岩、流紋岩、黒色頁岩、石英、珪質粘板岩等多様な石材が使用されている。

〔◎参考文献：矢本節朗他1994　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



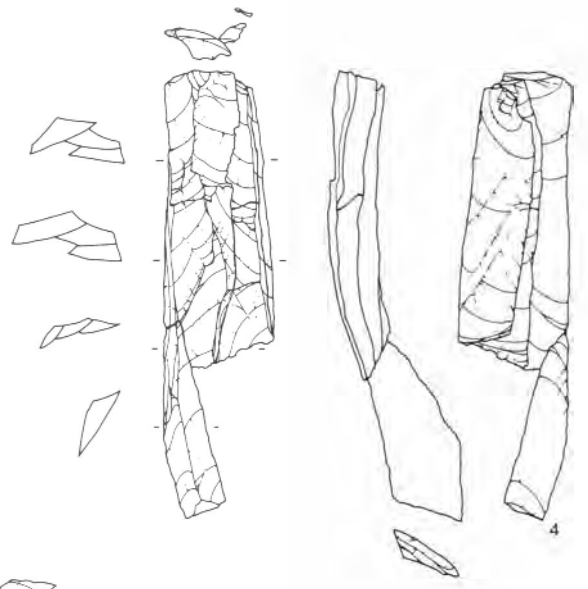


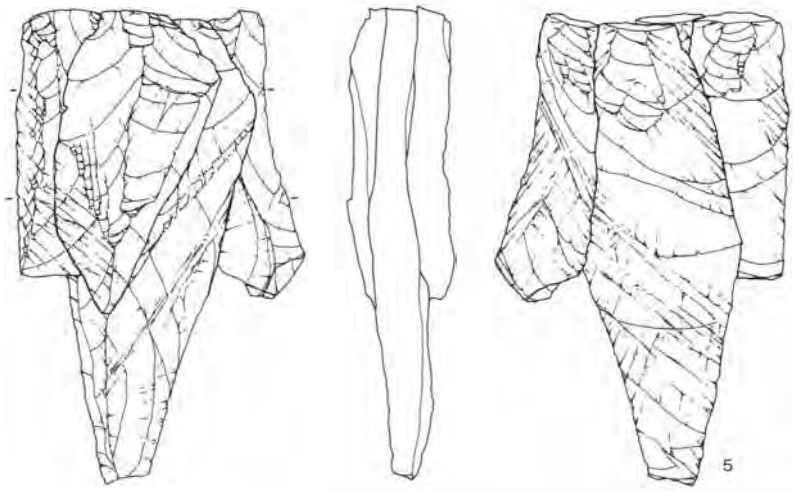
33～36：使用痕のある剥片、37～40：石核（33～35·37～39：珪質凝灰岩、36：メノウ、40：黒色ガラス質安山岩）



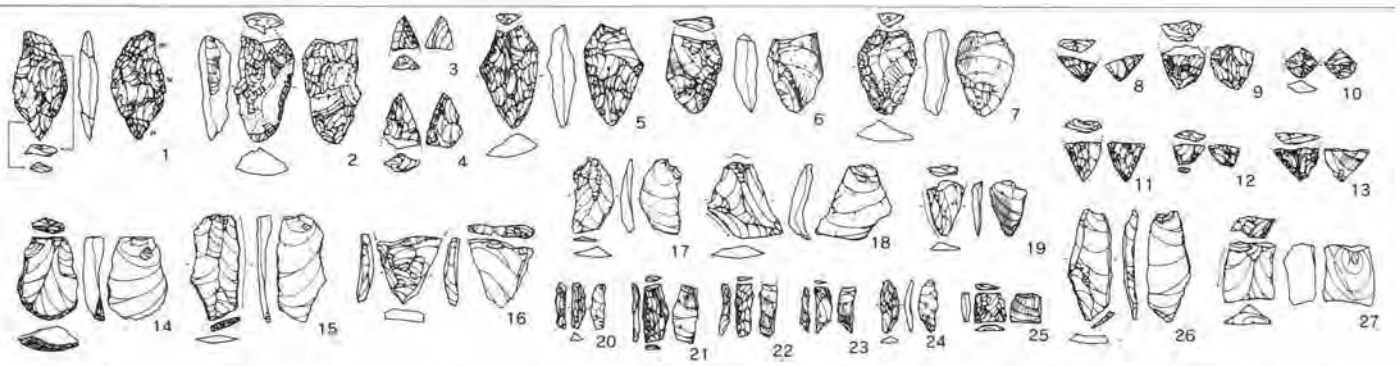
第10ブロック石刃出土状況



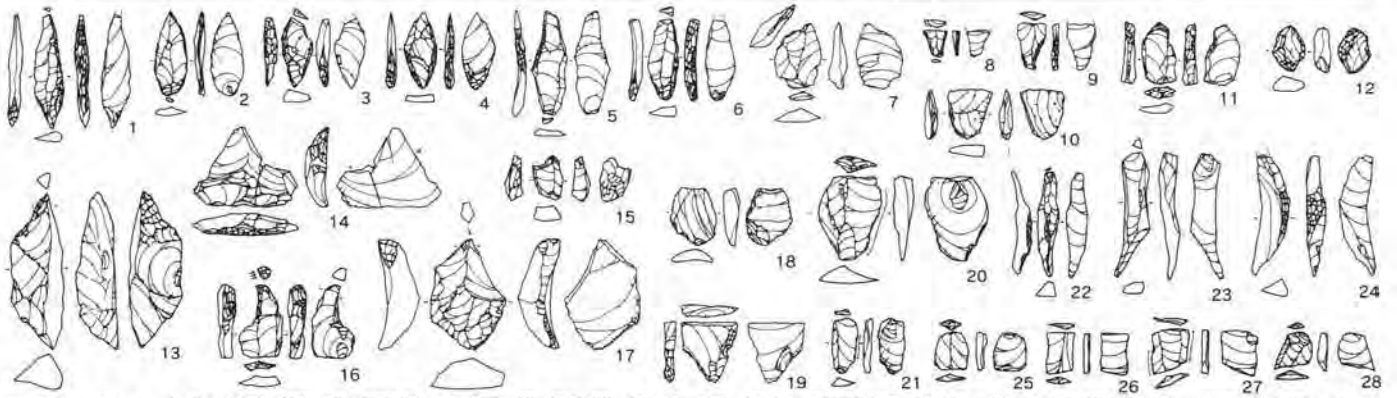




第Ⅴ文化層　1：ナイフ形石器、2·3：石刃、4·5：石刃接合資料
（1：粘板岩、2～5：黒色ガラス質安山岩）



第Ⅷa文化層　1～13：尖頭器、14：掻器、15：削器、16：彫刻刀形石器、17～19：使用痕のある剥片、20～25：剥片、26·27：石刃（1～13·19～25：黒曜石、14～18·26·27：珪質頁岩）



第Ⅷb文化層　1～9：ナイフ形石器、10：台形石器、11：石錐、12：楔形石器、13～15：削器、16·17：彫刻刀形石器、18·19：二次加工のある剥片、20·21：使用痕のある剥片、22～28：石刃（1～3·9·13·27：珪質頁岩、4：メノウ、5：碧玉、6～8·11·14～17·19·20·22·23·25·26：珪質凝灰岩、10：黒曜石、12·28：石英、18：細粒凝灰岩、21·24：流紋岩）

分布図番号：200

池花遺跡

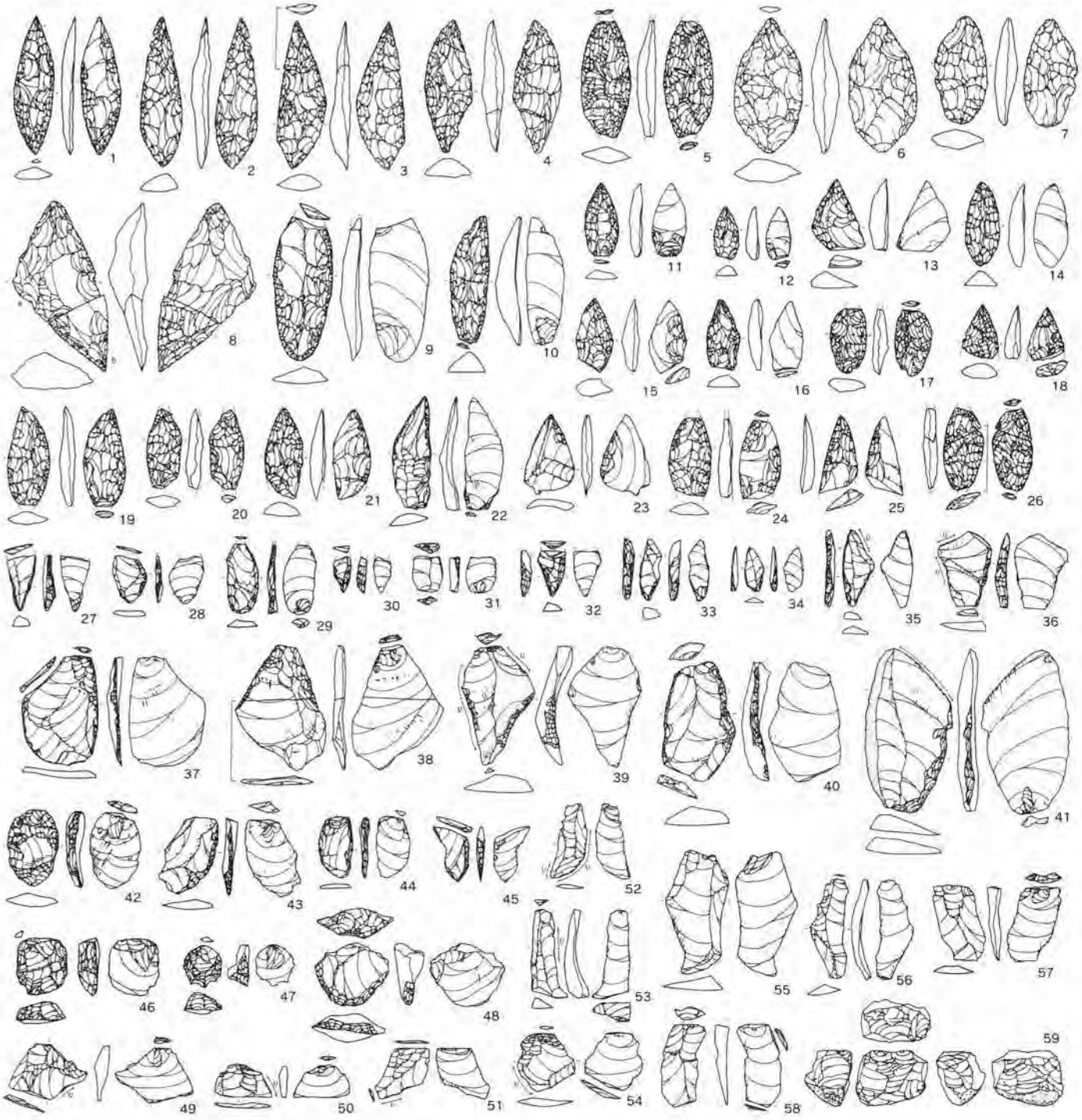
四街道市内黒田字池花〔手繰川水系〕

概要　遺跡は北流して印旛沼に注ぎ込む手繰川最上流の支谷に面した標高約26～27ｍの台地上に立地する。13カ所のブロックから総数約1,200点余が検出されており、これらは第1文化層（Ⅵ層）、第2文化層（Ⅳ・Ⅴ層）、第3文化層（Ⅲ層上位）の3枚の文化層に分けられる。中でも第3文化層は1,100点をこえる資料が出土が見られ、本遺跡の中心的文化層として注目される。

第3文化層〔印旛Ⅸc期〕

南北約80ｍ、東西約40ｍの範囲から計10カ所のブロックが検出され、総数1,117点の石器が出土している。石器組成は尖頭器44点、ナイフ形石器11点、掻器5点、削器11点、楔形石器1点、二次加工のある剥片8点、使用痕のある剥片25点、石核5点、剥片27点、調整剥片（砕片）973点、礫7点である。尖頭器には周縁加工、片面加工、半両面加工、両面加工のものが存在し、このうち半両面、両面加工のものが主体的位置を占める。片面加工のものは中型～小型品が多い。ナイフ形石器は石刃素材の二側縁加工のものが中心である。剥片剥離技術は両設打面で頭部調整・打面調整を顕著に行う石刃技法が中心であったようであるが、横長剥片剥離技術も認められている。石材は珪質頁岩、黒曜石が大半を占め、その他にオパール、凝灰岩、黒色ガラス質安山岩、チャート、流紋岩、メノウ、細粒凝灰岩が若干見られる。尖頭器には珪質頁岩、黒曜石、オパールが中心に、ナイフ形石器には細粒凝灰岩が中心に使用されており、石材選択の意図が認められる。

〔◎参考文献：渡辺修一1991　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘他〕



1～26：尖頭器、27～36：ナイフ形石器、37～45：削器、46～48：掻器、49～54：使用痕のある剥片、55～58：石刃、59：石核　1・4・8～10・14・19～25・27・37～40・44・45・50～52・54～58：珪質頁岩、5・17・18・26・42：黒曜石、6・12・43：黒色ガラス質安山岩、7：流紋岩、11・13・15・16・28・41・46～49・59：オパール、29：メノウ、30～35・53：細粒凝灰岩、36：チャート

分布図番号：201

池花南遺跡

四街道市内黒田字池花［手繰川水系］

概要　遺跡は北流して印旛沼に注ぎ込む手繰川最上流の支谷に面した標高約26～27mの台地上に立地する。第1文化層（Ⅸ層下部），第2文化層（Ⅳ層）、第3文化層（Ⅲ層上部）の計3枚の文化層が確認されており，中でも環状ブロック群が検出され、県有形文化財（考古資料）に指定されている第1文化層、竪穴遺構が検出された第2文化層が注目されている。

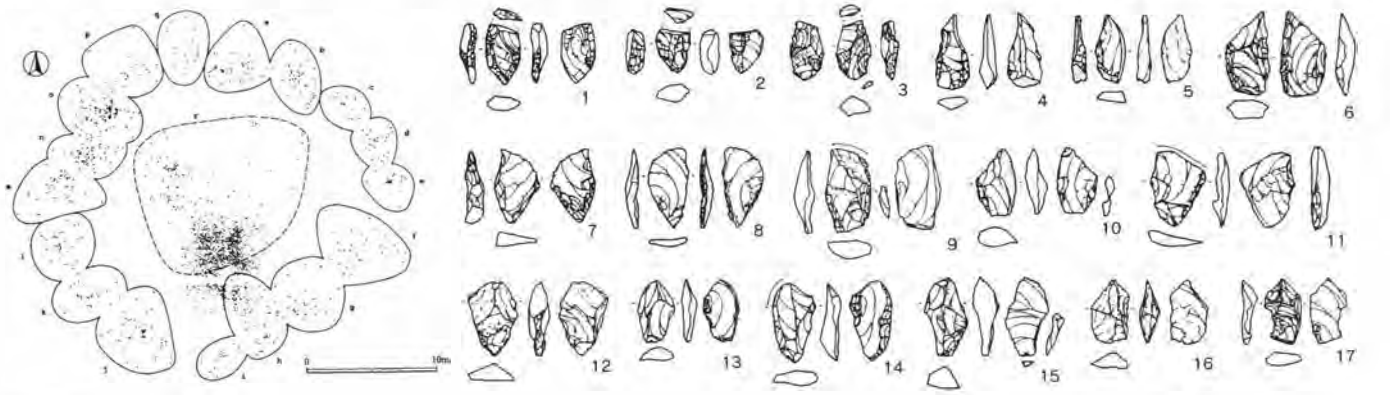
第1文化層［印旛Ⅲa期］

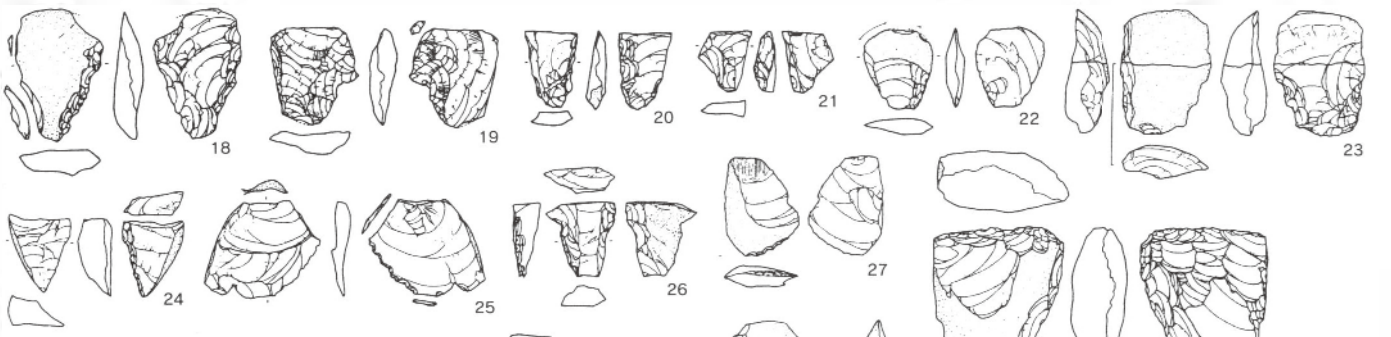
17カ所のブロックから構成される環状ブロック群が1基検出されている。規模は東西30.5m、南北28.5mを測る。また中央部には炭化物片集中地点も認められている。総数740点の石器が出土しており，石器組成はナイフ形石器（5点）、台形様石器（28点）、削器（4点）、楔形石器（1点）、局部磨製石斧（1点）、敲石（3点），二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、折断剥片、石核、剥片、砕片、礫である。主要器種である台形様石器は、打面と作業面の転位を頻繁に行いながら剥片剥離が進行する石核より作出された小型貝殻状剥片を素材とする。これらは形態的に見ていくつかに分類することができ、機能的な使い分けが行われていたものと推定されている。石材は黒色ガラス質安山岩、珪質頁岩、チャートを中心にメノウ、黒曜石、粘板岩、流紋岩、珪質凝灰岩等が用いられる。

第2文化層［印旛Ⅷ期］

竪穴遺構1基と遺構北東側から遺構内に流れ込むような状態で計30点の石器が検出されている。竪穴遺構は長径2.6m、短径2.2m、深さ0.4mの隅丸方形で、覆土中から多量の炭化物粒子も検出されている。この機能・性格についてはまだ不明確ではあるが，数少ない極めて信頼性の高い旧石器時代の遺構として特筆される。検出された石器の組成は尖頭器（1点）、削器（3点），二次加工のある剥片、剥片、砕片、焼礫で、石材は珪質頁岩、頁岩、粘板岩、砂岩、凝灰岩等が使用されている。

［◎参考文献：渡辺修一1991　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘他］



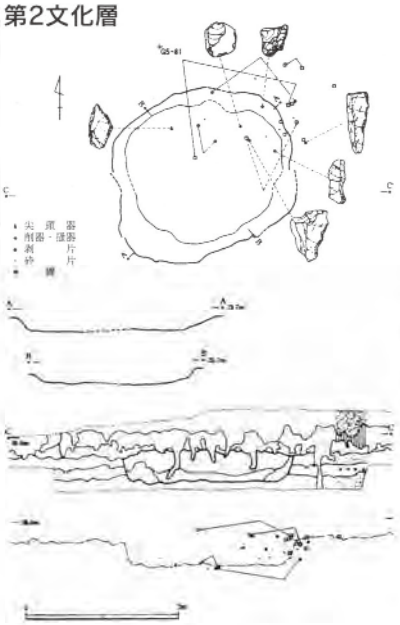


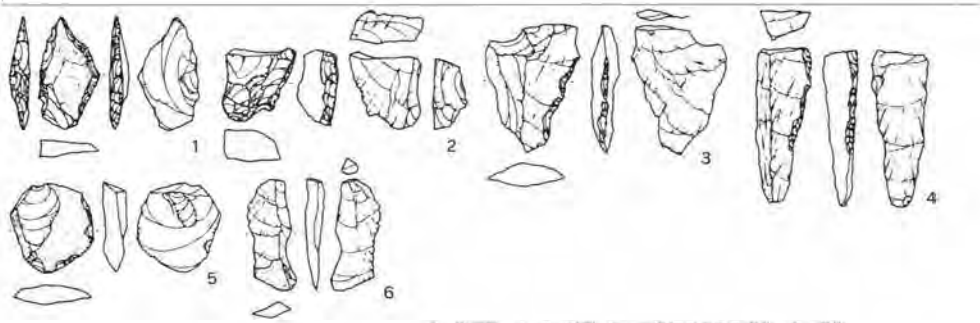


第1文化層

1～5：ナイフ形石器、6～23：台形様石器、24～27：削器、28：石斧、29：楔形石器、30・31：石槍
（1～3・19：黒曜石、4・6～11・14・15・20・21・23・25・26・29：珪質頁岩、18：チャート、
5・12・16・22・30・31：黒色ガラス質安山岩、13・17：珪質凝灰岩、24・27・28：粘板岩）

第2文化層





1：尖頭器、2～4：削器、5：二次加工のある剥片、6：剥片
（1・6：凝灰岩、2・3：粘板岩、5：頁岩、4：凝灰角礫岩）

分布図番号：193

出口・鐘塚遺跡

四街道市物井字出口〔鹿島川水系〕

概要　遺跡は北流して印旛沼に注ぐ鹿島川及びその支流により深く開析された台地の最奥部に位置し、南に張り出す標高約29mの舌状台地上に位置する。計21カ所のブロックから2,700点以上の石器が検出され、これらは第1文化層（Ⅸ層中位）、第2文化層（Ⅶ層）、第3文化層（Ⅵ層）、第4文化層（Ⅳ・Ⅴ層）、第5文化層（Ⅳ層上部～Ⅲ層）の5枚の文化層に分けることができる。いずれも良好な内容を示すが、特に第1文化層は検出ブロック数も多く、本遺跡の中心的存在になる。

第1文化層〔印旛Ⅲb期〕

計14ブロックから総数1,447点の石器が検出されている。そのうち集中4は南北25m、東西35mの環状ブロック群である。石器組成はナイフ形石器（12点）、台形様石器（17点）、削器（9点）、掻器（4点）、楔形石器（14点）、彫刻刀形石器（2点）、尖頭器（1点）、鋸歯縁石器（2点）、石斧（9点・調整剥片含む）、垂飾様石製品（2点）、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石刃、石核、剥片・砕片、礫器、敲石、礫と様々な器種が見られ、特に垂飾様石製品の検出は注目される。ナイフ形石器は加工が粗雑で素材形状をあまり修正しない部分加工のものが目立ち、台形様石器は横長剥片を横位に用いて様々な形態のものが製作されている。石斧には撥形・短冊形を呈する大型のものと楕円形を呈する中型のものが見られる。剥片剥離技術は横長・不定形剥片の作出を主とするもので、一部石刃技法による作業が行われていた痕跡も認められている。また、楔形石器の製作と結びつき、両極技法による剥片剥離技術も比較的多く存在している。石材はチャート、頁岩、黒色ガラス質安山岩を主体とし、これに少量の黒曜石、メノウ、凝灰岩、流紋岩、砂岩等が加わっている。

第2文化層〔印旛Ⅳ期1群〕

計3ブロックから総数50点が検出されている。石器組成はナイフ形石器（4点）、削器（2点）、楔形石器（2点）、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石刃、剥片・砕片である。ナイフ形石器は石刃を用いた大型のものが多く見られる。剥片剥離技術は石刃技法が主体である。石材は黒曜石、頁岩を主要石材とし、他にチャート、黒色ガラス質安山岩、凝灰岩が認められる。

第3文化層〔印旛Ⅴ期〕

計2ブロックから総数1,090点が検出されているが、そのほとんどがナイフ形石器の製作址である集中18から検出されたものである。石器組成はナイフ形石器（19点）、楔形石器（1点）、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、石刃、剥片・砕片で、主体となるナイフ形石器の大半は黒曜石の石刃を用いた中型～小型のものが占める。剥片剥離技術は石刃技法を主体とするが、出土している石刃等から素材原石はあまりサイズの大きくないものが想定され、その石材規制から様々な形態の剥片剥離も行われていたようである。石材は9割以上を黒曜石が占め、その他に頁岩、チャート、黒色ガラス質安山岩が用いられている。

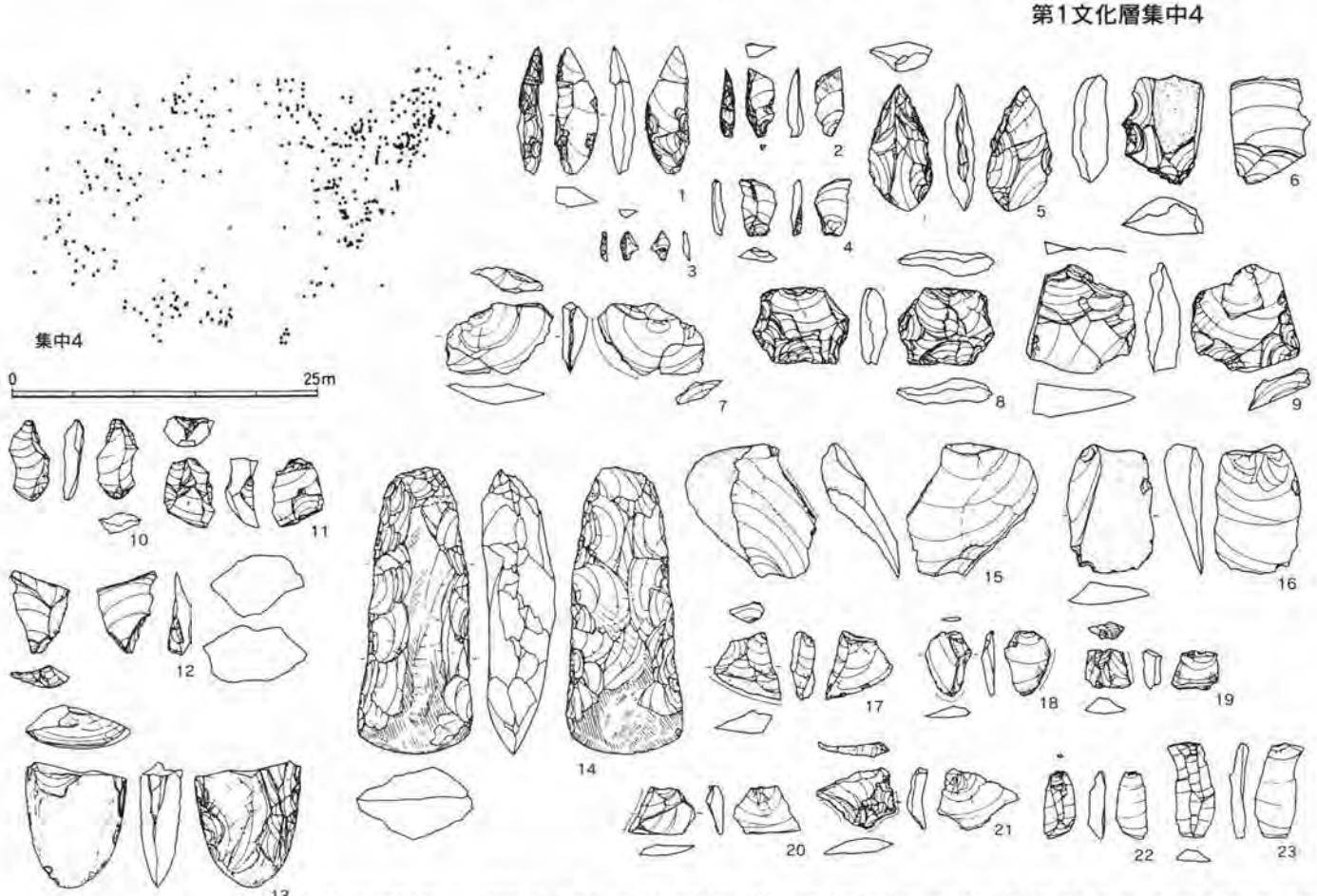
第4文化層〔印旛Ⅵ期〕

1カ所のブロックから総数75点が検出されている。石器組成はナイフ形石器（1点）、角錐状石器（2点）、掻器（1点）、鋸歯縁石器（1点）、石核、剥片・砕片、礫で、剥片剥離技術は横長剥片剥離技術を主とする。石材は黒曜石を中心に、チャート、黒色ガラス質安山岩、凝灰岩が用いられている。

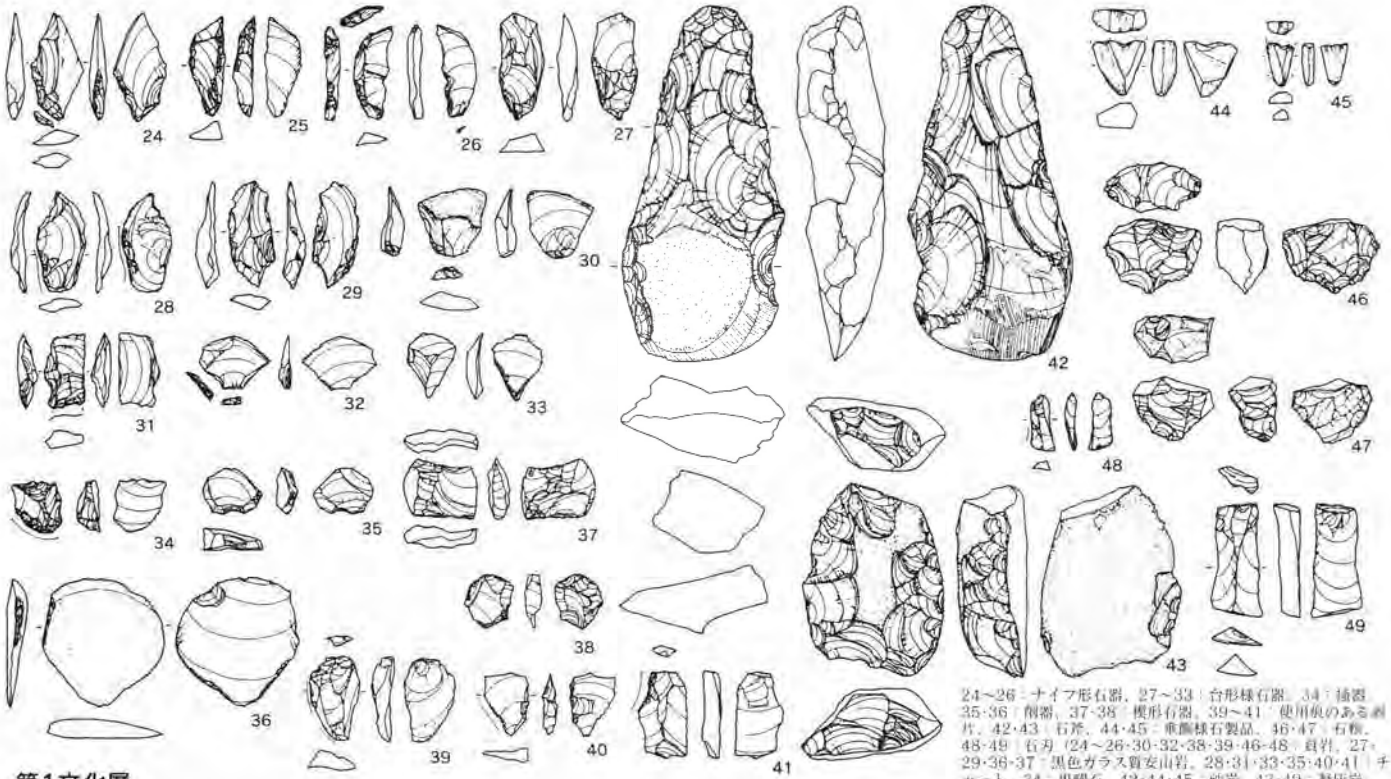
第5文化層〔印旛Ⅷ期〕

1カ所のブロックから総数65点が検出されている。石器組成は尖頭器（1点）、ナイフ形石器（1点）、掻器（1点）、削器（3点）、二次加工のある剥片、石核、剥片・砕片、敲石、礫である。尖頭器は樋状剥離を有する男女倉型で、ナイフ形石器は石刃素材の二側縁加工のもの。剥片剥離技術は出土点数が少ないため不明確であるが、石刃技法と横長剥片剥離技術とが見られるようである。石材は黒曜石、チャート、頁岩、黒色ガラス質安山岩、凝灰岩等が使用されている。

[◎参考文献：岡田誠造1999、矢本節朗2000　◎保管場所：千葉県文化財センター]

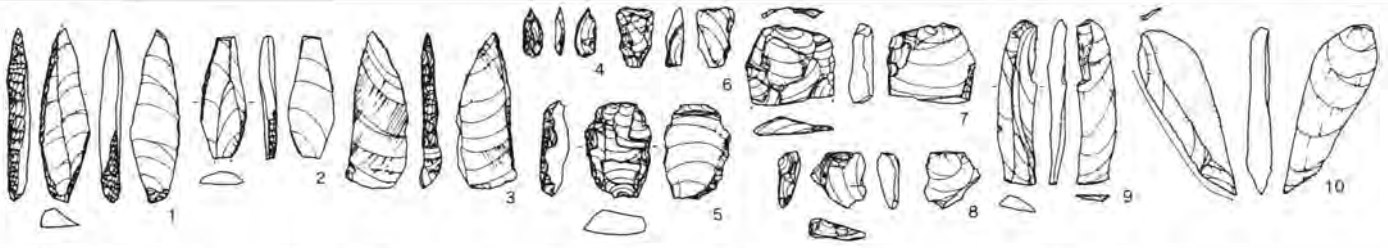


1～4・ナイフ形石器、5・尖頭器、6・7・削器、8～11・楔形石器、12・二次加工のある剥片、13・14・石斧、15～21・使用痕のある剥片、22・23・石刃
（1・6～12・16・17・20・22・23・頁岩、2～4・18・19・21・黒曜石、5・黒色ガラス質安山岩、15・チャート、13・14・砂岩）

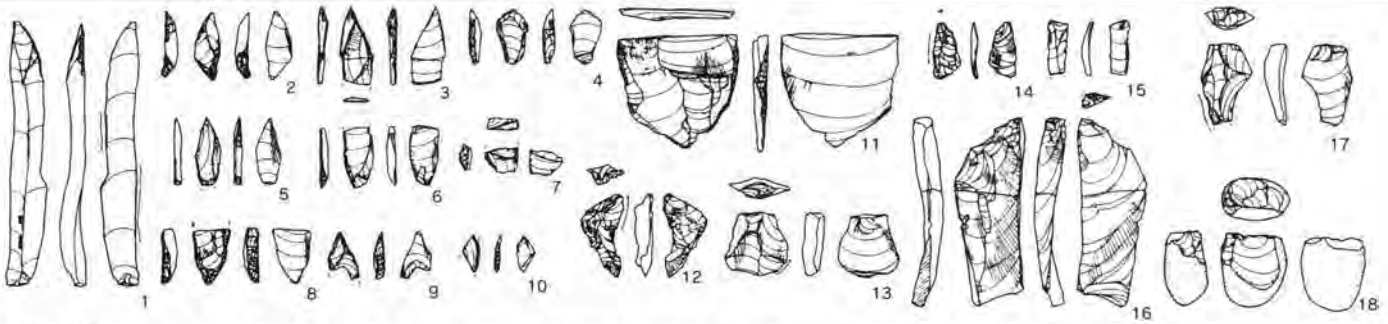


第1文化層

24～26：ナイフ形石器，27～33：台形様石器，34：掻器，35·36：削器，37·38：楔形石器，39～41：使用痕のある剥片，42·43：石斧，44·45：垂飾様石製品，46·47：石鏃，48·49：石刃（24～26·30·32·38·39·46·48：頁岩，27·29·36·37：黒色ガラス質安山岩，28·31·33·35·40·41：チャート，34：黒曜石，42·44·45：砂岩，43·49：凝灰岩，47：メノウ）



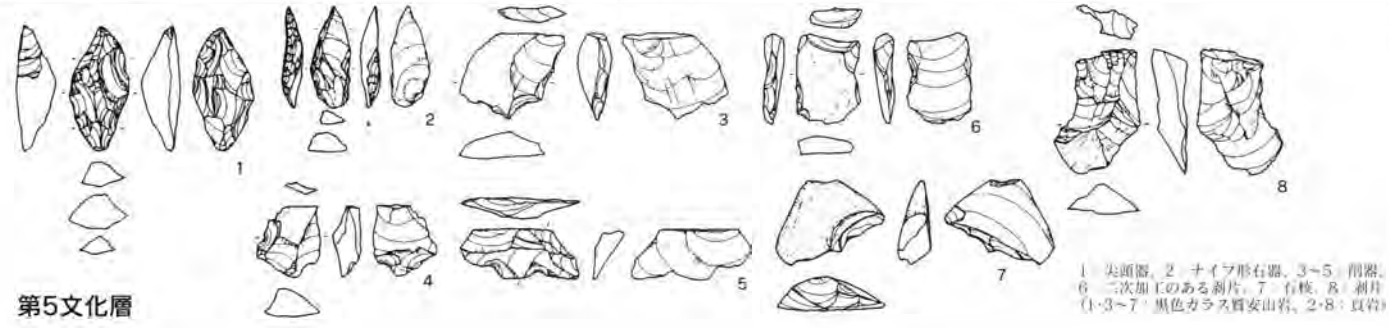
第2文化層　1～4：ナイフ形石器，5：削器，6·7：二次加工のある剥片，8：使用痕のある剥片，9·10：石刃（1·2·9·10：頁岩，3～7：黒曜石，8：凝灰岩）



第3文化層　1～10：ナイフ形石器，11：削器，12～14：使用痕のある剥片，15·16：石刃，17：剥片，18：石核（1：頁岩，2～17：黒曜石，18：チャート）



第4文化層　1·2：角錐状石器，3：掻器，4：細石刃石器，5·6：石核（1～6：黒曜石）



第5文化層

1：尖頭器，2：ナイフ形石器，3～5：削器，6：二次加工のある剥片，7：石核，8：剥片（1·3～7：黒色ガラス質安山岩，2·8：頁岩）

分布図番号：210

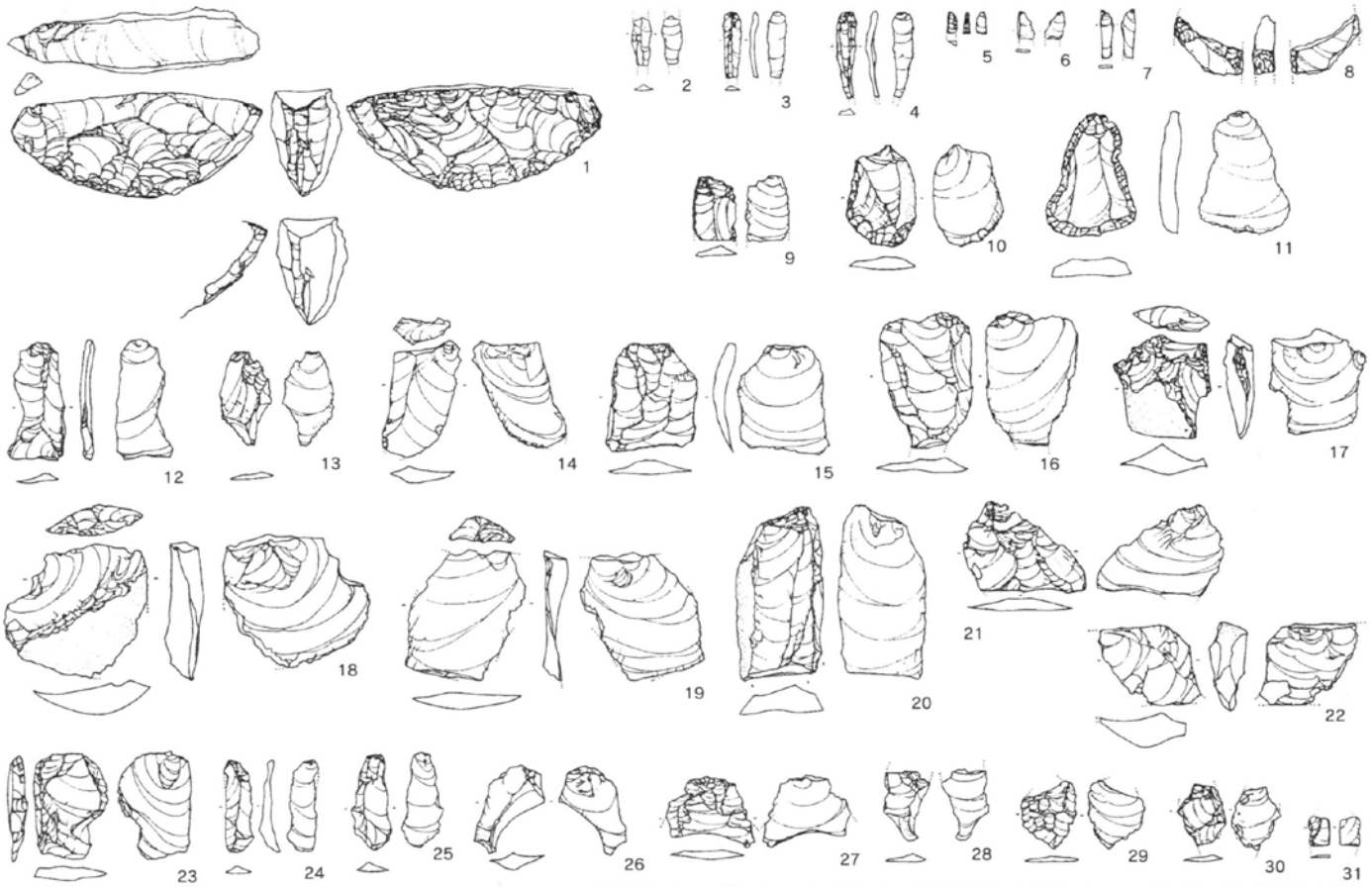
高岡大山遺跡

佐倉市上代字大山他〔高崎川水系〕

層位　Ⅳ下～Ⅴ、Ⅲ層
時期　印旛Ⅹ期2群
概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ鹿島川の支流にあたる高崎川の右岸に位置し、南側に逆Y字状に張り出す舌状台地上に立地する。台地の基部側に当たる北側では標高約34mであり、高崎側に面する台地先端では標高約28mを測る。遺物は標高約31mの南側緩斜面で検出されており、出土総点数は51点である。内容は北方系削片系細石刃石器群の第1群（37点）、Ⅳ下・Ⅴ段階の第2群（2点）、帰属不明（12点）となっている。

第1群の石器組成は細石刃石核1点、細石刃3点、削器1点、掻器2点、彫刻刀形石器1点、二次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片5点、剥片14点、砕片5点、削片3点であり、比較的利器が多く出土している。大半は遺構の覆土中のものであるが、下総台地において北方系削片系細石刃石器群が検出されている遺跡が少ないため、重要な遺跡と言えよう。遺跡内における剥片剥離作業の痕跡はあまり認められず、細石刃生産の痕跡も同様である。遺跡内に搬入される以前に既に上記の様な活動が行われていたことが考えられる。使用石材はすべて珪質頁岩であり、17母岩と識別不明に分類されている。同一母岩が少なく半数以上が単独母岩である。多くの母岩を保持しながら移動生活をおこなっていたと考えられる。石材の偏用が顕著な点がこの石器群の特徴と言える。

〔◎参考文献：阿部寿彦他1993b　◎保管場所：佐倉市教育委員会〕



1：細石刃石核、2～4：細石刃、5～7：削片、8：彫刻刀形石器、9：削器、10･11：掻器、12～16：使用痕のある剥片、17･20：二次加工のある剥片、18･19･21～31：剥片（1～31：珪質頁岩）
〔本書とびらにカラー図版（図1）掲載〕

分布図番号：209

高岡大福寺遺跡

佐倉市高岡字大福寺他〔高崎川水系〕

層位　Ⅲ層
時期　印旛Ⅹ期2群
概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ鹿島川の支流にあたる高崎川の右岸に位置し、南側に逆Y字状に張り出す舌状台地の基部付近に立地する。標高約33～34mの平坦面を中心に弥生時代以降の遺構が数多く展開している。遺跡の南側には高岡大岡山遺跡が隣接している。出土遺物は表面採集品と住居の覆土中から出土おり、原位置を保ってはいない。19号竪穴住居跡の覆土中ということが分かっており、この住居跡が位置するのは当遺跡の北端付近である。出土遺物は高岡大岡山遺跡で出土している、第1群の北方系削片系細石刃石器群と同じ石器群の資料である。2点のみの出土ではあるが下総台地でも類例の少ない石器群のため重要であるには違いない。出土遺物はやや大型の削片と細石刃剥離作業がある程度進んだ細石刃石核である。石材は2点とも珪質頁岩である。

〔◎参考文献：阿部寿彦他1993a　◎保管場所：佐倉市教育委員会〕



1：細石刃石核、2：削片　（1･2：珪質頁岩）
〔本書とびらにカラー図版（図1）掲載〕

分布図番号：242

内田端山越遺跡（クラブハウス）

佐倉市内田字端山越〔鹿島川水系〕

層位　Ⅲ層下部
時期　印旛Ⅸc期
概要　遺跡は印旛沼に注ぎ込む鹿島川東岸の標高35～40mの台地上、低地面との比高差約20mを測る南に面した台地縁辺のほぼ平坦部に立地する。計3カ所のブロックから総数633点（第1ブロック－15点、第2ブロック－528点、第3ブロック－90点）の石器が検出されており、現段階では未整理のため接合状況・母岩別分布状況等の詳細についてふれることはできないが、器種組成や主要石材から3カ所全て同一文化層のものとしてとらえることができる。また第2ブロックで2カ所、第3ブロックで1カ所、小規模ながら礫群が検出されている。石器組成は現在のところ尖頭器（12点）、ナイフ形石器（1点）、掻器（5点）、削器（5点）、彫刻刀形石器（1点）、石錐（1点）が確認でき、この他に石核、多量の尖頭器調整剥片、石刃、剥片、砕片が見られ、内容的には尖頭器製作址の様相を示す。尖頭器は片面加工を主体とするが、一部裏面基部加工が行われたものも存在する。形態的にも様々で、樋状剥離は見られないものの平面形が東内野型尖頭器に類似するものも認められその関係も視野に入れ考慮すべきところであろう。剥片剥離技術には石刃技法と横長剥片剥離技術の2者がほぼ同数ずつ見られるが、石刃石核の出土は見られていない。石材はその大半が信州産と思われる挟雑物の少ない漆黒～透明ガラス質の良質な黒曜石に占められており、尖頭器のほとんどはこの黒曜石によって製作されている点は注目される。その他にはチャート、メノウ、珪質頁岩、黒色ガラス質安山岩が若干見られるのみである。

下総台地の片面加工を主とする尖頭器石器群では良質な黒曜石を主要石材に用いたものはあまり見られず、今後本石器群は石材の供給システムや尖頭器の形態・組成・編年的様相を含め中部地域との関係を考慮する上で重要な資料になるものと考えられる。

〔◎参考文献：酒井弘志2001　◎保管場所：佐倉市教育委員会〕



1～12：尖頭器、13：ナイフ形石器、14～18：掻器、19～23：削器、24：彫刻刀形石器、25：石錐、26：石核、27～40：剥片類（1～17・21～40：黒曜石、18～20：メノウ）〔S＝2/3〕

分布図番号：256

御塚山遺跡

佐倉市上志津字御塚山〔手繰川水系〕

概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ手繰川の支流に位置しており、谷津頭を取り囲むようにブロックが認められる。台地の南東側では勝田川の支流が樹枝状に台地を刻む。標高約27mの平坦な台地状に立地し、沖積平野との比高差は2m前後となり、高低差がほとんどみられない地形となっている。当遺跡からは7地点、18カ所のブロックが検出されている。個々のブロックを検討すると3枚の文化層に分けることができる。

第Ⅰ文化層はⅢ層中から、第Ⅱ文化層はⅣ～Ⅴにかけて、そして第Ⅲ文化層はⅨ層中からそれぞれ検出されている。3枚の文化層の中で資料が最も充実しているのは第Ⅰ文化層である。同じⅢ層内からの出土であるが、実際は2期に細分される。第Ⅱ文化層は規模が小さいが、炉と考えられる焼土遺構が確認されている。第Ⅲ文化層も非常に規模の小さなものである。

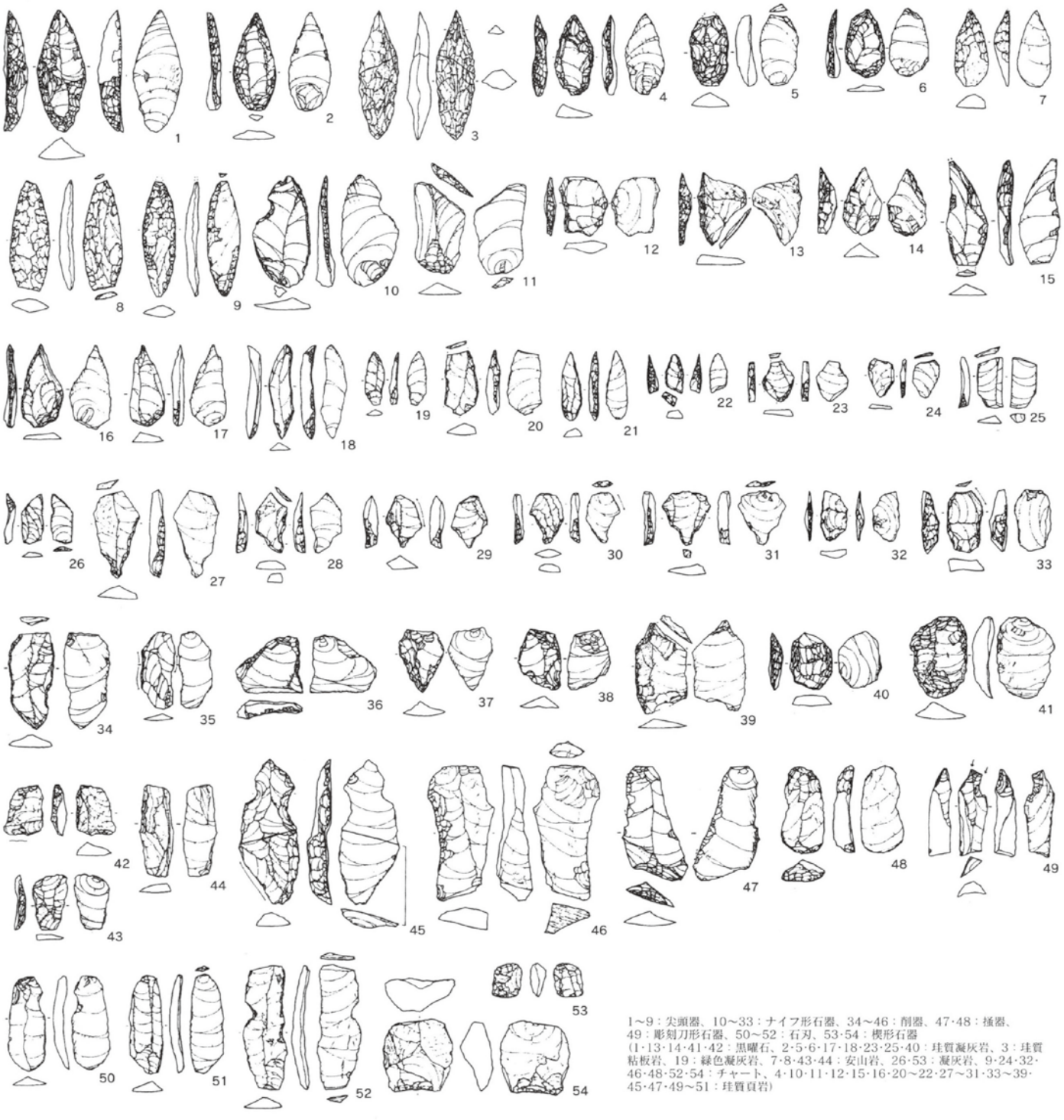
第Ⅰ文化層〔印旛Ⅸc期〕

第1～第9、第15～第18ブロックの13ヵ所が確認されている。その中でもナイフ形石器が主体となり、小型の尖頭器が客体的ではあるが組成に含まれる一群と尖頭器を伴わずナイフ形石器等の遺物から構成される一群に細分され、前者を第Ⅰ文化層ａ、後者を第Ⅰ文化層ｂとしている。

第Ⅰ文化層ａ　702点の遺物が確認されており、主な器種の石器組成は尖頭器16点、ナイフ形石器33点、削器14点、掻器2点、彫刻刀形石器2点、石刃3点、楔形石器7点、石核9点ほかである。

第Ⅰ文化層ｂ　115点確認しており、主な石器組成はナイフ形石器1点、石錐1点、削器3点、石核9点、細石刃石核1点ほかである。細石刃石核についてはこの石器群に入り込んでいる可能性がある。

〔◎参考文献：田村隆他1989、渡辺修一1991　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



1～9：尖頭器、10～33：ナイフ形石器、34～46：削器、47･48：掻器、49：彫刻刀形石器、50～52：石刃、53･54：楔形石器
(1･13･14･41･42：黒曜石、2･5･6･17･18･23･25･40：珪質凝灰岩、3：珪質粘板岩、19：緑色凝灰岩、7･8･43･44：安山岩、26･53：凝灰岩、9･24･32･46･48･52･54：チャート、4･10･11･12･15･16･20～22･27～31･33～39･45･47･49～51：珪質頁岩)

分布図番号：208

大林遺跡

佐倉市井野町字大林〔勝田川水系〕

概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ手繰川支流の最奥部に東面し、西側では勝田川の小支谷が台地を刻んでいる。ちょうど両河川の分水嶺上に遺跡が立地していることになる。地形は緩やかな景観を呈し、標高は25m前後を測る。遺跡では7枚の文化層が確認されており、周辺遺跡の時間的変遷を示す例として中心的な位置づけが与えられている。

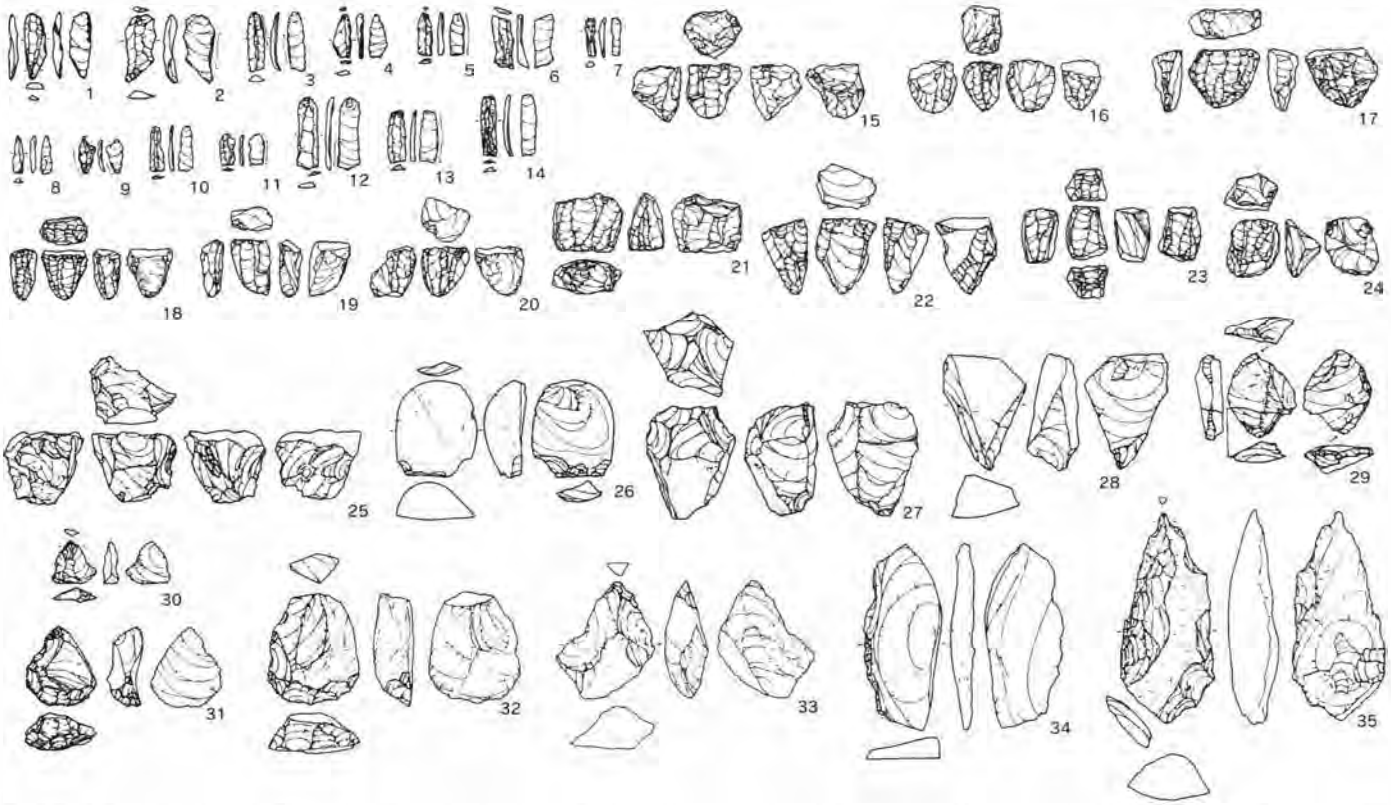
第Ⅰ文化層〔印旛X期1群〕
第1～第4ブロックの4カ所が検出されており、その中でも第1ブロックの内容は量・質共に突出している。出土層位はⅡ層からソフトローム層の漸移層付近に求められる。稜柱状の細石刃石核を主体とした石器群であり、全体で716点が検出されている。主要な石器は細石刃44点、細石刃石核33点、細石刃石核母型12点、石錐1点、削器類17点、彫刻刀形石器2点、楔形石器2点ほかである。主要な石材は安山岩261点、チャート125点、凝灰岩47点、珪質頁岩41点ほかである。

第Ⅱb文化層〔印旛IXa期〕
9～11ブロックの3カ所が検出されている。Ⅱ～Ⅲ層にかけて出土しているが、Ⅲ層の上部付近で最も遺物が多く出土する。遺物の出土点数は275点とそれほど多くはないが、小型の尖頭器が比較的まとまって認められる。主要な石器はナイフ形石器1点、尖頭器18点、削器類2点、彫刻刀形石器1点ほかである。主要な石材として黒曜石が挙げられ、全体の9割を占めている。

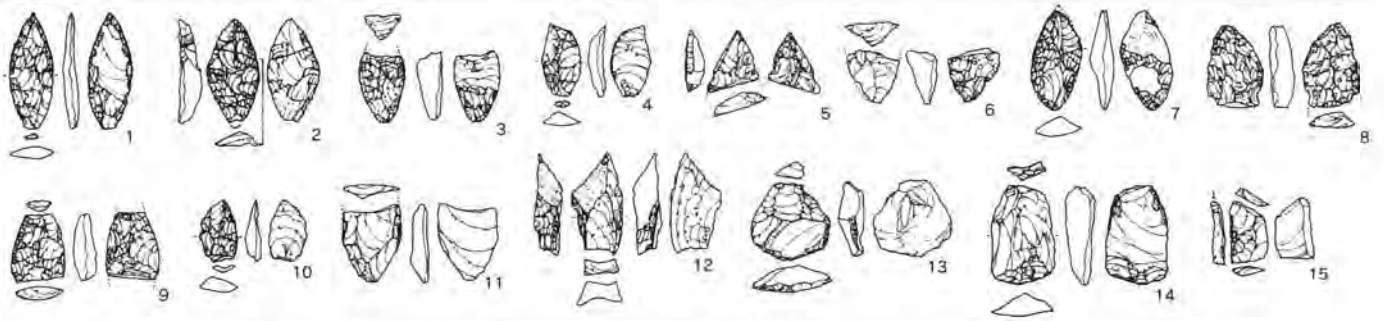
第Ⅳ文化層〔印旛VI期〕
21～37ブロックの17カ所が検出されており、Ⅳ下～Ⅴ層の間に遺物の出土層位が求められる。全体で1,066点の遺物が出土しているが、個々のブロックの出土点数はそれほど多くはなく、卓越したブロックもそれほど見受けられない。主な石器は角錐状石器1点、ナイフ形石器12点、削器類28点、楔形石器1点ほかであり、削器類が多いことがこの文化層の特徴と言える。主な石材は黒曜石554点、安山岩315点であり、この2つの石材で全体の8割強を占めている。

第Ⅵ文化層〔印旛Ⅳ期3群〕
39～41ブロックの3カ所が検出され、その中でも41ブロックはさらに16カ所の石器のまとまりに分けられている。第2黒色帯上部（Ⅶ層）から下部（Ⅸ層）にかけて、全体で538点の遺物が出土している。主な石器はナイフ形石器4点、削器類3点、石錐1点、楔形石器27点ほかである。主な石材は安山岩338点、流紋岩質凝灰岩80点、珪質頁岩57点、黒曜石25点ほかである。

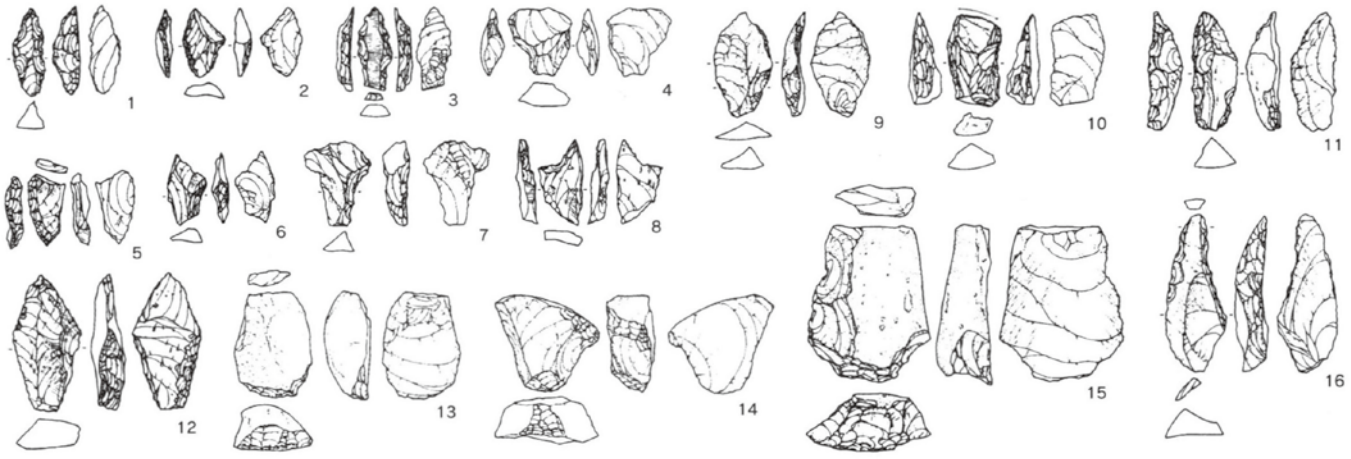
〔◎参考文献：田村隆他1989、田村隆2000h　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



第Ⅰ文化層　1～14：細石刃、15～24：細石刃石核、25～28：細石刃石核母型、29：彫刻刀形石器、30～35：削器類　（1～11・15～18・29：チャート、12・13・22・25・30：珪質頁岩、14・19～21・23・24・26～28：凝灰岩、31：珪質粘板岩、32～35：安山岩）



第Ⅱb文化層　1～11：尖頭器、12：ナイフ形石器、13・14：削器類、15：彫刻刀形石器（1・14：珪質頁岩、2～10・12・15：黒曜石、11：安山岩、13：凝灰岩）



第Ⅳ文化層　1：角錐状石器、2～6·9～12：ナイフ形石器、7·8·13～16：削器類（1：凝灰岩、2·4·7·9～11·13～16：安山岩、3·5·6·8·12：黒曜石）



第Ⅵ文化層　1～3：ナイフ形石器、4：石錐、5～11：楔形石器、12·13：削器（1·2·7～12：安山岩、3：黒曜石、5·6：珪質頁岩、13：流紋岩質凝灰岩、4：珪化木）

分布図番号：257

芋窪遺跡

佐倉市上志津字芋窪〔手繰川水系〕

層位　Ⅶ層
時期　印旛Ⅳ期3群
概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ手繰川支谷の最奥部付近の右岸に位置する。遺跡が立地する地形はなだらかに開けているが、勝田川の支谷や手繰川の別支谷により樹枝状に開析されている。標高約25mの台地上に立地し沖積平野との比高差は約7mである。遺物集中地点は1カ所確認されており、その中で10カ所程度の集中地点に分けることができる。約24m×23mの範囲に分布し、それぞれの集中地点の間で接合関係が認められるため、同時期に形成されたものと考えられる。全体で1,055点の遺物が出土しており、石器組成の内訳はナイフ形石器1点、楔形石器4点、削器9点、彫刻刀形石器1点、礫器2点、二次加工のある剥片18点、使用痕のある剥片21点、石核14点、剥片795点、砕片179点、礫・礫片11点である。しかし実際は点数以上の楔形石器が検出されており、この石器群の主体となると言える。石材組成は頁岩474点、チャート56点、安山岩147点、ホルンフェルス130点、黒色ガラス質安山岩59点、メノウ26点、砂岩53点、流紋岩12点、他98点となっている。
この段階では「遠山技法」による楔形石器の生産が主体となることもあり、そのような遺跡の一例であると言える。
〔◎参考文献：田村隆他1989、野口行雄2000　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



1：ナイフ形石器、2～7：削器、8：彫刻刀形石器、9～12：楔形石器、13·14：礫器
（1·2·4·6～12·14：頁岩、3：流紋岩、5：砂岩、13：ホルンフェルス）

分布図番号：251

星谷津遺跡

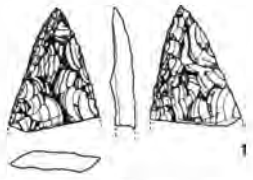
佐倉市岩富字星谷津〔鹿島川水系〕

概要　星谷津遺跡は昭和50年代初頭、下総台地の旧石器の確認調査において段階的にローム層を掘削し、遺物の有無を確認するという、当時としては画期的な方法で調査が進められた遺跡である。また下総台地において初めて姶良・丹沢火山灰（ＡＴ）を確認し、これを基準とした下総台地における立川ローム層の基本層序案が提示され、さらに立川ローム層各層に累積する石器群から南関東地方の他台地との比較検討を通しての詳細な編年的考察が行われた遺跡でもある。このように星谷津遺跡は、今日下総台地で進められている効率的かつ効果的な旧石器時代の調査・研究の基礎を築いた意義深い遺跡といえる。

遺跡は南印旛沼に注ぐ鹿島川右岸に位置し、標高34～37ｍの樹枝状に開析された台地上に立地する。中・小規模の17カ所のブロック（1カ所は炭化物集中地点のみ）から683点の石器が検出されており、点数が少なく、定形的な石器の出土が見られないため詳細な時期が不明確なブロックも存在するか、これらは以下の表に示す7枚の文化層に分けることができる。この中でも第Ⅲ層中文化、第Ⅳ層下文化は内容的にもまとまった良好な資料である。

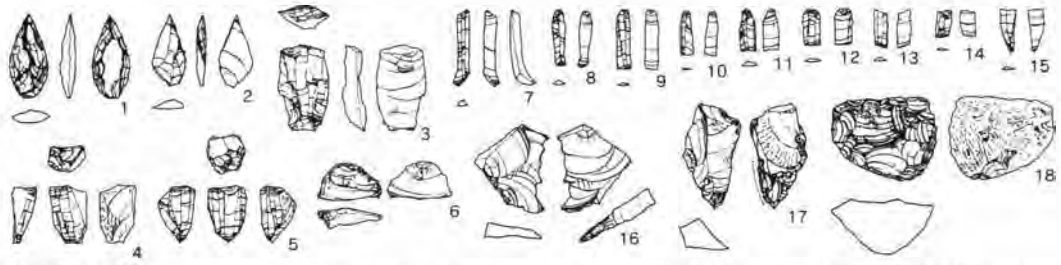
文化層	ユニット	点数	出土遺物	石質	備考
第Ⅲ層上文化	攪乱層	1	尖頭器	珪質粘板岩	
第Ⅲ層中文化	1	141	細石刃石核・細石刃・尖頭器・ナイフ形石器・石核・剥片・砕片	チャート・粘板岩・珪質粘板岩・黒曜石	チャート製野岳・休場型細石刃核
第Ⅲ層下文化	2･3･4･5･9	310	尖頭器・ナイフ形石器・掻器・石核・剥片・砕片・敲石・礫	珪質粘板岩・黒曜石・チャート・粘板岩・安山岩・メノウ他	4･5Uに小礫群伴う
第Ⅳ層上文化	10･11･12･13	105	尖頭器・ナイフ形石器・掻器・石核・小型石刃・剥片・砕片他	珪質粘板岩・黒曜石・チャート・メノウ・粘板岩他	10Uには炭化物集中伴う　11Uは炭化物集中のみ
第Ⅳ層下文化	14･15	91	角錐状石器・ナイフ形石器・石核・剥片・砕片・敲石・礫片	珪質粘板岩・メノウ・粘板岩・安山岩他	14Uには小礫群伴う
第Ⅶ層文化	16	3	石刃・砕片	粘板岩	第Ⅶ層＝立川ロームⅨ層
第Ⅷ層文化	17	1	ナイフ形石器	メノウ	第Ⅷ層＝立川ロームⅩ層

〔◎参考文献：鈴木道之助他1978、田村隆2000d　◎保管場所：千葉県立房総風土記の丘〕



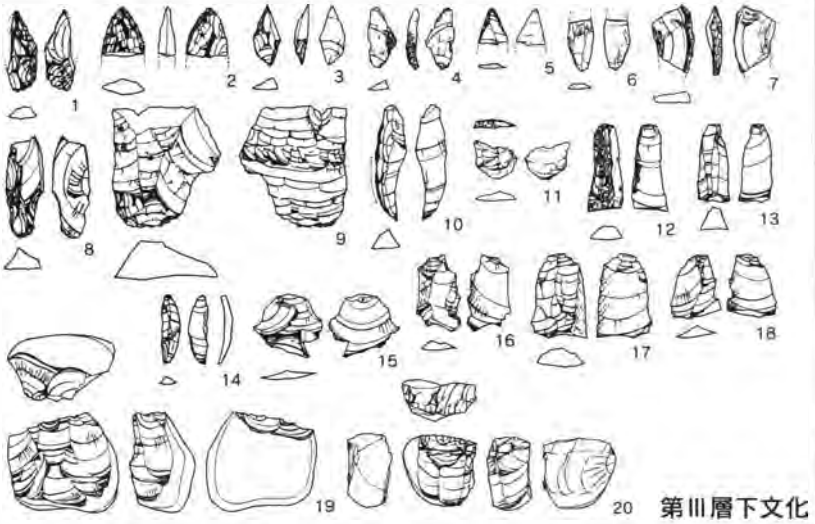
第Ⅲ層上文化

1：尖頭器（1：珪質粘板岩）



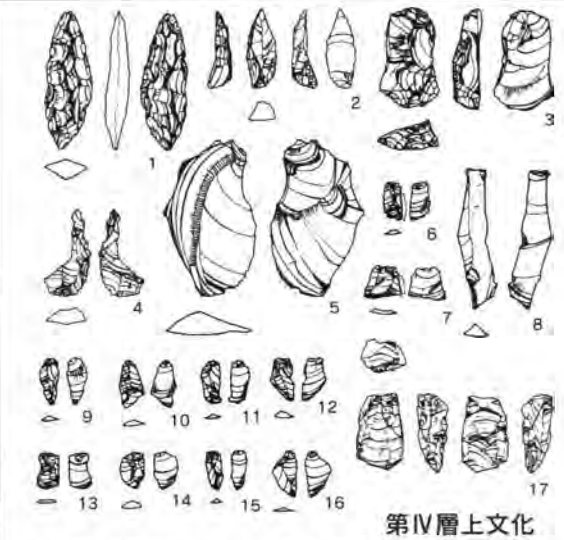
第Ⅲ層中文化

1：尖頭器、2：ナイフ形石器、3～5：細石刃石核、6：打面再生剥片、7～15：細石刃、16：二次加工のある剥片、17：使用痕のある剥片、18：石核（1･2：粘板岩、3～17：チャート、18：黒曜石）



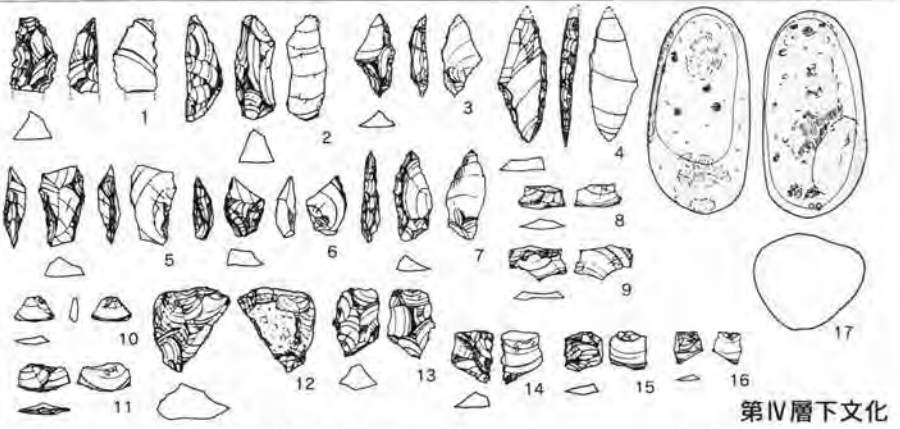
第Ⅲ層下文化

1･2：尖頭器、3～8：ナイフ形石器、9：掻器、10：使用痕のある剥片、11：二次加工のある剥片、12～18：剥片、19･20：石核（1･12：黒曜石、2･5･13～16･18･19：珪質粘板岩、3：流紋岩、4･11･20：チャート、6･10･17：粘板岩、7～9：メノウ）



第Ⅳ層上文化

1：尖頭器、2：ナイフ形石器、3･4：掻器、5～7：使用痕のある剥片、8：二次加工のある剥片、9～16：小型石刃、17：石核（1：粘板岩、2：メノウ、3･4･6･7･9～17：黒曜石、5･8：珪質粘板岩）



第Ⅳ層下文化

1･2：角錐状石器、3～7：ナイフ形石器、8～10：使用痕のある剥片、11：二次加工のある剥片、12･13：石核、14～16：剥片、17：敲石（1･6･8～16：珪質粘板岩、2：粘板岩、3～5：メノウ、7：安山岩、17：硬質砂岩）

第Ⅶ層文化



1：石刃（1：粘板岩）

第Ⅷ層文化



1：ナイフ形石器（1：メノウ）

分布図番号：252

向原遺跡

佐倉市神門字向原〔鹿島川水系〕

概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ鹿島川の右岸に位置し、標高約35mの比較的平坦な舌状台地上に立地する。小支谷を挟んだ左岸には向山谷津遺跡、木戸場遺跡が立地している。当遺跡からは12地点、23カ所の石器集中地点が確認されているが、台地全体に広く地点が位置するという感じである。文化層は3枚確認されており、遺物全体で1,200点以上が出土している。最も多く出土しているのはⅣ下～Ⅴ層段階に相当する第2文化層であり、次にⅥ～Ⅶ層段階に相当する第3文化層である。

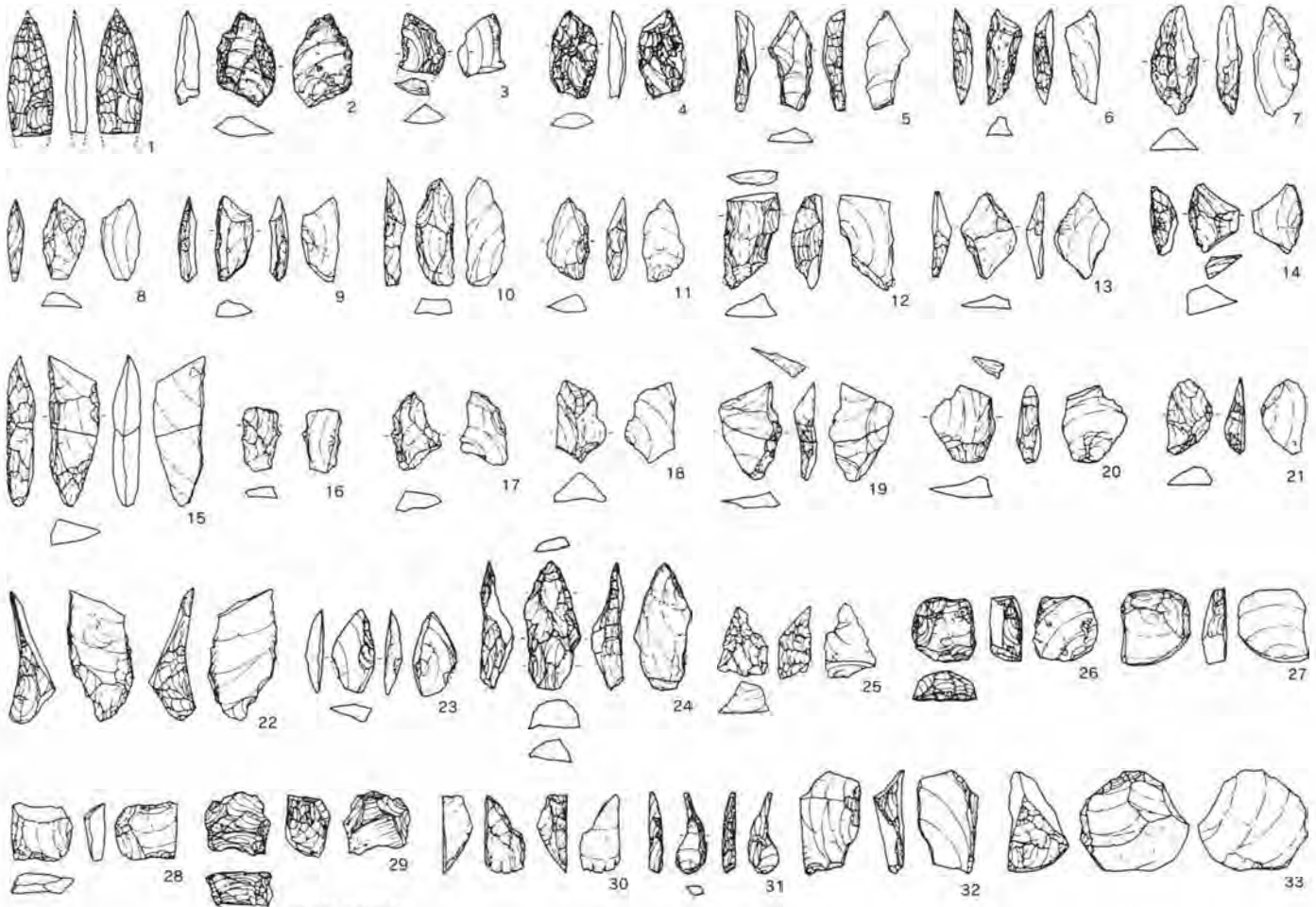
第2文化層〔印旛Ⅵ期〕

第1～4、7、9、11、12地点から9つの石器集中地点が検出されている。台地南側の縁辺部に地点が多くみられる。928点の遺物が出土しており、主要石器としてナイフ形石器21点、角錐状石器2点、尖頭器4点、楔形石器1点、掻器2点、削器9点などが出土している。主要石材は安山岩415点、黒曜石371点、硬質砂岩66点、チャート50点である。出土石器の中で目を引くのは尖頭器である。下総台地においてこの段階で出土する例は非常に少なく、八千代市権現後遺跡第3文化層、池花南遺跡第2文化層など当遺跡を含めても7遺跡のみである。第4地点No.5ブロックから出土しているが、唯一の黒曜石を素材としたものであり、原産地は栃木県高原山産である。

第3文化層〔印旛Ⅳ期3群〕

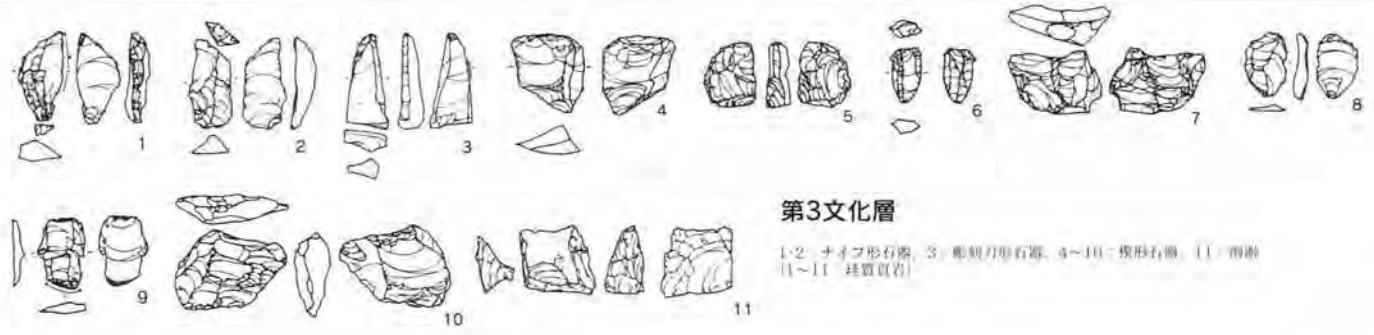
第6地点が相当し、台地の北側に入り込む谷津頭付近に位置している。No.6～18ブロックの13ブロックで構成されているが、同一時期の所産の可能性が高い内容を示している。274点の遺物が出土しており、主要石器としてナイフ形石器2点、彫刻刀形石器1点、楔形石器13点、削器2点などが出土している。石器石材としては約7割が珪質頁岩となっている。楔形石器の点数が多いことや、下総台地のⅥ・Ⅶ層段階でみられる下総型石刃再生技法の例が認められるなど、実質はⅦ層段階の石器群の様相を呈しているといえる。

〔◎参考文献：大原正義他1989、橋本勝雄2000、島立桂他2001　◎保管場所：千葉県文化財センター他〕



第2文化層

1～4：尖頭器、5～23：ナイフ形石器、24・25：角錐状石器、26・27：掻器、28：楔形石器、29～33：削器
（1～3・26・29・31：黒曜石、5・22：珪質頁岩、4・6～25・27・28・30・32・33：安山岩）



第3文化層

1・2：ナイフ形石器、3：彫刻刀形石器、4～10：楔形石器、11：削器
（1～11：珪質頁岩）

分布図番号：247

木戸場遺跡Ａ地点

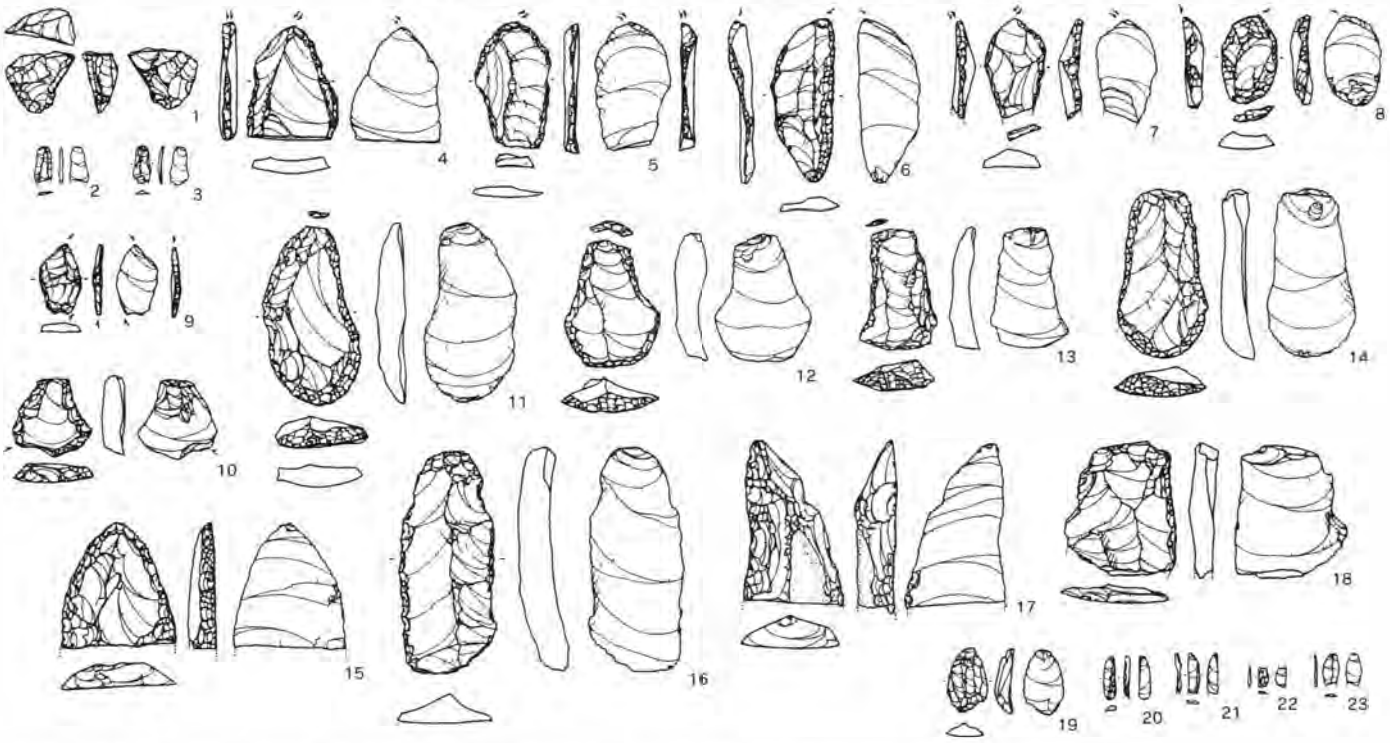
佐倉市岩富字木戸場〔鹿島川水系〕

概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ鹿島川の右岸に位置し、標高約34～35mの比較的平坦な舌状台地上に位置する。向山谷津遺跡と同じ台地であり、樹支状に開析された小支谷を上流に遡ったところである。遺物が出土している場所は舌状台地の先端付近であり、緩斜面の縁辺にあたる。No.1～7ユニットが検出されており、これらは第1文化層（No.1・2ユニット）、第2文化層（主にⅢ～Ⅳ層にかけて出土しているNo.3～5ユニットが含まれる。互いに隣接して検出されており、何らかの関係を思わせる。ただし、安山岩主体のものと、黒曜石・頁岩を主体とするものがあり、石材組成が大きく異なる点が上げられる。）、第3文化層（本来はⅥ層段階に認められる石器群と考えられ、No.6，7ユニットが相当する。共に透明度のある黒曜石が主体となるユニットであり、石刃技法を基盤とした石器組成を反映している。No.7ユニットで出土しているナイフ形石器をみると若干No.6ユニットよりも後出の段階と捉えることができる。）の3つの文化層に分けることができる。

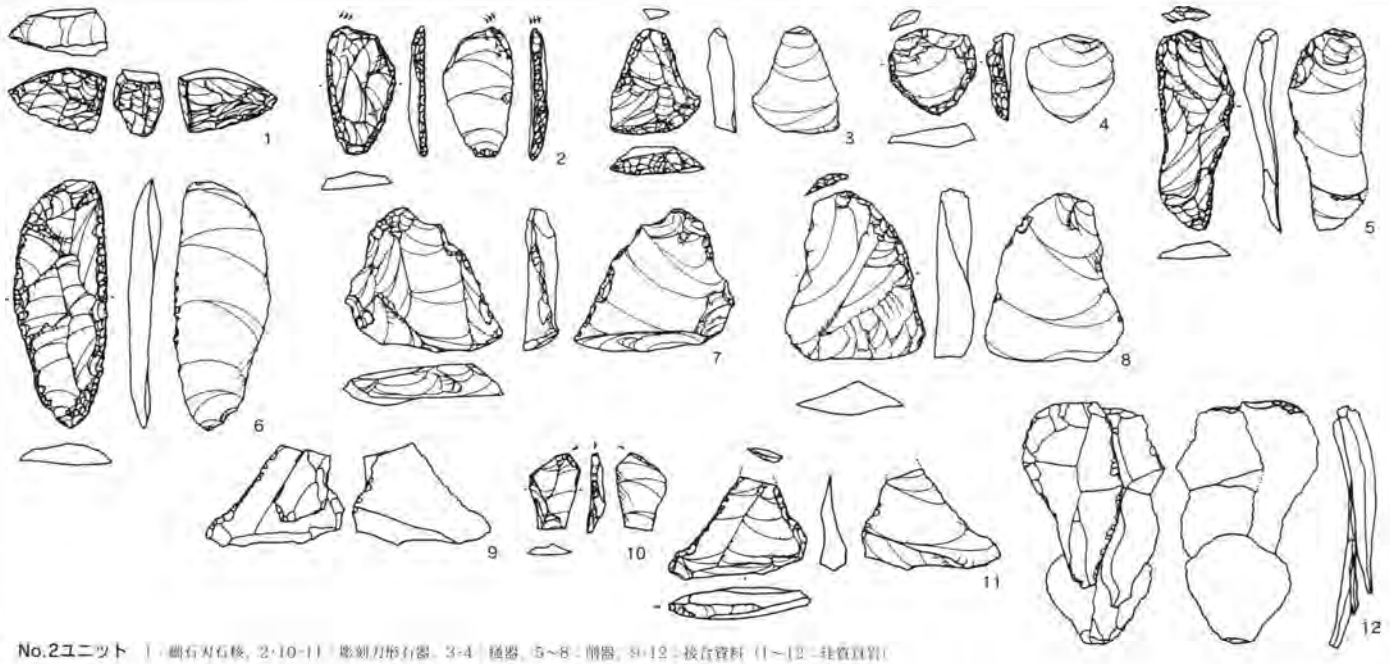
第1文化層〔印旛Ⅹ期2群〕

主にⅡ層に出土するNo.1，2ユニットが含まれる。非常に特徴のある北方系削片系細石刃石器群が隣接して検出されている。No.1ユニットの器種構成は細石刃石核1点、細石刃2点、彫刻刀形石器6点、掻器5点、削器4点、削片4点、作業面再生剥片1点（永塚1998参照）、剥片類26点、敲石1点、台石1点、礫片2点の合計53点である。石材構成は珪質頁岩39点、安山岩12点、砂岩3点、花崗岩1点である。No.2ユニットの器種構成は細石刃石核1点、彫刻刀形石器3点、掻器2点、削器6点、剥片類31点、礫片2点の合計45点である。石材構成は珪質頁岩40点、安山岩3点、黒曜石1点、砂岩1点である。両ユニットとも珪質頁岩の占有率が高く、製品を含む割合が高い。

〔◎参考文献：矢戸三男他1987、橋本勝雄2000、永塚俊司1998　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



No.1ユニット　1：細石刃石核、2･3：細石刃、4～9：彫刻刀形石器、10～14：掻器、15～18：削器、19：作業面再生剥片、20～23：削片（1～23：珪質頁岩）



No.2ユニット　1：細石刃石核、2･10･11：彫刻刀形石器、3･4：掻器、5～8：削器、9･12：接合資料（1～12：珪質頁岩）

分布図番号：217

池向遺跡

佐倉市岩富字池向〔鹿島川水系〕

概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ鹿島川の右岸に位置し、標高約36～37mの樹枝状に開析された台地上に位置する。17カ所のブロック（単独出土地点を含む）から450点以上の石器が検出されており、これらは第1文化層（Ⅶ層～Ⅸ層）、第2文化層（Ⅵ層下部～Ⅶ層上部）、第3文化層（Ⅳ・Ⅴ層～Ⅵ層）、第4文化層（Ⅳ層下部）、第5文化層（Ⅲ層）の5つの文化層に分けることができる。この中でも第2文化層及び第4文化層において良好な石器群の検出が見られている。

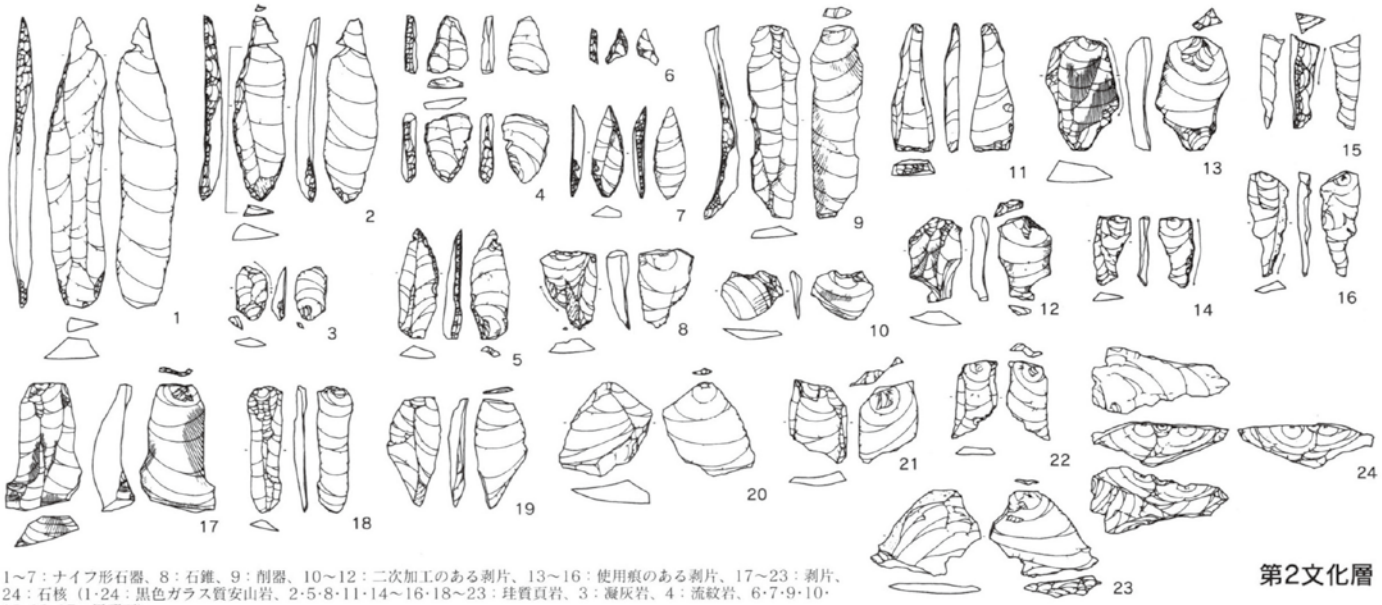
第2文化層〔印旛Ⅳ期1群〕

計6ブロックが見られるが、いずれのブロックも小規模である。総数165点の石器が検出されている。石器組成はナイフ形石器7点、削器1点、石錐1点、二次加工のある剥片3点、石核1点、剥片86点（使用痕のある剥片を含む）、砕片62点、礫4点である。ナイフ形石器は石刃を素材とし、二側縁加工のものを主体に一側縁加工・部分加工のものが認められる。ナイフ形石器等の素材から当文化層の時期に石刃技法が存在してたことは明らかであるが、本遺跡内においてその製作の痕跡は認められない。本遺跡内での剥片剥離は横長剥片剥片剥離技術が中心に行われており、石刃は本遺跡内では客体的な存在であったと考えられる。石材は珪質頁岩が大半を占め、他に黒曜石、チャート、凝灰岩、黒色ガラス質安山岩、流紋岩等が使用されている。

第4文化層〔印旛Ⅵ期〕

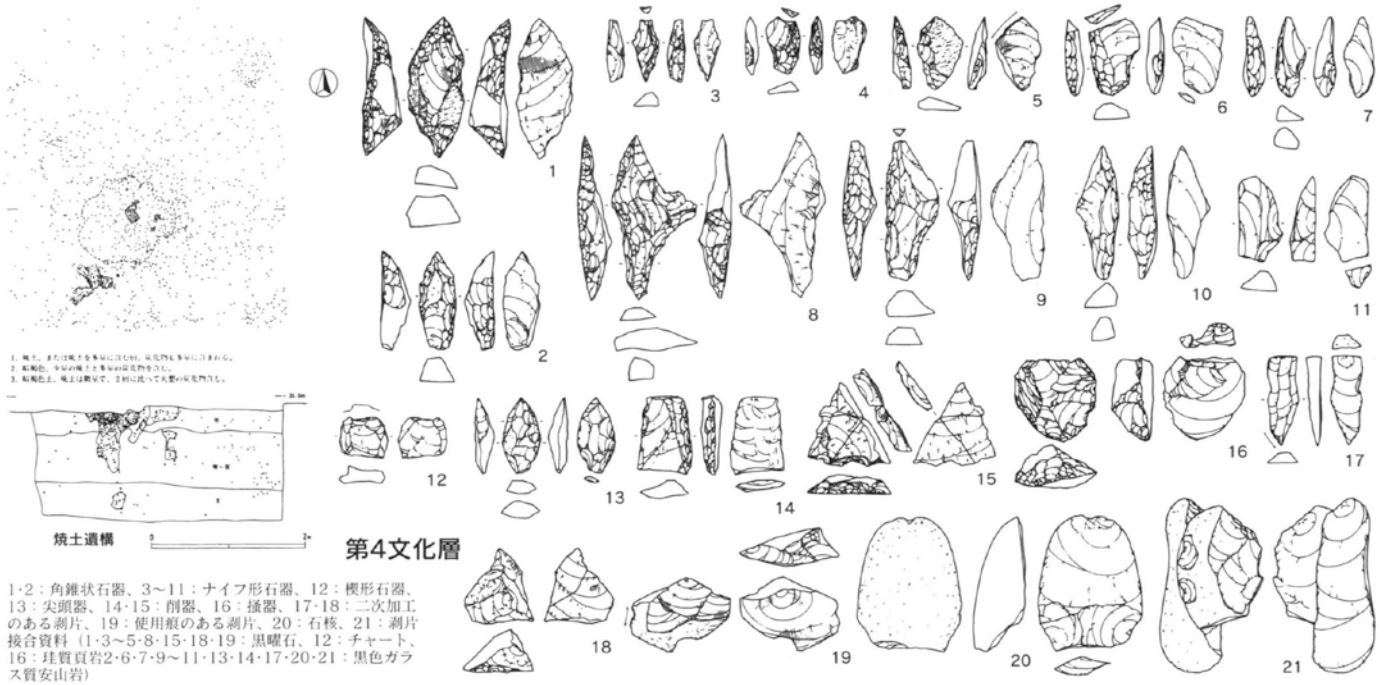
計4ブロックが見られるが、やはりいずれのブロックも小規模である。総数119点の石器が検出されている。また、N地点からは径約1.3mの焼土遺構が1基検出されている。石器組成は角錐状石器2点、ナイフ形石器9点、掻器1点、削器2点、尖頭器1点、楔形石器1点、二次加工のある剥片3点、石核1点、剥片68点（使用痕のある剥片を含む）、砕片28点、礫3点である。ナイフ形石器は切出形を呈し、掻器は円形掻器である。尖頭器は小型・木葉形の樋状剥離が施された男女倉型尖頭器で、この尖頭器が本石器群に伴う点は留意する必要があろう。剥片剥離技術は横長剥片剥離技術を主体としているが、わずかではあるが副次的に石刃状の縦長剥片の生産も行われていたようである。石材は黒色ガラス質安山岩、黒曜石を主体とし、他にチャート、珪質頁岩、ホルンフェルス等がわずかに用いられている。

〔◎参考文献：渡辺修一他1995　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



1～7：ナイフ形石器、8：石錐、9：削器、10～12：二次加工のある剥片、13～16：使用痕のある剥片、17～23：剥片、24：石核（1･24：黒色ガラス質安山岩、2･5･8･11･14～16･18～23：珪質頁岩、3：凝灰岩、4：流紋岩、6･7･9･10･12･13･17：黒曜石）

第2文化層



1･2：角錐状石器、3～11：ナイフ形石器、12：楔形石器、13：尖頭器、14･15：削器、16：掻器、17･18：二次加工のある剥片、19：使用痕のある剥片、20：石核、21：剥片接合資料（1･3～5･8･15･18･19：黒曜石、12：チャート、16：珪質頁岩2･6･7･9～11･13･14･17･20･21：黒色ガラス質安山岩）

第4文化層

分布図番号：255

栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡

佐倉市宮本字栗野〔鹿島川水系〕

概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ鹿島川の右岸に面した台地上に位置し、反対側では高崎川の支流が樹枝状に台地を開析している。標高32m前後の比較的平坦な台地を呈しており、台地の先端部よりも根元に近いところで石器群が検出されている。当遺跡の北側には南広遺跡が立地し、南側には大作、タルカ作遺跡が位置しており、これら4つの遺跡で小支谷を取り囲んでいる。

台地に広く展開している栗野Ⅰ遺跡の小支谷を挟んだ北側に栗野Ⅱ遺跡が位置しており、ここではブロックを1カ所確認している。両遺跡で18カ所のブロックが検出されており、3枚の文化層に分けられる。第Ⅰ文化層はⅢ層、第Ⅱ文化層はⅤ～Ⅶ層、第Ⅲ文化層はⅦ～Ⅸ層の段階に相当すると考えられる。第Ⅰ・第Ⅲ文化層は小規模なものであるが、第Ⅱ文化層は最も充実した良好な石器群である。この段階の石器群の例は意外と少ないため、遺跡も重要であるが、この段階を考えるには忘れてはならない遺跡であろう。

第Ⅱ文化層〔印旛Ⅴ期〕

栗野Ⅰ遺跡の3～11ブロックと栗野Ⅱ遺跡の18ブロックが相当する。8割近くが黒曜石となっており、占有率が非常に高い。出土層位を考慮してもⅥ層段階の石器群であると考えて差し支えないであろう。文化層全体で1,087の遺物が確認されており、主要石器の内訳はナイフ形石器10点、掻器18点、削器15点、彫刻刀形石器2点、楔形石器20点、石刃10点などである。

〔◎参考文献：田島新他1991、田島新2000　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



第Ⅱ文化層

1～6：ナイフ形石器、7～12：掻器、13～17：削器、18・19：彫刻刀形石器、20～25：楔形石器、26～34：石刃
(1・3・5・7～12・15～17・19～22・25～27・29・30・32～34：黒曜石、5・13・14・18・28・31：頁岩、4・23：チャート、24：粘板岩、2：凝灰岩)

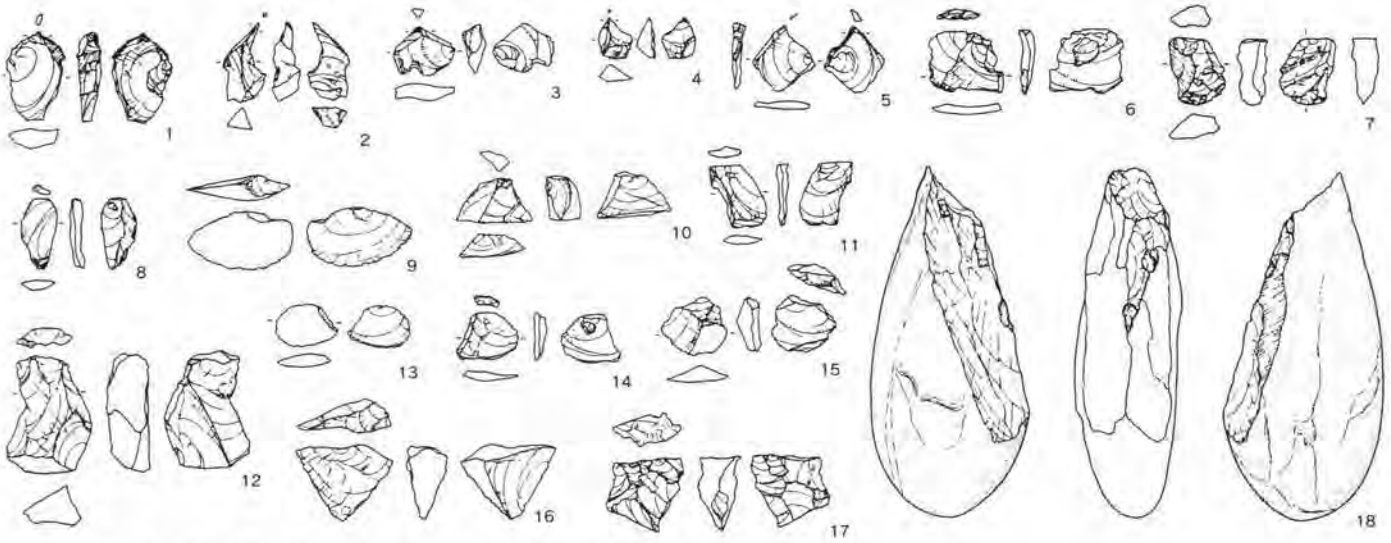
分布図番号：244

向山谷津遺跡

佐倉市神門字向山谷津〔鹿島川水系〕

層位　X層
時期　印旛II期
概要　遺跡は南印旛沼に注ぐ鹿島川の右岸に面しており、標高約35mの樹支状に開析された舌状台地上に位置する。台地を開析する小支谷は向山谷津遺跡が立地する当たりから東側に延びており、それに沿うような形で佐倉第三工業団地内遺跡群の各遺跡が展開している。台地の南側は鹿島川本流の小支谷が入り込んでおり、両河川に挟まれた細長い台地を形成している。遺物が確認されたのは台地の南西側の緩斜面縁辺である。当遺跡は佐倉市内でも最古の石器群に相当し、炉跡と考えられる焼土遺構も検出されている。出土層位は現在で言うIX層とX層の境あたりであり、遺物出土総点数は27点と小規模である。石器組成は尖頭石器4点、彫刻刀形石器1点、削器1点、礫器1点、石核2点、剥片18点であり、玄武岩とメノウが主要石材となる。器種と石材の関係をみてみると利器にはメノウがやや多用されているように思われる。焼土遺構は長径46cm、短径34cm、深さ25cmの擂り鉢状の土坑に焼土がたまっていた。土坑の側面および底面に被熱により硬化した部分が認められている。

〔◎参考文献：矢戸三男他1987　◎保管場所：千葉県文化財センター〕



1～4：尖頭石器、5：彫刻刀形石器、7：削器、6・8～15：剥片、16・17：石核、18：礫器
（9～12・15・16：玄武岩、1～5・8・14・17：メノウ、6・7：チャート、18：硬質砂岩）

分布図番号：268

榎戸小富遺跡

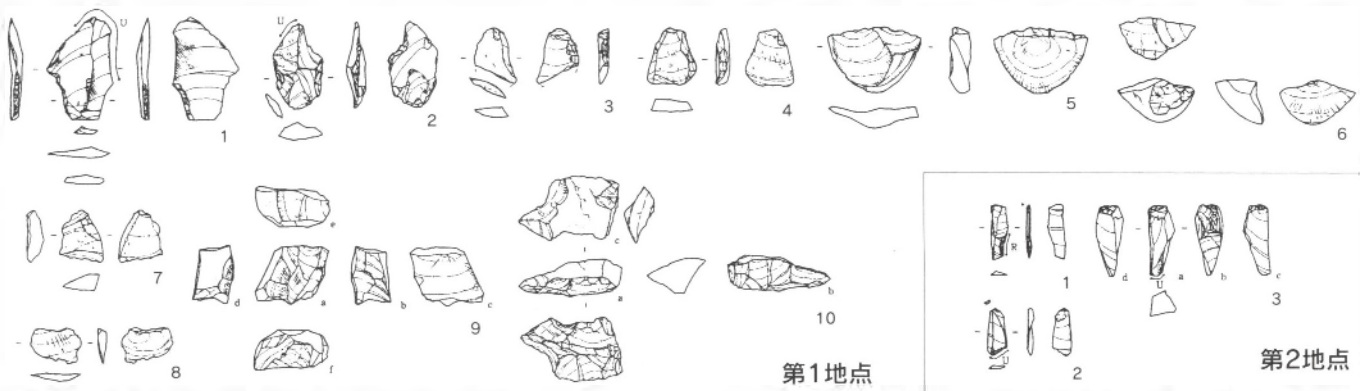
八街市榎戸字小富〔高崎川水系〕

概要　遺跡は高崎川から入り込む支谷により開析された標高約40mの北西方向にのびる細長い台地上の中央平坦部に位置する。第1地点（III層下部～IV・V層）、第2地点（VII層）、第3地点（VI層）とそれぞれ出土層位の異なる計3カ所のブロックから総計22点が出土している。

第1地点〔印旛VI期〕
ナイフ形石器2点、二次加工のある剥片2点、石核2点、剥片8点の計14点が検出されている。ナイフ形石器は切出形を呈するものである。剥片剥離技術は打面・作業面の転位を頻繁に行うサイコロ状石核や剥片を素材とし、周囲から求心状に剥片剥離作業を行う石核から横長・不定形剥片を作出するものである。石材は黒色ガラス質安山岩を主体とし、ナイフ形石器のみ珪質頁岩、チャートが用いられている。

第2地点〔印旛IV期2群〕
二次加工のある剥片1点、使用痕のある剥片2点、小型石刃1点、剥片2点、砕片1点の計7点が検出されている。全て同一母岩であり良質な東北地方産と思われる珪質頁岩が使用されている。点数も少なく典型的な剥片素材石核の出土は見られていないが、形態的・技術的特徴よりこれらの石器は下総型石刃再生技法によって製作が行われたものと考えられる。

〔◎参考文献：酒井弘志2000　◎保管場所：八街市教育委員会〕



1・2：ナイフ形石器、3・4：二次加工のある剥片、5～8：剥片、9・10：石核
（1：珪質頁岩、2：チャート、3～10：黒色ガラス質安山岩）

第1地点

1：二次加工のある剥片、2・3：使用痕のある剥片
（1～3：珪質頁岩）

第2地点

分布図番号：293

墨新山遺跡

印旛郡酒々井町墨字新山〔高崎川水系〕

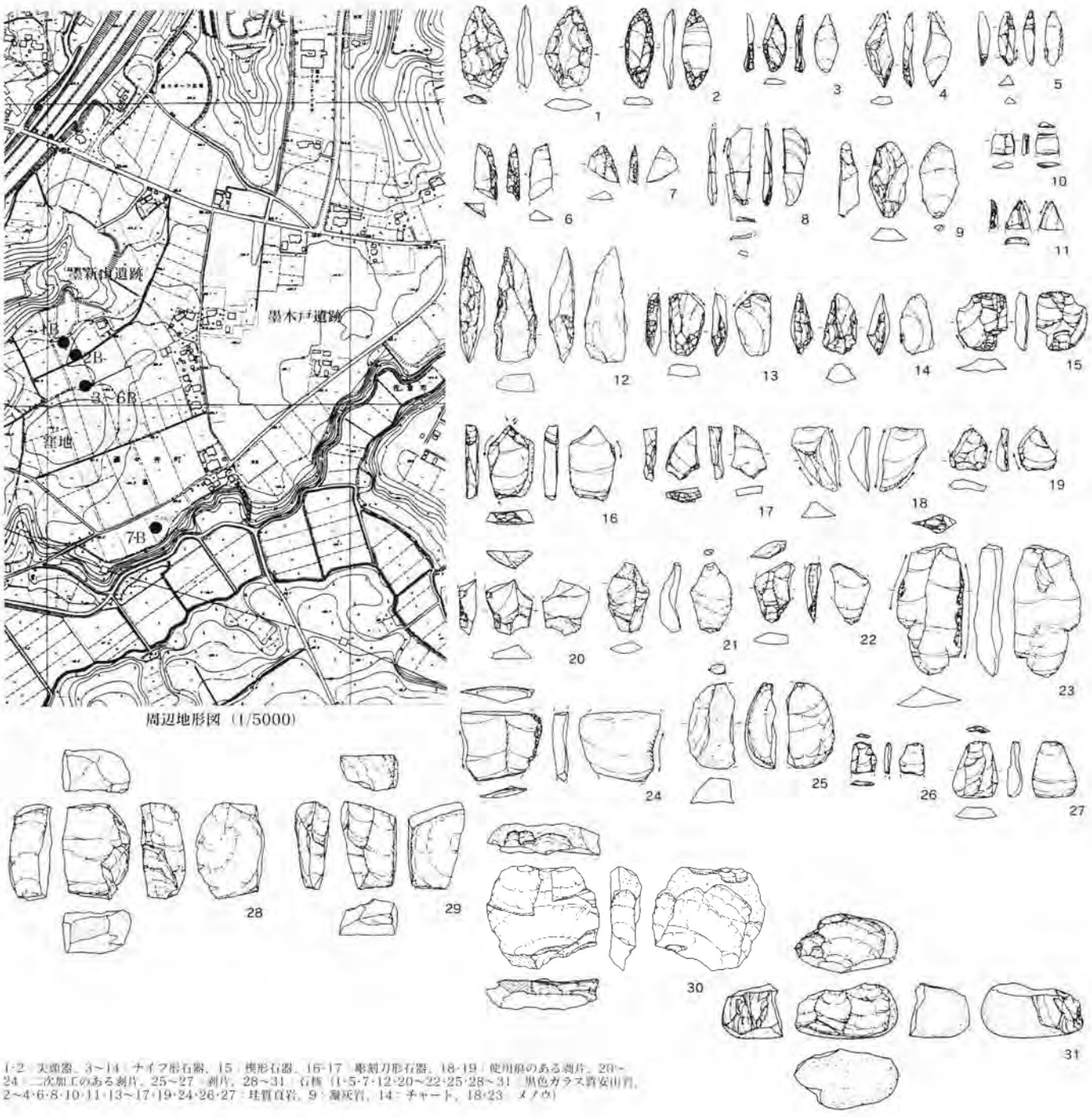
概要　遺跡は高崎川左岸の中流域に位置し、東西を北側から入り込む開析谷によって区切られた、南北に長い標高35m前後の台地上に立地する。Ⅲ層～Ⅳ層にかけて計7ブロック、総数500点に及ぶ石器が検出され、これらは富里市東内野遺跡同様に（第Ⅱ章コラム参照）遺跡西側に所在する窪地周辺に分布する傾向が見て取れる。しかしこれらのブロックは、第3ブロック以外はいずれも中～小規模で、定形的な石器も少なく出土層位も不明確なこともあって、時期及びブロック間での同時性を把握するには至らない状況である。ここでは点数・出土遺物共に最もまとまりの見られる第3ブロックの資料を掲載した。

第3ブロック〔印旛Ⅶ期2群〕

Ⅲ層～Ⅳ層にかけ、252点の石器が検出されている。石器組成はナイフ形石器12点、尖頭器2点、掻器2点、彫刻刀形石器2点、楔形石器1点、二次加工のある剥片5点、使用痕のある剥片3点、石核5点、剥片31点、砕片101点であり、この他にブロック内に散在する形ではあるが礫が88点検出されている。尖頭器は周縁加工を中心とした裏面に素材主要剥離面を大きく残すもので、ナイフ形石器も石刃素材のものと横長剥片素材のものとの2者が認められる。剥片剥離技術には、両設打面で頭部調整・打面調整・打面再生が頻繁に行われた石刃技法と横長剥片剥離技術とが認められる。石材は黒色ガラス質安山岩を主体とし、この他に珪質頁岩、チャート、黒曜石、メノウ、凝灰岩等が用いられている。

〔◎参考文献：小谷龍司他1997　◎保管場所：酒々井町教育委員会〕

周辺地形図（1/5000）



1·2：尖頭器、3～14：ナイフ形石器、15：楔形石器、16·17：彫刻刀形石器、18·19：使用痕のある剥片、20～24：二次加工のある剥片、25～27：剥片、28～31：石核（1·5·7·12·20～22·25·28～31：黒色ガラス質安山岩、2～4·6·8·10·11·13～17·19·24·26·27：珪質頁岩、9：凝灰岩、14：チャート、18·23：メノウ）

分布図番号：314

東内野遺跡

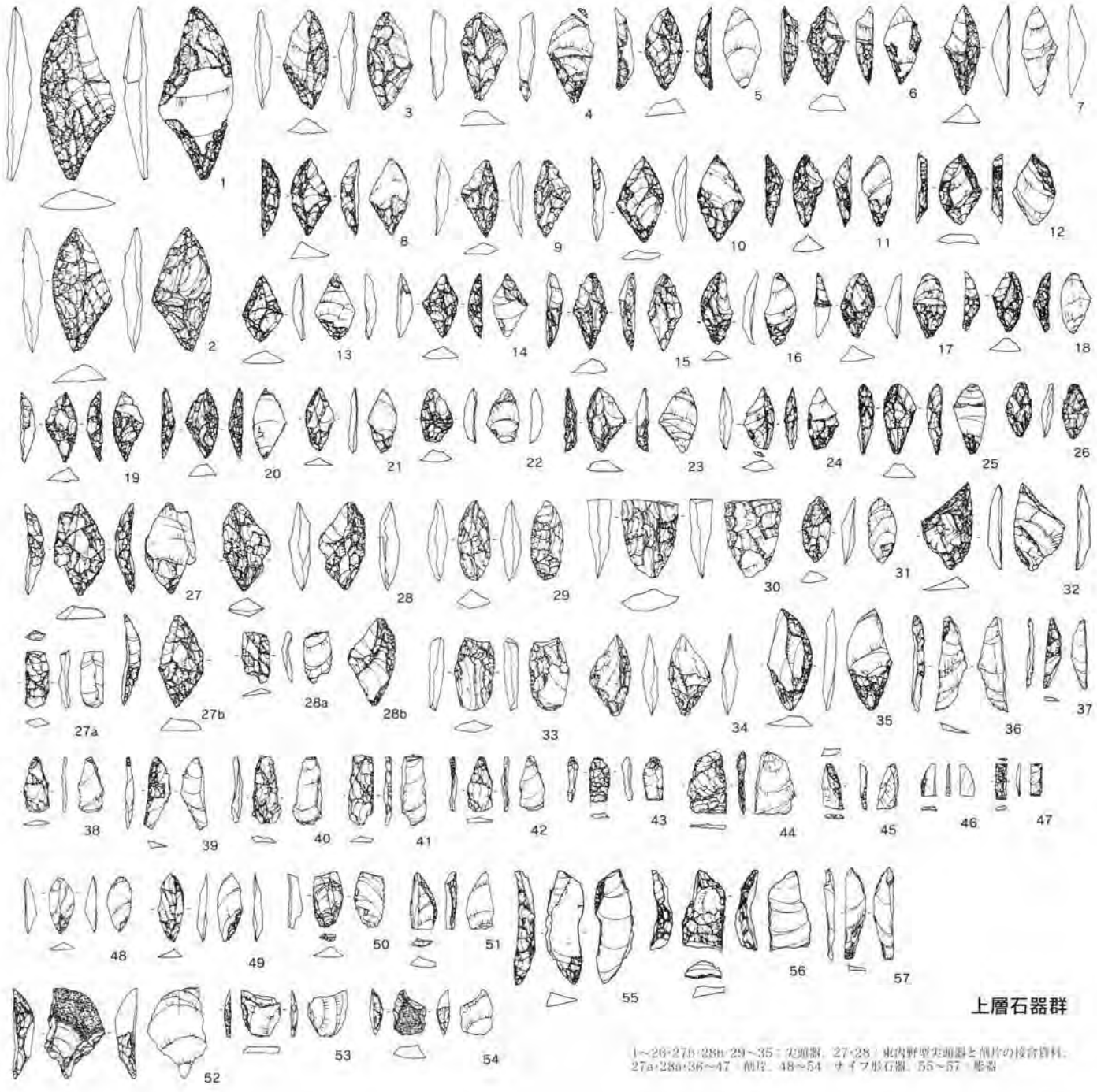
富里市七栄字東内野〔高崎川水系〕

概要　東内野遺跡は樋状剥離を有する尖頭器の1つである「東内野型尖頭器」の標識遺跡として、学史に刻まれている著名な遺跡である。遺跡は高崎川と根木名川の分水嶺上、標高41m前後の台地上に位置し、遺跡中央に見られる窪地（東内野湖）を中心に石器群が展開している（第II章コラム参照）。8次にわたる調査により、1万点をはるかにこえる石器の出土が見られているが、そのほとんどは残念ながら未報告である。石器群は出土層位や諸特徴から東内野型尖頭器を多量に含む上層石器群（III層中）、角錐状石器や切出形ナイフ形石器を伴う中層石器群（IV・V層）、第二黒色帯中よりナイフ形石器等が見られている下層石器群（VII層）の3枚の文化層に大別することができ、この中でも上層石器群については印旛郡内を代表する大規模な石器群として注目することができる。

上層石器群〔印旛VII期3群〕

総点数は未整理のため不明確であるが大規模な石器群である。石器組成は尖頭器、ナイフ形石器、削器、彫刻刀形石器、削片、石核、剥片・砕片（尖頭器調整剥片含む）である。尖頭器は珪質頁岩、黒色ガラス質安山岩を主体として製作されており、多量の東内野型尖頭器の他、両面加工・半両面加工・片面加工のものも認められる。また、東内野型尖頭器の中には樋状剥離部に削片が接合している例もあり、製作技法を考えるうえでの重要な資料になる。ナイフ形石器は石刃を素材とした二側縁加工のものが中心であるが、一部横長・不定形剥片を素材とした切出形を呈するものや尖頭器調整剥片を利用した小型のナイフ形石器も含まれる。剥片剥離技術は石刃技法が主体を占めると考えられるが、横長剥片剥離技術も存在している。石材は珪質頁岩と黒色ガラス質安山岩を中心に、他に凝灰岩、流紋岩、黒曜石等が使用されている。珪質頁岩には東北地方産と南房総に産地が求められる嶺岡産の2種が認められ、量的には後者の方が多いが、東内野型尖頭器には東北地方産のものが多用されるという石材選択が行われている。

〔◎参考文献：篠原正他1977a・1978a・1979、篠原正1993、宇田川浩一2000　◎保管場所：富里市教育委員会〕



上層石器群

1～26・27b・28b・29～35：尖頭器、27・28：東内野型尖頭器と削片の接合資料、27a・28a・36～47：削片、48～54：ナイフ形石器、55～57：彫器

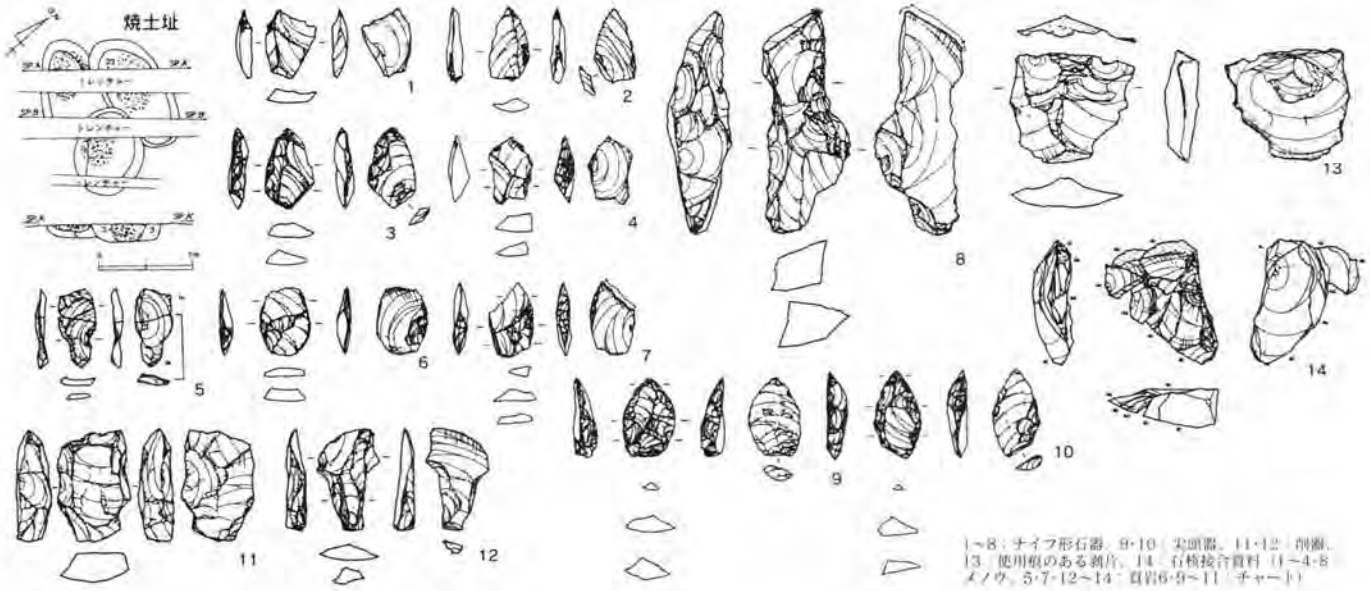
分布図番号：315

獅子穴IX遺跡

富里市七栄字獅子穴〔高崎川水系〕

層位　Ⅳ層
時期　印旛Ⅷ期
概要　遺跡は高崎川の上流域、標高約41ｍの台地上に立地し、印旛沼水系と東京湾水系の分水界上に位置する。4ブロックから計322点の石器が検出されており、全て同一文化層のものとしてとらえられる。Ⅳブロックには焼土址1基と礫群1基も伴っている。石器組成は尖頭器2点、ナイフ形石器10点、削器3点、楔形石器1点、二次加工のある剥片1点、使用痕のある剥片1点、折断剥片97点、石核6点、剥片83点、砕片75点、礫43点である。尖頭器は片面加工のもので裏面に一部加工が施されるものも存在し、ナイフ形石器は小型幾何形のものを主体とする。また、剥片剥離技術には、横長剥片を素材としその主要剥離面を打面として素材末端部から順次剥片を剥離する特徴的な工程が認められる。石材はチャート、メノウ、黒曜石を主体に頁岩、凝灰岩、流紋岩等が用いられるが、ブロック単位で使用される主要石材の違いが認められている。

〔◎参考文献：新田浩三・吉林昌寿1994　◎保管場所：富里市教育委員会〕



1～8：ナイフ形石器、9･10：尖頭器、11･12：削器、13：使用痕のある剥片、14：石核接合資料（1～4･8：メノウ、5･7･12～14：頁岩6･9～11：チャート）

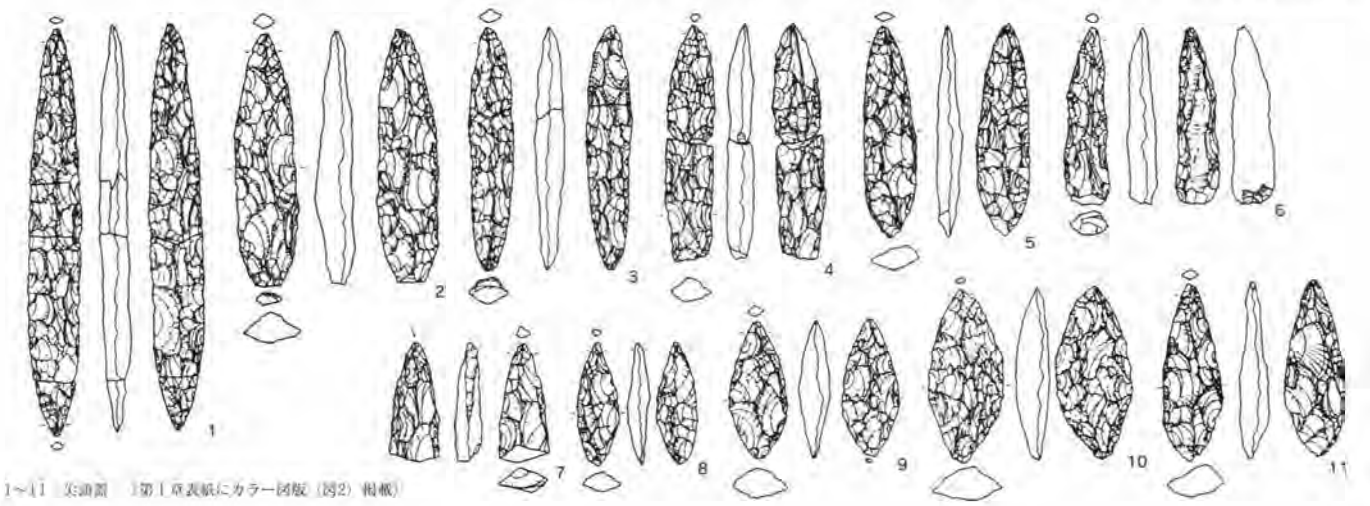
分布図番号：319

南大溜袋遺跡

富里市七栄〔高崎川水系〕

層位　Ⅲ層上部
時期　印旛Ⅺ期
概要　遺跡は標高約36ｍの南に張り出す舌状台地先端部に位置し、周囲は水田面との比高差約30ｍにおよぶ深い開析谷が入り込む地形となる。採集遺物、発掘調査遺物を合わせ、尖頭器85点、削器1点、ノッチ1点、石錐1点、矢柄研磨器1点、石鏃1点、石核1点、約700点に及ぶ剥片類が確認され、遺跡は現在、千葉県史跡の指定を受け、現状保存されている。主体となる尖頭器には柳葉形、やや幅広の木葉形、有舌形が認められ、中でも柳葉形が約7割を占める。特に全長が9～10cmをこえる柳葉形のものは大半が折損しており、植刃として使用された可能性が強い。また全国的に見ても類例の少ない軽石製の矢柄研磨器や1点ながらも石鏃が伴っている点も大変注目される。石材は柳葉形尖頭器には硬砂岩を主体にチャート・安山岩が、木葉形尖頭器には安山岩が主体に用いられ、尖頭器の形態に合わせた石材の使い分けが行われたものと考えられる。その他の石器には頁岩・チャート・安山岩等が用いられている。

〔◎参考文献：戸田哲也1973･2000、田村　隆・橋本勝雄1984　◎保管場所：富里市教育委員会〕



1～11　尖頭器　〕第Ⅰ章表紙にカラー図版（図2）掲載〕

分布図番号：325

古込Ⅴ遺跡

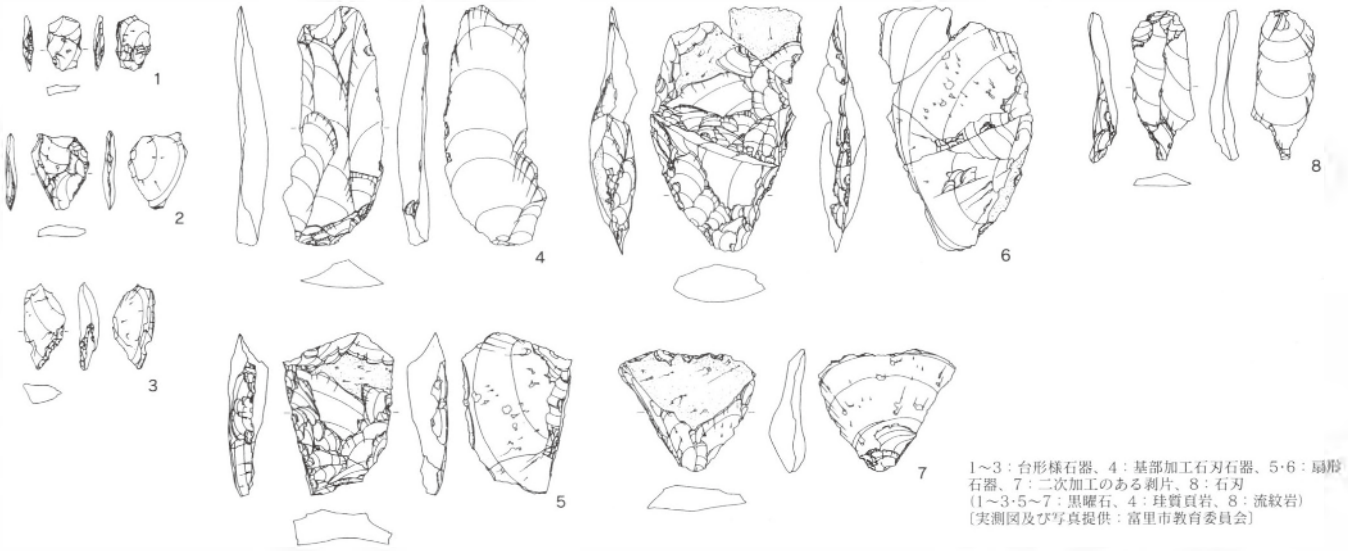
富里市七栄字古込〔根木名川水系〕

層位　Ⅸ層下部～Ⅹ層？
時期　印旛Ⅱ期～Ⅲa期？
概要　遺跡は根木名川の支流により開析された支谷の谷津頭、標高約38～40ｍの台地上に位置する。現段階では整理途中のため詳細についてふれることはできないが、その内容については注視すべき点が多く認められるため、以下概要を述べてみたい。

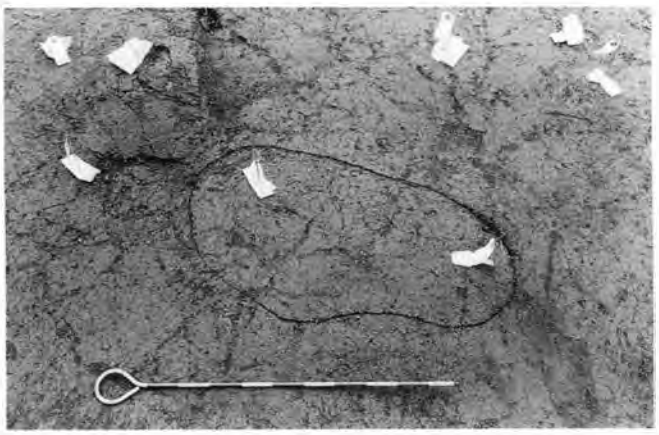
発掘調査により石器総数約1,500点に及ぶ計3カ所のブロックと炉址2基が検出されている。これらは谷津頭部の浅い谷にむかって傾斜する緩斜面地に立地し、石器はＡＴ層の下から武蔵のローム層上部にかけて検出されている。詳細な出土層位に関しては立地が緩斜面地であること、ロームに水の影響が見られる（水付きローム）ことから今後検討を重ねなければならないが、炉址から検出された炭化物の^{14}Ｃ年代測定では27,400±210の結果が得られており（情報提供：富里市教育委員会）、立川ローム層下部段階に位置する石器群であることはほぼ間違いないものと考えられる。石器組成は台形様石器、扇形石器、基部加工石刃石器（ナイフ形石器）、二次加工のある剥片、石刃、打面再生剥片、石核、剥片などである。剥片剥離技術には石刃技法と横長剥片剥離技術が認められる。石刃技法は石核調整剥片や打面再生剥片の出土から本遺跡内において作業が行われており、打面調整・頭部調整・打面再生を行いながら大型のものを含めた石刃が作出されている。石材はほとんどが黒曜石であり、他に流紋岩、珪質頁岩、チャート等が見られる。

このように本石器群は大量に搬入された黒曜石を主要石材とする点、その黒曜石を用いた石刃技法により大型の石刃が多数作出されている点等、従来立川ローム下部段階においては見られなかった特徴的内容を示す。炉址に伴う炭化物の年代測定や今後期待したい黒曜石の原産地推定と合わせ、今後の下総台地の旧石器時代研究における興味深い結果が得られるものと思われる。

〔◎参考文献：篠原正2002　◎保管場所：富里市教育委員会〕



1～3：台形様石器、4：基部加工石刃石器、5･6：扇形石器、7：二次加工のある剥片、8：石刃
（1～3･5～7：黒曜石、4：珪質頁岩、8：流紋岩）
〔実測図及び写真提供：富里市教育委員会〕



炉　址



炉址周辺石器出土状況

印旛郡内旧石器出土遺跡一覧表

番号	分類	市町村	遺跡名	所在地	水系	調査期間	文献	遺物	備考
1	○	白井市	二部山遺跡	白井市富塚字二部山	手賀沼	印	進藤・小谷1994	K、Pe、RF、UF、C、F	1ブロック、744点、Ⅶ層、黒曜石、頁岩を中心とした石器群、
2	□	白井市	小名内遺跡	白井市名内字小名内	手賀沼	採集	高橋・古内1974	Bl	1点
3	△	白井市	寺向遺跡	白井市平塚	手賀沼	調査会	平岡他1985	K、Bu、SS、F	8点、遺構外出土、下層調査からは検出されず
4	○	白井市	神々廻東原遺跡	白井市神々廻字東原	神崎川	印	末武1988	P、C、F	2ブロック、約90点、Ⅸ層・Ⅲ層、黒曜石製の槍先形尖頭器石器群
5	○	白井市	河原子台遺跡	白井市神々廻字河原子台	神崎川	印	喜多・飯島1991	A、Bu、C、F	2ブロック、44点
6	◎	白井市	白井第1遺跡	白井市復字屋向	神崎川	県	鈴木他1978など	K、角、UF、C、Fなど	黒曜石製切出形ナイフなど、資料編掲載
7	○	白井市	谷田木曽地遺跡	白井市谷田字木曽地	神崎川	県	清藤・及川1984	K、Bl、A、P、SS、C、F	4文化層？文化層毎の記述なく不明確、2ブロック、局磨・切出ナイフ・有舌尖頭器など、焼礫片約1000点
8	◎	白井市	復山谷遺跡	白井市復字山谷	神崎川	県	鈴木他1978など	K、角、P、SS、ES、C、Fなど	10文化層の大規模重層遺跡、資料編掲載
9	◎	白井市	一本桜南遺跡	白井市十余一字一本桜	神崎川	県	落合・雨宮1998	K、P、MB、SS、ES、C、Fなど	10文化層の大規模重層遺跡、資料編掲載
10	△	白井市	谷田神楽場遺跡	白井市谷田字木曽地	神崎川	県	清藤・及川1984	K、C	2点、縄文と混在
11	○	白井市	清戸Ⅱ遺跡	白井市清戸字花堀込	神崎川	県	県年報13-18	K、C、Fなど	出土地点4ヶ所、Ⅶ～Ⅲ層、詳細不明
12	△	白井市	神々廻宮前遺跡	白井市神々廻字宮前	神崎川	印	末武1988	P、MB、MC	6点、縄文と混在
13	○	白井市	東割遺跡	白井市清戸字東割	神崎川	県	抄報H.4	C、Fなど	3ブロック、文献では「清戸遺跡」として掲載、後に分離、詳細不明
14	○	印西市	高根北遺跡	印西市小倉字大塚前	浦部川	県	白石他1974	K、P、Bu、ES、SS、Sp、C、Fなど	3ブロック、焼土遺構検出・木炭から炭素14年代＝21260±610
15	△	印西市	榎峠遺跡	印西市浦幡新田字榎峠	浦部川	県	白石他1973	P、MB、ES、SS、Pe、F	Ⅲ上～Ⅱ層、大形の槍先形尖頭器など、縄文と混在
16	○	印西市	北の台遺跡	印西市武西字北台	亀成川	県	白石他1975	K、Bl、Bu、ES、F	2ブロック、Ⅲ層下
17	○	印西市	石道谷津遺跡	印西市小林字石道谷津	亀成川	県	白石他1975	K、P、MB、Dr、UF、C、F	出土地点6ヶ所、Ⅳ下・Ⅴ層中心、各地点毎の時期把握困難
18	○	印西市	別所大山遺跡	印西市別所字屋敷割	亀成川	県	白石他1975	Bu、SS、C、F	1ブロック、47点、Ⅳ下・Ⅴ層
19	○	印西市	宗甫遺跡	印西市宗甫字西割	亀成川	県	落合1993	SS、RF、UF、C、F	2ブロック、Ⅳ下・Ⅴと Ⅳ上層
20	○	印西市	泉北側第3遺跡	印西市鹿黒字新山	亀成川	県	竹田1999、竹田・落合1999	T、K、C、Fなど	2文化層、1500点、Ⅸ層とⅣ下・Ⅴ層、Ⅸ層は最大規模の環状ブロック群2基、内環－外弧の2帯構成、県年報23・24
21	◎	印西市	吉新田南遺跡	印西市大森字宮脇	亀成川	県	県年報10	+	10ブロック以上、Ⅶ～Ⅵ層、1000点以上、詳細不明
22	○	印西市	六角遺跡	印西市草深字六角	亀成川	県	白石他1974	K、C、F	1ブロック、42点、Ⅳ層
23	△	印西市	天神台遺跡	印西市大森字香内	亀成川	印	西山他1987	Bl	遺構外出土
24	○	印西市	泉北側第2遺跡	印西市鹿黒字新山	亀成川	県	高橋1991	K、角、P、Bu、ES、RF、UF、C、F	2文化層、3ブロック、1292点、Ⅶ～Ⅲ層、地点外より大形の槍先形尖頭器、大形石刃製で全周に加工の入る彫器
25	△	印西市	泉遺跡	印西市鹿黒字新堀	亀成川	県	橋本他1989	角、P、MB、MC、SS、RF、C、F	33点、野岳・休場型の細石刃核、大形石刃製の削器など、縄文と混在
26	○	印西市	大割水溜遺跡	印西市大森字高掘	亀成川	県	県年報26	+	1ブロック、Ⅲ層、詳細不明
27	○	印西市	大森割野遺跡	印西市大森字割野	亀成川	県	県年報22・23	MC、F	8ブロック、詳細不明
28	△	印西市	宗甫北遺跡	印西市別所字大山	亀成川	県	野村他1976	P、F	大形の槍先形尖頭器など、遺構外出土
29	△	印西市	別所新田遺跡	印西市別所字谷津	亀成川	県	落合・雨宮1999	F	「別所新田第2地点」として報告、採集、遺構外出土
30	○	印西市	武西近隣遺跡	印西市武西	亀成川	県	県年報18	+	6ブロック、詳細不明
31	□	印西市	鹿黒遺跡	印西市草深字東泉新田前	亀成川	採集	橋本他1989	K	調査以前の表採品
32	○	印西市	泉北側第1遺跡	印西市和泉字前原	亀成川	県	県年報23	+	出土地点1ヶ所、詳細不明
33	△	印西市	一の作遺跡	印西市草深字一の作	師戸川	県	白石他1974	K、Bl、P、Bu、ES、RF、C、Fなど	縄文と混在、下層未調査
34	◎	印西市	木苅峠遺跡	印西市浦幡新田字木苅峠	手賀沼	県	白石他1975など	K、Bl、角、P、Bu、ES、SSなど	大規模調査と編年指標の先鞭となった遺跡、黒曜石製の男女倉型尖頭器など、資料編掲載
35	◎	印西市	地国穴台遺跡	印西市草深字地国穴台	手繰川	県	白石他1973など	K、角、ES、SS、RF、UF、C、Fなど	15ブロック、800点、資料編掲載
36	○	印西市	石頭第2遺跡	印西市草深字石道台	手繰川	県	落合・雨宮1999	K、P、MB、MC、Bu、C、Fなど	4文化層、13ブロック、Ⅸ・Ⅶ層とⅣ下・Ⅴ層
37	△	印西市	小林城跡	印西市小林字城山	手繰川	県	井上他1994	P	単独、未製品
38	○	印西市	松崎Ⅰ～Ⅶ遺跡	印西市松崎字滝他	新川	県	県年報19～26	+	大規模、詳細不明
39	△	印西市	大木戸根十三塚	印西市和泉字大木戸根	新川	県	橋本他1989	K、P、F	縄文と混在
40	○	印西市	新井堀Ⅱ遺跡	印西市草深字新井堀	新川	県	県年報22・25	F	5ブロック、詳細不明
41	◎	印西市	船尾白幡遺跡	印西市船尾字白幡	神崎川	県	野村1976	MB、MC、Bu、SSなど	野岳・休場型の細石刃石器群など、資料編掲載
42	○	印西市	向新田遺跡	印西市武西字向新田	神崎川	県	金丸2002	K、F	1ブロック、17点、Ⅸ層？
43	○	印西市	泉南遺跡	印西市泉字西ケ作仲側	神崎川	県	落合・雨宮1999	RF、C、F	出土地点2ヶ所、4点、Ⅸ層
44	△	印西市	南西ケ作遺跡	印西市和泉字南西ケ作	神崎川	県	白石他1974	K	縄文と混在
45	△	印西市	船尾町田遺跡	印西市船尾字町田	神崎川	県	清藤1984	P	単独
46	△	印西市	向ノ地遺跡	印西市船尾字向ノ地	神崎川	印	印年報9	+	詳細不明
47	△	印西市	鳴神山遺跡	印西市戸神字大野	神崎川	県	萩原2000	K、F	2点、遺構外出土
48	△	印西市	武西千駄苅遺跡	印西市武西字千駄苅	神崎川	印	末武1990	C、F	2点、確認調査のみ
49	△	印西市	一本桜遺跡	印西市木刈5丁目	神崎川	県	野村他1976	P、MB、ES	遺構外出土
50	○	印西市	馬込遺跡	印西市平岡字馬込	利根川	県	県年報23・25・27	+	出土地点10ヶ所、Ⅲ層・Ⅵ層、詳細不明
51	□	印西市	井之内作南遺跡	印西市竹袋字井之内作	利根川	採集	県教委1997	K	
52	□	印西市	五ノ神遺跡	印西市平岡字行々地	利根川	採集	県教委1997	K	
53	△	印西市	東遺跡	印西市平岡字西谷津	利根川	印	阿部1999	K、UF、F	4点、遺構外出土
54	△	印西市	馬場遺跡	印西市小林字馬場	利根川	印	板橋2001	P	1点、黒曜石製、遺構外出土
55	△	印西市	駒形北遺跡	印西市小林字駒形	利根川	印	進藤1993	MB、Sp、C、F	24点、遺構外出土
56	◎	本埜村	宮内遺跡	本埜村中根字宮内	印旛沼	印	内田・吉林1995	K、Bl、SS、Spなど	下総型石刃再生技法など、資料編掲載
57	◎	本埜村	瀧水寺裏遺跡	本埜村滝字宮前	印旛沼	印	酒井・戸谷2004	T、K、Bl、A、Pe、RF、UFなど	良好な環状ブロック群など、資料編掲載
58	○	本埜村	大門遺跡	本埜村滝字大門	印旛沼	県	柳原1997	K、P、Bu、RF、UF、C、F	3ブロック、151点、砂川期の石器群など
59	◎	本埜村	向原遺跡	本埜村竜腹寺字向原	印旛沼	県	白石他1973	K、P、MB、MCなど	野岳・休場型の細石刃石器群など、資料編掲載
60	○	本埜村	向原北遺跡	本埜村竜腹寺字向原	印旛沼	県	野村他1976	K、ES、C、F	3ブロック、202点、Ⅲ層
61	◎	本埜村	五斗蒔遺跡	本埜村竜腹寺字五斗蒔	印旛沼	県	落合1993	K、SS、RF、UF、C、Fなど	7文化層、22ブロック、資料編掲載

番号	分類	市町村	遺跡名	所在地	水系	調査期間	文献	遺物	備考
62	○	本埜村	大王台西遺跡	本埜村竜腹寺字大王台西	印旛沼	県	県年報15・25・27	+	出土地点5ヶ所、IX・VII層、詳細不明、炉跡
63	◎	本埜村	荒久遺跡	本埜村角田字荒久	師戸川	県	落合・雨宮1999	P、F	1ブロック、5点、単独で黒曜石製の槍先形尖頭器
64	○	本埜村	雨古瀬遺跡	本埜村角田字雨古瀬	師戸川	県	白石他1974	K、P、ES、SS、RF、C、F	2ブロック、37点、砂川期の石器群など
65	◎	本埜村	角田台遺跡	本埜村角田字関所	師戸川	県	田村2000e、田村・橋本1984	K、A、P、ES、SS、Bu、C、Fなど	2400点以上、良好な有樋尖頭器資料（男女倉型）
66	○	本埜村	荒野前遺跡	本埜村角田字荒野前	師戸川	県	県年報12・23、田村2000f	K、Bl、Bu、SS、C、Fなど	出土地点25ヶ所、1600点以上、VII層とIII層
67	◎	本埜村	弐卜込遺跡	本埜村角田字弐卜込	師戸川	県	県年報14・15	K、F	1ブロック、詳細不明
68	○	栄町	向台遺跡	栄町酒直向台地先	印旛沼	県	石田他1985	A、F	1ブロック、単独で局部磨製石斧など
69	◎	栄町	大畑Ⅰ遺跡	栄町龍角寺大畑	印旛沼	県	石田他1985	K、C、Fなど	メノウ主体の砂川期の石器群など、資料編掲載
70	△	栄町	大畑Ⅱ遺跡	栄町龍角寺大畑	印旛沼	印	薩原他1987	F	単独
71	△	栄町	大畑Ⅱ－4遺跡	栄町龍角寺字台内	印旛沼	印	印年報17	F	遺構外出土、詳細不明
72	◎	栄町	前原Ⅰ遺跡	栄町龍角寺前原	印旛沼	県	石田他1985	K、C、Fなど	メノウ主体の砂川期の石器群など、資料編掲載
73	△	栄町	前原北遺跡	栄町龍角寺前原地先	利根川	印	印年報6	F	詳細不明
74	○	印旛村	油作第1遺跡	印旛村平賀字油作他	印旛沼	印	高橋1991	角、MB、MC、Bu、Pe、F	1ブロック、野岳・休場型の細石刃石器群
75	◎	印旛村	トゃ前遺跡B地点	印旛村吉田字トケ前	印旛沼	印	喜多・飯島1992	K、Bu、SS、C、F	2ブロック、57点、VII層
76	○	印旛村	ちぼろく遺跡	印旛村師戸字ちぼろく	印旛沼	印	喜多1999	K、F	2ブロック、23点、IX・VII層
77	◎	印旛村	平賀一ノ台遺跡	印旛村平賀字一ノ台	印旛沼	調査会	道澤他1986など	K、P、Bu、Dr、ES、Sp、C、Fなど	良好な東内野型尖頭器石器群など、資料編掲載
78	○	印旛村	伸ノ台遺跡	印旛村平賀字伸ノ台	印旛沼	調査会	道澤他1986	P、K、SS、UF、F	1ブロック、14点
79	◎	印旛村	油作第2遺跡	印旛村平賀字油作他	印旛沼	調査会	道澤他1986	K、P、ES、C、F	1ブロック、石器35点、礫48点、ブロック外で有舌尖頭器など
80	○	印旛村	井戸向遺跡	印旛村瀬戸字井戸向他	印旛沼	県	糸原1996	K、RF、UF、F、C	3ブロック、67点、IX層とIV下・V層
81	◎	印旛村	瀬戸遠部遺跡	印旛村瀬戸	印旛沼	県	白石他1973	Bl、P、ES、UF、F	剥片259点、縄文包含層にまじって大形の槍先形尖頭器、有舌尖頭器、隆起線文土器
82	△	印旛村	木戸口遺跡	印旛村吉田字木戸口	印旛沼	印	印年報4	F	単独、VII層
83	△	印旛村	馬々台遺跡	印旛村吉田字馬々台	印旛沼	調査会	古内他1980	K	縄文と混在
84	△	印旛村	辺台遺跡A地区	印旛村広台	印旛沼	印	斎藤・篠原1988	Bl、F	2点、遺構外出土
85	△	印旛村	前原第1遺跡	印旛村鎌苅字前原他	印旛沼	印	木内他1986	UF	1点、頁岩製、遺構外出土
86	△	印旛村	萩原株木遺跡	印旛村萩原字狢谷	印旛沼	印	野村2000	C	単独
87	△	印旛村	丑むぐり遺跡	印旛村松虫字丑むぐり	印旛沼	県	白石他1973	P、SS	単独出土2地点
88	○	印旛村	大竹遺跡	印旛村吉高字大竹	印旛沼	県	県年報22	+	出土地点6ヶ所、詳細不明
89	○	印旛村	炭焼台遺跡	印旛村瀬戸字炭焼台他	印旛沼	県	県年報21	+	出土地点7ヶ所、詳細不明
90	○	印旛村	細田台遺跡	印旛村瀬戸字細田台他	印旛沼	県	県年報22	+	出土地点1ヶ所、詳細不明
91	□	印旛村	打手第2遺跡	印旛村山田字打手他	印旛沼	採集	進藤1994	SS	破損品、大形石刃製、調査以前の採集品
92	△	印旛村	山田諏訪遺跡	印旛村山田字諏訪他	印旛沼	印	進藤1994	K、SS、Pe、C	5点、遺構外出土、採集
93	△	印旛村	惣行遺跡	印旛村平賀字惣行他	印旛沼	印	進藤1994	K、SS、Pe、MC、F	120点、遺構外出土
94	△	印旛村	駒込遺跡	印旛村平賀字駒込	印旛沼	調査会	村山他1985	K、F	7点、遺構外出土
95	◎	印旛村	木戸口古墳	印旛村吉田字木戸口	印旛沼	印	印年報6	Pe、C、Fなど	3ブロック、400点、詳細不明
96	△	印旛村	仲内遺跡	印旛村吉田字仲内	印旛沼	印	印年報4	+	詳細不明
97	△	印旛村	古山遺跡	印旛村鎌苅字古山	師戸川	印	木内他1986	P、Bu、ES、C、F	総数1086点、縄文と混在
98	△	印旛村	際作遺跡	印旛村際作	師戸川	印	印年報報告8	Sp	1点、東内野型尖頭器の破片、遺構外出土
99	◎	印旛村	向辺田遺跡	印旛村遠谷字堀尻	師戸川	県	県年報22	+	出土地点4ヶ所、詳細不明
100	△	印旛村	割野遺跡	印旛村割野	師戸川	県	落合・雨宮1999	K	単独
101	□	成田市	外子代(Loc.40)遺跡	成田市玉造1丁目	印旛沼	採集	戸田・江森1971	P	大形の槍先形尖頭器、調査以前の採集品
102	○	成田市	並木町大久保台Ⅱ遺跡	成田市並木町字大久保台	江川	印	印年報17	F	出土地点1ヶ所、詳細不明
103	◎	成田市	大袋腰巻遺跡	成田市大袋字腰巻	江川	印	菊池・小牧1998	Bu、F	1ブロック
104	△	成田市	台方下平Ⅱ遺跡	成田市台方字下平	江川	印	印年報19	K、ES、F	角二山型掻器など
105	△	成田市	台方下平Ⅰ遺跡	成田市台方字下平	江川	印	H.15調査	P、MC	野岳・休場型細石刃核など
106	○	成田市	西向野Ⅰ遺跡	成田市飯田町字西向野	江川	印	高橋1992	K、P、SS、Pe、RF、UF、C、F	2ブロック、黒曜石を主体とした槍先形尖頭器石器群
107	◎	成田市	西向野Ⅰ遺跡（第2地点）	成田市飯田町字西向野	江川	印	高花1993	K、P、SS、RF、UF、C、F	2ブロック、406点、黒曜石を主体とした槍先形尖頭器石器群
108	○	成田市	大袋小谷津遺跡	成田市大袋字小谷津	江川	印	酒井他1994	K、角、P、ES、SS、RF、UF、C、F	2ブロック、540点、角錐状石器・切出形ナイフの石器群、焼礫多数
109	◎	成田市	飯伸金堀遺跡	成田市飯伸字金堀	江川	印	酒井他1994	K、Bl、ES、SS、Pe、RF、UF、Spなど	東北産珪質頁岩を主体とする石器群、資料編掲載
110	○	成田市	飯伸中台遺跡	成田市飯伸字中台	江川	印	酒井他1994	K、UF、C、F	1ブロック、9点、VII～III層、下総型石刃再生技法など
111	△	成田市	成毛右田第1遺跡	成田市成毛字右田	荒海川	調査会	浜名他1976	P、F	有舌尖頭器2点、縄文と混在
112	□	成田市	土室長山第2遺跡	成田市土室字長山	荒海川	採集	県教委1997	+	
113	△	成田市	十余三四本木Ⅱ遺跡	成田市十余三	荒海川	県	宮・永塚2002	P、F	大形の槍先形尖頭器、縄文と混在
114	○	成田市	十余三瓜生池遺跡	成田市十余三字瓜生池	荒海川	県	斎木他1985	F	1ブロック、2点、III層上、剥片のみ、時期不明確
115	◎	成田市	十余三四本木Ⅰ遺跡	成田市十余三字四本木	荒海川	県	斎木他1985	K、SS、C、F	出土地点3ヶ所、58点
116	△	成田市	土室長山遺跡	成田市土室字長山	荒海川	県	小久貫・石橋1989	A	IX層下部より単独、打製石斧
117	□	成田市	神台遺跡	成田市木ノ根字神台	高谷川	採集	県教委1997	+	
118	△	成田市	東三里塚吉野台遺跡	成田市東三里塚	高谷川	県	西野他1971	P、MB、ES、UF、C、F	有舌尖頭器、東内野型尖頭器など、空港No.3・51・52、縄文と混在
119	◎	成田市	木の根拓美遺跡	成田市木ノ根字拓美	高谷川	県	宮他1981、新田他1993	T、K、A、P、SS、C、Fなど	2文化層、6ブロック、III層とIX層、削器を主体とするブロック群、空港No.6遺跡
120	○	成田市	南三里塚宮園遺跡	成田市南三里塚字宮園	高谷川	県	新田他1993	K、UF、C、F	1ブロック、22点、IV下・V層とVI層に単独出土、空港No.4遺跡
121	◎	成田市	木の根東台遺跡	成田市木ノ根字東台	高谷川	県	宮他1981	K、P、MB、MC、ES、SS、C、F	5ブロック、IV下・V層とIII層、配石遺構3基、空港No.5遺跡
122	○	成田市	畑ケ田浅間遺跡	成田市畑ヶ田字新畑	根木名川	県	田形他1988	C、F	2ブロック、III層下部とVII層上部
123	◎	成田市	川栗館遺跡	成田市川栗字遠祖神	根木名川	印	渋谷2001	K、P、Bu、Pe、C	7点、遺構外出土
124	○	成田市	畑ケ田新林遺跡	成田市畑ヶ田字新畑	根木名川	県	田形他1988	K、F	1ブロック、2点

番号	分類	市町村	遺跡名	所在地	水系	調査期間	文献	遺物	備考
125	◎	成田市	吉込遺跡	成田市古込字吉込	取香川	県	吉内他1971など	K、Bl、A、Dr、Pe、UF、C、F	南関東初の局部磨製石斧出土、空港（三里塚）No.55、資料編掲載
126	○	成田市	駒井野荒追遺跡	成田市駒井野字荒追	取香川	印・県	林田1993、県年報20・21	MB、Dr、SS、UF、Sp、F	7ブロック、Ⅲ層、頁岩製の細石刃石器群、県調査分は詳細不明
127	○	成田市	大山遺跡	成田市小菅字矢ノ尻	取香川	調査会	小川1999	SS、UF、F	1ブロック、Ⅲ層、岡田他 1978『大山遺跡』本報告あり
128	□	成田市	込前遺跡	成田市古込字込前	取香川	採集	県教委1997	P	有舌尖頭器
129	△	成田市	野毛平木戸下向山遺跡	成田市野毛平字木戸下	取香川	県	金丸・矢本1990	Bl	単独、「木戸下遺跡」として報告されている
130	△	成田市	駒井野城跡	成田市駒井野字東	取香川	県	県年報22～24	+	詳細不明
131	○	成田市	駒井野西ノ下遺跡	成田市駒井野字西ノ下	取香川	県	県年報21・22	F	5ブロック、詳細不明
132	○	成田市	小菅小屋ノ台Ⅱ遺跡	成田市小菅字小屋ノ台	取香川	印	鈴木・小牧1998	K、ES、RF、UF、C、F	2ブロック、41点、Ⅳ下・Ⅴ層段階の石器群、円形掻器など
133	◎	成田市	取香和田戸遺跡	成田市取香字和田戸	取香川	県	新田他1994など	K、角、P、Bu、ES、SS、C、Fなど	東内野型尖頭器石器群など大規模重層遺跡、空港No.60、資料編掲載
134	◎	成田市	東峰御幸畑西遺跡	成田市東峰字御幸畑	取香川	県	永塚他2000aなど	T、K、A、MB、MC、Bu、ES、Peなど	環状ブロック群・削片系細石刃石器群など大規模重層遺跡、空港No.61、資料編掲載
135	◎	成田市	天神峰最上遺跡	成田市天神峰字最上	取香川	県	永塚他2001cなど	K、A、P、MB、Bu、ES、SSなど	Ⅸ～Ⅶ層中に礫石出土、空港No.64、資料編掲載
136	○	成田市	駒井野台ノ田Ⅱ遺跡	成田市駒井野字台ノ田	取香川	県	矢本・蜂屋1997	K、Bl、P、UF、F	2ブロック、Ⅳ下・Ⅴ層とⅨ層、切出形ナイフ、有舌尖頭器など
137	○	成田市	十余三円妙寺遺跡	成田市十余三字円妙寺	取香川	県	斎木他1985	P、ES、C、F	1ブロック、8点、Ⅲ層上面
138	○	成田市	推出し古墳	成田市十余三字円妙寺	取香川	県	斎木他1985	K、F	1ブロック、3点
139	△	成田市	上福田保町遺跡	成田市上福田字保町	十日川	県	永沼1993	SS	単独、Ⅶ上層
140	△	成田市	南羽鳥タダメキ第2遺跡	成田市南羽鳥字タダメキ	十日川	印	酒井他2000	RFなど	遺構外出土
141	△	成田市	南羽鳥谷津堀遺跡B地点	成田市南羽鳥字谷津堀	十日川	印	酒井他2000	UF	メノウ製、縄文と混在
142	△	成田市	囲護台遺跡	成田市囲護台	小橋川	印	渋谷1990	P	大形の槍先形尖頭器、遺構外出土
143	△	成田市	松崎播磨遺跡	成田市松崎字遠原	小橋川	県	永沼1993	K	単独、Ⅳ下・Ⅴ層、切出形ナイフ
144	△	成田市	南囲護台遺跡	成田市囲護台	小橋川	印	阿部1996	P	単独
145	◎	成田市	山口雷上遺跡	成田市玉造5丁目	小橋川	県	大野・矢戸1987	K、F	出土地点4ヶ所、時期不明確、礫器
146	○	成田市	南羽鳥中畑遺跡D地点	成田市南羽鳥字中畑	長沼	印	宇田・松田1997	RF、C、F	1ブロック、30点、黒色ガラス質安山岩を主体とする石器群
147	◎	成田市	南羽鳥正福寺第2遺跡	成田市南羽鳥字正福寺	長沼	印	宇田1996	K、角、P、ES、C、F	2ブロック、152点、Ⅳ下・Ⅴ層、単独で大形の槍先形尖頭器
148	△	成田市	幡谷宮谷第1遺跡	成田市幡谷字宮谷	尾羽根川	印	印年報11	F	単独、Ⅶ層
149	◎	成田市	十余三稲荷峰遺跡	成田市十余三字稲荷峰	尾羽根川	県	永塚2000c	K、P、MB、SSなど	30前後のブロック、ブロックから6400点、Ⅱ～Ⅸ層、野岳・休場型の細石核、空港No.67、整理中・詳細不明
150	○	成田市	東峰御幸畑東遺跡	成田市東峰字御幸畑	尾羽根川	県	抄報S.53～S.55	K、SS、C、F	11ブロック、空港NO.62、整理中・詳細不明
151	△	成田市	十余三稲荷峰Ⅱ遺跡	成田市十余三字稲荷峰	尾羽根川	県	斎木他1985	P、F	縄文と混在
152	△	成田市	幡谷宮谷第2遺跡	成田市幡谷字宮谷	尾羽根川	印	印年報11	F	詳細不明
153	△	成田市	大室十三塚	成田市大室	尾羽根川	印	渋谷1996	K	2点、遺構外出土
154	△	成田市	大室仲妻遺跡	成田市大室字仲妻	尾羽根川	印	杉山2004	F	1点、遺構外出土
155	△	成田市	古込朝日台遺跡	成田市古込字朝日台	尾羽根川	県	西山他1971	F	縄文と混在、空港No.13
156	□	成田市	土室坊前遺跡	成田市土室字坊前	尾羽根川	採集	西野1980	F	
157	◎	成田市	椎ノ木遺跡	成田市芝字椎ノ木	尾羽根川	印	川端他1987	K、Bl、P、ES、Bu、Pe、F	1ブロック、Ⅶ層
158	○	成田市	十余三稲荷峰西遺跡	成田市十余三字稲荷峰	尾羽根川	県	永塚他2000b、永塚他2003	T、K、P、Bu、SS、C、Fなど	3文化層、13ブロック、Ⅵ層とⅣ下・Ⅴ層、環状ブロック群2基など、空港No.68遺跡
159	◎	成田市	東峰西笠峰遺跡	成田市東峰字西笠峰	尾羽根川	県	永塚・平野1999	K、Bl、P、Bu、SS、Pe、UF、C、F	4ブロック、Ⅸ層とⅥ～Ⅲ層、空港No.63遺跡
160	◎	成田市	天神峰奥之台遺跡	成田市天神峰字奥之台	尾羽根川	県	矢本他1997など	T、K、Bl、A、ES、SS、Peなど	3文化層、31ブロック、空港No.65、資料編掲載
161	◎	成田市	十余三稲荷峰東遺跡	成田市十余三字稲荷峰	尾羽根川	県	永塚他2001b	K、P、MC、SS、Pe、RF、UF、C、F	7ブロック、182点、空港No.66遺跡
162	◎	成田市	南三里塚宮原第1遺跡	成田市南三里塚字宮原	木戸川	印	宇井・布施2004	T、K、A、SS、C、Fなど	3基の環状ブロック群など、資料編掲載
163	◎	成田市	三里塚馬場	成田市三里塚字馬場	木戸川	県	小林1982	K、P、MB、MC、SS、C、F	13ブロック、Ⅲ～Ⅶ層中、細石刃石器群、各層でまとまった資料あり
164	○	成田市	御料牧場遺跡	成田市三里塚字御料牧場	木戸川	県	太田1988	K、Bl、ES、RF、UF、F	1ブロック、Ⅵ層、大形石刃を用いたナイフ
165	△	四街道市	中久喜遺跡	四街道市物井字中久喜	鹿島川	県	県年報22	+	詳細不明
166	△	四街道市	松葉作遺跡	四街道市物井字松葉作	鹿島川	印	鈴木2001	C	1点、下総型石刃再生技法、「松葉作第2地点」として報告、遺構外出土
167	△	四街道市	郷遺跡	四街道市物井字郷	鹿島川	県	県年報23	+	詳細不明
168	○	四街道市	新久遺跡	四街道市物井字新久	鹿島川	県	県年報11・15・25・27	+	出土地点9ヶ所、詳細不明
169	◎	四街道市	出口遺跡	四街道市物井字出口	鹿島川	県	県年報24・26・27	+	出土地点4ヶ所、詳細不明
170	○	四街道市	高堀遺跡	四街道市栗山字高堀	鹿島川	県	県年報13・26	+	5ブロック、Ⅸ～Ⅶ層、詳細不明
171	◎	四街道市	鏡塚No.2遺跡	四街道市長岡字鏡塚	鹿島川	印	菊池1996	K、F	1ブロック、17点、Ⅸ層
172	○	四街道市	北ノ作遺跡	四街道市物井字北ノ作	鹿島川	県	県年報23	+	1ブロック、詳細不明
173	◎	四街道市	館ノ山遺跡	四街道市物井字館ノ山	鹿島川	県	県年報23～25	+	1ブロック、詳細不明
174	○	四街道市	谷津田遺跡	四街道市鹿渡字谷津田	鹿島川	印	印年報19	K、P、ES、SS、UF、RF、C、F	3ブロック、掻器多数
175	△	四街道市	桜ヶ丘遺跡	四街道市大日字桜ヶ丘	鹿島川	四教委	川端1992	P、SS、F	遺構外出土
176	△	四街道市	割山遺跡	四街道市上野字割山	鹿島川	印	斎藤1986	Bl、F	縄文と混在
177	△	四街道市	上野遺跡	四街道市上野	鹿島川	印	大澤他1993	P、SS、F	有舌尖頭器など、縄文と混在
178	△	四街道市	郷野遺跡	四街道市中台字郷野	鹿島川	印	飯島他2002	K、F	遺構外出土
179	△	四街道市	笹目沢No.2遺跡	四街道市成山字笹目沢	鹿島川	印	印年報16	P、F	遺構外出土
180	△	四街道市	堂ノ後遺跡	四街道市吉岡字堂ノ後	鹿島川	県	山田1995	C、F	3点、遺構外出土
181	△	四街道市	軽沢遺跡	四街道市吉岡字軽沢	鹿島川	調査会	大賀他1986	P、Pe、SS、F	縄文と混在　有舌尖頭器
182	△	四街道市	金住院遺跡	四街道市吉岡字金住院	鹿島川	調査会	大賀他1986	P	柳葉形尖頭器、遺構外出土
183	△	四街道市	道作遺跡	四街道市鹿渡字道作	鹿島川	四教委	川端1994	P	柳葉形尖頭器、遺構外出土
184	○	四街道市	中山遺跡	四街道市和良比字中山	鹿島川	印	渋谷1987	K、F	7点、Ⅶ層、Ⅳ下・Ⅴ層、分布散漫
185	△	四街道市	東原遺跡	四街道市和良比字東原	鹿島川	印	渋谷1987	K、C、F	8点、チャート主体、分布散漫
186	△	四街道市	後口遺跡	四街道市亀崎字後口	鹿島川	採集	四教委1982	K、P	採集によりナイフ形石器と有舌尖頭器、下層調査からは検出されず
187	△	四街道市	和良比御屋敷遺跡	四街道市和良比字御屋敷	鹿島川	印	斎藤・高谷1990	P	単独、Ⅲ層、ソフトロームから掘り込まれた土坑

番号	分類	市町村	遺跡名	所在地	水系	調査期間	文献	遺物	備考
188	○	四街道市	中久喜No.2遺跡	四街道市物井字中久喜	鹿島川	印	石戸1987	K、Bl、C、F	3ブロック、124点
189	◎	四街道市	和良比遺跡群	四街道市和良比字本山他	鹿島川	印	高谷1991	T、K、A、角、P、MC、Bu、ESなど	大規模重層遺跡、4文化層、4000点超、Ⅸ～Ⅲ層、Ⅳ下・Ⅴ層段階の良好な資料、荒屋型彫器など
190	◎	四街道市	木戸先遺跡	四街道市鷹の台2丁目	鹿島川	印	林田他1994など	K、P、MB、MC、Bu、C、Fなど	東内野型尖頭器・削片系細石刃・柳葉形尖頭器の3つの石器群、資料編掲載
191	◎	四街道市	御原No.2遺跡	四街道市鹿渡字御原	鹿島川	印	印年報19	K、P、ES、SS、UF、RF	2文化層、3ブロック
192	◎	四街道市	御山遺跡	四街道市物井字御山	鹿島川	県	矢本他1994	T、K、Bl、A、P、SS、Pe、Spなど	県内最古級の環状ブロック群など大規模重層遺跡、資料編掲載
193	◎	四街道市	出口・鐘塚遺跡	四街道市物井字出口	鹿島川	県	岡田1999など	T、K、Bl、A、角、P、SS、Peなど	環状ブロック群など大規模重層遺跡、資料編掲載
194	○	四街道市	小屋ノ内遺跡	四街道市物井字小屋ノ内	鹿島川	県	白鳥1995	T、K、A、C、Fなど	環状ブロック群、約50ブロック、約650点
195	◎	四街道市	棒山・呼戸遺跡	四街道市長岡字呼戸	鹿島川	県	県年報11・13・14・25	K、Bl、P、Bu、C、Fなど	大規模、詳細不明
196	○	四街道市	稲荷塚遺跡	四街道市物井字新田	鹿島川	県	県年報20～22	+	出土地点10ヶ所、詳細不明
197	◎	四街道市	清水遺跡	四街道市物井字清水	鹿島川	県	県年報12・22・25・27	+	出土地点25ヶ所、詳細不明
198	○	四街道市	木戸場遺跡	四街道市鹿渡字木戸場	鹿島川	印	印年報19	F	大規模礫群2ヶ所
199	◎	四街道市	大割遺跡	四街道市内黒田字大割	手繰川	県	渡辺1991	K、A、P、MB、ES、C、Fなど	7文化層、Ⅸ下～Ⅲ層までの大規模重層遺跡
200	◎	四街道市	池花遺跡	四街道市内黒田字池花	手繰川	県	渡辺1991	K、Bl、P、ES、SS、RF、UFなど	良好な槍先形尖頭器石器群、資料編掲載
201	◎	四街道市	池花南遺跡	四街道市内黒田字池花	手繰川	県	渡辺1991	T、K、A、SS、Pe、C、Fなど	環状ブロック群、Ⅵ層から竪穴遺構など大規模重層遺跡、資料編掲載
202	○	四街道市	西山No.3遺跡	四街道市内黒田字西山	手繰川	印	木内1993	MC、C、F	1ブロック、Ⅸ層、ブロック外から細石刃核
203	◎	佐倉市	井野安坂山遺跡	佐倉市井野字安坂山	印旛沼	印	印年報18・H.15本調査	K、C、F	2ブロック、Ⅳ下層、詳細不明
204	△	佐倉市	大蛇中芝遺跡	佐倉市大蛇町字中芝	印旛沼	印	加藤2004	K、F	単独、遺構外出土
205	◎	佐倉市	先崎西原遺跡	佐倉市先崎字西原他	印旛沼	印	印年報17	+	1ブロック、Ⅳ下・Ⅴ層
206	○	佐倉市	大蛇麻賀多脇遺跡	佐倉市大蛇町字麻賀田脇	印旛沼	県	香取1996	P、UF、F	2ブロック、Ⅲ層
207	◎	佐倉市	大堀遺跡	佐倉市上志津字大堀	印旛沼	県	田村他1989	K、A、Bu、Pe、RF、UF、C、F	3ブロック、Ⅸ層、局部磨製石斧
208	◎	佐倉市	大林遺跡	佐倉市井野町字大林	勝田川	県	田村他1989など	K、角、P、MB、MC、Bu、SS、Peなど	槍先形尖頭器石器群の細分資料、資料編掲載
209	◎	佐倉市	高岡大福寺遺跡	佐倉市高岡字大福寺他	高崎川	印	橋本他1993	MC、Sp	削片系細石刃石器群、資料編掲載
210	◎	佐倉市	高岡大山遺跡	佐倉市高岡字大山他	高崎川	印	橋本他1993	MB、MC、Bu、ES、SS、RF、UF、Spなど	削片系細石器石器群、資料編掲載
211	△	佐倉市	高岡砦跡	佐倉市高岡字大崎	高崎川	県	香取1996	Pe、F	遺構外出土
212	△	佐倉市	石川1号墳	佐倉市石川字大栗作	高崎川	印	印年報14	+	詳細不明
213	△	佐倉市	宮本宮後B地区遺跡	佐倉市宮本字宮後	高崎川	印	飯島2001	P	未製品1点、遺構外出土、下層調査からは検出されず
214	△	佐倉市	石川向ら地遺跡	佐倉市石川字阿良地	高崎川	印	喜多1993	角	1点、遺構外出土
215	△	佐倉市	弥勒東台遺跡	佐倉市弥勒町字東台	高崎川	県	白鳥1997	A	局部磨製石斧1点、遺構外出土
216	○	佐倉市	大作遺跡	佐倉市神門字大作	鹿島川	県	藤崎・田島1990	K、A、Bu、ES、SS、C、Fなど	4文化層、17ブロック、局部磨製石斧、切出形ナイフなど
217	◎	佐倉市	池向遺跡	佐倉市岩富字池向	鹿島川	県	渡辺他1995	K、角、P、ES、SS、RF、UFなど	4文化層、資料編掲載
218	△	佐倉市	羽鳥外海道遺跡	佐倉市羽鳥字外海道	鹿島川	県	県年報24	F	詳細不明
219	△	佐倉市	吉見台遺跡A地区	佐倉市吉見字秋下他	鹿島川	印	林田2000	SS、F	縄文と混在
220	□	佐倉市	江原台遺跡	佐倉市臼井田字道部台他	鹿島川	採集	滝口他1961	P	2点、調査以前の採集品
221	△	佐倉市	飯重新畑遺跡	佐倉市飯重字新畑	鹿島川	調査会	桑原他1974	MC	1点、黒曜石製の細石刃核、遺構外出土
222	□	佐倉市	飯野新坂遺跡	佐倉市飯野字新坂他	鹿島川	採集	県教委1997	P	
223	△	佐倉市	佐倉城跡	佐倉市城内町	鹿島川	印	能勢1996	K、P	2点、遺構外出土
224	○	佐倉市	太田・大篠塚Loc.1遺跡	佐倉市大篠塚字新林	鹿島川	調査会	田川他1982	K、Bl、C	6点、分布散漫
225	□	佐倉市	坂戸西宿遺跡	佐倉市坂戸字西宿	鹿島川	採集	県教委1997	P	
226	△	佐倉市	宮内南台遺跡	佐倉市宮内字南台	鹿島川	印	印年報13	+	遺構外出土、詳細不明
227	◎	佐倉市	宮内井戸作遺跡	佐倉市宮内字井戸作	鹿島川	印	喜多・高谷1998、印年報14・15	K、P、MB、Pe、RF、UF、Sp、F	1ブロック、54点、単独で東内野型尖頭器など、数ブロック分が未報告
228	△	佐倉市	高崎新山遺跡	佐倉市高崎字新山	鹿島川	印	木内1986	P、Dr	有舌尖頭器など、遺構外出土
229	△	佐倉市	吉見中ノ比余遺跡	佐倉市吉見字中ノ比余他	鹿島川	印	印年報報告16	F	1点、縄文と混在
230	○	佐倉市	七曲高ヒヨ遺跡	佐倉市七曲字高ヒヨ	鹿島川	佐教委	内田他1989	C、F	3ブロック、詳細不明
231	◎	佐倉市	新堤遺跡	佐倉市西御門字新堤	鹿島川	印	印年報14	+	3ブロック、Ⅸ～Ⅲ層、詳細不明
232	△	佐倉市	古内遺跡	佐倉市岩富字古内	鹿島川	県	矢戸他1987	SS、F	遺構外出土
233	△	佐倉市	臼井屋敷跡遺跡(第2次)	佐倉市吉見字臼井屋敷	鹿島川	印	H.15調査	C	1点、遺構外出土
234	△	佐倉市	明代台遺跡B地点	佐倉市岩富字明代台	鹿島川	県	矢戸他1987	K	単独
235	◎	佐倉市	白池台遺跡	佐倉市西御門字新堤台	鹿島川	印	高谷1995	Bl、ES、F	1ブロック、Ⅳ下・Ⅴ層、黒曜石製の掻器など、
236	○	佐倉市	太田長作遺跡	佐倉市太田字長作	鹿島川	印	林田1998	K、Bl、F	2ブロック、Ⅶ～Ⅵ層、下総型石刃再生技法か？
237	◎	佐倉市	間野台貝塚（第2次）	佐倉市臼井字篤松他	鹿島川	印	小倉1999	MB、Bu、ES、F	1ブロック、48点、荒屋型彫器など
238	○	佐倉市	岩名古墳群	佐倉市岩名字寄済	鹿島川	印	酒井2001	T、K、ES、SS、Pe、RF、UF、C、F	2ブロック、Ⅸ層とⅣ下・Ⅴ層
239	◎	佐倉市	太田・大篠塚遺跡	佐倉市太田字長作台他	鹿島川	目文研	田川・千田1978	K、Bl、Dr、ES、SS、C、F	5ブロック、頁岩主体
240	○	佐倉市	西御門荒生遺跡C地区	佐倉市西御門字荒生	鹿島川	印	印年報14	+	4ブロック、174点、Ⅳ下・Ⅴ層、詳細不明
241	◎	佐倉市	西御門明神台遺跡	佐倉市西御門字明神台	鹿島川	印	印年報14	+	3ブロック、600点ほど、Ⅳ下・Ⅴ層、詳細不明
242	◎	佐倉市	内田端山越遺跡	佐倉市内田字端山越	鹿島川	印	酒井2001・印年報16	K、P、ES、SS、C、Fなど	黒曜石製の片面加工尖頭器石器群など、資料編掲載
243	◎	佐倉市	立山遺跡	佐倉市直弥字立山	鹿島川	県	金丸1983	ES、UF、F	9ブロック、Ⅸ～Ⅲ層、時期不明礫
244	◎	佐倉市	向山谷津遺跡	佐倉市神門字向山谷津	鹿島川	県	矢戸他1987	Bu、SS、C、Fなど	X・Ⅸ層中より焼土遺構など、資料編掲載
245	◎	佐倉市	明代台A地点	佐倉市岩富字明代台他	鹿島川	県	矢戸他1987	Bu、ES、SS	1ブロック、3点
246	○	佐倉市	明代台C地点	佐倉市岩富字明代台他	鹿島川	県	矢戸他1987	A？、SS、F	1ブロック、3点、石斧？器種不確定
247	◎	佐倉市	木戸場A地点遺跡	佐倉市神門字木戸場	鹿島川	県	矢戸他1987など	MB、MC、Bu、ES、SSなど	削片系細石刃石器群など、資料編掲載
248	○	佐倉市	木戸場B地点遺跡	佐倉市神門字木戸場	鹿島川	県	矢戸他1987	K、F	2ブロック、Ⅵ層とⅣ下・Ⅴ層
249	◎	佐倉市	腰巻遺跡	佐倉市神門字腰巻	鹿島川	県	石倉1987	K、Bl、P、Dr、ES、SS、C、F	11ブロック、Ⅸ～Ⅲ層、Ⅸ層資料に石刃主体の環状ブロック群、単独で有舌尖頭器など
250	○	佐倉市	タルカ作遺跡	佐倉市神門字タルカ作他	鹿島川	県	田村他1985	K、P、Dr、SS、C、F	5ブロック、縄文の包含層から有舌尖頭器3点など

番号	分類	市町村	遺跡名	所在地	水系	調査期間	文献	遺物	備考
251	◎	佐倉市	星谷津遺跡	佐倉市岩富字星谷津	鹿島川	県	鈴木他1978など	K、角、P、MB、MC、ES、SSなど	県下においてはじめて下総台地における立川ローム基本層序案が提示された遺跡、資料編掲載
252	◎	佐倉市	向原遺跡	佐倉市神門字向原	鹿島川	県	大原他1989など	K、角、P、Bu、ES、SS、Peなど	最古段階の槍先形尖頭器など、資料編掲載
253	○	佐倉市	南広遺跡	佐倉市宮本字南広	鹿島川	県	豊田他1993	K、Bl、UF、C、F	4ブロック、34点、Ⅵ層
254	○	佐倉市	松向作遺跡	佐倉市天辺字松向作他	鹿島川	県	田島他1992	K、P、Pe、UF、F	2ブロック、20点、珪質頁岩主体の石器群と黒曜石主体の石器群
255	◎	佐倉市	栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡	佐倉市宮本字栗野	鹿島川	県	田島他1991など	K、Bl、Bu、ES、SS、Peなど	良好なⅥ層中の石器群など、資料編掲載
256	◎	佐倉市	御塚山遺跡	佐倉市上志津字御塚山	手繰川	県	田村他1989など	K、Bl、P、ES、SS、C、Fなど	3文化層、資料編掲載
257	◎	佐倉市	芋窪遺跡	佐倉市上志津字芋窪	手繰川	県	田村他1989など	K、Bu、SS、Peなど	Ⅶ層中より多数の楔形石器出土など、資料編掲載
258	□	佐倉市	畔田川崎東遺跡	佐倉市畔田字川崎	手繰川	採集	県教委1997	MC	
259	△	佐倉市	臼井南(石神第3地点)遺跡	佐倉市臼井台字石神	手繰川	調査会	熊野他1976	K、UF	遺構外出土
260	△	佐倉市	生谷B地区遺跡	佐倉市臼井台字石神	手繰川	調査会	田川他1972	P、SS	2点、下層と周辺へ拡張調査するが検出されず
261	△	佐倉市	臼井南渡戸A地区遺跡	佐倉市臼井台字渡戸	手繰川	調査会	熊野他1975	P、Bu、SS	攪乱より出土、有舌尖頭器など
262	△	佐倉市	吉見稲荷山遺跡	佐倉市吉見字稲荷山	手繰川	県	県年報27	+	詳細不明
263	△	佐倉市	上志津干場遺跡	佐倉市上志津字干場	手繰川	印	佐藤2004	K、SS	2点、遺構外出土
264	△	佐倉市	臼井台大名宿遺跡	佐倉市臼井台大名宿	手繰川	印	小牧2002	T、Bu	2点、下総型石刃再生技法、遺構外出土
265	○	佐倉市	神楽場遺跡	佐倉市下志津字志津橋他	手繰川	印	菊池他1991	Bl、MB、C、F	3ブロック、Ⅶ～Ⅲ層、大形石刃など
266	○	佐倉市	臼井南(石神第1地点)遺跡	佐倉市臼井台字石神	手繰川	佐教委	熊野他1975	P、MB、MC、Bu、UF、C、F	2ブロック、覆土中から槍先形尖頭器・細石刃石器群
267	◎	佐倉市	生谷古新山南遺跡	佐倉市生谷字古新山他	手繰川	印	印年報報告11	P、F	3点、Ⅲ層、分布散漫
268	◎	八街市	榎戸小富遺跡	八街市榎戸字小富	高崎川	印	酒井2000	K、UF、C、Fなど	下総型石刃再生技法など、資料編掲載
269	△	八街市	朝陽遺跡	八街市文違	高崎川	採集	田村・橋本1984	P、Buなど	東内野型尖頭器を含む石器群、未調査で消滅
270	□	八街市	元駒場遺跡	八街市住野字元駒場	高崎川	採集	八教委1987	K、SS、UF、Fなど	詳細不明、住野遺跡として伊藤1959『千葉県石器時代遺跡地名表』にも記述あり
271	□	八街市	藤株Ⅱ遺跡	八街市住野字藤株	高崎川	採集	県教委1997	P	
272	△	八街市	鉄砲作遺跡	八街市榎戸字鉄砲作	高崎川	印	渋谷1993	K	単独
273	△	八街市	新地遺跡(第2地点)	八街市榎戸字新地	高崎川	印	印年報11	+	詳細不明
274	△	八街市	一之綱Ⅲ遺跡	八街市八街字榎台	高崎川	印	中山1995	P	有舌尖頭器
275	○	八街市	一之綱Ⅰ遺跡	八街市榎戸字一之綱	高崎川	印	渋谷1993	P、ES、SS、F	1ブロック、35点、黒曜石主体の石器群
276	△	八街市	小間子牧野馬上手	八街市八街ヘ	作田川	印	印年報報告9	Bl	1点、遺構外出土
277	△	八街市	西村邸屋敷跡	八街市八街字北側	作田川	印	喜多1998	F	1点、頁岩製、遺構外出土
278	□	八街市	宮ノ脇遺跡	八街市吉倉字宮ノ脇	鹿島川	採集	県教委1997	P	
279	△	八街市	米ヶ峠遺跡	八街市砂字米ヶ峠	鹿島川	印	江森1996	P	縄文と混在
280	□	八街市	南沖Ⅱ遺跡	八街市沖字南沖	鹿島川	採集	県教委1997	P	
281	△	酒々井町	下岩橋芝栗毛遺跡	酒々井町下岩橋字芝栗毛	印旛沼	印	木内1994	MC、SS、F	確認調査のみ
282	△	酒々井町	伊篠台畑遺跡	酒々井町伊篠字上屋敷	印旛沼	印	木内1994	ES、SS	確認調査のみ
283	△	酒々井町	伊篠大日遺跡	酒々井町伊篠字大日	印旛沼	印	木内1994	K	確認調査のみ
284	△	酒々井町	上岩橋岩崎遺跡	酒々井町上岩橋字岩崎	印旛沼	印	高花1996	K、P、F	3点、珪質頁岩製の大形石刃を用いたナイフ形石器など、遺構外出土
285	○	酒々井町	本佐倉大堀遺跡	酒々井町上本佐倉字大堀	印旛沼	印	印年報10	K、ES、SS、F	黒曜石主体のブロックあり、詳細不明
286	○	酒々井町	本佐倉北大堀遺跡	酒々井町本佐倉字北大堀	印旛沼	県	横山他1996	K、P、ES、SS、Pe、C、F	10ブロック、Ⅸ～Ⅳ下・Ⅴ層
287	○	酒々井町	北大堀遺跡	酒々井町本佐倉字北大堀	印旛沼	印	篠原1985	K、UF、F	15点、Ⅳ下・Ⅴ層、分布散漫
288	○	酒々井町	伊篠白幡遺跡	酒々井町伊篠字白幡	印旛沼	県	田島他1986	K、P、SS、UF、F	1ブロック、67点
289	△	酒々井町	墨総合公園内遺跡	酒々井町尾上字小盛田	高崎川	酒教委	高野他1980	+	詳細不明
290	△	酒々井町	墨木戸遺跡	酒々井町墨字木戸	高崎川	印	中山1995	P	2点、遺構外出土
291	○	酒々井町	墨古沢遺跡	酒々井町墨字古沢	高崎川	県	県年報25・27	+	2ブロック、詳細不明
292	△	酒々井町	上本佐倉上宿遺跡	酒々井町上本佐倉字上宿	高崎川	印	小倉2001	Bl	1点、遺構外出土
293	◎	酒々井町	墨新山遺跡	酒々井町墨字新山	高崎川	印	小谷他1997	K、P、Bu、RF、UF、Peなど	Ⅳ下・Ⅴ～Ⅲ層にかけての石器群、資料編掲載
294	○	酒々井町	飯積原山遺跡	酒々井町飯積	高崎川	県	県年報21～23	+	出土地点24ヶ所、詳細不明
295	○	酒々井町	墨古沢南1遺跡	酒々井町墨字小谷津	高崎川	県	県年報25・26	+	大規模環状ブロック群、詳細不明
296	△	富里市	新橋遺跡	富里市新橋	高崎川	富教委	篠原他1978b	P、F	12点、遺構外出土
297	□	富里市	大堀遺跡	富里市大堀	高崎川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
298	□	富里市	二十六榎Ⅱ遺跡	富里市大堀	高崎川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
299	□	富里市	四十四榎遺跡	富里市十倉	高崎川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
300	□	富里市	新田遺跡	富里市七栄	高崎川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
301	□	富里市	人形台遺跡	富里市七栄	高崎川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
302	○	富里市	両国沖Ⅲ遺跡	富里市十倉	高崎川	調査会	篠原1982	P、SS	Ⅲ層、大形の槍先形尖頭器・槍刃など、分布散漫
303	△	富里市	稲荷谷津遺跡	富里市立沢字稲荷谷津	高崎川	印	日暮・小谷1998	K、P、Pe、F	33点、ピエス製作に伴う砕片・焼礫多数、遺構外出土
304	△	富里市	新橋高松遺跡	富里市新橋字高松	高崎川	印	林田1997	F	単独
305	□	富里市	五十九榎遺跡	富里市大堀	高崎川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
306	□	富里市	新田台遺跡	富里市高野	高崎川	採集	県教委1997	+	
307	□	富里市	六十二榎遺跡	富里市武州	高崎川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
308	□	富里市	金堀遺跡	富里市十倉	高崎川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
309	□	富里市	吉川Ⅱ遺跡	富里市十倉	高崎川	採集	県教委1997	+	
310	□	富里市	三十榎遺跡	富里市十倉字三十榎	高崎川	採集	県教委1997	+	
311	○	富里市	獅子穴X遺跡	富里市七栄字獅子穴	高崎川	印	印年報18	K	出土地点1ヶ所、詳細不明
312	△	富里市	狐谷津遺跡	富里市新中沢字狐谷津	高崎川	印	日暮・小谷1998	SS、RF、F	3点、珪質頁岩製、遺構外出土
313	△	富里市	谷津台遺跡	富里市新中沢字谷津台	高崎川	印	日暮・小谷1998	UF、F	2点、遺構外出土

番号	分類	市町村	遺跡名	所在地	水系	調査期間	文献	遺物	備考
314	◎	富里町	東内野遺跡	富里市七栄字東内野	高崎川	印・富教委	篠原他1977aなど	K、P、Bu、SS、Spなど	「東内野型尖頭器」の標識遺跡、資料編掲載
315	◎	富里町	獅子穴IX遺跡	富里市七栄字獅子穴	高崎川	印	新田・吉林1994	K、P、SS、C、Fなど	焼土遺構など、資料編掲載
316	○	富里町	塚越遺跡	富里市新中沢字出戸	高崎川	印	日暮・小谷1998	MB、MC、F	3ブロック、407点、野岳・休場型の細石刃石器群
317	○	富里町	中沢野馬木戸遺跡	富里市中沢	高崎川	印	宮1999	P、SS、F	1ブロック、有舌尖頭器など
318	○	富里町	獅子穴VI遺跡	富里市七栄	高崎川	富教委	篠原他1977b	K、Bl、SS、Pe、UF、F	2ブロック、148点、Ⅳ下・Ⅴ層、切出形ナイフ
319	◎	富里町	南大溜袋遺跡	富里市七栄	高崎川	富教委	戸田1973など	P、SS、Drなど	多数の柳葉形尖頭器など、資料編掲載
320	○	富里町	梅田台遺跡	富里市中沢字南台	高崎川	印	印年報18	C、F	1ブロック、7点、X層、詳細不明
321	○	富里町	南内野遺跡	富里市七栄	高崎川	県	鳴田1985	ES、Pe、C、F	1ブロック、150点（礫134点）、Ⅳ下・Ⅴ層
322	□	富里市	宮内遺跡	富里市御料	木戸川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
323	□	富里市	旭遺跡	富里市御料字旭	木戸川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
324	□	富里市	山室人外遺跡	富里市二区	木戸川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
325	◎	富里市	吉込V遺跡	富里市七栄字吉込	根木名川	富教委	篠原2002	T、K、Blなど	立川ローム層下位の石器群、3ブロック、2基の炉址検出、資料編掲載
326	□	富里市	旧平遺跡	富里市十倉	根木名川	採集	富教委1981、県教委1997	+	詳細不明
327	△	富里市	古山遺跡	富里市日吉倉	根木名川	調査会	浜名他1975	K、P、UF	有舌尖頭器など　日吉倉遺跡第Ⅳ地点、採集
328	△	富里市	北新木戸1遺跡	富里市七栄	根木名川	調査会	篠原他1980a	K、Bl、P、C、F	有舌尖頭器など、付編として記載、詳細不明
329	△	富里市	北新木戸2遺跡	富里市七栄	根木名川	調査会	篠原他1980a	K、F	付編として記載、詳細不明
330	□	富里市	北新木戸3遺跡	富里市七栄	根木名川	採集	富教委1981、県教委1997	+	詳細不明
331	○	富里市	北大溜袋遺跡	富里市七栄	根木名川	調査会	篠原他1980a	K、P、Sp、F	4点、散在
332	□	富里市	葉山遺跡	富里市御料	根木名川	採集	富教委1981、県教委1997	+	
333	△	富里市	南新木戸遺跡	富里市七栄	根木名川	富教委	抄報S.59	+	詳細不明
334	○	富里町	獅子穴II遺跡	富里市七栄字獅子穴	根木名川	印	篠原1988	T、K、RF、UF、C、F	5ブロック、1000点以上、IX層
335	○	富里町	久能高野遺跡	富里市久能字高野	根木名川	印	菊池・篠原1988	K、SS、C、F	1ブロック、15点、切出形ナイフなど
336	○	富里町	笠木山遺跡	富里市根木名	根木名川	富教委	篠原1980	P、SS、F	1ブロック、74点
337	○	富里町	松作遺跡	富里市根木名	根木名川	富教委	篠原他1980b	K、Bl、UF、F	2ブロック、礫群
338	○	富里町	久能下池田遺跡	富里市久能字下池田	根木名川	富教委	篠原他1977c	P、C、F	1ブロック、片面加工の槍先形尖頭器など
339	○	富里町	中木戸遺跡	富里市七栄字中木戸	根木名川	県	南宮他1988	K、P、MB、ES、SS、RF、UF、F	2ブロック、196点、東内野型尖頭器・円形掻器など

≪凡　例≫

分　類：○・◎＝付図・遺跡分布図中の赤（◎＝資料編掲載遺跡）、△＝橙、□＝緑の遺跡をそれぞれ表す。

調査機関：印＝印旛郡市文化財センター、県＝千葉県文化財センター、四教委＝四街道市教育委員会、佐教委＝佐倉市教育委員会、酒教委＝酒々井町教育委員会、富教委＝富里市教育委員会、日文研＝日本文化財研究所、調査会＝各遺跡調査会を表す。

文　献：印年報＝印旛郡市文化財センター年報、県年報＝千葉県文化財センター年報、県教委＝千葉県教育委員会、抄報＝千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報、四教委＝四街道市教育委員会、八教委＝八街市教育委員会、富教委＝富里市教育委員会を表す。なお、文献の正書名は巻末に一括表記した。

遺　物：T＝台形様石器、K＝ナイフ形石器、Bl＝石刃、A＝石斧、角＝角錐状石器、P＝尖頭器、MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、Bu＝彫刻刀形石器、Dr＝石錐、ES＝掻器、SS＝削器、RF＝二次加工のある剥片、UF＝使用痕のある剥片、Sp＝敲石、C＝石核、F＝剥片、＋＝旧石器の検出は見られているが、内容が不明なものを表す。

参考・引用文献一覧

印旛郡市文化財センター報告書

阿部寿彦	1996	『南囲護台遺跡（第1地点）－（仮）スターツ株式会社宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
阿部寿彦他	1993a	『高岡遺跡群Ⅰ－佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書（1）－』	(財) 印旛郡市文化財センター
阿部寿彦他	1993b	『高岡遺跡群Ⅱ－佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書（2）－』	(財) 印旛郡市文化財センター
阿部寿彦	1999	『東遺跡（第2地点）・馬込遺跡Ⅱ－印西市道00-109号線埋蔵文化財調査・（馬込地区）排水整備事業に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
飯島伸一	2001	『宮本宮後遺跡B地区（第2次）－汚泥再生処理センター建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
飯島伸一他	2002	『四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（1）－郷野遺跡－』	(財) 印旛郡市文化財センター
石戸啓夫	1987	『中久喜No.2遺跡－四街道市第2福祉作業所建設予定地内調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
板橋規子	2001	『馬場遺跡（第1地点）・北谷塚－印西市道18-059号線埋蔵文化財調査委託・印西市道00-009号線埋蔵文化財調査委託－』	(財) 印旛郡市文化財センター
岩崎　健・小牧美知枝	2002	『臼井台大名宿遺跡（第4次）－臼井台大名宿宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
宇井義典・布施　千	2004	『南二里塚宮原第1・第2遺跡－（仮）南二里塚物流基地建設予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
宇田敦司	1996	『南羽鳥遺跡群Ⅰ－成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（1）－』	(財) 印旛郡市文化財センター
宇田敦司・松田富美子	1997	『南羽鳥遺跡群Ⅱ－成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
内田理彦・吉林昌寿	1995	『宮内遺跡－本禁村総合運動場建設に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
江森幹浩	1996	『東ヶ峠遺跡－八街カントリー倶楽部造成に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
大澤孝他	1993	『上野遺跡・出口遺跡発掘調査報告書－四街道総合公園事業地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
小倉和重	1999	『間野台貝塚（第2次）－東京電力株式会社臼井変電所新設事業に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
小倉和重	2001	『上本佐倉上宿遺跡（第4次）』	(財) 印旛郡市文化財センター
加藤貴之	2004	『大蛇中芝・大蛇瓜作遺跡－佐倉市宮大蛇住宅建設に伴う埋蔵文化財調査業務委託－』	(財) 印旛郡市文化財センター
川端弘士他	1987	『椎ノ木遺跡』	(財) 印旛郡市文化財センター
木内達彦	1986	『高崎新山遺跡発掘調査報告書』	(財) 印旛郡市文化財センター
木内達彦	1993	『西山No.3遺跡発掘調査報告書－四街道市営霊園拡張に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
木内達彦	1994	『宗吾南地区確認調査報告書』	(財) 印旛郡市文化財センター
木内達彦他	1986	『印旛村村道瀬戸師戸線発掘調査報告書』	(財) 印旛郡市文化財センター
菊池敏記	1996	『鏑塚No.2遺跡－四街道N T T移動通信網建設予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
菊池敏記・小牧美知枝	1998	『大袋艤巻遺跡（第11次）－成田市飯田町宅地造成事業に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
菊池敏記・篠原　正	1988	『久能遺跡群発掘調査報告書－富里町久能カントリー倶楽部ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
菊池敏記他	1991	『神楽場遺跡・五反目遺跡』	(財) 印旛郡市文化財センター
喜多圭介	1988	『西村屋屋敷跡－（仮称）八街市公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
喜多圭介	1993	『石川阿ら地遺跡』	(財) 印旛郡市文化財センター
喜多圭介	1999	『ちぼろく遺跡－印旛村道鎌苅・師戸線道路建設事業に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
喜多裕明・飯島伸一	1991	『河原子台遺跡－百井総合運動公園建設事業地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
喜多裕明・飯島伸一	1992	『卜ヶ前遺跡発掘調査報告書－印旛村泉カントリー倶楽部コース造成事業地内埋蔵文化財調査報告書（1）－』	(財) 印旛郡市文化財センター
喜多裕明・高谷英一	1998	『宮内井戸作遺跡1地区－ちばリサーチパーク開発事業予定地内埋蔵文化財調査（2）－』	(財) 印旛郡市文化財センター
小谷龍司他	1997	『墓新山遺跡－ホソヤミート調理食品工場造成地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
小谷龍司	1994	『本曽地遺跡発掘調査報告書－昭和シェル綜油所予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
斎藤　毅・篠原　正	1988	『岩戸広台遺跡A地区・B地区発掘調査報告書』	(財) 印旛郡市文化財センター
斎藤　毅他	1986	『潮山遺跡』	(財) 印旛郡市文化財センター
斎藤毅・高谷英一	1990	『和良比御屋敷遺跡発掘調査報告書』	(財) 印旛郡市文化財センター
酒井弘志	2000	『榎戸小富遺跡－（仮称）榎戸スポーツ施設新設に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
酒井弘志	2001	『岩名古墳群（2号墳・3号墳）－老人福祉施設設置に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
酒井弘志・戸谷敬司	2004	『龍水寺裏遺跡－本禁村道改良工事に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
酒井弘志他	1994	『公津東遺跡群Ⅰ－飯田町南向野遺跡・大袋小谷津遺跡・飯仲中台遺跡・飯仲大作遺跡・飯仲馬場作遺跡－　成田市公津東土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査』	(財) 印旛郡市文化財センター
酒井弘志他	2000	『南羽鳥遺跡群Ⅳ　成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）－谷津堀遺跡A・B・C地点、タダメキ第1地点、タダメキ第2地点－』	(財) 印旛郡市文化財センター
篠原　正	1985	『北大堀－畜産場遺跡発掘調査報告書－酒々井町町道北大堀・畜産場線埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
篠原　正	1988	『獅子穴Ⅱ遺跡－富里町中央公園予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
篠原　正他	1987	『大畑Ⅱ遺跡－栄町龍角寺ドライブイン建設予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
芝谷健司	1996	『大室十三塚－成田市大室・芝綱道路改良予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
芝谷健司他	2001	『山梨遺跡群Ⅱ－ドゥ・スポーツカントリークラブ成田ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
芝谷興平	1987	『四街道市四街道南土地区画整理事業地発掘調査報告書』	(財) 印旛郡市文化財センター
芝谷芳則	1990	『囲護台遺跡－セコム独身寮建設に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
芝谷芳則	1993	『一之綱Ⅰ・鉄砲作遺跡発掘調査報告書－八街市榎台宅地開発予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
進藤泰浩	1994	『印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書－平賀惣行遺跡・山田虎ノ作遺跡・井ノ崎台遺跡・光明寺遺跡・打田第2遺跡・山田諏訪遺跡－』	(財) 印旛郡市文化財センター
進藤泰浩・小谷龍司	1994	『二部山遺跡発掘調査報告書－臼井・沼南土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
進藤泰浩	1993	『駒形北遺跡発掘調査報告書－印西町立小林小学校運動場拡張に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
末武直則	1988	『神々廻遺跡群－千葉県印旛郡白井町船橋カントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
末武直則	1990	『武西千駄苅遺跡確認調査報告書－印西町ゴルフ練習場造成地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
杉山祐一	2004	『大室仲妻遺跡－成田市大室仲妻地内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
鈴木正一・小牧美知枝	1998	『成田ビューカントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書（3）－小菅大神台Ⅰ遺跡・小菅大神台Ⅱ遺跡・小菅小屋ノ台Ⅰ遺跡・小菅小屋ノ台Ⅱ遺跡・小菅石神Ⅰ遺跡・小菅石神Ⅱ遺跡・駒井野山之台遺跡－』	(財) 印旛郡市文化財センター
鈴木康友	2001	『物井松葉作遺跡第2地点－都市計画道路3・4・20号物井Ⅰ号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
高橋　誠	1991	『油作第1遺跡発掘調査報告書』	(財) 印旛郡市文化財センター
高橋　誠	1992	『西向野Ⅰ遺跡・西向野Ⅱ遺跡』	(財) 印旛郡市文化財センター
高花宏行	1993	『西向野Ⅰ遺跡（第2地点）』	(財) 印旛郡市文化財センター
高花宏行	1995	『獅子穴Ⅱ遺跡－富里町中央公園建設予定地内埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
高花宏行	1996	『上岩橋岩崎遺跡－酒々井町上岩橋地区土取工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
高花宏行・宮　文子	1998	『公津東遺跡群Ⅲ－大袋艤巻遺跡－　成田市公津東土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査』	(財) 印旛郡市文化財センター
高谷英一	1995	『白池台遺跡・西御門荒生遺跡A地区・西御門荒生遺跡B地区－ちばリサーチパーク開発事業予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
高谷英一・斎藤　毅	1991	『千葉県四街道市和良比御屋敷遺跡発掘調査報告書』	(財) 印旛郡市文化財センター
高谷英一他	1991	『和良比遺跡発掘調査報告書－四街道市和良比地区埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
中山俊之	1995	『墨木戸－（仮）すかいらーく酒々井工場建設予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
中山俊之	1995	『一之綱Ⅱ遺跡・一之綱Ⅲ遺跡－八街市文違・榎台地区住宅地造成地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
西山太郎他	1987	『天神台遺跡発掘調査報告書』	(財) 印旛郡市文化財センター
新田浩二・吉林昌寿	1994	『獅子穴IX遺跡－いなげや富里店店舗造成地内埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
能勢幸枝	1996	『佐倉城跡－市立佐倉中学校給食室建設に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
能勢幸枝	1997	『宗吾内野台畑遺跡－成田市農業協同組合公津支所新築予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
野村優子	2000	『萩原株木遺跡－印旛村道ニュータウン・萩原線埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
橋本勝雄	1991	『東内野遺跡－富士エステート富里宅地造成地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
林田利之	1993	『駒井野荒追遺跡－マロウドインターナショナルホテル成田建設予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
林田利之	1997	『新橋高松遺跡－福山通運株式会社荷捌場増設に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
林田利之	1998	『太田長作遺跡－特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター
林田利之	2000	『吉見台遺跡A地点－市道1-32号線（吉見工区）埋蔵文化財調査に伴う整理業務委託－』	(財) 印旛郡市文化財センター
林田利之他	1994	『木戸先遺跡』	(財) 印旛郡市文化財センター
日暮冬樹・小谷龍司	1998	『稲荷谷津遺跡・狐谷津遺跡・木戸遺跡・堰山遺跡・塚越遺跡・谷津台遺跡－富里町富里第二工業団地1地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 印旛郡市文化財センター
宮　文子	1999	『中沢野馬木戸遺跡－ホルダー建設に伴う埋蔵文化財調査－』	(財) 印旛郡市文化財センター

千葉県文化財センター報告書

雨宮龍太郎他	1988	『国道409号道路改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書　中木戸遺跡　西二本榎遺跡　西内野遺跡』	(財) 千葉県文化財センター
石倉亮吉	1987	『佐倉市臑巻遺跡－佐倉第二工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V－』	(財) 千葉県文化財センター
石田広美他	1985	『主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書』	(財) 千葉県文化財センター
斎原　清	1996	『一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書－印旛村大木台古墳群・井戸向遺跡・炭焼台所作塚・相田谷津塚－』	(財) 千葉県文化財センター
井上哲朗他	1994	『印西町小林城跡－一般県道印西印旛線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
太田文雄	1988	『酪料牧場遺跡－麻薬犬訓練所建設予定地内埋蔵文化財調査－』	(財) 千葉県文化財センター
大野康男	1993	『八千代市坊山遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書VI－』	(財) 千葉県文化財センター
大野康男・矢戸三男	1987	『成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告　山口雷土遺跡』	(財) 千葉県文化財センター
大原正義	1989	『佐倉市向原遺跡－佐倉第二工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI－』	(財) 千葉県文化財センター
岡田誠道	1999	『四街道市出口・鐘塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』	(財) 千葉県文化財センター
小久貫隆史・石橋宏克	1989	『成田市林北遺跡・長山遺跡－一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』	(財) 千葉県文化財センター
落合章雄	1989	『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡－東葉高速鉄道引込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
落合章雄	1993	『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－印旛郡本禁村九斗坊遺跡・印西市宗甫遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
落合章雄・雨宮龍太郎	1998	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅡ－臼井町一本桜南遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
落合章雄・南宮龍太郎	1999	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅠ』	(財) 千葉県文化財センター
香取正彦	1996	『一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書2－佐倉市高岡骨跡・大畑麻賀多墓遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
金丸　誠	1983	『佐倉市立山遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』	(財) 千葉県文化財センター
金丸　誠	2002	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XV－印西市同新田遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
金本誠・矢本節朗	1990	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VI－成田市木戸下遺跡・富里町七栄古込遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
小林清隆	1982	『成田市二里塚馬場遺跡』	(財) 千葉県文化財センター

小林清隆	1985	『栄町大畑Ⅰ－2遺跡－県単道路成田安食線埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
斎木　勝他	1985	『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－成田地区－』	(財) 千葉県文化財センター
榊原弘二	1997	『本埜村大門遺跡－本埜アクセス光設備埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
島立　桂他	1994	『千原台ニュータウンⅥ－草刈六之台遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
島立　桂他	2002	『千葉市鷲谷津遺跡－都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』	(財) 千葉県文化財センター
白石竹雄他	1973	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』	房総考古資料刊行会
白石竹雄他	1974	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』	房総考古資料刊行会
白石竹雄他	1975	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』	(財) 千葉県都市公社
白鳥　章	1997	『佐倉市弥勒東台遺跡－千葉地裁家庭裁判所佐倉支部埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
鈴木定明他	1978	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』	(財) 千葉県文化財センター
鈴木道之助他	1978	『佐倉市屋谷津遺跡』	(財) 千葉県文化財センター
清藤一顕・及川淳一	1984	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』	(財) 千葉県文化財センター
田形孝一・海老原充他	1988	『成田市畑ケ田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』	(財) 千葉県文化財センター
高橋博文	1991	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅹ－泉北側第2遺跡（C N613）－』	(財) 千葉県文化財センター
高橋博文・奥田正彦	1986	『主要地方道成田松尾線　畔ヶ洋遺跡・中台栢谷遺跡・遠山天ノ作遺跡』	(財) 千葉県文化財センター
田島　新他	1986	『酒々井町伊篠百illoc遺跡』	(財) 千葉県文化財センター
田島　新他	1991	『佐倉市栗野Ⅰ－Ⅱ遺跡－佐倉第二工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』	(財) 千葉県文化財センター
田島　新他	1992	『佐倉市松両作遺跡－佐倉第二工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』	(財) 千葉県文化財センター
田村　隆他	1982	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』	(財) 千葉県文化財センター
田村　隆他	1985	『佐倉市タルカ作遺跡－佐倉第二工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』	(財) 千葉県文化財センター
田村　隆他	1986	『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－ゐ割・雪入塚・中山新田Ⅰ－』	(財) 千葉県文化財センター
田村　隆他	1989	『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－佐倉市御塚山・大林・大堀・西野・芋洗遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
豊田秀治他	1993	『佐倉市南広遺跡－佐倉第二工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』	(財) 千葉県文化財センター
永塚俊司・平野雅一	1999	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ Ⅰ－東峰内笠峰遺跡（空港No.63遺跡）－』	(財) 千葉県文化財センター
永塚俊司他	2000a	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ Ⅲ－東峰御幸畑西遺跡（空港No.61遺跡）－』	(財) 千葉県文化財センター
永塚俊司他	2000b	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ Ⅱ－十余三稲荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）－』	(財) 千葉県文化財センター
永塚俊司他	2001a	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ Ⅳ－一鍬田甚兵衛山西遺跡（空港No.16遺跡）－』	(財) 千葉県文化財センター
永塚俊司他	2001b	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ Ⅵ－十余三稲荷峰東遺跡（空港No.66遺跡）－』	(財) 千葉県文化財センター
永塚俊司他	2001c	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ Ⅴ－天神峰最上遺跡（空港No.64遺跡）－』	(財) 千葉県文化財センター
永塚俊司他	2003	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ Ⅷ－香山新田新山（空港No.10遺跡）・十余三稲荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）－』	(財) 千葉県文化財センター
永沼律朗他	1993	『主要地方道成田安食線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅱ』	(財) 千葉県文化財センター
鳴田浩司	1985	『富里町南内野遺跡－県立富里地区（仮称）高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
鳴田浩司・田形孝一	1999	『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－印西亜鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
新田浩三他	1991	『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ（佐原地区3）』	(財) 千葉県文化財センター
新田浩三他	1993	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－南三里塚宮前遺跡（空港No.4）、木の根拓美遺跡（空港No.6）、香山新田中横堀遺跡（空港No.7遺跡）』	(財) 千葉県文化財センター
新田浩三他	1994	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡）－』	(財) 千葉県文化財センター
野村幸希他	1976	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』	(財) 千葉県文化財センター
萩原恭一	2000	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ－印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
橋本勝雄他	1985	『八千代市北海道遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』	(財) 千葉県文化財センター
橋本勝雄他	1989	『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』	(財) 千葉県文化財センター
勝嶋芳樹・田島　新	1990	『佐倉市大作遺跡』－佐倉第二工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』	(財) 千葉県文化財センター
宮　重行・永塚俊司	2002	『成田市十余三四本木Ⅱ遺跡－航空無線施設用地内埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
宮　重行他	1981	『本の根－成田市本の根No.5、No.6遺跡発掘調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
矢戸三男他	1987	『佐倉市向山谷津・明代台－木戸場－古内遺跡－佐倉第二工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』	(財) 千葉県文化財センター
山田貴久	1995	『四街道市堂ノ後遺跡－主要地方道浜野四街道長沼住宅地関連事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
矢本節朗・鎌屋孝之	1997	『成田国際物流複合基地埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－成田市台ノ田Ⅱ遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
矢本節朗・横山　仁	1997	『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－天神峰奥之台遺跡（空港No.65遺跡）－』	(財) 千葉県文化財センター
矢本節朗他	1994	『四街道市御山遺跡（Ⅰ）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』	(財) 千葉県文化財センター
横山仁・香取正彦他	1996	『一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－酒々井町本佐倉北大堀遺跡－』	(財) 千葉県文化財センター
渡辺修一	1991	『四街道市内黒田遺跡群－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』	(財) 千葉県文化財センター
渡辺修一	1993	『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－御塚山遺跡第7地点の調査－』	(財) 千葉県文化財センター
渡辺修一他	1995	『佐倉市池向遺跡－佐倉第二工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ Ⅱ－』	(財) 千葉県文化財センター

県内その他報告書・遺跡報告

飯塚博和	1980	『野田市本郷遺跡発掘調査報告書』	野田市本郷遺跡調査団
伊藤和夫	1959	『千葉県石器時代遺跡地名表』	千葉県教育委員会
宇田川浩一	2000	『東内野遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
内田理彦他	1989	『昭和63年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書』	佐倉市教育委員会
大賀　健他	1986	『吉岡遺跡群発掘調査報告書』	四街道市吉岡遺跡群調査会
小川和博	1999	『成田市の旧石器時代基礎資料Ⅴ』『成田史談』44号	成田市文化財保護協会
織笠　明	2000	『東林跡遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
川崎弘士	1992	『四街道市内遺跡群発掘調査報告書』	四街道市教育委員会
川崎弘士	1994	『四街道市内遺跡群発掘調査報告書』	四街道市教育委員会
鹿野正也他	1975	『臼井南－千葉県佐倉市臼井南遺跡調査報告書－』	臼井南遺跡調査団
鹿野正也他	1976	『臼井南－石神Ⅱ地点発掘調査報告書』	臼井南遺跡調査団
桑原　護他	1974	『飯重』	佐倉市遺跡調査会
佐伯秀人他	1992	『前三舟台遺跡』	(財) 君津郡市文化財センター
酒井弘志	2001	『内田端山極遺跡（クラブハウス）』『第7回石器文化研究交流会－発表要旨－』	石器文化研究会
佐藤晃雅	2004	『上志津下場遺跡』	佐倉市教育委員会
篠原　正	1980	『笠木山遺跡調査概報』	笠木山遺跡発掘調査会
篠原　正	1982	『両国神山遺跡発掘調査報告書』	両国神山遺跡発掘調査会
篠原　正	1993	『富里町東内野遺跡』『第1回　遺跡発表会　発表要旨』	(財) 印旛郡市文化財センター
篠原　正	2002	『富里市古込V遺跡－オープンサイトの旧石器－』『第6回　遺跡発表会　発表要旨』	(財) 印旛郡市文化財センター
篠原　正他	1977a	『東内野遺跡発掘調査概報』	東内野遺跡発掘調査団
篠原　正他	1977b	『獅子穴VI遺跡発掘調査報告』	獅子穴VI遺跡発掘調査団
篠原　正他	1977c	『久能下池田遺跡－千葉県印旛郡富里村久能下池田遺跡発掘調査報告－』	日本文化財研究所
篠原　正他	1978a	『東内野遺跡第2次発掘調査概報』	東内野遺跡発掘調査団
篠原　正他	1978b	『新橋遺跡発掘調査報告書』	富里村村史編纂委員会
篠原　正他	1979	『東内野遺跡第3次発掘調査概報』	東内野遺跡発掘調査団
篠原　正他	1980a	『北大溜袋遺跡発掘調査報告』	北大溜袋遺跡発掘調査会
篠原　正他	1980b	『松作遺跡発掘調査報告書』	松作遺跡発掘調査団
島立　桂	2000	『草刈遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
白鳥　章	1995	『四街道市小屋ノ内遺跡』『平成6年度千葉県遺跡調査研究発表会　発表要旨』	千葉県文化財法人連絡協議会
高野博光他	1980	『酒々井町総合公園遺跡発掘調査報告書』	酒々井町教育委員会
高橋良助・吉内　茂	1974	『最近発掘された先土器時代資料2例』『ふさ』5・6合併号	ふさの会
田川　良・千田利明	1978	『太田・大篠塚－千葉県佐倉市太田・大篠塚遺跡発掘調査概報』	日本文化財研究所
田川　良他	1972	『生谷』	生谷遺跡発掘調査団
田川　良他	1982	『北総線』	東京電力北総線遺跡調査会
滝口　宏他	1961	『印旛－手賀－印旛手賀沼周辺埋蔵文化財調査－』	早稲田大学考古学研究室
竹田真雄	1999	『泉北側第3遺跡』『平成10年度千葉県遺跡調査研究発表会　発表要旨』	千葉県文化財法人連絡協議会
竹田良雄・落合章雄	1999	『泉北側第3遺跡』『第6回石器文化研究交流会－発表要旨－』	石器文化研究会
田村　隆	2000a	『復山谷遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
田村　隆	2000b	『地蔵穴台遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
田村　隆	2000c	『木刀部遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
田村　隆	2000d	『星谷津遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
田村　隆	2000e	『角田台遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
田村　隆	2000f	『荒野前遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
田村　隆	2000g	『古込遺跡（新東京国際空港No.55）』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
田村　隆	2000h	『大林遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
千葉県教育委員会	1997	『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）－』	千葉県教育委員会
戸田哲也	1973	『千葉県南大溜袋遺跡の調査』『考古学ジャーナル』No.78	ニュー・サイエンス社
戸田哲也	2000	『南大溜袋遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
戸田哲也・江森正義	1971	『「外子代遺跡」採集のポイントについて』『成田史談』17号	成田市文化財保護協会
富里村教育委員会	1981	『千葉県印旛郡富里村埋蔵文化財分布地図』	富里村教育委員会
永塚俊司	2000c	『新東京国際空港予定地内遺跡群』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
永塚俊司	2001	『南敷発見の“ハンドアックス”』『大栄町史　通史編上巻　原始古代・中世』	大栄町
西野　元	1971	『三里塚－新東京国際空港用地内の考古学的調査－』	(財) 千葉県北総公社
西野　元	1980	『成田市史　原始・古代編　成田の黎明』	成田市史編さん委員会
新田浩三	2000a	『遠山天ノ作遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
新田浩三	2000b	『出口遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
浜名徳永他	1975	『遺跡目吉倉－千葉県印旛郡富里村目吉倉遺跡調査報告書－』	芝山はにわ博物館
浜名徳永他	1976	『旧久住中南・右田向遺跡調査報告書』	旧久住中南・右田遺跡発掘調査団
平岡和夫他	1985	『寺向・捕込間遺跡－松ノ内宮台井堂地公園計画用地内遺跡－』	白井堂地公園遺跡調査会
吉内　茂他	1980	『吉田馬々台遺跡－縄文早期炉穴址群の調査－』	吉田馬々台遺跡発掘調査会

遠藤　明	1986	『平賀』	平賀遺跡群発掘調査会
遠澤　明	2000	『平賀－ノ台遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
八街町史研究会	1987	『写真で見る八街の歴史』	八街町教育委員会
矢本節朗	2000	『出口・鍾塚遺跡』『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
四街道市教育委員会	1982	『千葉県四街道市内埋蔵文化財分布地図』	四街道市教育委員会

県外報告書

県立畜産試験場遺跡調査会・株式会社シン技術コンサル	1998	『小暮東新山遺跡　旧石器時代住居跡の調査』	県立畜産試験場遺跡調査会・株式会社シン技術コンサル
鈴木敏中他	1999	『初音ケ原遺跡－都市計画道路音出幸原線初音ケ原インターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』	三島市教育委員会
堤　隆他	1996	『中ッ原第1遺跡G地点の研究Ⅱ』	八ヶ岳旧石器研究グループ
長沼　孝他	2002	『白滝遺跡群Ⅲ　白滝村奥白滝1遺跡・上白滝5遺跡　一般国道450号白滝丸瀬布道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』	（財）北海道埋蔵文化財センター

概説書・図録等

相沢忠洋	1969	『「岩宿」の発見　幻の旧石器を求めて』	講談社
赤澤　威	1995	『人類の移住・拡散そして適応戦略』『モンゴロイドの地球［1］　アフリカからの旅立ち』	東京大学出版会
麻生　優	2001	『日本における洞穴遺跡』	発掘者談話会
麻生　優・鈴木道之助編	1992	『房総の古代史をさぐる』	築地書館
安蒜政雄	1978	『先土器時代の研究』『日本考古学を学ぶ(1)』有斐閣選書	有斐閣
市川市史編纂委員会	1971	『原始骨角文化－先土器時代－』『市川市史』第一巻	市川市
稲田孝司	2001	『遊動する旧石器人　先史日本を復元する』	岩波書店
今泉忠明監修	1997	『世界絶滅危機動物図鑑　第1集　日本の哺乳類』	学習研究社
岡村道雄	1990	『日本旧石器時代史』雄山閣考古学選書33	雄山閣
京都文化博物館	1997	『ヒトの来た道－人類500万年と列島最古の居住者－』	京都文化博物館
笠懸野岩宿文化資料館	1992	『岩宿時代　展示解説』	笠懸野岩宿文化資料館
笠懸野岩宿文化資料館	1993	『第5回企画展　群馬の岩宿時代』	笠懸野岩宿文化資料館
笠懸野岩宿文化資料館	1994	『第9回企画展　岩宿時代の画期を見る－石器群編年の意義－』	笠懸野岩宿文化資料館
笠懸野岩宿文化資料館	1999a	『岩宿遺跡発掘50周年記念特別企画展②／第27回企画展　日本史を書き換えた岩宿の発見』	笠懸野岩宿文化資料館
笠懸野岩宿文化資料館	1999b	『岩宿遺跡発掘50周年記念特別企画展③／第28回企画展　岩宿遺跡発掘50年の足跡』	笠懸野岩宿文化資料館
笠懸野岩宿文化資料館	2001	『第33回企画展　日本人のルーツを探る－日本人類史の検討－』	笠懸野岩宿文化資料館
木村英明	1997	『シベリアの旧石器文化』	北海道大学図書刊行会
旧石器文化談話会編	2000	『旧石器考古学辞典』	学生社
グレアム・クラーク	1971	『石器時代の狩猟民』（訳：大塚初重）	創元社
国立科学博物館	2001	『日本人はるかなる旅展』	NHK・NHKプロモーション
近藤精造	1992	『千葉の自然をたずねて』日曜の地学19	築地書館
ジョン・ワイマー	1989	『世界旧石器時代概説』（訳：河合信和）	雄山閣
白石浩之	2002	『旧石器時代の社会と文化』日本史リブレット1	山川出版社
市立市川考古博物館	1986	『市立市川考古博物館展示解説』	市立市川考古博物館
鈴木忠司	1984	『先土器時代の知識』考古学シリーズ3	東京美術
仙台市富沢遺跡保存館	1996	『地底の森ミュージアム　常設展示案内』	仙台市富沢遺跡保存館
田村　隆・橋本勝雄	1984	『房総考古学ライブラリー1　先土器時代』	（財）千葉県文化財センター
千葉県史料研究財団	1997	『ちばけんの自然誌　本編2　千葉県の大地』	千葉県・千葉県史料研究財団
千葉県史料研究財団	2000	『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』	千葉県・千葉県史料研究財団
千葉県立房総風土記の丘	2001a	『槍の身振り』平成13年度企画展図録	千葉県立房総風土記の丘
勅使河原彰	1988	『日本考古学史』UP考古学選書（1）	東京大学出版会
栃木県立博物館	2003	『企画展　氷河時代の狩人たち－旧石器時代の自然と暮らし－』	栃木県立博物館
富田幸光	1995	『絶滅した大哺乳類たち』特別展図録	国立科学博物館
富田幸光	2002	『絶滅哺乳類図鑑』	丸善株式会社
中橋孝博	1997	『第5章　世界へ広がる現世人類』『人類の起源』（ミミダス特別編集	集英社
日本第四紀学会	1996	『第四紀露頭集－日本のテフラ』	日本第四紀学会
日本第四紀学会他編	1992	『図解・日本の人類遺跡』	東京大学出版会
野田市郷土博物館	1992	『旧石器時代の狩りと暮らし－1万2千年以前の東葛飾地方－』	野田市郷土博物館
バリー・コックス他	1993	『原色版　恐竜・絶滅動物図鑑－魚類から人類まで－』（総監修：小畠郁生・訳：岡崎淳子）	大日本絵画
広島県立歴史博物館	1993	『サルからヒトへ－最古の文化と瀬戸内－』	広島県立歴史博物館
前田四郎監修	1974	『千葉県　地学のガイド　千葉県の地質とそのおいたち』	コロナ社
町田　洋	1977	『火山灰は語る－火山と平野の自然史－』	蒼樹書房
町田　洋・新井房夫	1992	『火山灰アトラス［日本列島とその周辺］』	東京大学出版会
横浜市歴史博物館・埋蔵文化財センター	1996	『縄文時代草創期　資料集』	横浜市歴史博物館・埋蔵文化財センター
リチャード・リーキー	1996	『ヒトはいつから人間になったか』サイエンス・マスターズ3（馬場悠男訳）	草思社
F. ボルド	1971	『旧石器時代』世界大学選書023（訳：芹沢長介・林謙作）	平凡社
N. G. マンロー	1982	『Palaeolithic Phase』『PREHISTORIC JAPAN』（復刻版）	第一書房
R. ルーウィン	2002	『ここまでわかった人類の起源と進化』人間科学全書テキストブックシリーズ7（保志　宏訳）	てらぺいあ

論文・シンポジウム資料

茨城県考古学協会	2002	『茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－』	茨城県考古学協会
河合信和	2001	『複雑化する人類進化の系統－激増するヒト種数と現代人祖先の見直し－』『朝日総研リポート』No.150	朝日新聞総合研究センター
河合信和	2003	『人類の起源はいつまでさかのぼれるか－アフリカなどで発見続く"最古"の化石－』『朝日総研リポート』No.162	朝日新聞総合研究センター
酒井宏志	2001	『旧石器発見のための一視点（再論）－下総台地を中心とした後期旧石器時代遺跡の立地傾向の把握－』『研究紀要』第2号	（財）印旛郡市文化財センター
佐藤雅一	2002	『新潟県津南段丘における石器群研究の現状と展望－後期旧石器時代から縄文時代草創期に残された活動痕跡－』『先史考古学論集』第11集	安斎正人
静岡県考古学会	1996	『静岡県考古学会シンポジウムIX　愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年　収録集』	静岡県考古学会
柴田　徹	1994	『使用石材からみた旧石器時代の南関東における地域性について』『松戸市立博物館紀要』第1号	松戸市立博物館
島立　桂・永塚俊司	1997	『千葉県における北方系細石刃石器群』『第4回　石器文化研究交流会－発表要旨－』	石器文化研究会
島立　桂他	1992	『下総台地における立川ローム層の層序区分』『研究連絡誌』第35号	（財）千葉県文化財センター
杉原荘介・大塚初重	1955	『常総台地における関東ローム層中の石器文化－市川市丸山遺跡について－』『駿台史学』第5号	駿台史学会
鈴木次郎・矢島国雄	1978	『先土器時代の石器群とその編年』『日本考古学を学ぶ(1)＜新版＞』有斐閣選書	有斐閣
鈴木道之助	1976	『概説－房総における先土器文化の概要と変遷－』『研究紀要　1』	（財）千葉県文化財センター
諏訪間　順	2001	『相模野旧石器編年の到達点』『相模野旧石器編年の到達点』	神奈川県考古学会
石器文化研究会	1989	『石器文化研究1　第1回研究討論会　ATP降灰以前の石器文化』	石器文化研究会
石器文化研究会	1990	『石器文化研究2　第2回研究討論会　ATP降灰以前の石器文化Part II』	石器文化研究会
石器文化研究会	1991	『石器文化研究3　シンポジウム　ATP降灰以前の石器文化－関東地方における変遷と列島内対比－』	石器文化研究会
石器文化研究会	2000a	『石器文化研究8　シンポジウム　砂川－その石器群と地域性－　資料集成　南関東各地域の基礎的検討』	石器文化研究会
石器文化研究会	2000b	『石器文化研究9　シンポジウム　砂川－その石器群と地域性－　予稿集』	石器文化研究会
石器文化研究会	2001	『石器文化研究10　シンポジウム　砂川－その石器群と地域性－　コメント・まとめ集』	石器文化研究会
千葉県文化財センター	1981	『研究紀要　6　自然科学の手法による遺跡、遺物の研究－概論－』	（財）千葉県文化財センター
千葉県文化財センター	1987	『研究紀要　11　自然科学の手法による遺跡、遺物の研究－先土器時代の石器石材の研究－』	（財）千葉県文化財センター
千葉県文化財センター	2002	『研究紀要　22　尖頭器石器群の研究－各時代における諸問題I－』	（財）千葉県文化財センター
千葉県立房総風土記の丘	2001b	『シンポジウム　「有樋尖頭器の発生・変遷・終焉」予稿集』	千葉県立房総風土記の丘
長崎潤一	2000	『リタクション』『用語解説　現代考古学の方法と理論III』	同成社
永塚俊司	1998	『細石刃石核の変形－東峰御幸畑西（空港No.6）J遺跡の細石刃石器群より－』『研究連絡誌』第52号	（財）千葉県文化財センター
長野県旧石器文化研究交流会	2003	『シンポジウム　「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」－発表資料－』	長野県旧石器文化研究交流会
西秋良宏	2001	『先史考古学における真と偽－石器のコピーをめぐって－』『東京大学コレクションXII　真贋のはざま』	東京大学出版会
新田浩三	1992	『空港No.7遺跡A地点第6石器群の位置づけと問題点』『芝山町史　資料集1　原始・古代編』	芝山町
新田浩三	1995	『下総型石刃再生技法の提唱』『研究紀要　16』	（財）千葉県文化財センター
新田浩三	1988	『遠山天ノ作遺跡の再検討』『古鏡』第5号	北総たけべらの会
橋本勝雄	1997	『下総台地における旧石器時代遺跡の諸相－佐倉第三工業団地内遺跡群から－』『千葉県立中央博物館研究報告』第5巻第1号	千葉県立中央博物館
橋本勝雄	1998	『関東細石器考』『千葉県立中央博物館研究報告』第5巻第2号	千葉県立中央博物館
春成秀爾	2001	『更新世末の大型獣の絶滅と人類』『国立歴史民俗博物館研究報告』第90集	国立歴史民俗博物館
遠澤　明	1983	『下総台地の先土器時代－編年について－』『日本考古学研究所集報』V	日本考古学研究所
遠澤　明	1996	『下総台地の様相』『石器文化研究5　シンポジウム　ATP降灰以降のサイフ形石器文化　－関東地方におけるV～IV下層段階石器群の検討－』	石器文化研究会
遠澤　明	2002a	『周辺地域の様相－千葉県』『茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－　発表要旨・資料集』	茨城県考古学会
遠澤　明	2002b	『東総　石の文化史』『財団法人東総文化財センター設立10周年記念論文集』	（財）東総文化財センター
八ヶ岳旧石器研究グループ	2003	『シンポジウム　「日本の細石刃文化」I・II』	八ヶ岳旧石器研究グループ

※紙数の都合により，印旛郡市文化財センター年報，千葉県文化財センター年報，千葉県埋蔵文化財発掘調査報告書は省略した．

図版出典一覧

図1　資料所蔵：佐倉市教育委員
写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター

図2　資料所蔵／写真提供：富里市教育委員会

図3　資料所蔵／写真提供：群馬県立自然史博物館

図4　国立科学博物館2001，図1-3を改編

図5　グレアム・クラーク1971，図3を改編

図6　資料所蔵：明治大学考古学博物館
写真所蔵：京都文化博物館（京都文化博物館1997，図12.2〈下〉から転載）

図7　資料所蔵：財団法人古代学協会
写真所蔵：京都文化博物館（京都文化博物館1997，図20〈右上1点〉から転載）
【出土地】セーヌ河床，フランス

図8　資料所蔵：財団法人古代学協会
写真所蔵：京都文化博物館（京都文化博物館1997，図23から転載）
【出土地】1．ル・ムスティエ遺跡，ドルドーニュ県，フランス
2．ボンスクール（北フランス），フランス
3．モンティエール・レ・ザミアン（北フランス），フランス
4．ル・ムスティエ遺跡，ドルドーニュ県，フランス
5．ラ・キーナ遺跡，シャラント県，フランス
6．ルカ遺跡，ドルドーニュ県，フランス
7．アブヴィル付近（北フランス），フランス

図9　F．ボルド1971，図44／ジョン・ワイマー1989，図46より転載・編図

図10　中橋孝博1997，P.61の図をもとに国立科学博物館2001，図1-10を参考として改編

図11　資料所蔵：宮守村教育委員会
写真提供：笠懸野岩宿文化資料館

図12　リチャード・リーキー1996，巻頭の表を改編、実測図は赤澤威1995、図8・図10・図13より転載

図13　資料所蔵：相澤忠洋記念館
写真提供：笠懸野岩宿文化資料館

図14　資料所蔵／写真提供：東京大学総合研究博物館

図15　資料所蔵：相沢忠洋記念館
写真提供：笠懸野岩宿文化資料館

図16　写真提供：明治大学考古学博物館

図17　写真提供：明治大学考古学博物館

図18　資料所蔵：明治大学考古学博物館
資料保管：市立市川考古博物館
写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター

図19　資料所蔵：明治大学考古学博物館
資料保管：市立市川考古博物館
写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター

図20　写真提供：明治大学考古学博物館

図21　資料所蔵：千葉県立房総風土記の丘
写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター

図22　野田市郷土博物館1992，P.11の図／日本第四紀学会他編1992，P.9の図から編図

図23　市立市川考古博物館1986，P.3〈上図〉／麻生優・鈴木道之助編1992，図2-1をもとに編図

図24　近藤精造1992，巻末図の一部を抜粋して作図

図25　写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター

図26　笠懸野岩宿文化資料館1992，P.55の図／田村隆・橋本勝雄1984，第6図／酒井弘志2001，第7図／矢本節朗・横山仁1997，第6図をもとに作図

図27　写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター

図28　町田洋1977，図Ⅳ-7を改編、噴出年代は日本第四紀学会1996／町田洋・新井房夫1992をもとに記載

図29　町田洋1977，付図(B)を改編

図30　写真提供：野尻湖発掘調査団

図31　資料所蔵：国立科学博物館
写真所蔵：広島県立歴史博物館（広島県立歴史博物館1993，図59から転載）

図32　春成秀爾2001，図21を改編

図33　地形図は日本第四紀学会他編1992，P.39の図をもとに、分布図は千葉県史料研究財団2000，図28／鈴木忠司1984、図11をもとに作図

図34　作画：川口真奈美
【参考文献】富田幸光1995・2002／今泉忠明監修1997／パリー・コックス他1993

図35　資料所蔵／写真提供：千葉県立房総風土記の丘
写真撮影：堀越知道

図36　写真所蔵：五代吉彦（印旛村文化財審議委員）
写真提供：印旛村歴史民俗資料館

図37　鈴木忠司1984，図8をもとに作図

図38　写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター

図39　写真所蔵：仙台市富沢遺跡保存館（仙台市富沢遺跡保存館1996，P.8〈左下〉から転載）

図40　写真提供：小金井市教育委員会

図41　写真提供：八田洋章（国立科学博物館筑波実験植物園）

図42　国立科学博物館2001，図1-21を参考に、印旛郡内におけるローム層内の花粉分析等の結果を考慮して作画
作画：川口真奈美

図43　写真提供：財団法人千葉県文化財センター

図44　篠原正1993，発表会添付資料をもとに作図

図45　監修：篠原正／作画：川口真奈美

図46　資料所蔵：成田市教育委員会
写真撮影：杉原豊

図47　〔上〕栃木県立博物館2003，図137／〔下〕仙台市富沢遺跡保存館1996，P.27〈上〉をもとに作図

図48　田村隆・橋本勝雄1984，第17図を改編

図49　田村隆・橋本勝雄1984，第18図を改編
作画：川口真奈美

図50　栃木県立博物館2003，図140をもとに作図

図51 栃木県立博物館2003，図143をもとに作図
図52 旧石器文化談話会編2000，付録図16／岡村道雄1990，図54から編図
図53 資料所蔵：四街道市教育委員会
写真提供：千葉県史料研究財団
図54 実測図転載
〔磨石〕永塚俊司他2000a，第227図
〔掻器〕酒井弘志他1994，第225図
〔石斧〕宇井義典・布施仁2004，第102図
〔尖頭器〕渡辺修一1991，第160図
〔彫刻刀形石器〕永塚俊司他2000a，第276図
〔石錐〕酒井弘志他1994，第235図
〔ナイフ形石器〕酒井弘志他1994，第221図
〔細石刃・細石刃石核〕阿部寿彦他1993b，第4図
作画：川口真奈美
図55 宇井義典・布施仁2004，第106図から転載
図56 〔左〕宇田川浩一2000，図4／〔中〕阿部朝衛他2002，第35図／〔右〕島立桂他2002，第54図から転載
図57 石材標本提供：橋本勝雄・道澤明・吉野真如
写真提供：吉野真如（左上）
写真撮影：杉原豊（その他）
図58 図は柴田徹1994，第7図を改編
石材標本提供：柴田徹・橋本勝雄・吉野真如
写真撮影：杉原豊
図59 資料所蔵：本埜村教育委員会
写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター
図60 写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター
図61 写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター
図62 写真所蔵：財団法人北海道埋蔵文化財センター
（長沼孝他2002，口絵27〈上資料〉から転載）
図63 田村隆他1989，第444図を改編
図64 宇井義典・布施仁2004，付図1から作図
図65 写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター
図66 写真提供：明治大学考古学博物館
図67 安蒜政雄1978，図2から転載
図68 〔左〕写真所蔵：神奈川県教育委員会（栗原伸好他2002，巻頭図版2〈下〉から転載）／〔右〕国土地理院発行　1/50,000地形図「藤沢」（平成4年発行）から転載・加筆
図69 〔左〕堤隆他1996，第53図・第54図から転載・加筆／〔右〕国土地理院発行　1/50,000地形図「八ヶ岳」（平成9年発行）及び「金峰山」（昭和63年発行）から転載・加筆
図70 〔左〕写真提供：津南町教育委員会／〔右〕国土地理院発行　1/50,000地形図「松之山温泉」（平成10年発行）から転載・加筆
図71 写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター
図72 写真所蔵：群馬県教育委員会（県立畜産試験場遺跡調査会・株式会社シン技術コンサル1998，見開き右上の写真から転載）
図73 写真提供：財団法人千葉県文化財センター
図74 写真所蔵：木村英明（札幌大学）（木村英明1997，巻頭図版P.9〈右上〉から転載）
図75 写真提供：麻生直子
図76 写真所蔵：三島市教育委員会（鈴木敏中他1999，巻首図版2〈下〉から転載）
図77 写真所蔵：三島市教育委員会（鈴木敏中他1999，巻首図版2〈上〉から転載）
図78 鈴木敏中他1999，第245図を改編
図79 資料所蔵：知内町郷土資料館
写真提供：笠懸野岩宿文化資料館
図80 資料所蔵：今金町教育委員会
写真提供：笠懸野岩宿文化資料館
図81 写真提供：財団法人千葉県文化財センター
図82 写真提供：財団法人山武郡市文化財センター
図83 資料所蔵：本埜村教育委員会
写真撮影：杉原豊
図84 資料所蔵：成田市教育委員会
写真撮影：財団法人印旛郡市文化財センター

協力者・協力機関

本書の作成にあたり、下記の個人及び機関より多大なる協力をいただきました。ここに記して御礼申し上げる次第です。（五十音順・敬称略）

〔個人〕

麻生直子　天本昌希　伊藤富治夫　糸原　清　井上哲朗　植木　浩　内田儀久　小久貫隆史
加納　実　川口真奈美　木村英明　小菅将夫　五代吉彦　古藤真平　近藤洋一　佐藤雅一
篠原　正　柴田　徹　渋谷健司　島田和高　島立　桂　白﨑智隆　杉原　豊　高橋克之
田形孝一　土屋潤一郎　新田浩三　野口和己子　能勢幸枝　橋本勝雄　八田洋章　日暮冬樹
堀越知道　道澤　明　吉野真如　領塚正浩

〔機関〕

相澤忠洋記念館
印旛村教育委員会
神奈川県教育庁
群馬県教育委員会
小金井市教育委員会
財団法人古代学協会
財団法人千葉県文化財センター
佐倉市教育委員会
白井市郷土資料館
仙台市富沢遺跡保存館
津南町教育委員会
成田市教育委員会
三島市教育委員会
本埜村教育委員会
四街道市教育委員会
今金町教育委員会
印旛村歴史民俗資料館
かながわ考古学財団
群馬県立自然史博物館
国土地理院
財団法人山武郡市文化財センター
財団法人北海道埋蔵文化財センター
酒々井町教育委員会
知内町郷土資料館
千葉県教育委員会
東京大学総合研究博物館
野尻湖発掘調査団
宮守村教育委員会
八街市教育委員会
印西市教育委員会
笠懸野岩宿文化資料館
京都文化博物館
県立畜産試験場遺跡調査会
国立科学博物館筑波実験植物園
財団法人千葉県史料研究財団
栄町教育委員会
白井市教育委員会
市立市川考古博物館
千葉県立房総風土記の丘
富里市教育委員会
広島県立歴史博物館
明治大学考古学博物館
八街市郷土資料館

「印旛の原始・古代－旧石器時代編－」

◆編集・発行　財団法人印旛郡市文化財センター
〒285-0025　千葉県佐倉市鏑木町198-3

◆印刷　株式会社エリート印刷
〒286-0045　千葉県成田市並木町44-20

平成16年３月24日　印刷
平成16年３月31日　発行

表　紙　背　　景：「日の出前」　撮影／内田儀久
　　石　　器：富里市東内野遺跡出土　東内野型尖頭器
　　＜資料所蔵：富里市教育委員会＞

裏表紙　財団法人印旛郡市文化財センターシンボルマーク
設立15周年を記念して設定されたもので、成田市正福寺１号墳出土のムササビ形埴輪をモデルに印旛沼上空を滑空する姿を描きました。
イラスト：川口真奈美

ホームページアドレス　http://www.inba.or.jp

財団法人 印旛市文化財センター
「印旛の原始・古代－国名勝旧蹟－」付図

印旛内国名勝旧蹟分布図

● □ 国選択史跡名勝天然記念物
（□は県指定重要）

● 国選択以外の史跡名勝
中世以降城郭・寺社・屋敷等
で住民の伝統と深くかかわる遺跡

● 本書の遺跡・伝承地以外の
市指定文化財

【参照本書巻末「遺跡一覧表」の所在と同一】

発行　千葉県印旛郡印旛村吉高1183-3　TEL 0436-484-0126
財団法人印旛市文化財センター
印刷　(株)東京印書館　東京都千代田区神田小川町3-20　TEL 03-3233-2228

1：50,000

2004
財団法人
印旛郡市文化財センター

